

YAPOO, THE HUMAN CATILE
Egawa Tetsuya x Numa Shota

家畜ヤプー五

かちく
じん

BIRZ
COMICS

家畜
ちく
じん
ヤプー五

Original by Tetsuya Egawa
Illustrated by Shota Numa

原作 江川達也
作画 沼正三

作画 江川達也
原作 沼正三



9784344805217



1929979005900

ISBN4-344-80521-6

C9979 ¥590E

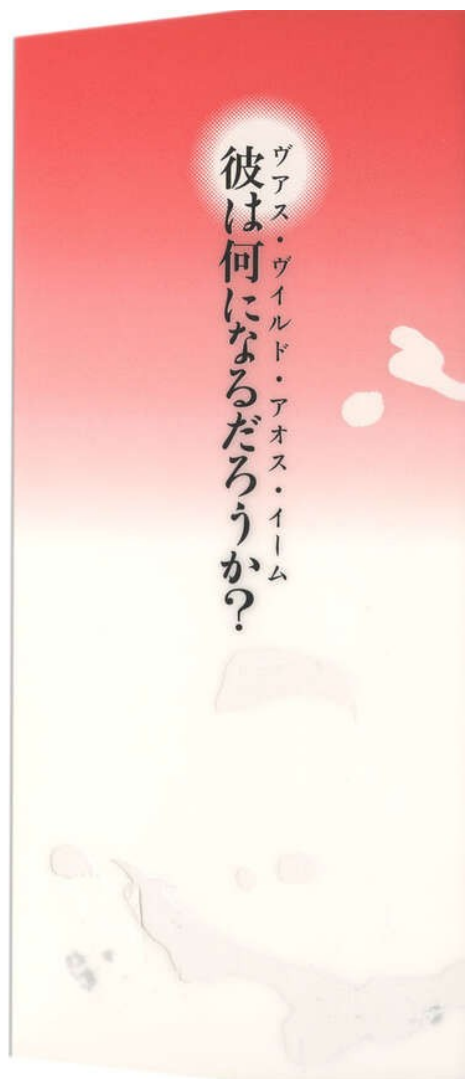
雑誌 54243-67
定価：本体590円＋税
発行＝幻冬舎コミックス
発売＝幻冬舎

BIRZ
COMICS

発行
幻冬舎
コミックス



ヴァス・ウィルド・アオス・イーム
彼は何になるだろうか？





BIRZ
COMICS

家畜人ヤプー

Esuno Takeyuki & Naoto Ohguro

原作 江川達也
作画 結城正三

発行 幻冬舎
コミックス

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

YAP

YAPOO, THE HUMAN CATTLE
Egawa Tetsuya X Numa Shiro

家畜

かちく
じん

ヤブ

Y
A
P
O
O

五

作画 江川達也
原作 沼 正三

幻冬舎アウトライン文庫「家畜人ヤブ」より



YAPOO, THE HUMAN CATTLE 5 CONTENTS

第九章 別々になつて

第三話 ————— 5

第十章 矮人決闘

第一話 ————— 32

第二話 ————— 77

第三話 ————— 113

第四話 ————— 149

ドレイパア青年は
何を思ったか

急に
顔を輝かせて
ドリスに向うと

第九章

別々になつて

第三話



さっきのこと
矮人^{ビグミ}に
決めさせよう

いったい
何のこと？
何を
決めさせるの？

と
ポーリーンが
訊くと

いいわ

と
ドリス

青年は
赤くなつて

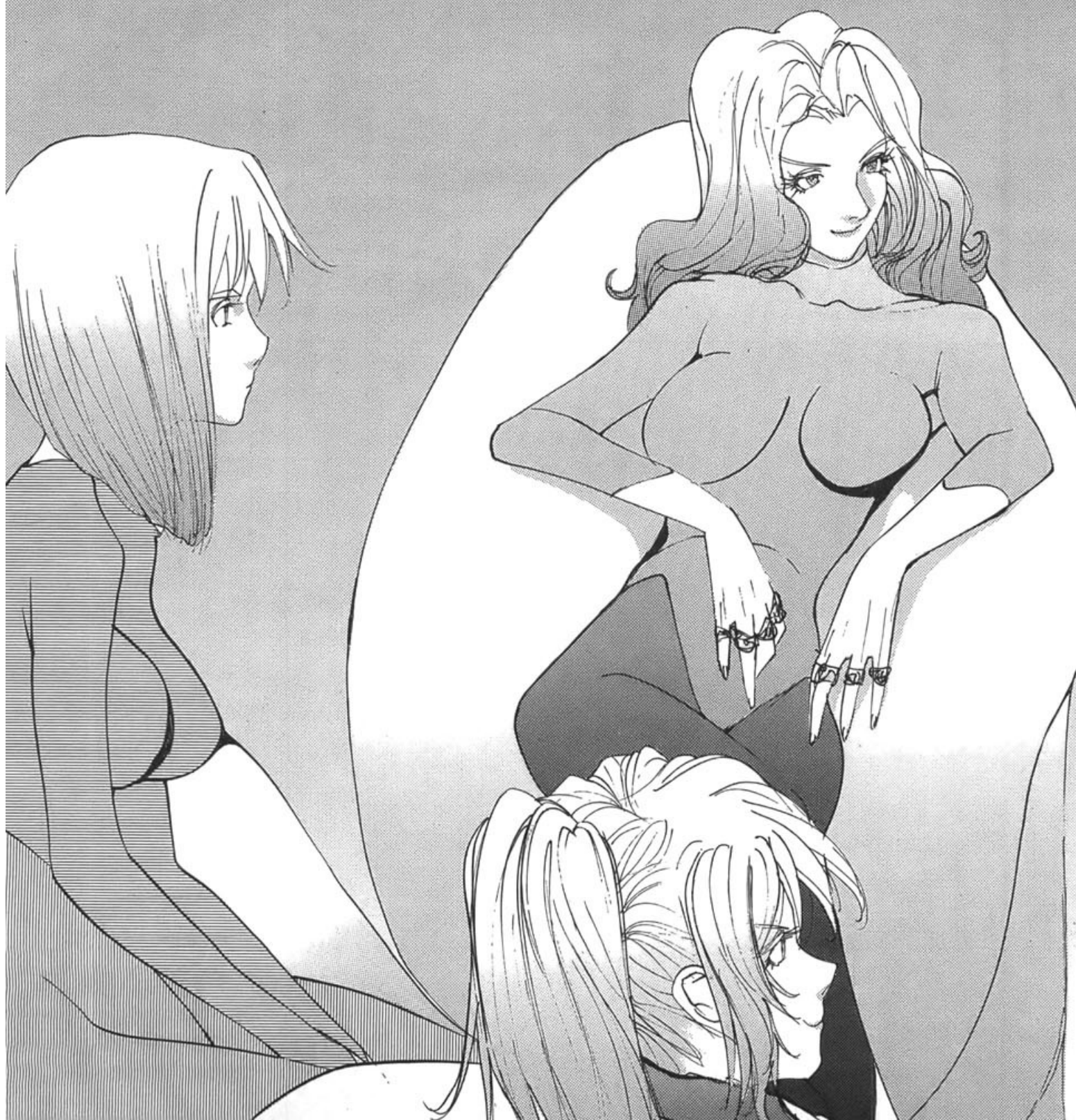
いえね
アベルデーンで
貴女の次に
クララ嬢の
さん
ウェルカム・パーティー
歓迎招宴をする役を

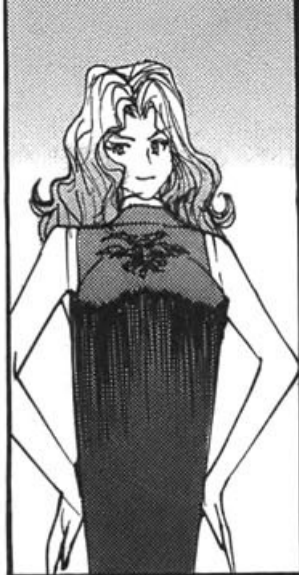
僕とドリスで
取り合って
いるんですよ

第九章 別々になって

第三話







未来の
ジャンセン家当主
として

生き残ったほうを
クララに
贈物するわ

矮人^{ビグミール・デュエル}決闘で
決めるのなら



母に次ぐ
処分権を持つ
ボーリオンが
いった



僕の選んだのが
残ったら

僕は
このごろ手に入れた
珍品を持参金代りに
その矮人に持たせよう

——置物の船だけど



妾^{あたし}の
勝^{かつ}つたら

と
ドリスが負けずに
いった

妾^{あたし}の
厩^{うまや}の中で
好きな馬を一匹
クララに
選ばせるわ

エクウス
旧馬に
乗^のっていた
クララに



僕^{ぼく}も
何か贈物^{プレゼント}を
考えなくちや

金色の
編髪を
揺すりつつ

ヤツブ・ホース
畜人馬^{ヤツブ・ホース}を
思い出させるには
絶好の思いつきね



と
ポーリーンが
応^{こた}じた

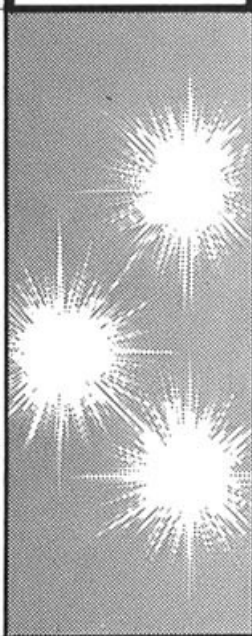
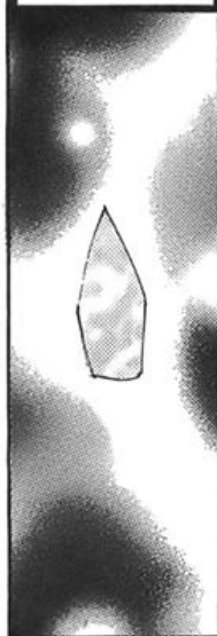
ドレイパア伯爵夫君が
いった

千六百年ほど前
シリウス圏が
征服され



前後して
畜人制度完成期の
三大発明の一つと
いわれる

デミニツシグ・マシン
生体縮小機が
案出された



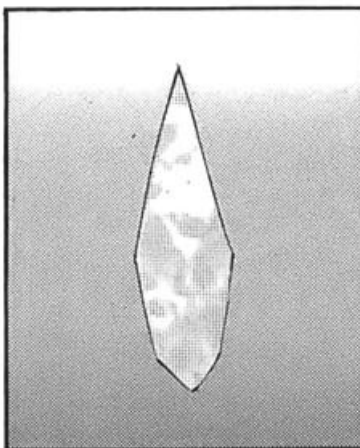
テラ・ノヴァ星の
トライゴンから
カルー星の
アベルデーンへと



大遷都が
行なわれたところ

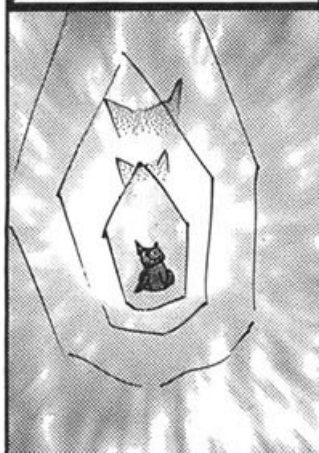


完全気密の
※一クリスタル・ベル
吊鐘状水晶瓶
の中に



特殊の
放射線を注ぐと
鐘が縮み

それにつれて
中の
動物も縮む

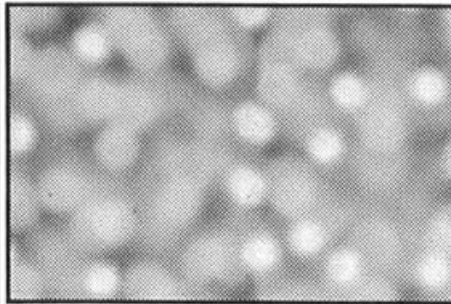


動物を
入れてから
水晶発振機を
動かし



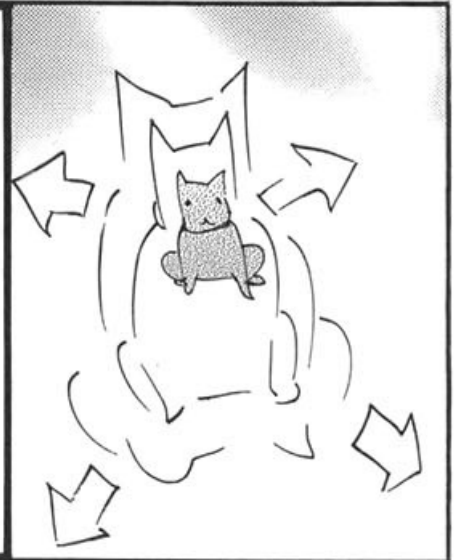
※一 今では水晶服というもつと便利なものがあるが

しかも
生体各細胞の
分子が

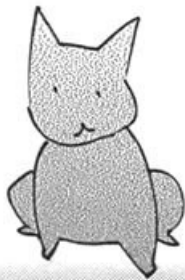


縮小された
動物には

元の
個性が
維持されている
一方



一定の割合で
体外に
呼気になって
排出されて
ゆくので

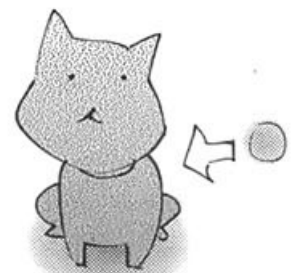


※2
この呼気を
他の個体の
呼気と分離して
保存しておけば



こうして
生体を
任意の
寸法に

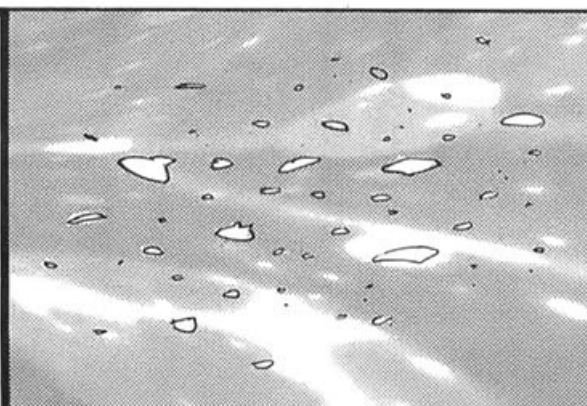
可逆的に
縮小しうるに
至ったのだ



逆装置によつて
もう一度
原型に
復させることも
可能
なのであつた

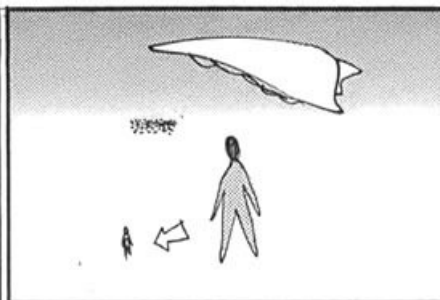


これは
遷都後の
輸送業務に
とつては



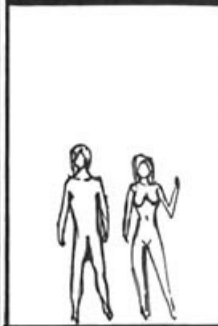
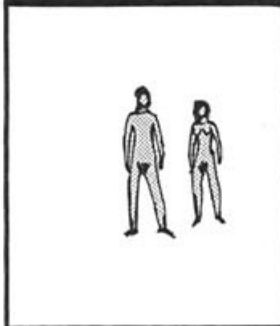
大福音と
思われた

つまり
多人数を
輸送する際は
いったん縮小

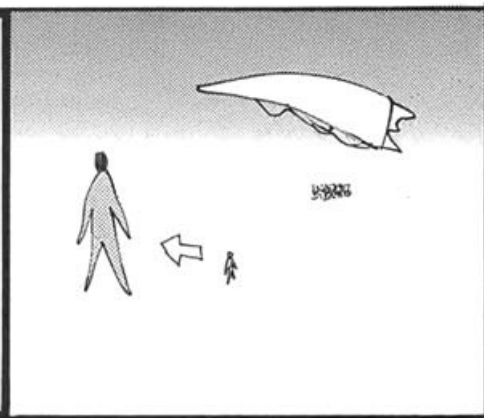


すぐ人間には
試みず

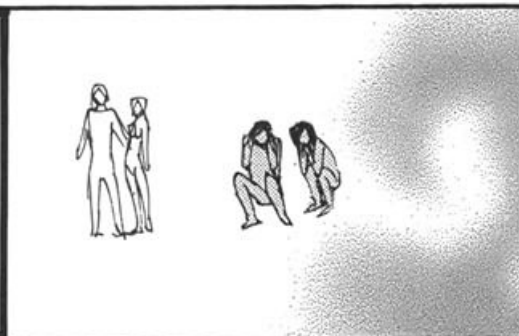
まず
ヤプーについて
試験してみた
ところ



到着後
復元してやれば
いいのだ



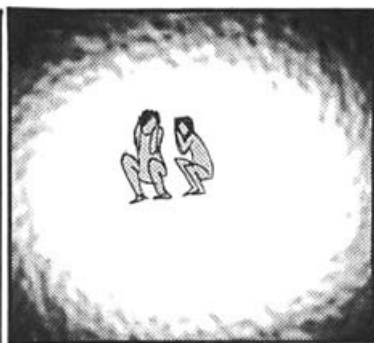
縮小中は
わずかだが
宇宙線疾患罹病率^{しゅくせんびょうりつ}が
増加することが
わかったので



※³
結局
人間への使用は
中止されたが

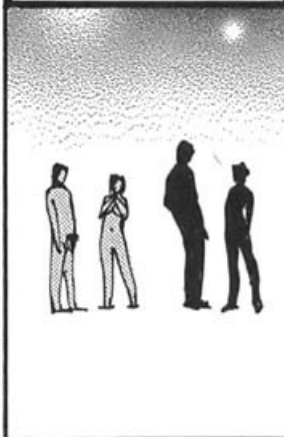
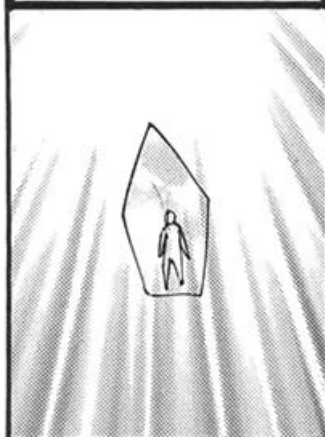
※3 もっとも後章で述べるように、後に白人にも縮小刑というものが制定された

この
疾患による
損失を
見込んでも

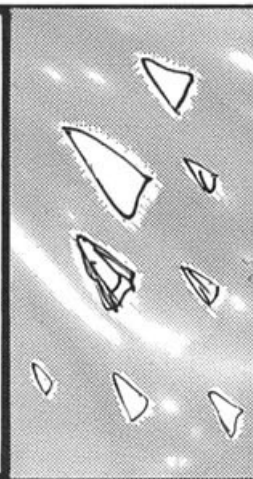


黒奴と
ヤプーが

もつぱら
縮小機に
かけられた



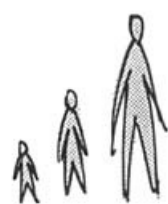
経済的に
採算は取れたから



輸送能率向上
から

※4 ただし黒奴が半人間といわれるのがこれにもとづくというのは俗説である

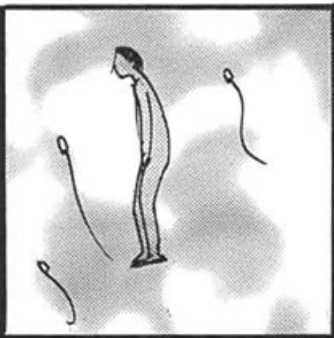
しかし
二分の一以上の
縮小率だと



※4
黒奴縮小率は
二分の一止りと
定められた



雄の
生殖能力が
消失することが
証明された結果



ヤブーに
対しては

黒奴と違って
まったく
人権的な
顧慮の必要が
ないから

積載数を
少しでも
増そうと

縮小率は
しだいに
高められたが



YAPPOO



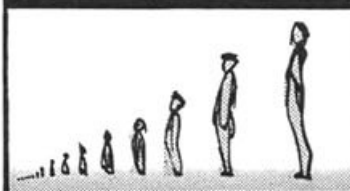
人



動物



船



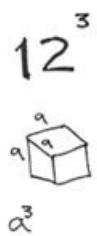
トウエルブス
十二分の一以上
になると
知能がかなり
減退することが
わかったので

十二分の一
というのが
限界の縮小率
となった

これによって
輸送能力は

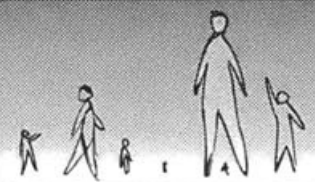
実に
十二の三乗

すなわち
千七百二十八倍
することにな
ったのである



$$12^3 \\ = 12 \times 12 \times 12 \\ = 1728$$

ところが
こうしていろいろの
縮小率を変えて



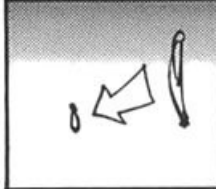
縮小ヤプーを
輸送していると



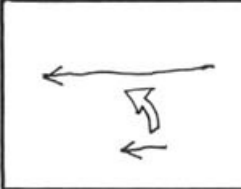
おもしろい事実が
わかってきた



縮小されている間は
縮小率に応じて



時間の経過が
加速される
らしいのである



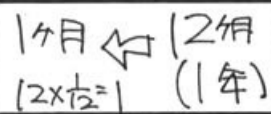
三分の一物に
とっては



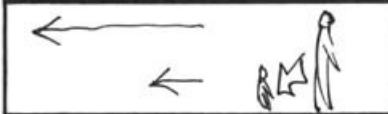
普通の
四ヶ月が
一年にあたる



十二分の一物は
一ヶ月に
一年分を年取る



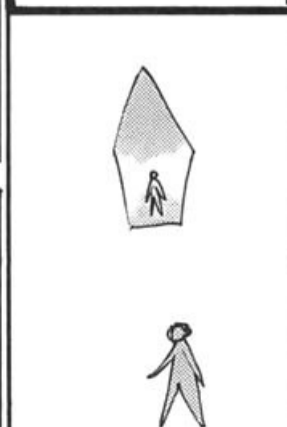
肉体と同時に
人生も縮小
されるのだ



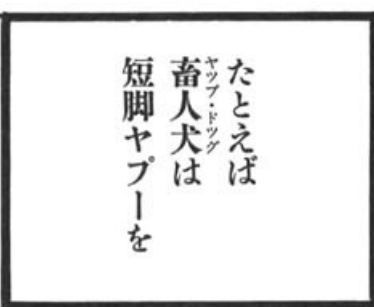
この
性質を
利用して



生体縮小機は
生長促進機として
応用されるに
至った



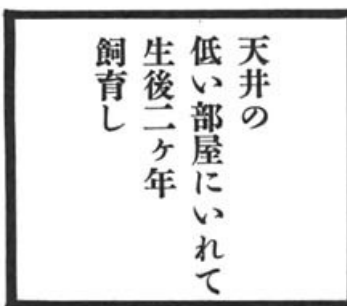
たとえば
ヤブ・ドック
畜人犬は
短脚ヤプーを



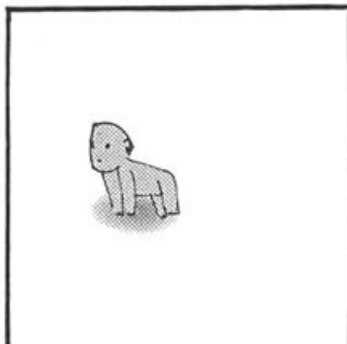
2年



天井の
低い部屋に
生後二ケ年
飼育し



その間
基礎訓練として
四つん這いの
癖をつけたもので
あるが



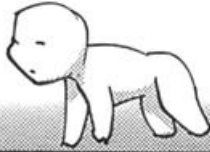
※5
それを
十二分の一形態で
飼えば
二ヶ月に
短縮でき

$$2年 \times \frac{1}{12} = 2ヶ月$$


二ヶ月後に
逆装置に
掛ければ



繁殖力こそないが
立派な二歳仔として
以後の訓練に
耐えるのである



こうして
縮小機は



広く
使用されるに
至ったが



輸送中の事故で
鐘が割れ
中の呼気が
散逸したため



到着先で
原形に戻せず



仕方なく
植民星人の
玩具とされた
縮小ヤプーが



偶然
本国貴族の
目に触れ



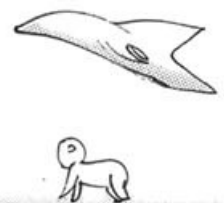
その
頹廃した
猟奇趣味に投じて



「生きた人形」
として
珍重されたことから



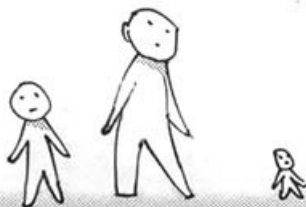
それまでは
輸送や
生長促進のための



一時的手段に
過ぎなかった
縮小形態は



一転して
自己目的として
存在を
主張するに至り
呼気を保存せずに
初めから
人形用として
生産された
縮小ヤプーが
出現するに至った



玩具としての
恒常的需要が
生じると



いちいち
縮小機に
掛けずに済むよう



縮小ヤプー自体の
再生産が
要求されてくるのは
自然の成行きである



しかし
前記のように



性能力は
二分の一の
形態までしか
維持できないので



玩具向きの
小型のものに
ついては



当初
再生産は
不能だった



ところが
縮小機の
発明は



ほとんど
五世紀を経て後



ついに
生殖能力を持つ
十二分の一
縮小ヤプー種が
開発されたのである



ヤプーの中に
サラブレッド
純血種と
称せられる
血統があつた



地球征服者
マック將軍は



旧ヤプー首長の
テンノー一族を
捕虜として



テラ・ノヴァなる
首都トライゴンの
宮廷にもたらし帰って
王に献じ



爾来
彼らは
宮廷用として



王室飼育所で
繁殖させられ



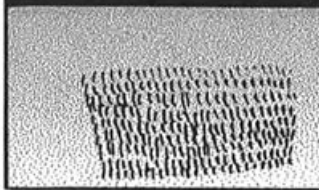
性能の優秀な
サラブレッド
純血種ヤプーと
なった



ヘレン三世が
王女クリスチーナの
十二歳の誕生日に



十二分の一縮小ヤブー
二百匹を



「生きた玩具の兵隊」
にして



「ビグミー・カンパニー」
矮人中隊」
と名づけて
贈物した時も



もちろん
このサラブレッドを
材料にしたのだが



そのうち
隊員中に



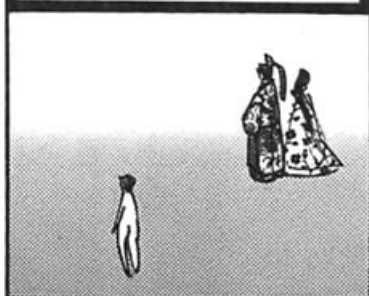
性能力を
維持し続けている者が
一匹発見された



突然変異で
あったろうが



サラブレッドから
これが
生れたのは
偶然とはいえまい



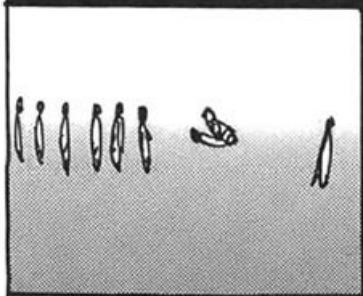
これは
アダムと
名づけられた



彼は
性能力の
続く限り



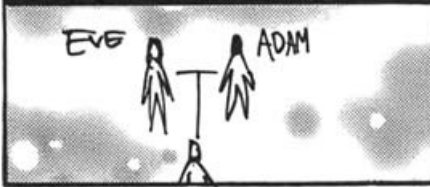
毎日何回でも
雌の縮小ヤブーを
相手に



子孫を
作らされた

彼の相手は
イブ一号とか百号とか
イブ号数で
称ばれたが

イブ同士は
母娘直系が
多かった



つまり
彼は
変種作出のため

娘
孫娘
曾孫娘
等と

房交配を
強制されていた
わけだ

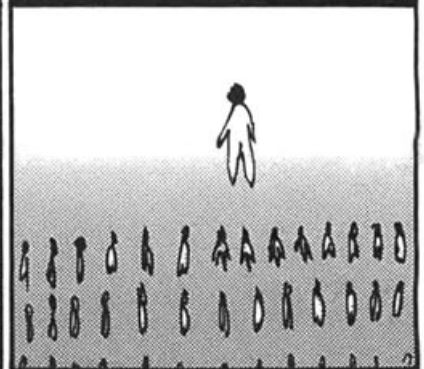


かくて
アダムの後に
残された
一群の
小人族は

ヤプーの
一大変種として
公認されたが

これを
矮人種と称ぶのは
クリスチーナ王女の
玩具の兵隊

※6
「矮人中隊」に
ちなんだ
命名であった



※6 正式学名は「ヤベット」 Yappet

彼らは
二十四日で
母胎を離れ



一年半で
成熟し



六歳まで
繁殖し



十年で
老衰死する



肉体的には
あらゆる点で
十二分の一に
なっていたが



知能
その他の
精神的能力は



普通の
ヤブーと
少しも
異ならない
立派な
知性動物だった



矮人種の
作出は
エボック
ヤブー文化史に
一時期を画した



始祖アダム
イブからの
系統図が
わかっているうえ



世代の
交代が
早いので



遺伝学・優生学・育種学の
実験用動物としては
最適であった

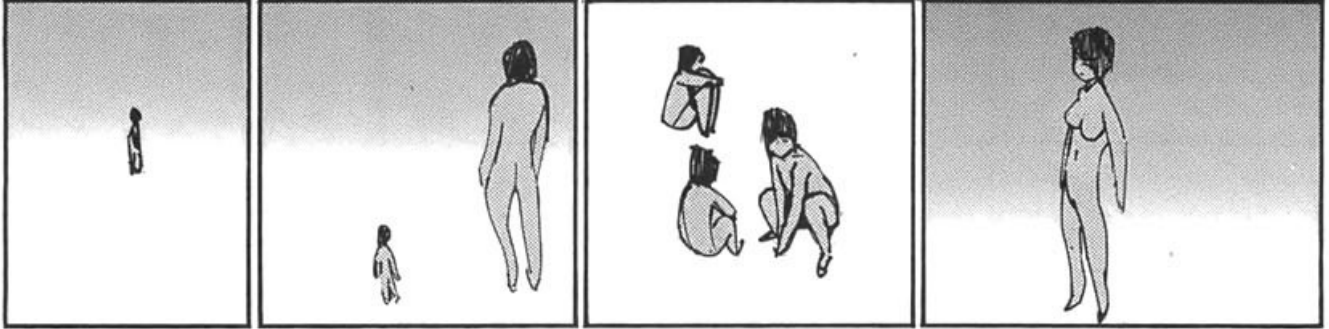


しかも
肉体は
人体の完全な
ミニチュア
縮小体である

医学・生理学・病理学での
モルモット代用としても
手軽で

結果が
早く出る等
原ヤプーを
使うより

ずっと
便利な点が
少ない



……が
歴史的に見れば
いちばん大きな
収穫は

その
機械工学的利用に
あった

※7
テレパシフィック・ビギン
読心能矮人は
命令脳波エネルギーが
少しでも動かせる

それで
これを機械の回路の
要所要所に
生体部品化して
備えつけた



※7 つまりCQの低い平民でも

完全自動装置が
※8
生産過程に
使用されることにな
った

ヤバマトロシ
有魂計算機を
代表とする

いわゆる
ソウド・マシン
有魂機械こそは

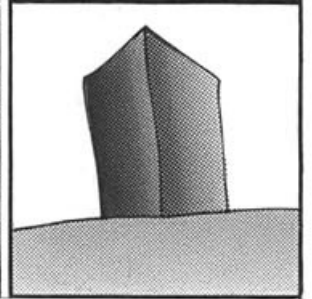
第三次機械自動化
※9
による

第五次産業革命の
基礎となった
ものである

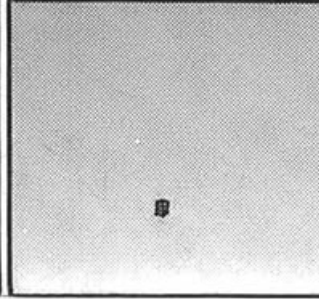


※8 これは平民の仕事である

巨大なビルのような
体積を誇っていた
人工頭脳が



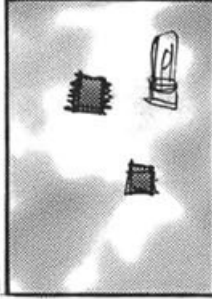
これにより
一挙に
千分の一の
大きさになった
有様は



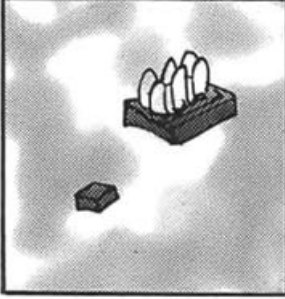
二十世紀人の
読者に対しては



真空管ラジオが
トランジスターや
ICの使用によって



小型化したことに
比喻するのが
いちばんわかりやすいで
あろう



とにかく
矮人種^{ビグミール}は



読心装置^{テレパシー}と
結合すること
によって



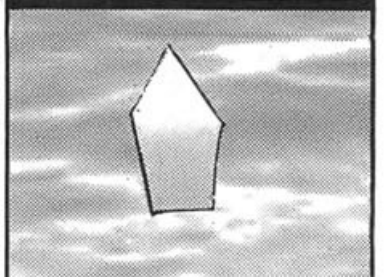
文化史上
真に革命的な
意義をになうこと
になったのだった



しかし
こればかりではない



いちいち
縮小機に掛けて
生産された
時代には



高価な
贅沢品としての



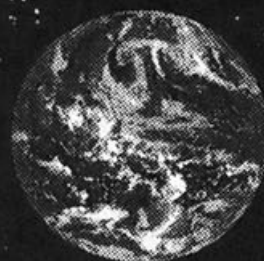
「生きた玩具」
でしか
なかったものが



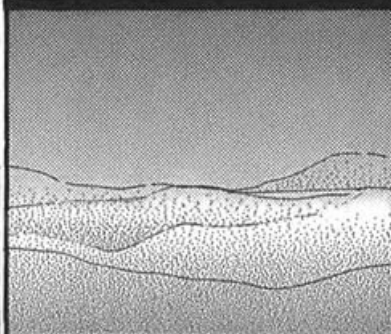
小人島^{リリパット}の
大牧場で
量産されるよう
になったのだ



リリパット 小人島 とは何か



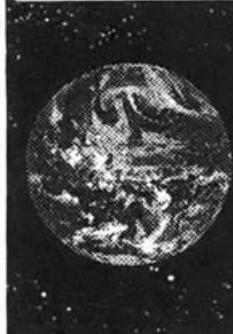
大気が
希薄なため
人間には
住めぬような
星でも



矮人は
呼吸量が少ないので
生存できる



そこで
※9
そういう惑星の一つが
矮人飼育用に使われ



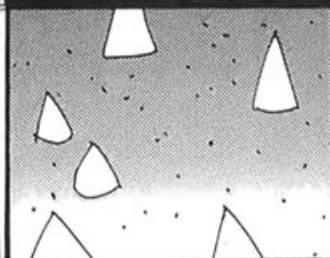
人間は
気密円頂閣に
住みながら



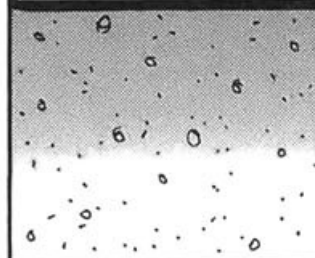
外に
野外飼育場を
施設して



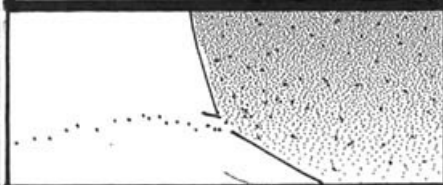
矮人族を
収容・飼育・繁殖
させることになった



これが
矮人牧場である



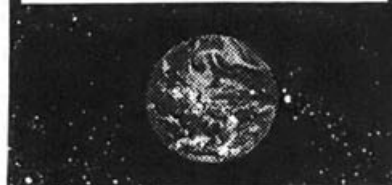
この牧場に
事故があつて
放牧中の一部矮人が
逸出したことがあり



いつか
囲障外で
食をあさりつつ
野生化した連中が
多数群がり
住むに至つて



リリパット
小人島の
称を生んだ



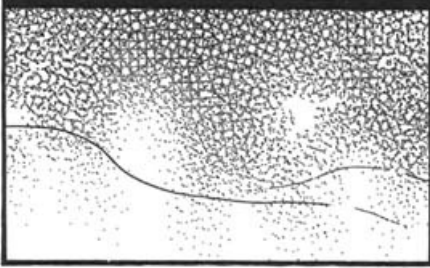
エコロジック・ステディ
生態学的研究の
宝庫といわれる
この星を



イース貴族たちは
釣堀とも称ぶ



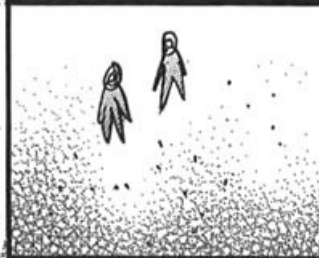
人間の住めぬ
大気層だから



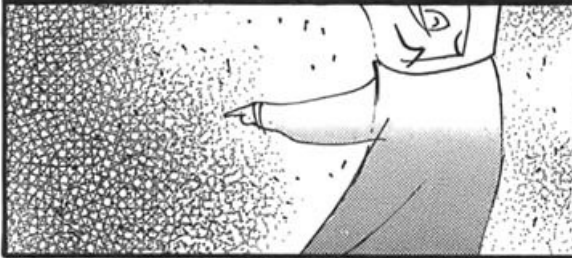
ヘルメット
気密帽や
スペーススーツ
宇宙服を
着けねばならぬ点で
海底にもぐるのに
似ているので



野生矮人の
捕獲は
獵てはなく
釣といわれる



矮人釣は
貴族以外味わえぬ
楽しい消閑の
一つだった



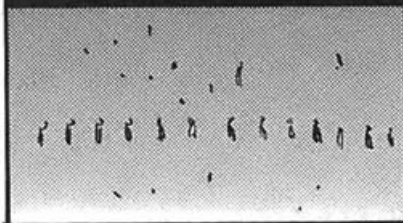
さてこそ
クララは
貴族に違いない

との
信用を
勝ち得たので
ある



※10 薬味サンタはその一種にすぎない
※11 机上の文房具の運搬操作に使役される

量産に伴い
広範な
実用的用途が
開けてきた



客間で
クララが
見聞した



※10
食卓矮人
鳥籠奴隸
花矮人
など

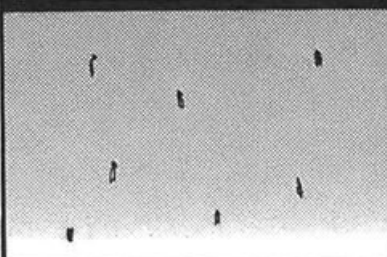


※12 鏡台の引出しに住み、常に香水瓶を背負っており、
主人の意に応じて香水を吹きかける

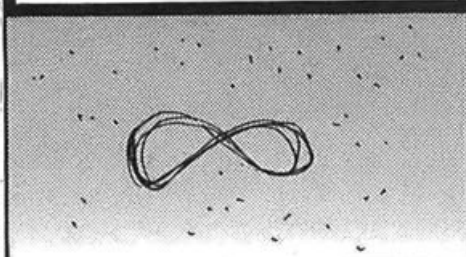
いづれも
従来の
生体家具では
用をなさなかつた
微小領域を



ビッグミゼーション
矮人利用化によって
新たに
活性化したもので



この類いの
応用は
ほとんど
無限だった



※13 潜水兜をかぶり、十二匹一組で、浴槽に安臥している
主人の体を湯の中に潜って行つて洗う

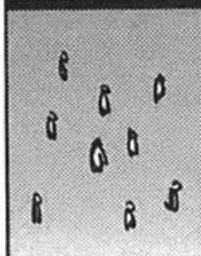
※11
デスク・ビッグミ
机矮人



※12
パフユム・ボーイ
香水瓶童子



※13
バスタブ・ビッグミーズ
浴槽矮人隊



※14
ブランケットクッション
足裏布団



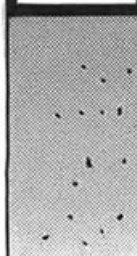
※15
ダイアア
肉襪襪



※16
テストヤベツト
検定小畜



等々……



※14 網皮化し、四肢を切断した矮人の胴体を、足裏の土踏まずのクッションとして横にして靴底に入れたもの。アーチサポートとか
※15 ippo a tappo aippo 生理極小畜と同じく、
靴底矮人ともいう。絶え間ない圧迫のため、普通の十分の一の一年ぐらいいしか寿命がない消耗品だが、使う側からいえば弾力ある踏み
心地の良さは格別で、歩き疲れないうえ、足裏の脂を吸い取らせるので足の美容にもよい。イース貴族の靴にはたいてい入れている
※16 テストヤベツト 全身表面に海綿状皮膚癌を有し、汚血・汚液を吸着する性質があるので、股間衛星維持のため愛用される

※16 モルモットの代わりに薬品の検定に用いられる。検尿矮人はこの一種

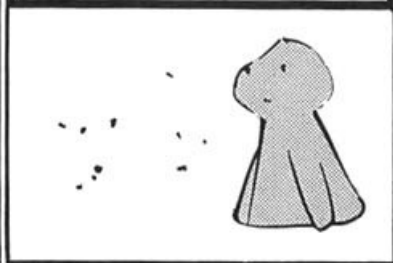
※17 超小型空中車に、下肢を切断した矮人を生体糊で接着固定したもの。その他用途広し

※18 電子人工頭脳回路の生体部品としてIQ一九〇以上の矮人数人を配したもの。普通の人工頭脳は命令をデープ化して与えねばならないが、これにはその必要がない。また種々の故障も自動修理する

さらに
ソーマ原液を
花から花に
集めたりする
空中矮人
※17
ニアロ・ビグミ
に至っては



従来の
ヤプー利用では
到底考えることも
できなかった
微小作業を



蜜蜂や蜂鳥と
同じように
やっつけのけるのだ



機械有魂化の
方向も
進歩は著しく



※18
有魂計算機



※19
黒奴監督機



※20
有罪度算出計



※21
神託機



等の
高度のものが
誕生している



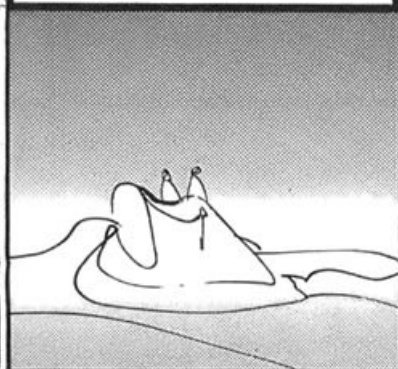
平民が
生産に従事し



貴族は
政治や司法を
行うのが
イース白人間での
職分であるが



その後者は
このような
有魂機械によって
代理される部分が
大きいので



貴族は安逸に
ふけりつつ



※19 後述の、黒奴の日記報告を照合する機械で、やはり人口頭脳を用いるが矮人が付属している

※20 「証提機械」ともいう。裁判官としての特別教育を受けた矮人百人を組み合わせ、一つの裁判補助具としたもの。証言を聞いて真偽を判断し、ランプで表示する。百灯あるので、有罪度が百分率で示されるのである

※21 「女王の予言者」ともいわれる。最大の有魂計算機と、それぞれ専門を持つ一万人の矮人を組み合わせ、何を聞いても答えられるようにした大きな機械で、立法諮問用として女王専用である

しかも
正しい裁判



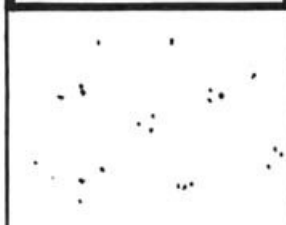
すぐれた政治を
行なうことが
できるのである



この際
原種ヤブーに
比べて



矮人^{ビクミ}の
長所だったのは



世代交代の
早いことから
優生交配による
品種改良が



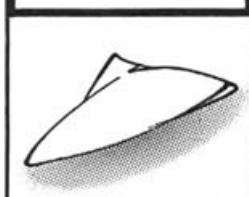
急速に
行われ得たこと
である



たとえば
さつき
ウィリアムが賭けた



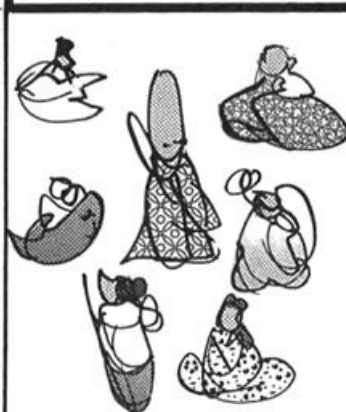
「置物の船」
とは



「生きた七福神を乗せた宝船」
なのであった



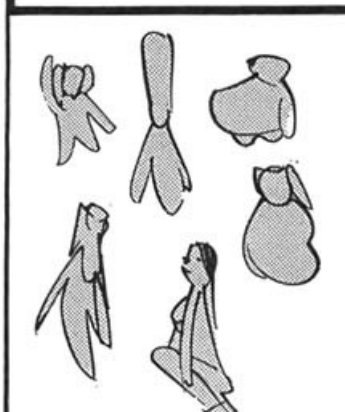
布袋^{ぼてい}の大きな腹
福祿寿^{ふくろくじゅ}の長い頭
皆そっくり
そのままの形で



しかも
生きているのだ



すべて
育種的に
作出した
奇形矮人^{ビクミ}なので
ある



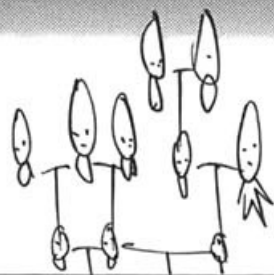
たとえば
福祿寿の
長い尖^{えい}がり帽子の
ような頭部にしても



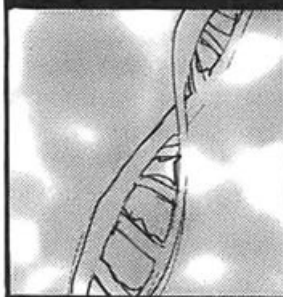
放射線で
突然変異させた
奇形矮人中から



尖頭児を選んで
交配し
変種を
確立したものだ



染色体手術法の
発明前に



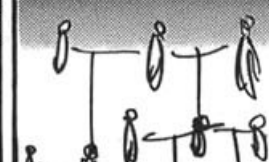
こうして
原矮人からは
続々珍奇な
変種が作られた



肉体
だけでなく



たとえば
音楽の天才を
やはり
交配によって



純血血統として
確立するものも
何でもない



この血統の
リトル・マジンガー
小伶人を
※22
特に一年間
訓練し



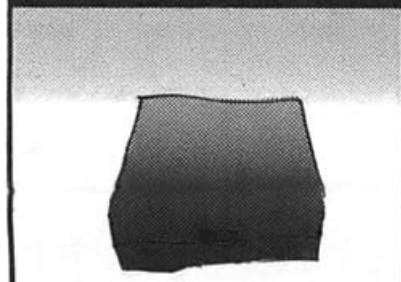
一人前に
仕込んでから



超小型ピアノに
付属させて
自動演奏具の中に
仕込んだり



一組にして
トランクに入れ
携帯用管弦楽団を
作ったりするわけだ



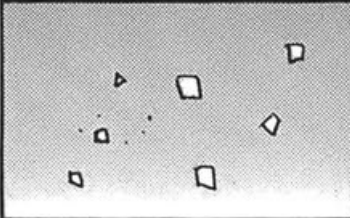
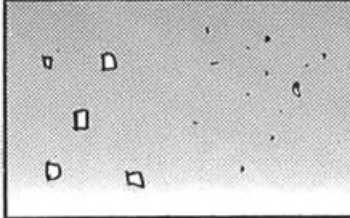
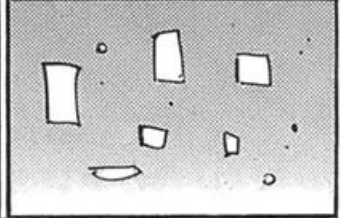
※22 人間の十二年にあたる

これらは
高級玩具として

先に
列記した
実用具とは
また別に

広い需要を
呼び起こした

玩具だから
といって
馬鹿にすると
間違って



現に
トランクの中にすむ
五十人のどの一人でも

二十世紀の
地球世界なら
大演奏家として
通用するに違いない
天才たちなのだ

楽器は
小さくても
性能がよいから

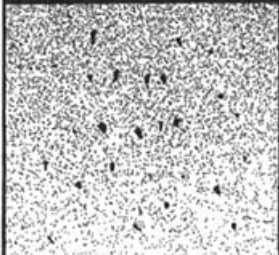


そのままの
形でも
二十世紀人の
演奏家に
ひけをとるまい

音楽に限らず
何か
特技を持たされた
矮人が

このように
どしどし
生産される

その特技として
武術を
選ばれたものが



次章に
紹介しようとする
グラフィック・レズ
小決闘士である



グラフィック・レズ
決闘士には
原やプーを
そのまま
転用しうる関係で



ビグミー・デュエル
畜人決闘は



古来から
イース人士の
愛好する娯楽
だったのだが



これが
矮人化された
ことにより



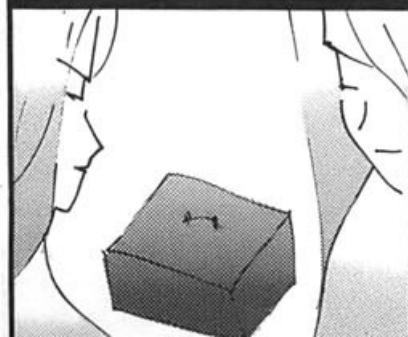
矮人決闘という
きわめて
手軽な形式で
室内遊技場に
持ち込まれるに至り



ことに
アングロ・サクソンの
伝統で
賭博好きは
貴族たちは



ちよつとした賭^{かけ}でも
「矮人^{ビグミー}に決めさせる」
ので



短日月の間に
広く普及したので
あった



ジャンセン家の
財力は



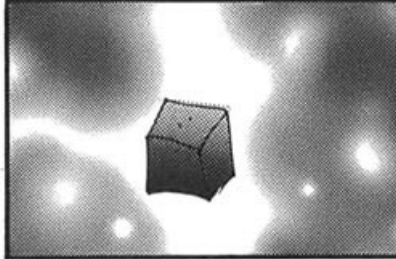
屋敷内
ばかりでなく



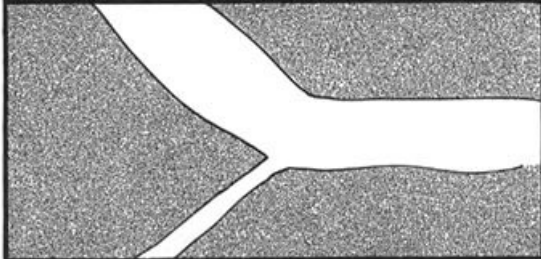
『氷河号』
のような
持船の中にまで



立派な
小決闘士^{グラフィック・レス・セット}の組物を
備えているの
である



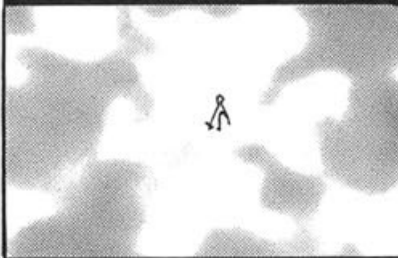
しかし
あまり横道に
それぬうちに
この程度の
予備知識で満足して



われわれは
クララや
鱗一郎のところに
戻ってゆくことにしよう



なお
本節では
極小畜のことに
触れなかったが



これは
多少の
知能劣弱化を
かまわずに
縮小した



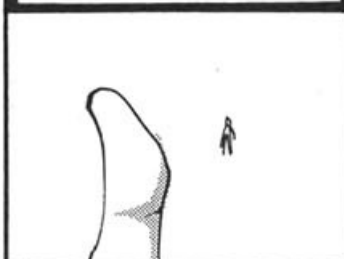
身長三センチ半の
五十分の一物で



完全な一寸法師
である



親指太郎^{トムサム}と
称ばれる
上等のものは



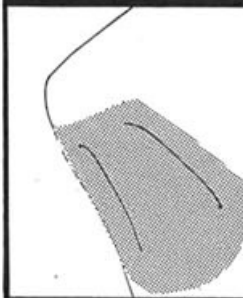
主人の
頭部諸孔の
管理が任務で



※23
眼係



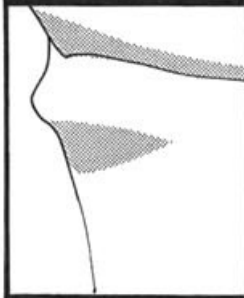
※24
鼻係



※25
耳係



※26
口係



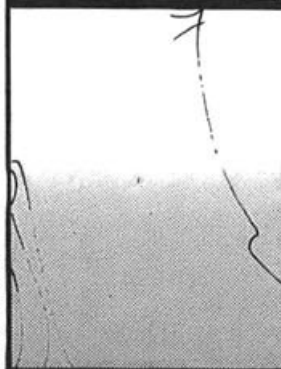
等がある



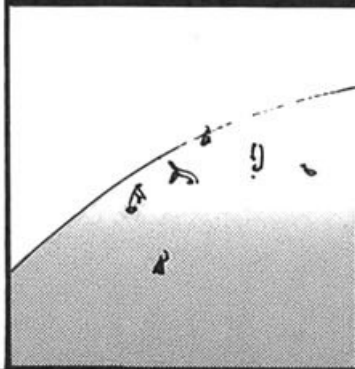
腸内極小畜や
生理極小畜の
ほか



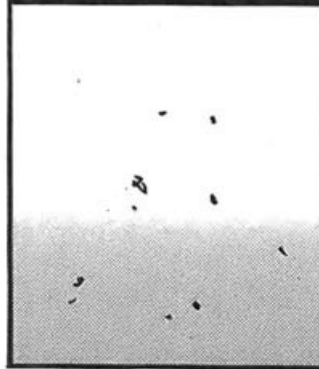
陰部寄生生物とか
腔内小童子とか
称ばれる



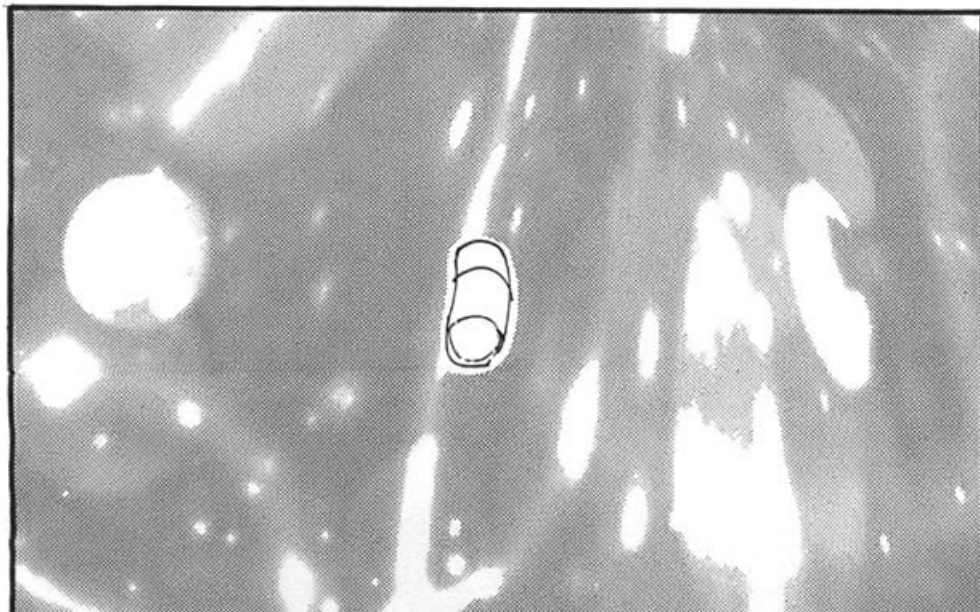
下等の
性交虫は
粘液環境内作業を
天職とするが



picae-scraper
glans-knocker
semen-drinker
など
各種がある



詳しくは
後章に譲ろう



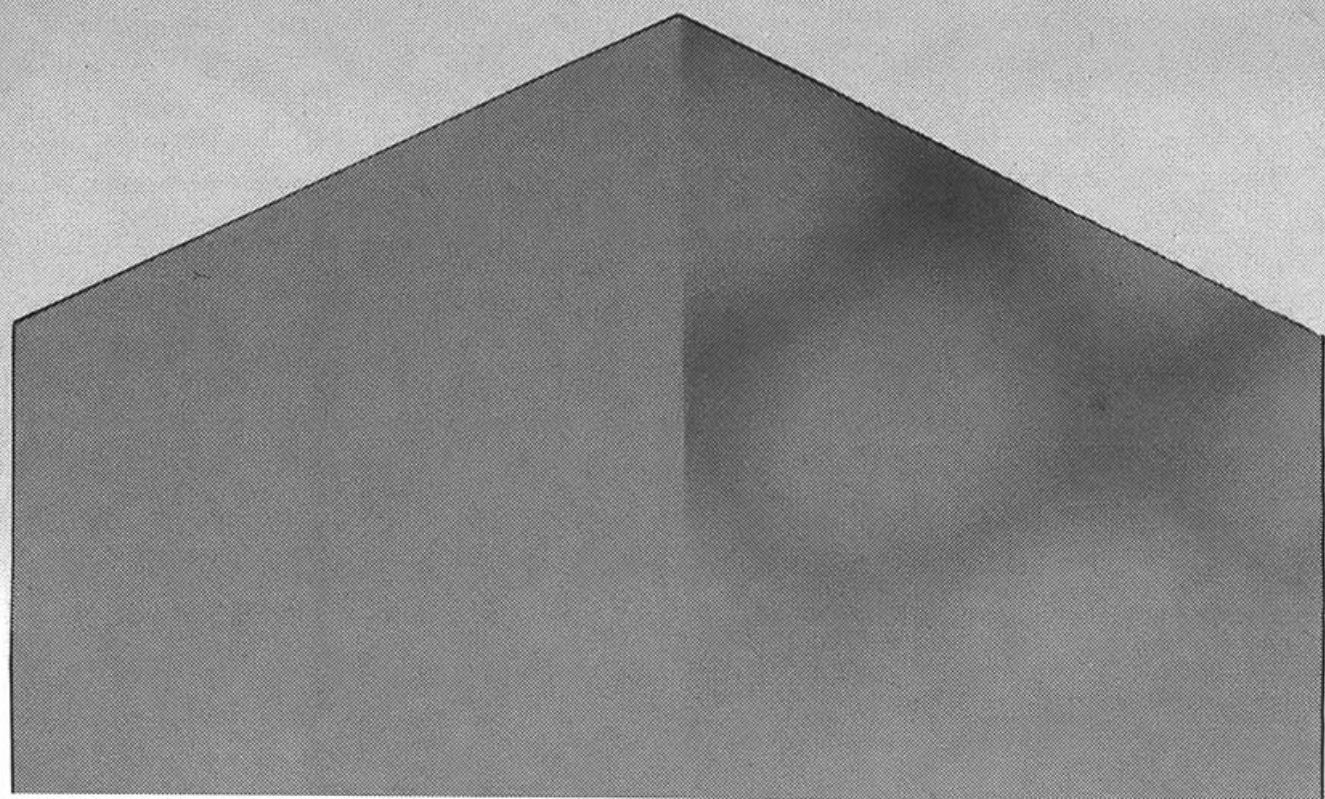
※23 睫毛を刈りそろえ、目糞をとる

※24 鼻毛を刈り、鼻糞をとる

※25 耳垢をとる

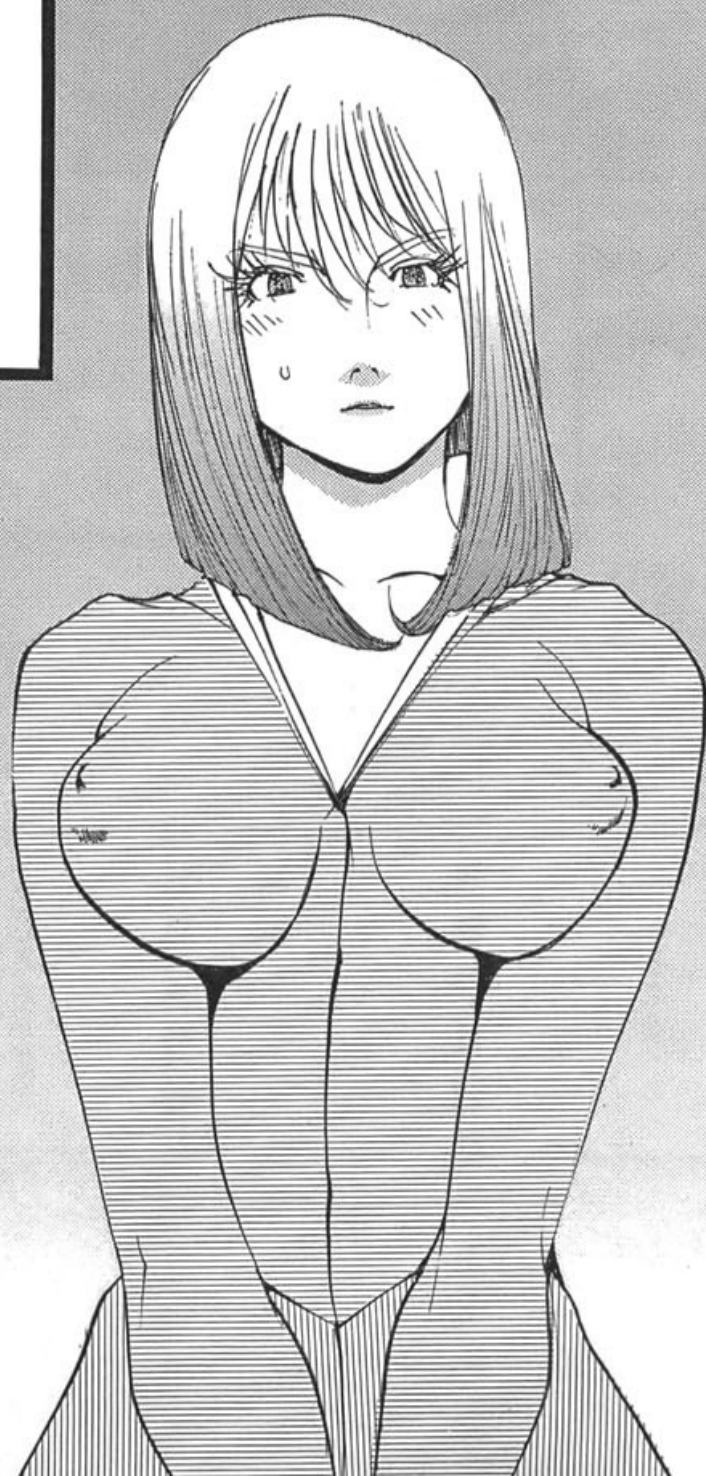
※26 常務は歯垢の除去。臨時には爪楊枝の代わりもする

クラウは
遊戯室中央の
黒い箱のわきに
立って

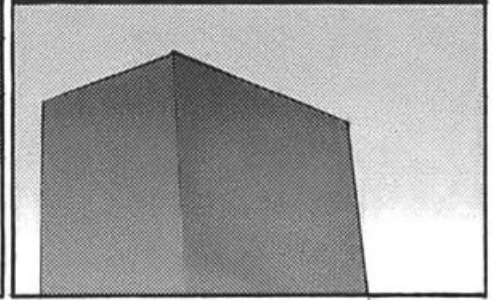


これから
どんな事が
始まるのか

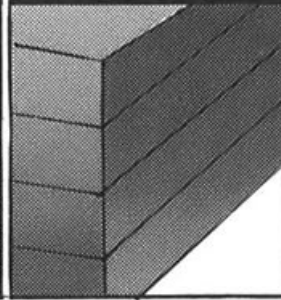
好奇心に
胸を躍らせていた



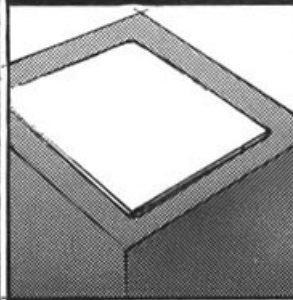
高さ八十センチ
縦横一メートルほどの
四角形な
がっしりした
鉄の大箱



側面は
四面とも
四段の引出しに
なっており



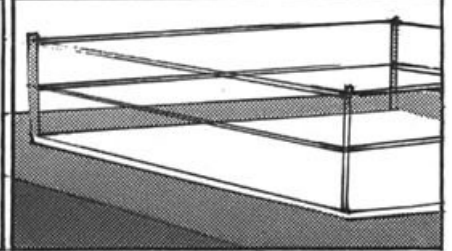
上面には
縁を十センチほど
残して



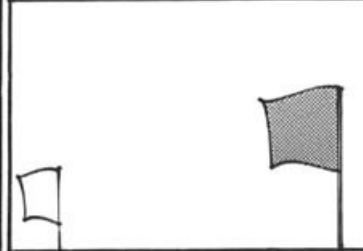
八十センチ四方の
試合場が
しつらえられ



周囲に
五センチ
十センチほどの
高さて
網が張られていた



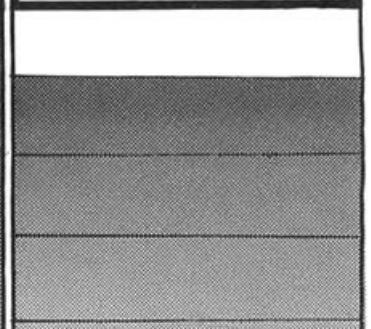
対角線上に
青と白の
旗門が
立っているのは



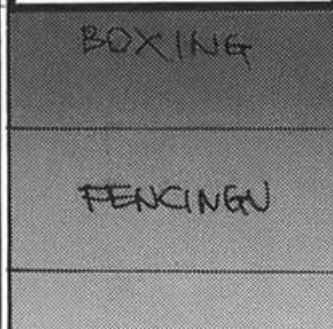
隅の
標示であろうか



引出しには



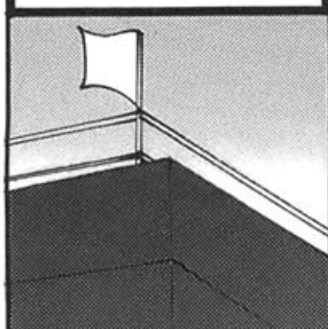
BOXING(拳闘)
とか
FENCING(剣術)
とかいった



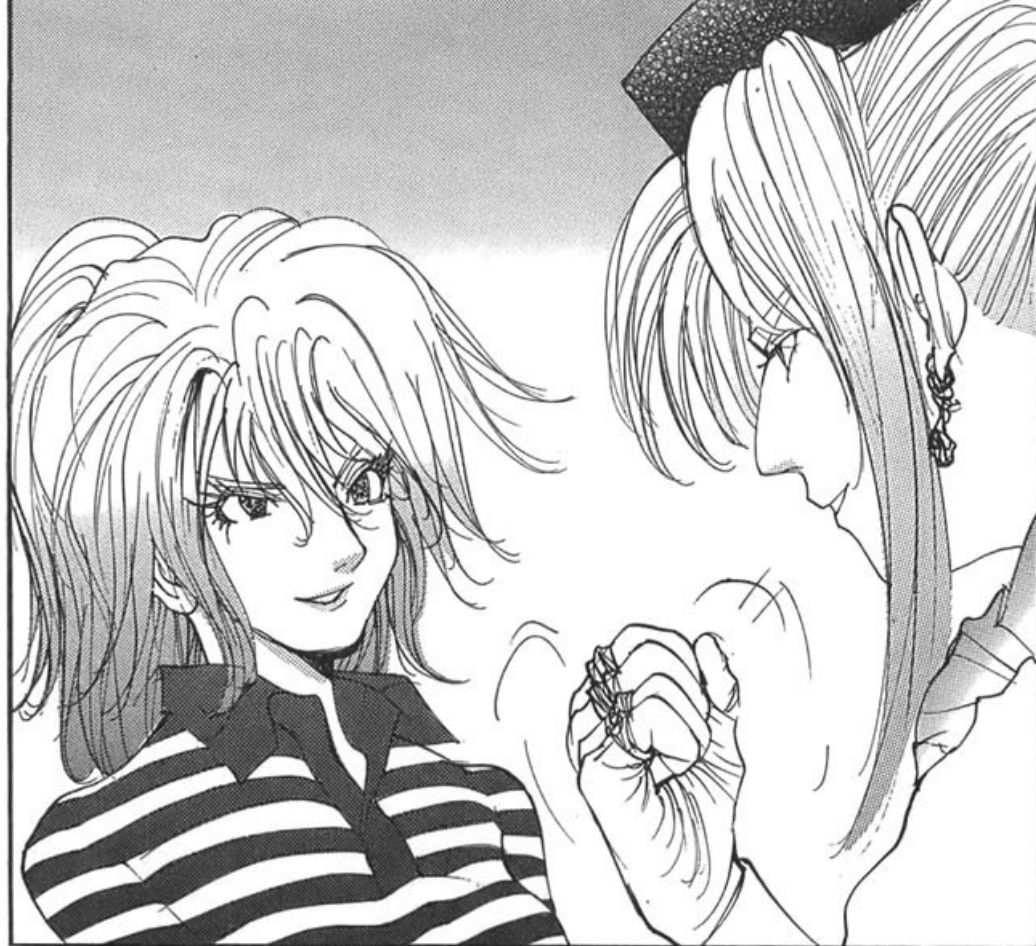
闘技の
名称が
記されている



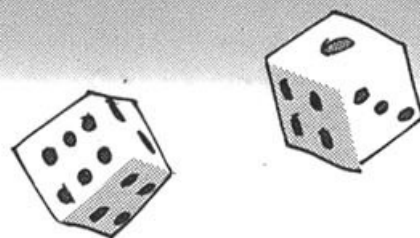
競争の
当事者になった



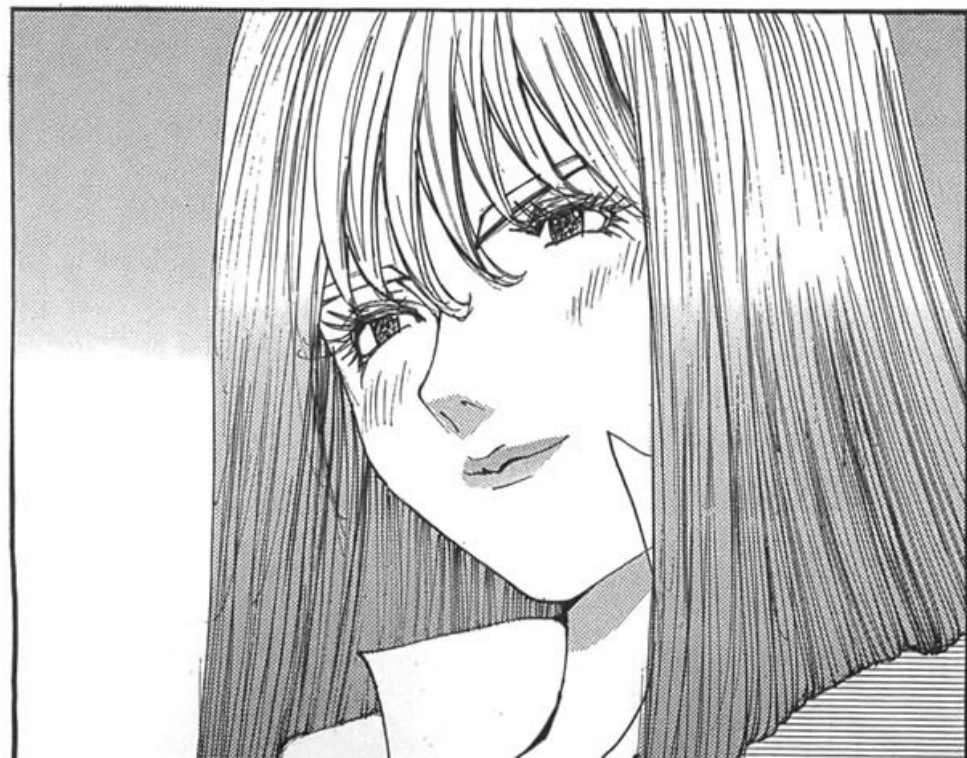
ジャンセン嬢ドリスと
ドレイパア郎ウィリアムとが



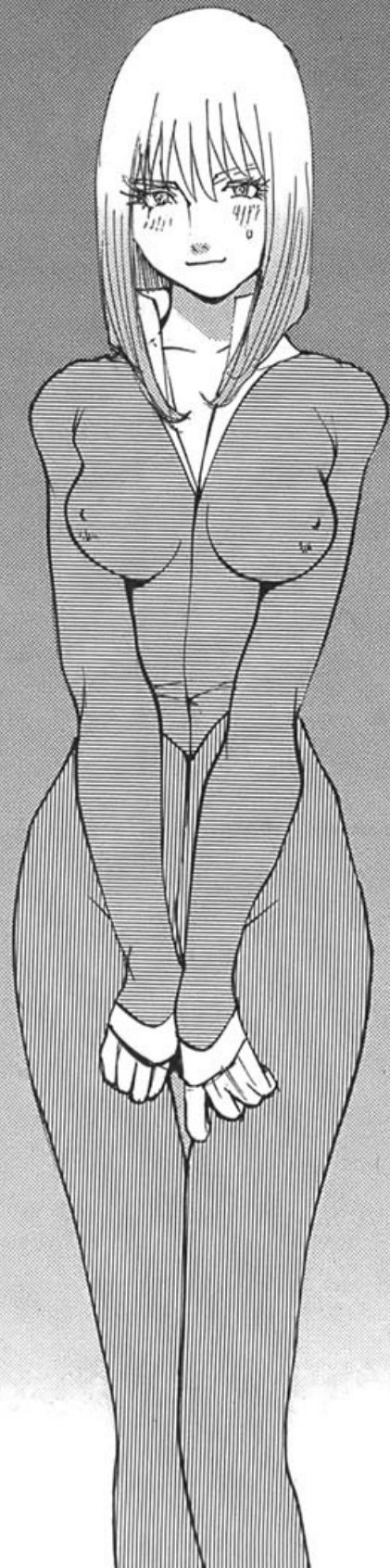
さいころ
骰子を
振り合っている間



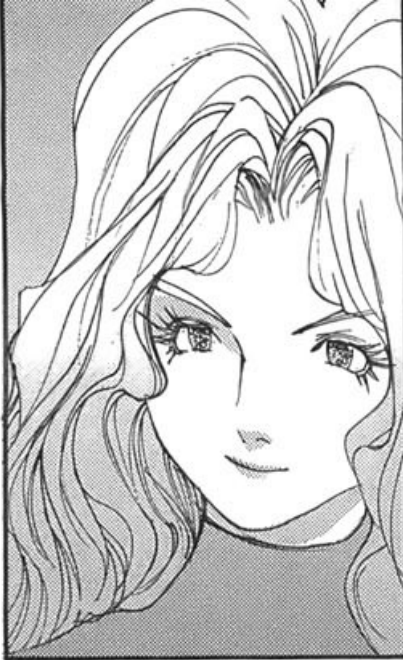
クララは
好奇心を満たしたい
欲望と



イース貴族を
装ううえでの
自重・自制との
格闘に苦しんだが



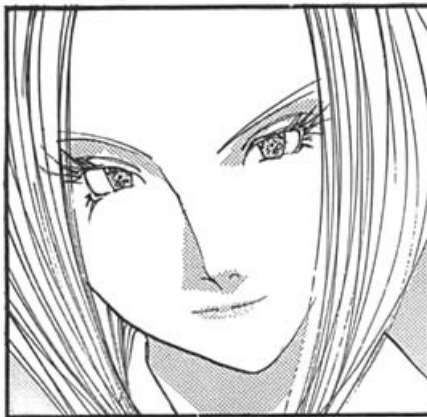
妹から
聞かされたとおり



クララは
すべての記憶を
喪失した人である



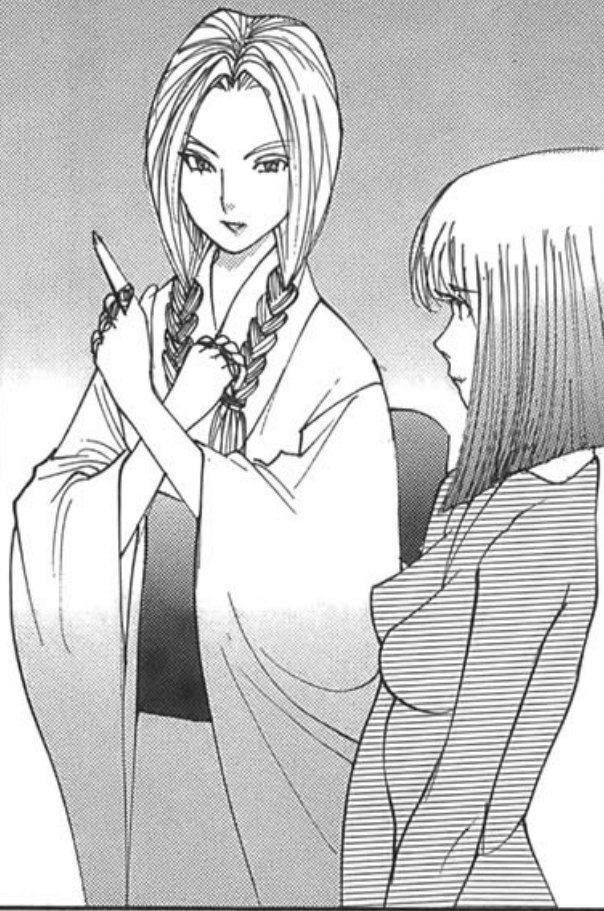
と
信じ込んでいる
セシルは



一つには
ヤプーについての知識を
この美しい客人に
披瀝^{ひれき}する
うれしさも手伝って



頼まれも
しないのに



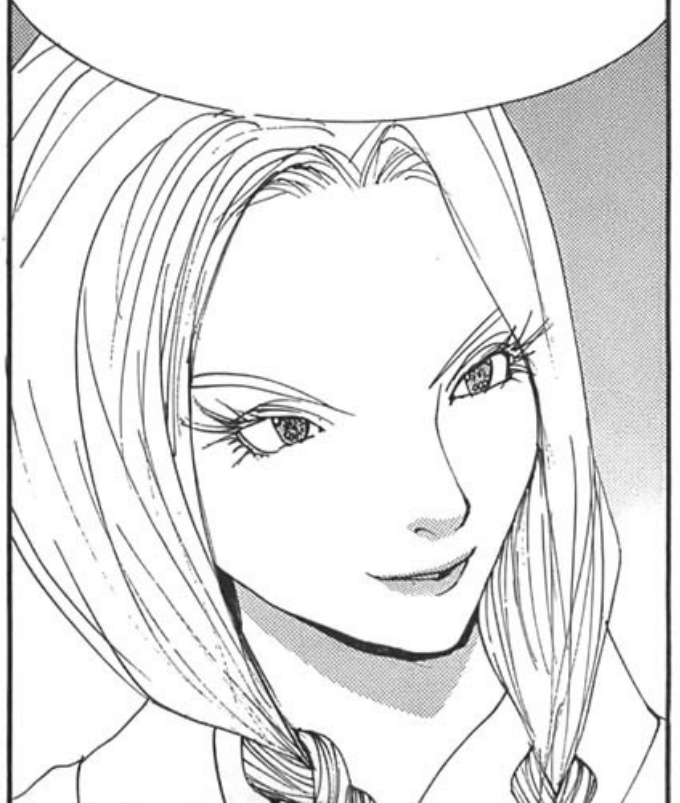
クララに
向って説明を
始めた

この
グラジャートレット・チエスト
小決闘士簞笥
のことを
彼ら自身は
ドロアーズ・ドミトリ
引出し寄宿舎と
称びます

引出し
十六個のうち

四つは素手組
ハウナツツ

残りが武器組です
ハウズズ



素手組は
ボクシング
レスリング
ジュウドー

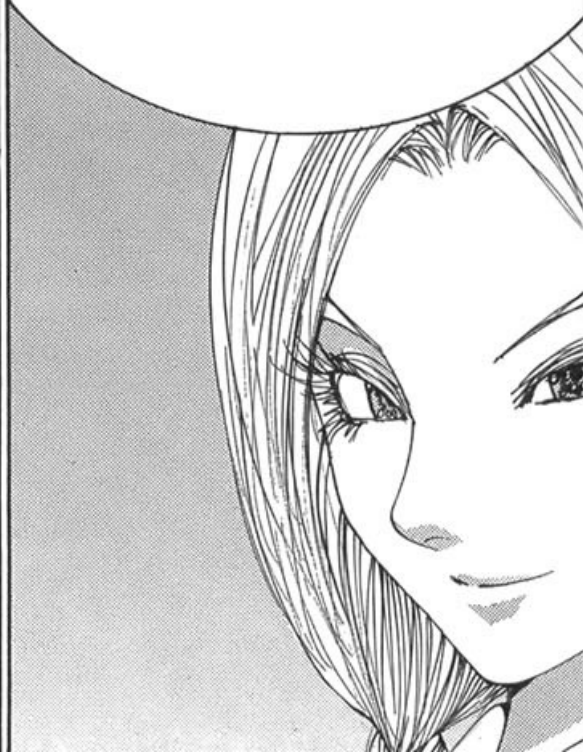
この言葉で
クララはふと
隣一郎の
たくましい体格を
思い出した



※²⁷
パンクレイシヤム
の四種です

武器組は
剣・槍・棒から
ローマ決闘風の
盾と刀まで
十二種の
凶器で区別され
専門化してます

どの引出しを
選ぶかは骰子の目が
決めますが……





それが
決まったらしい



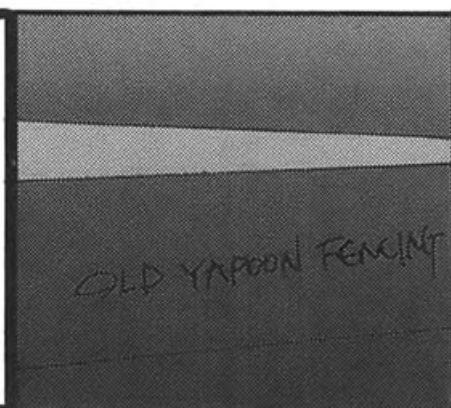
横から
のぞき込んで



ドリスが



※28
OLD
YAPOON
FENCING
と標示のある
引出しを抜いた



OLD YAPOON FENCING

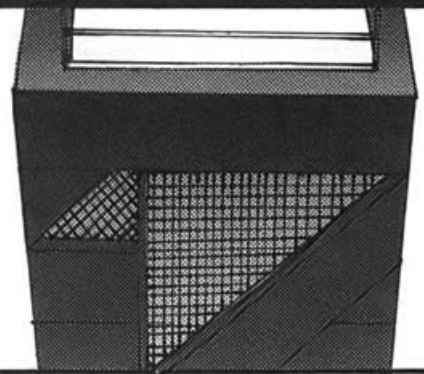


小人の
アパートなのだ

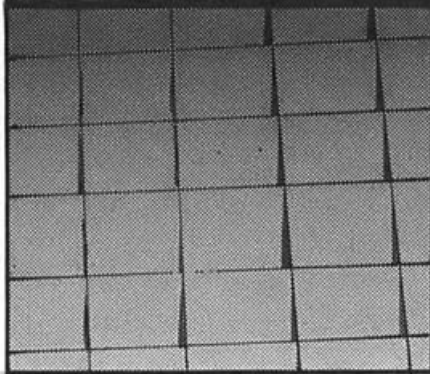


クララは
またまた
内心びっくり
させられた

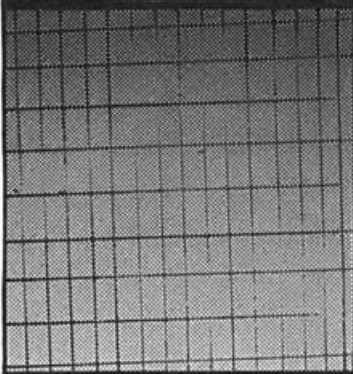
引出しは
直角二等辺三角形
だったが



鉤物の
標本箱のように
縦横に狭い仕切が
あった



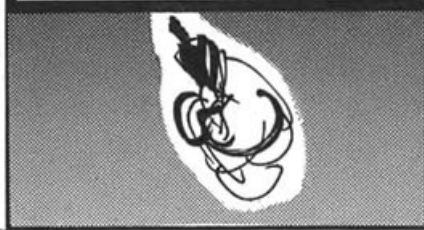
一引出しに
百ほど
区画があろうか



その
一つ一つが
個室アトリエになって
小さな家具を備え



中に
キモノを着た矮人ピグミーが
寝たり坐ったり
しているのである



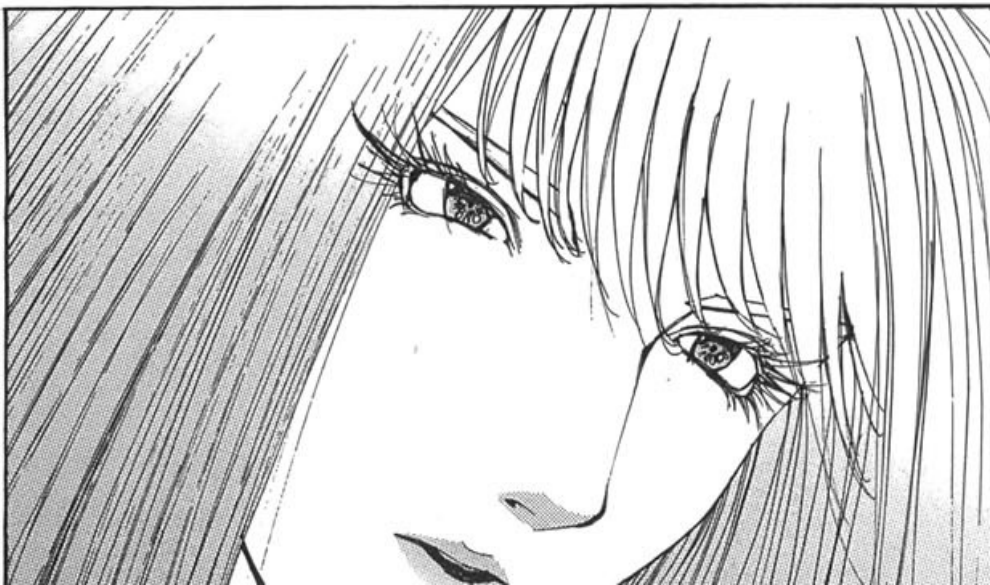
妙な
頭髮の形だ



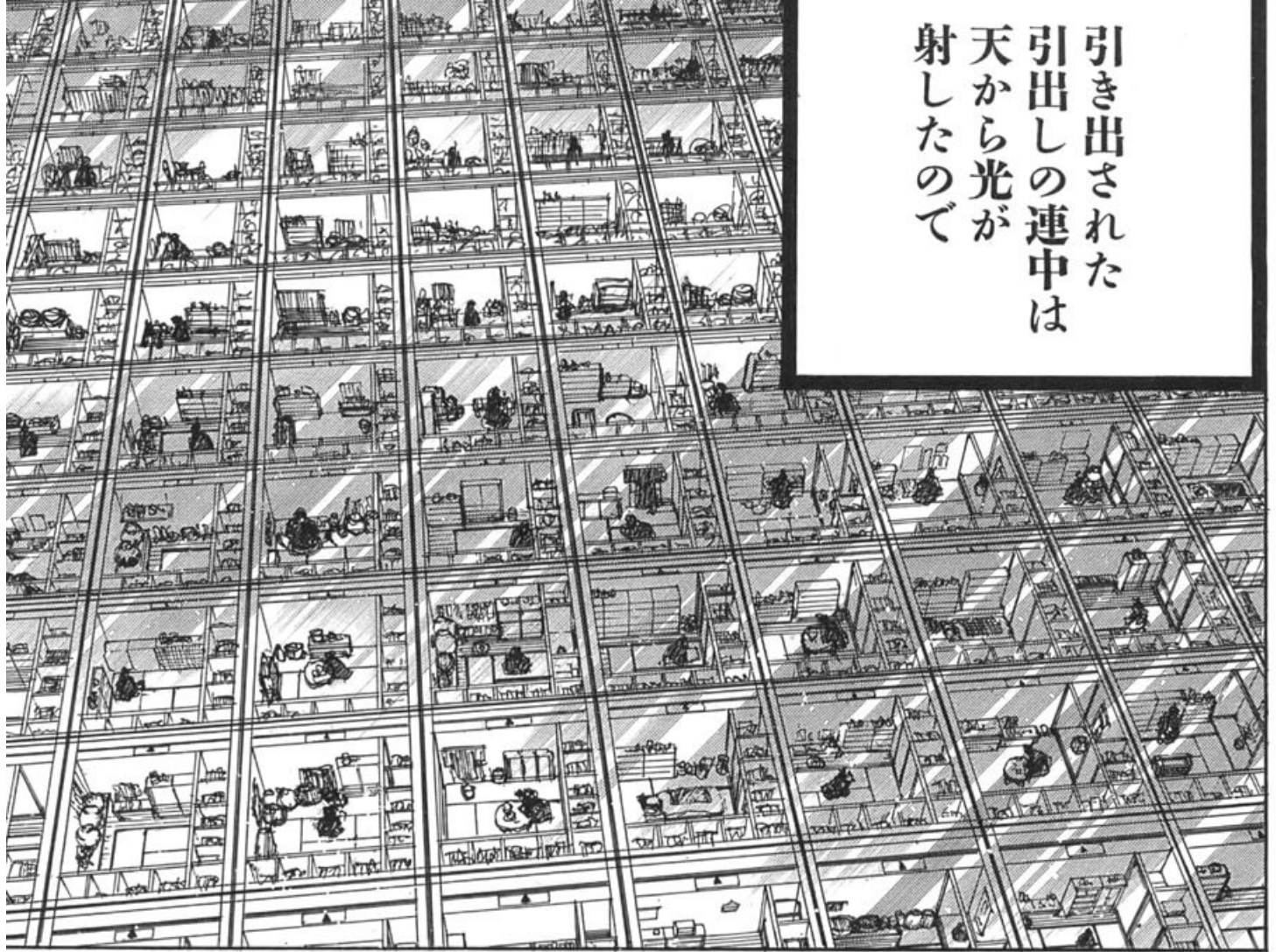
ちょんまげとは



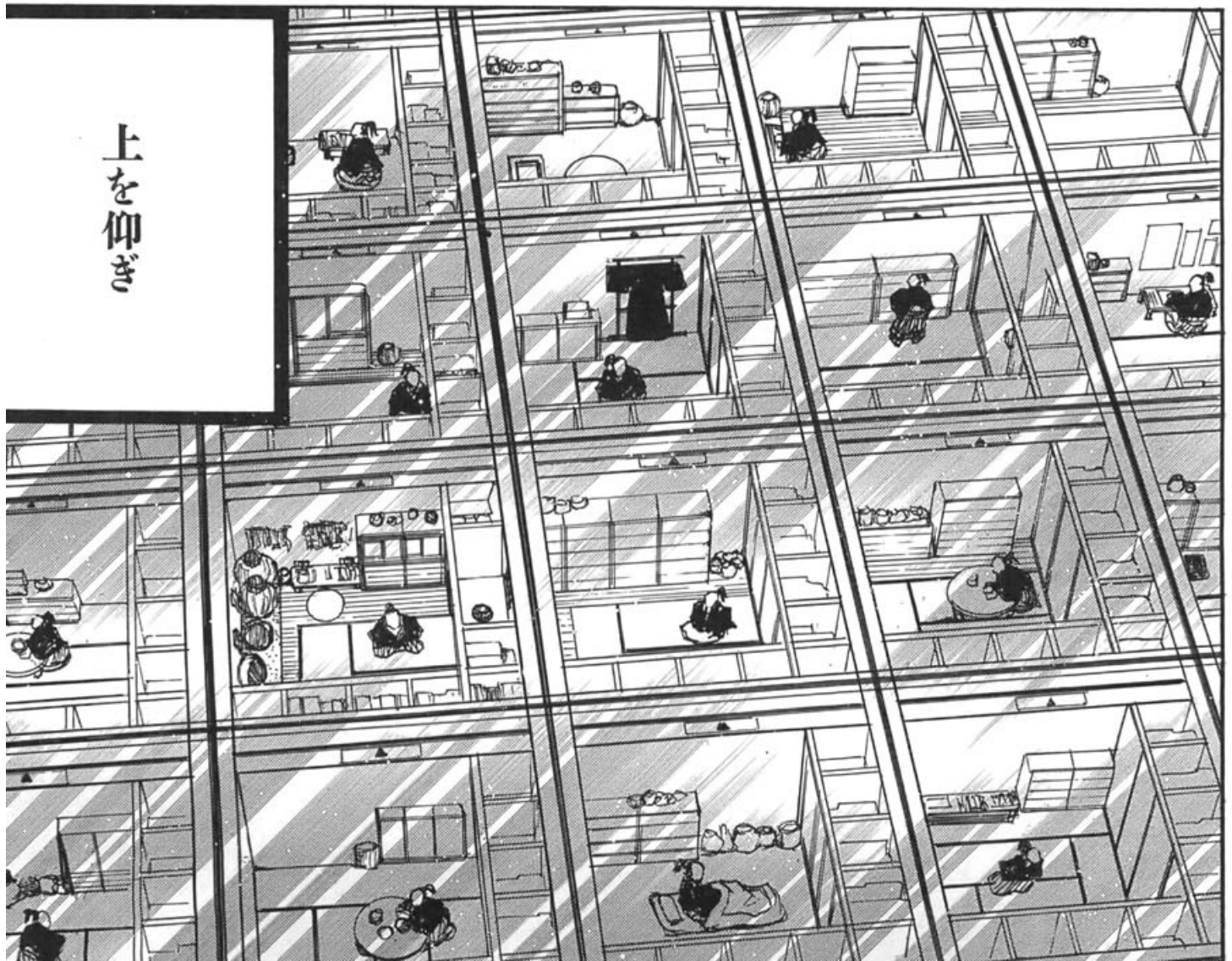
クララは
知らない



引き出された
引出しの連中は
天から光が
射したので

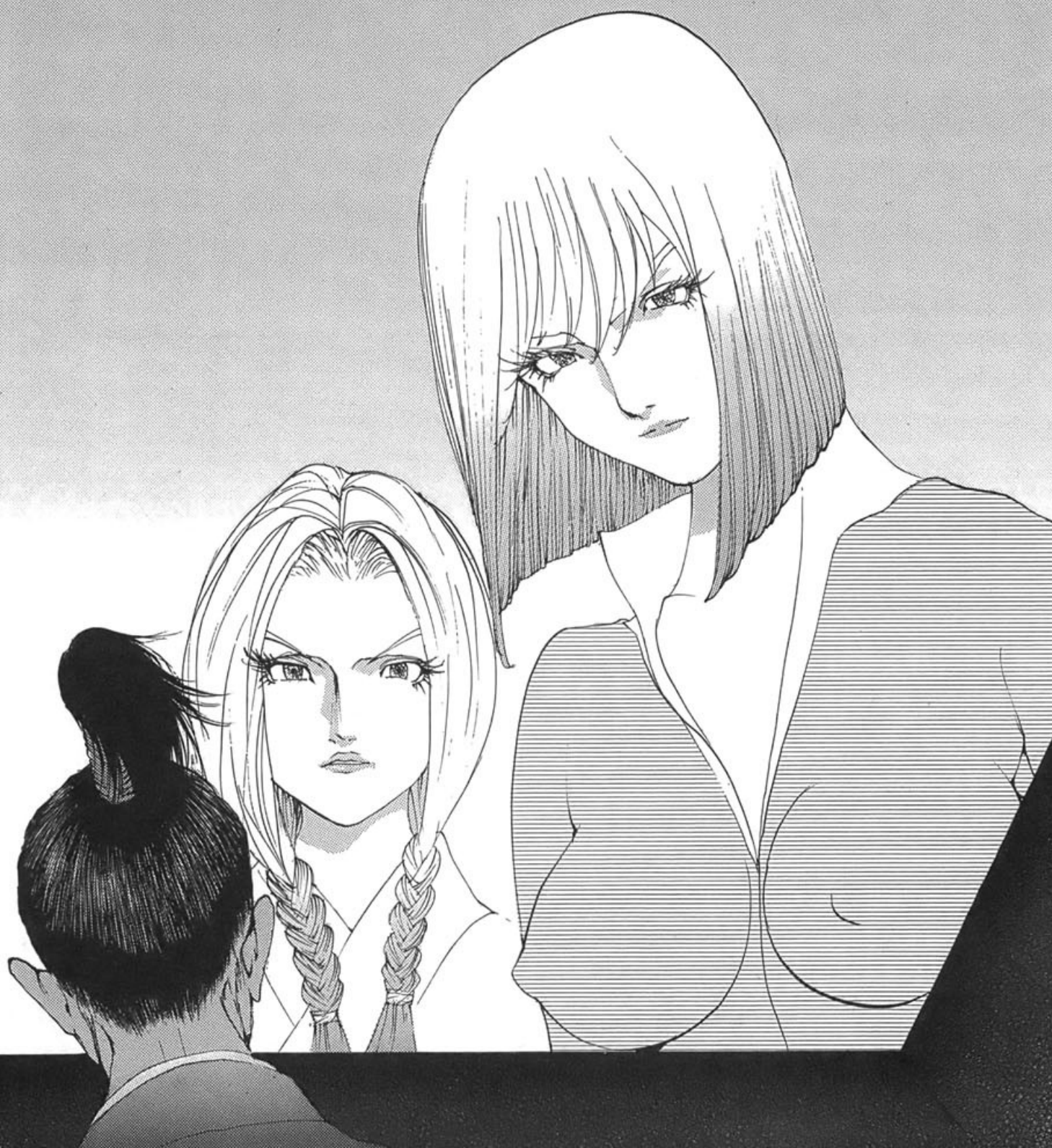


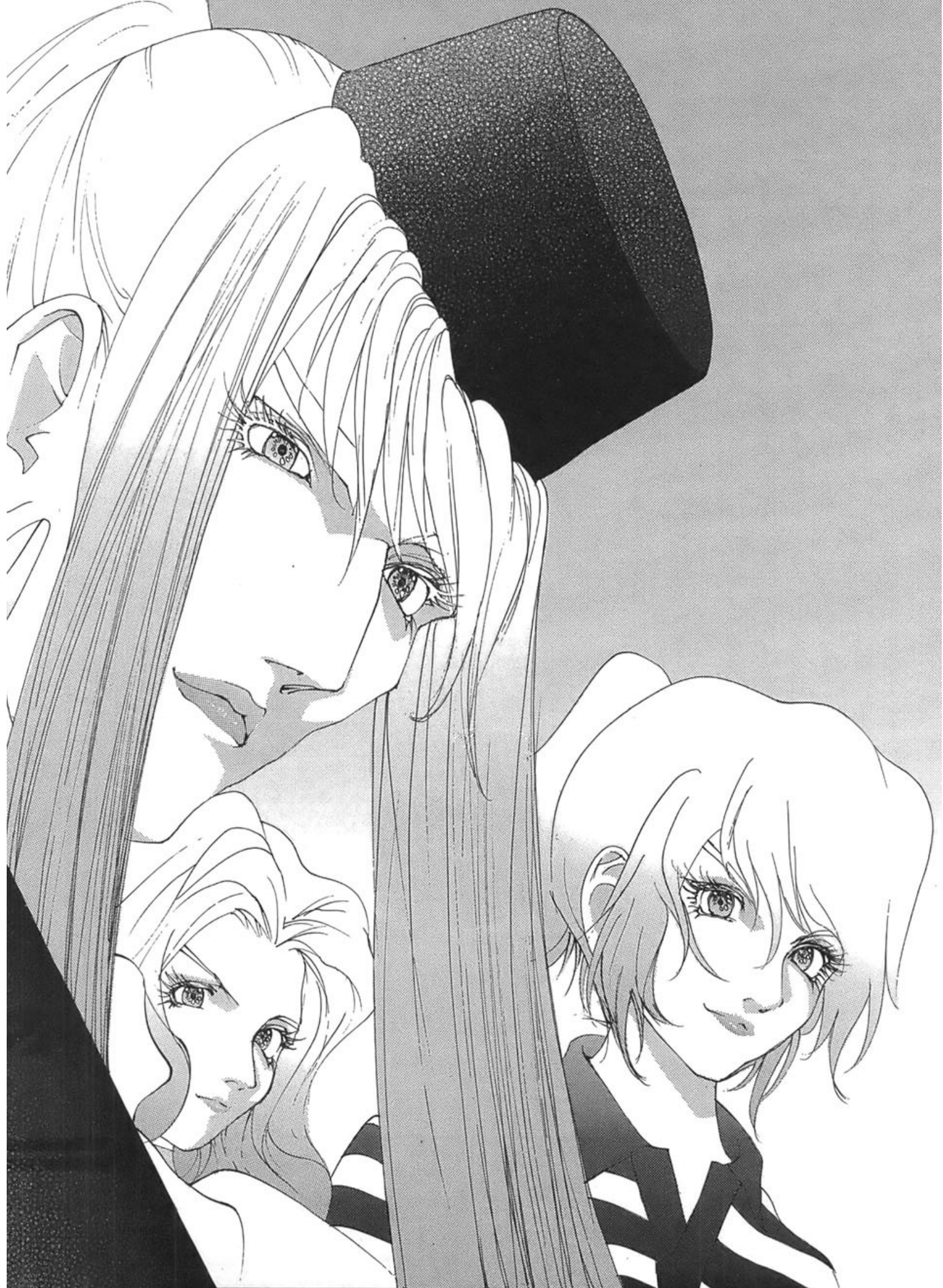
上を仰ぎ



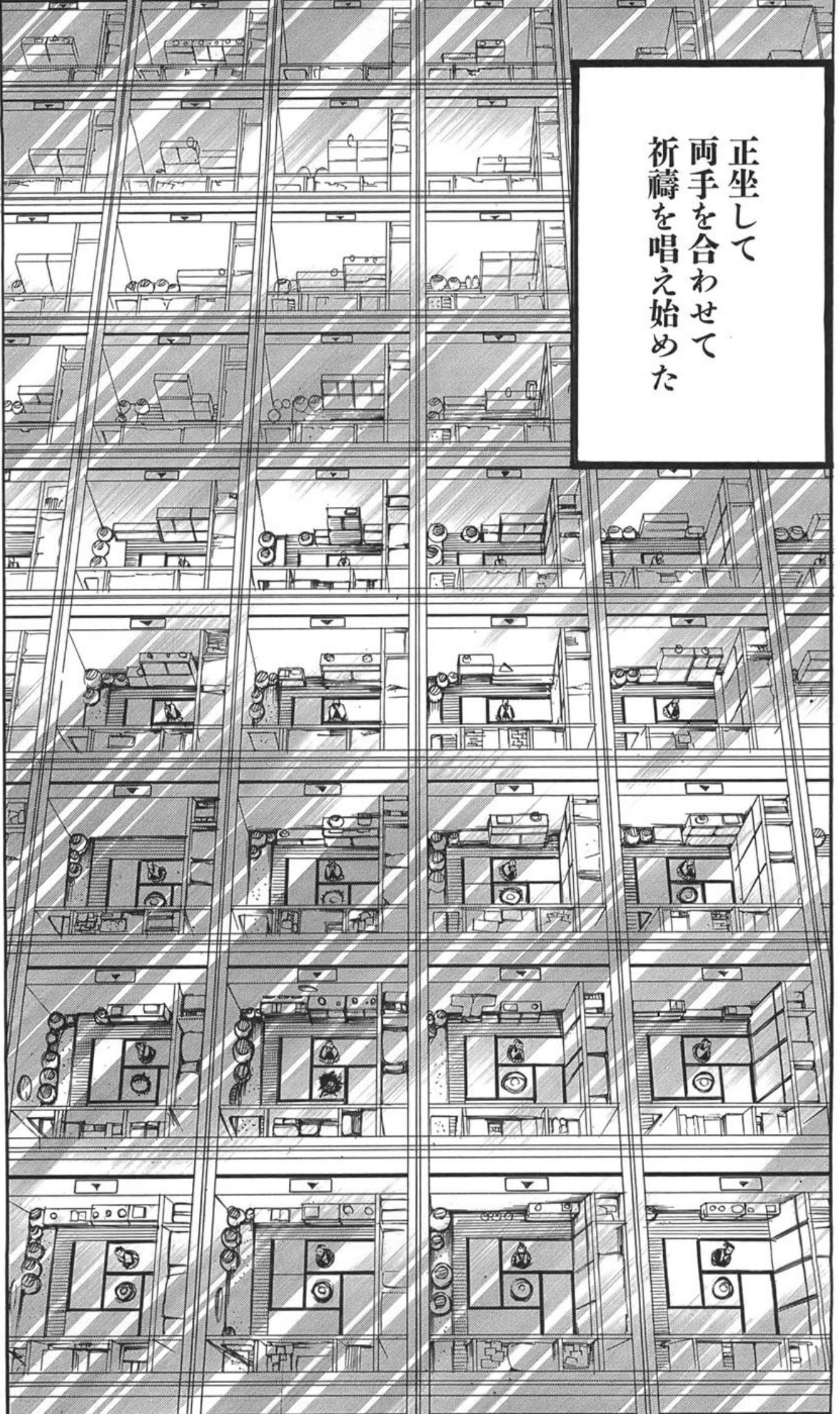
五人の

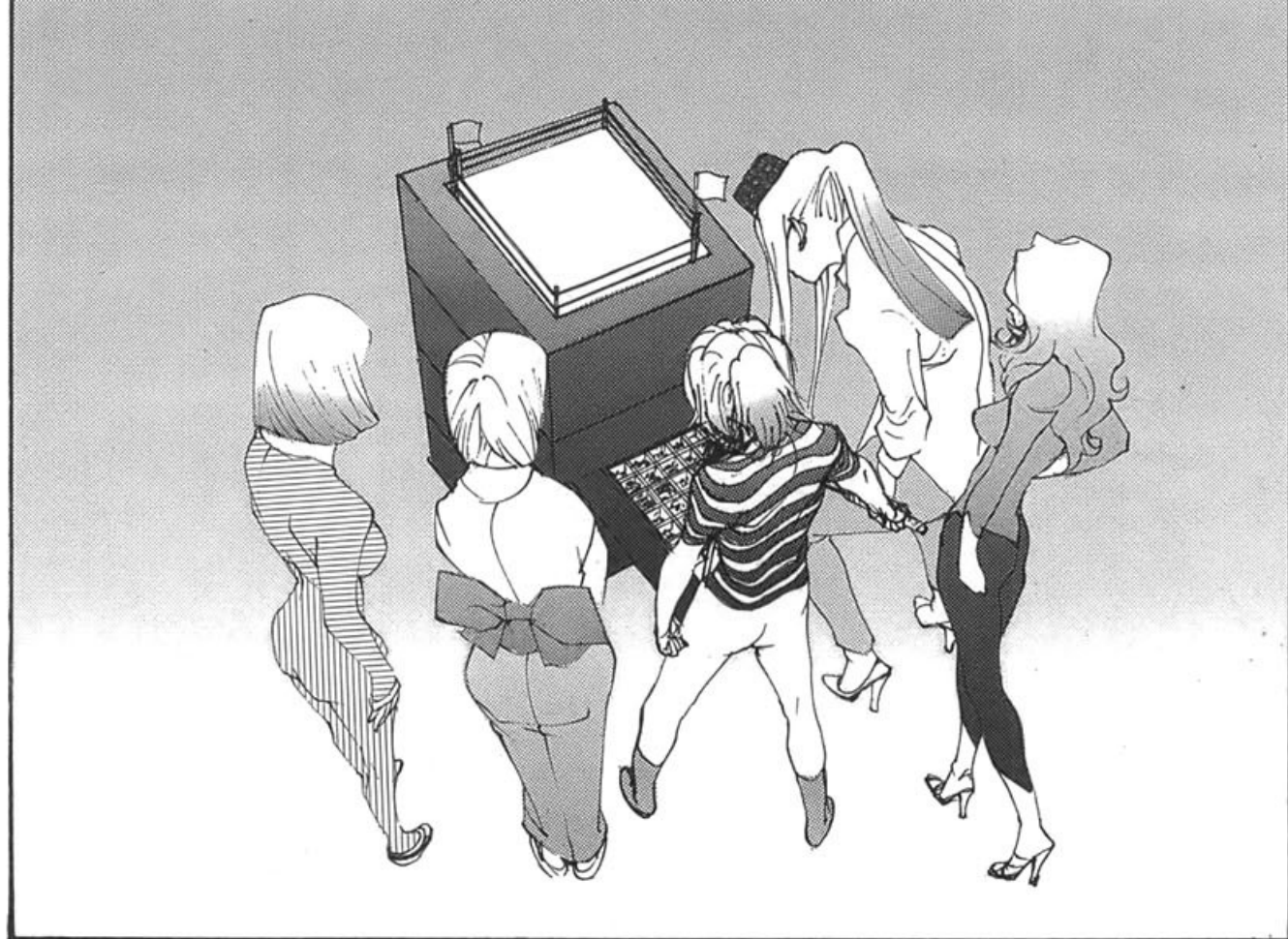
姿を
見ると





正坐して
両手を合わせて
祈禱を唱え始めた

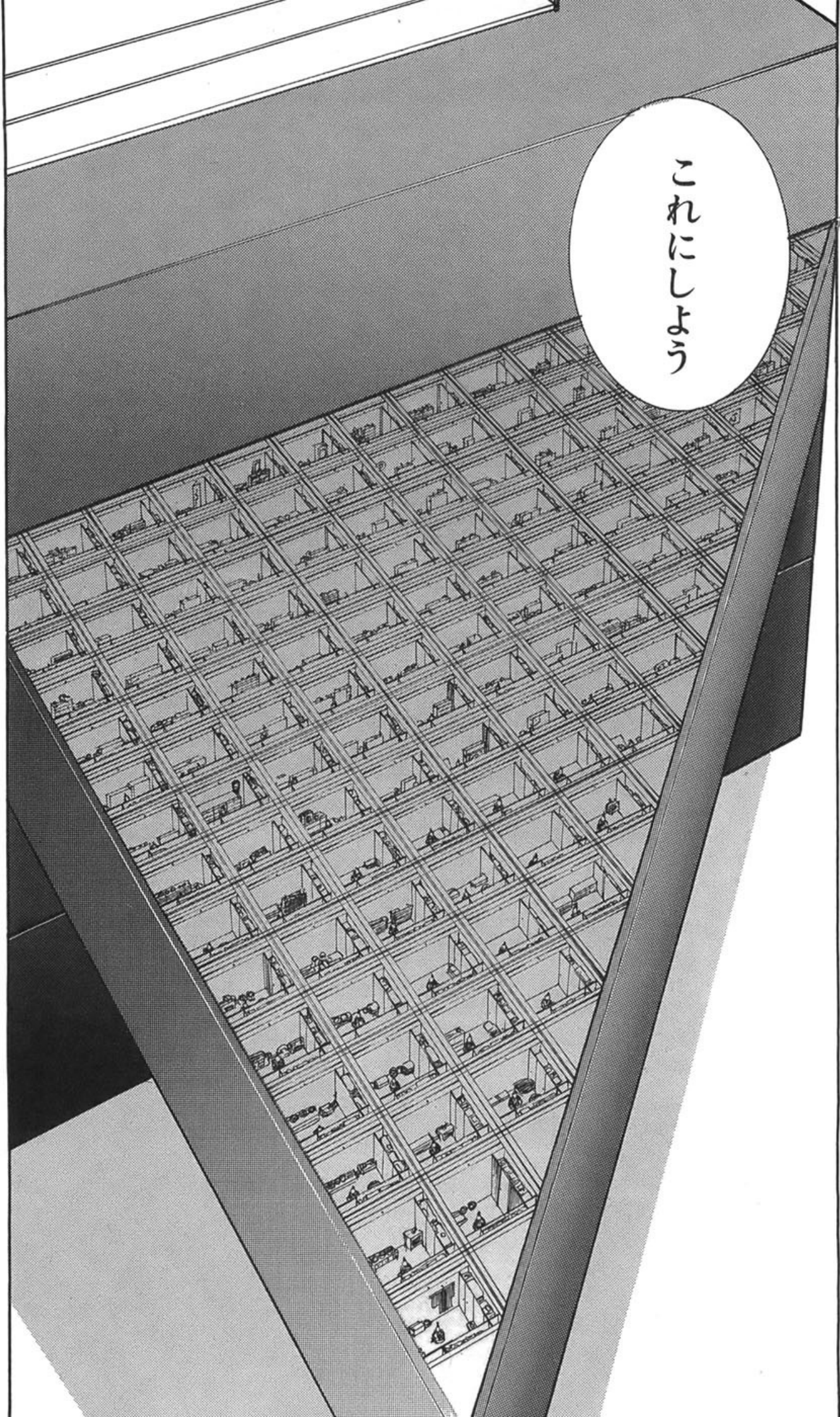




ドリスは
しばらく
見渡していたが



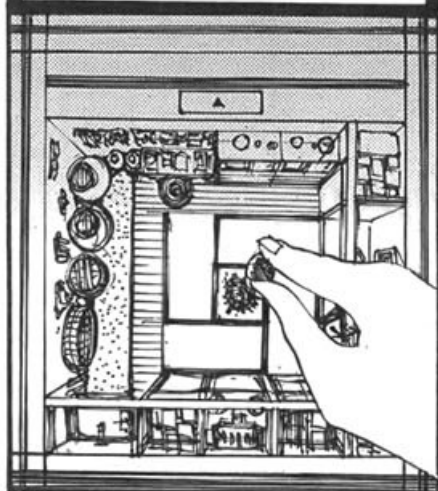
これにしよう



と
いって
鞭を小脇に
はさむと



右手を
伸ばして
一匹を
摘み上げた



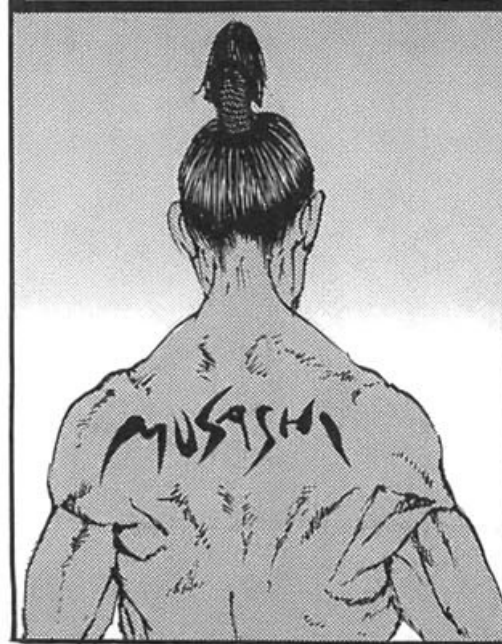
バツと
キモノを
脱ぎ捨てた
彼の胸には



ニューマの
額と同じ
ジャンセン家の
紋が



背中には
MUSASHIの
七文字が
焼きつけられて
いる



五体は
刀傷の
痕だらけで
ある



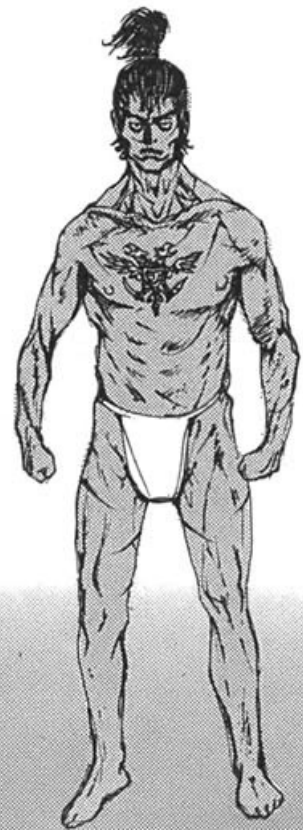
六尺^{たけ}禪^{ぜん}のような
白いものを
腰に
まといていたが



よく見ると
布ではなく
白金^{はくしん}様の^{よう}
肉質^{にくしつ}金属^{きんぞく}らしい



この
白金^{はくしん}禪^{ぜん}以外は
何も
身に
つけていない



顔から見ると
年若^{としわか}なようだ



ムサシを
左^{ひだり}の
手掌^{てのひら}に
載^のせた
ドリスは



あるかないかの産毛が
微かに上唇を
かげらせている
ポツチリ赤い
口元をとがらすと

その
手掌の上に



プツ

と
小さく
唾を吐いた

矮人は
待っていたように
膝をつき
両手をつく



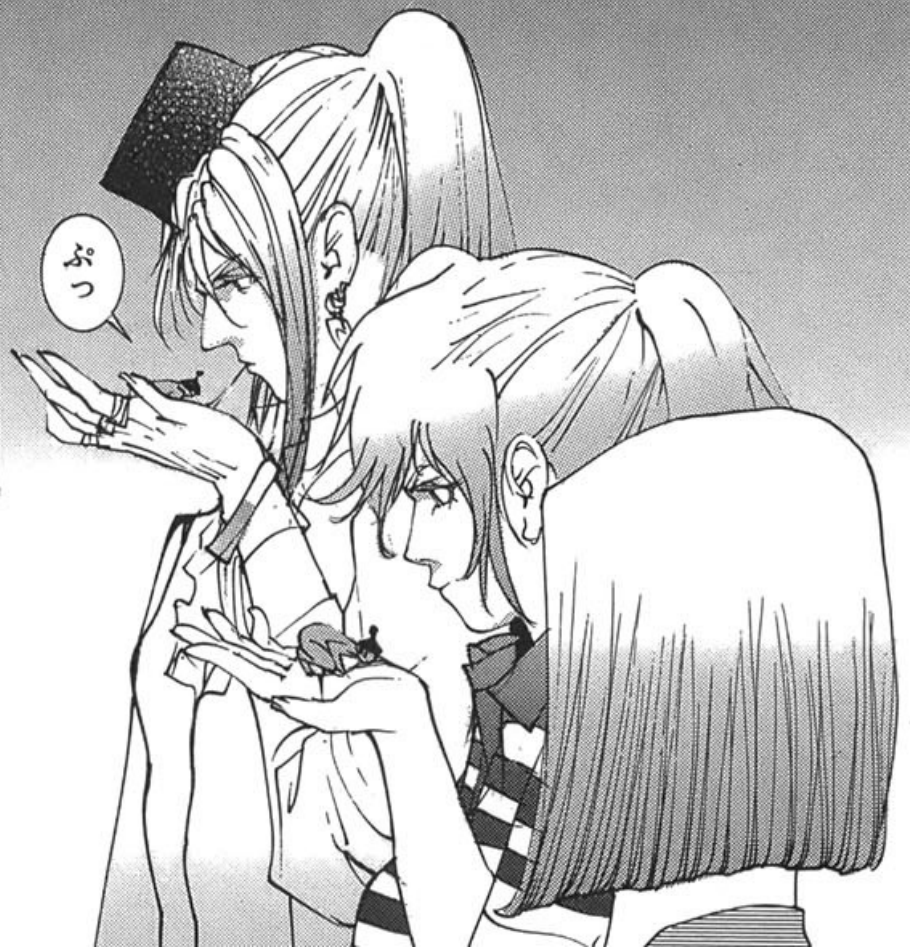
顔を
その
唾の
ほうに
近寄せ
すすり
出した



吐くほうには
一口でも
矮人には相当の
分量なのである



ウィリアムも
一人を手掌にして



同じように
唾を
飲ませている

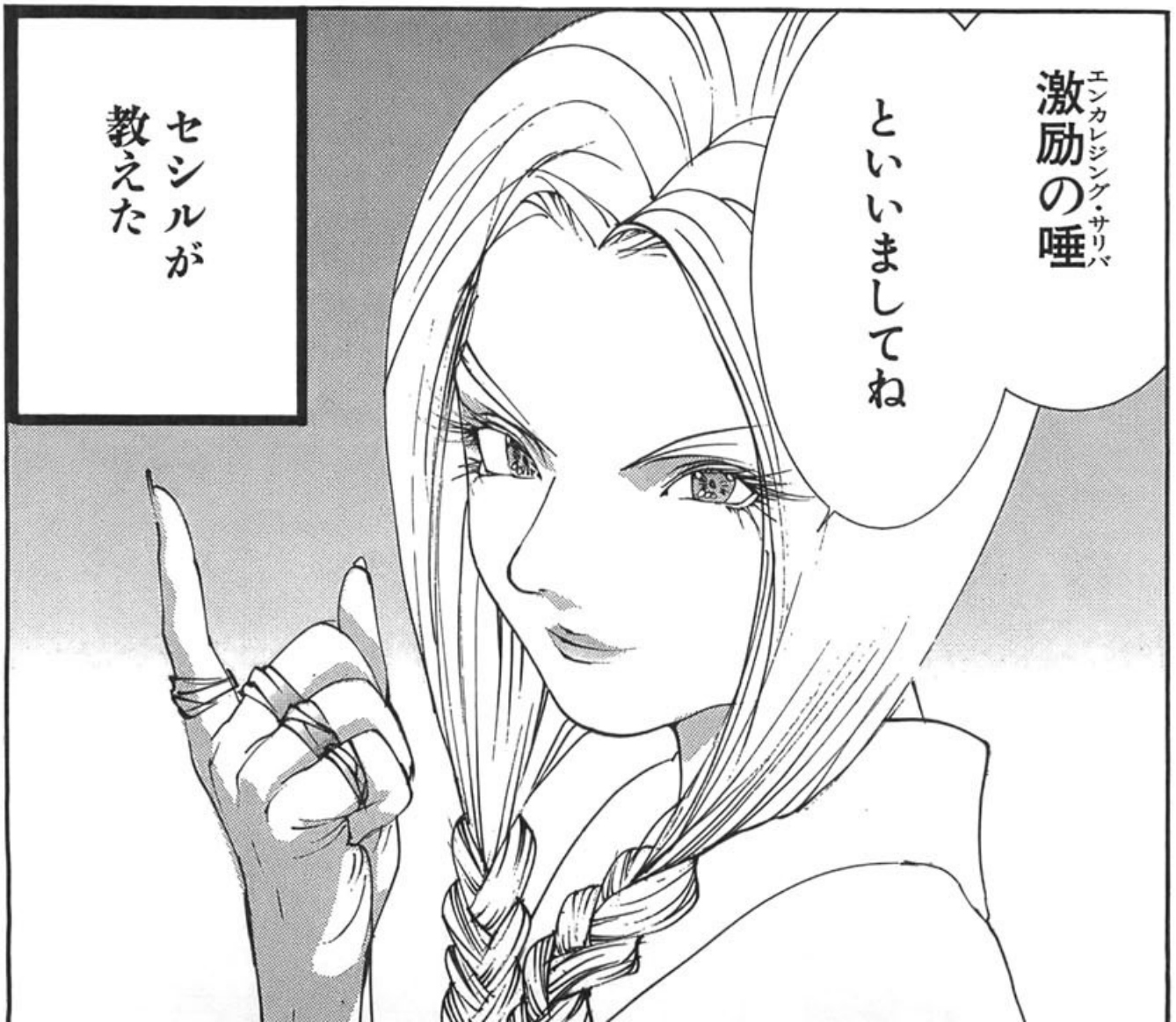
その背中には
KOJIROの
六文字が見えた



エンカレシグ・サリバ
激励の唾

といいましてね

セシルが
教えた

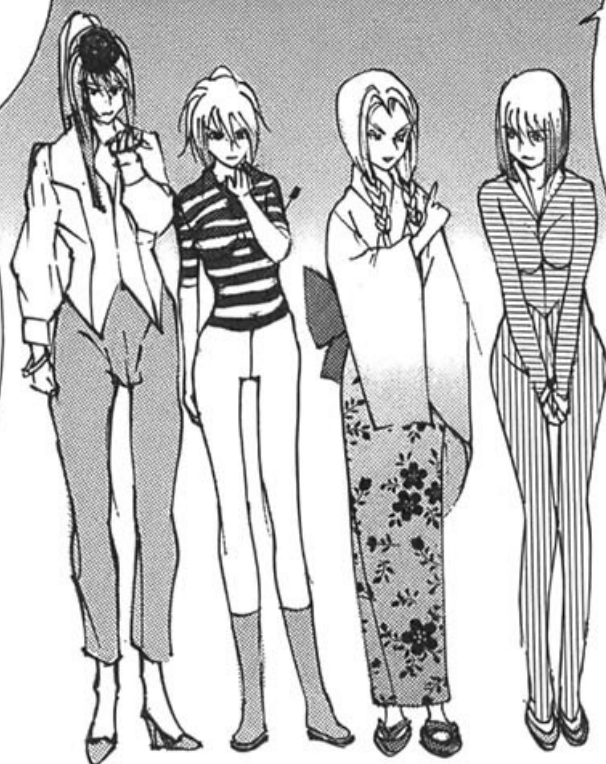


これで

俄然^{がぜん}元気を
出すのです

今では

試合前の儀式の一つ
みたいになっています



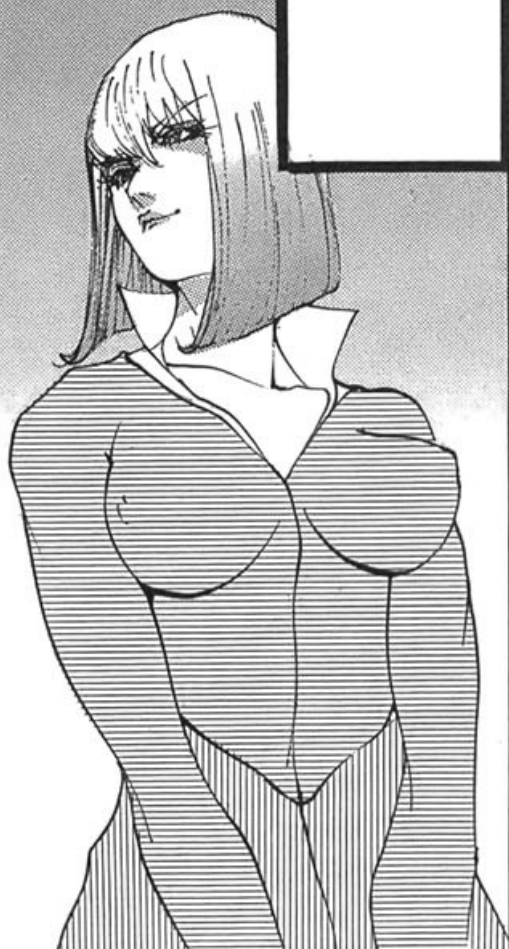
……試合で

勝ったほうにも……

唾^{よだ}を与^よるんでしよう

と

クララは
当て推量した





リウオーディング・サバ
慰勞の唾は

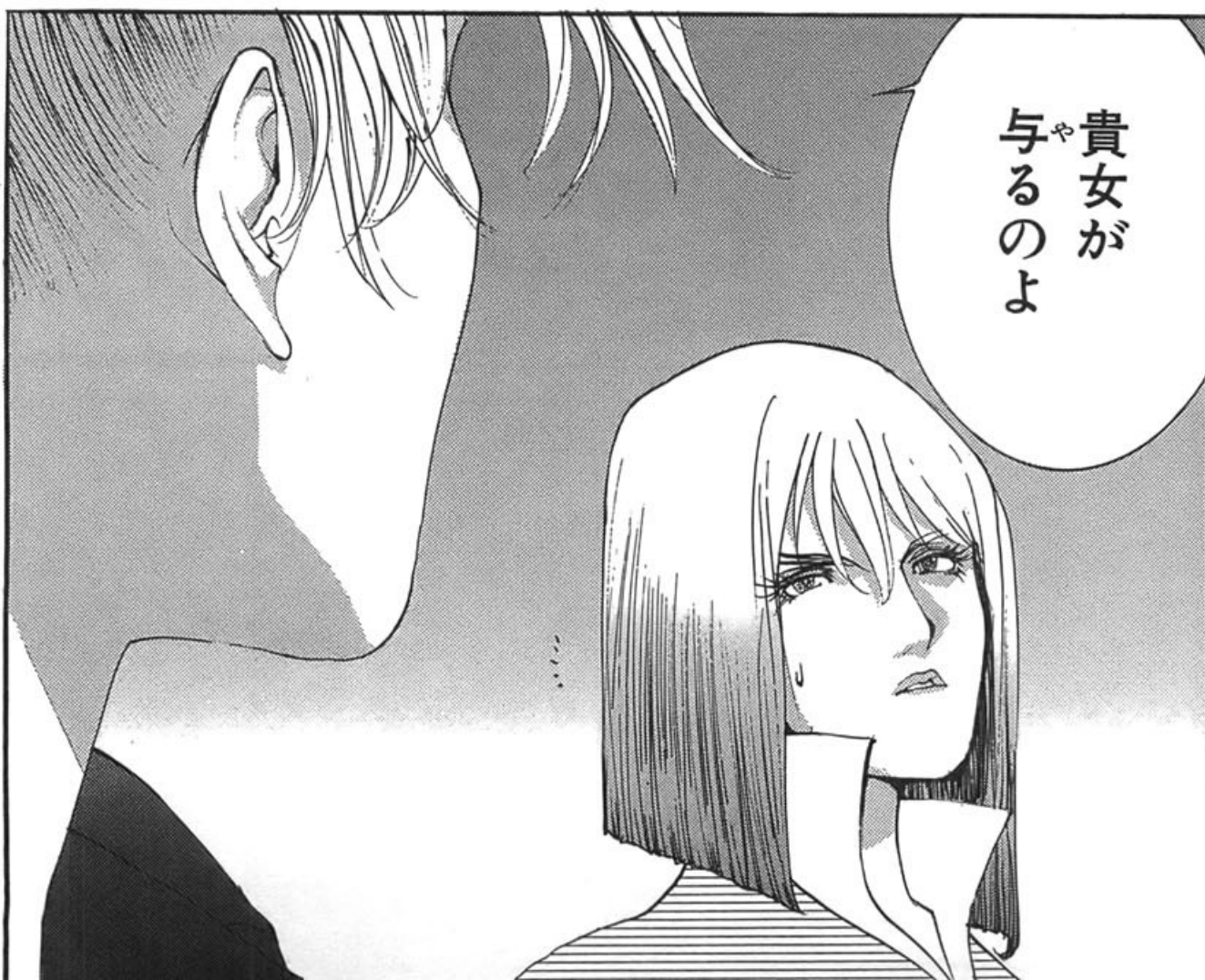


はげまし
激励と
ねぎらい
慰勞に
スベツト
唾吐くこと

記憶があるわ
だんだん
思い出してくる



ドリスが
聞きつけて
口をはさんだ

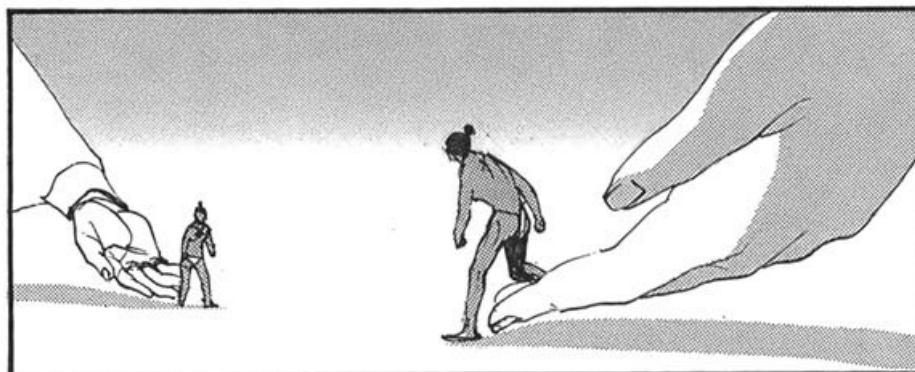


貴女が
与^やるのよ

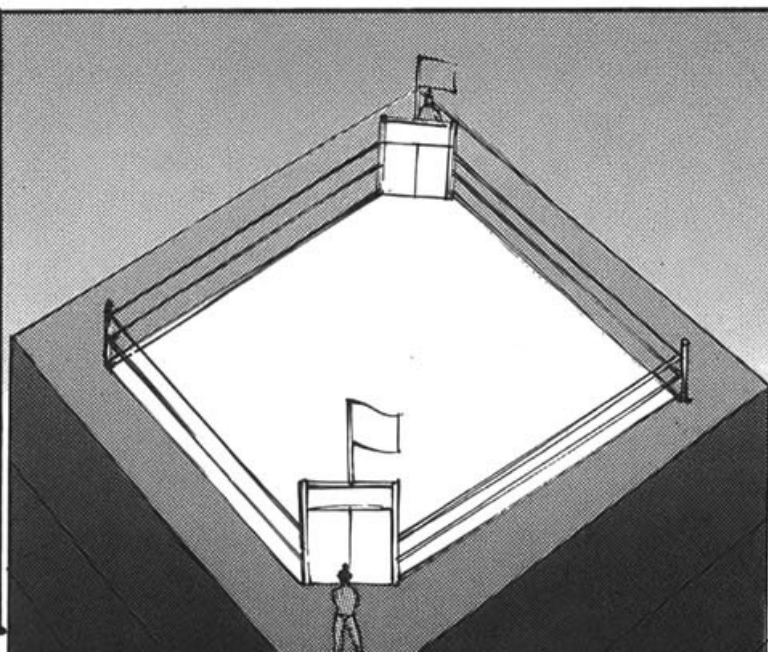
勝ったほうは
貴女のものに
なるんだから



両戦士は
手掌
から
下ろされ



台の両端
青と白の旗門外に
待機した



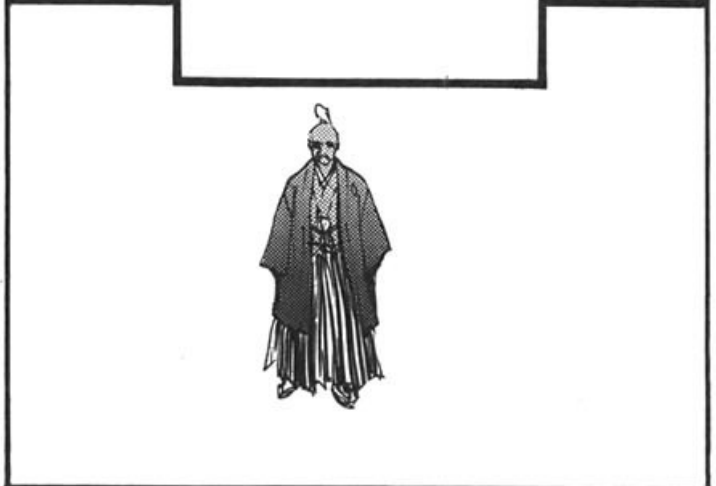
どこからか
奇妙な服装――

実は
紋付袴だった

――で
別の老顔の
矮人が現われ

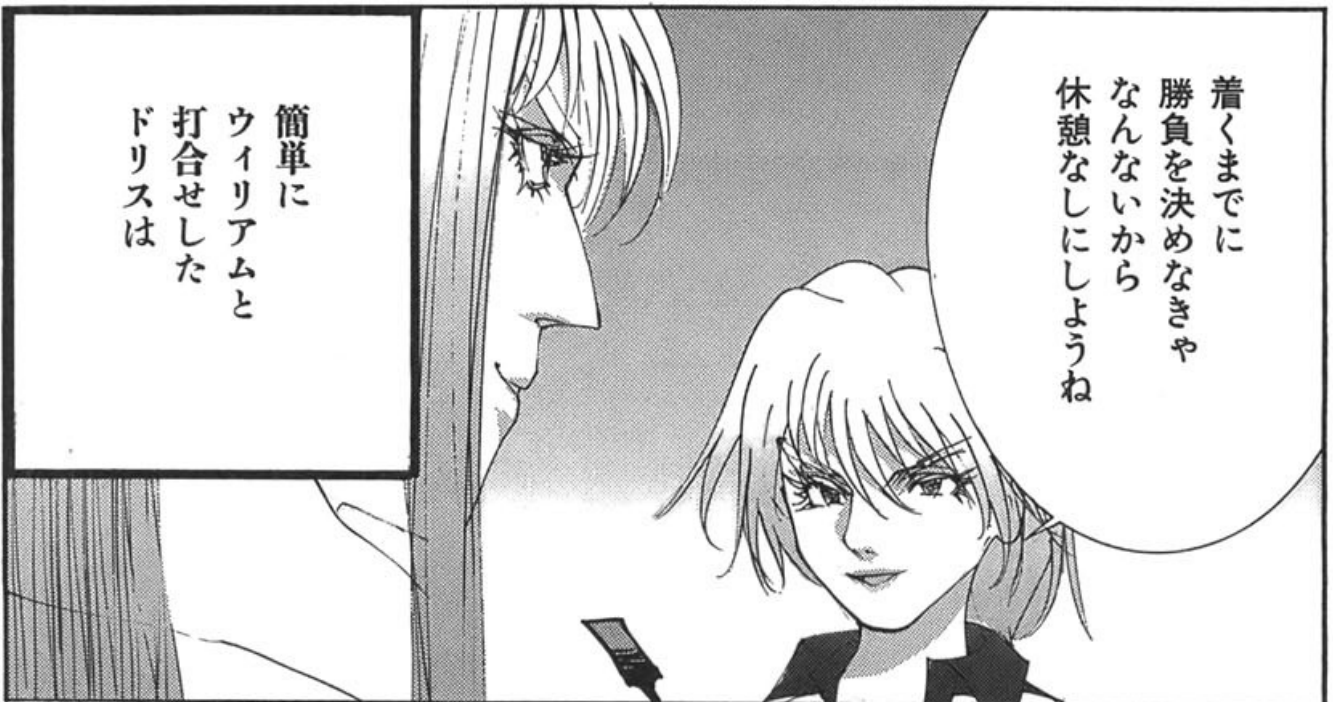
試合場の
綱を
検分していた

これが
審判員であつた



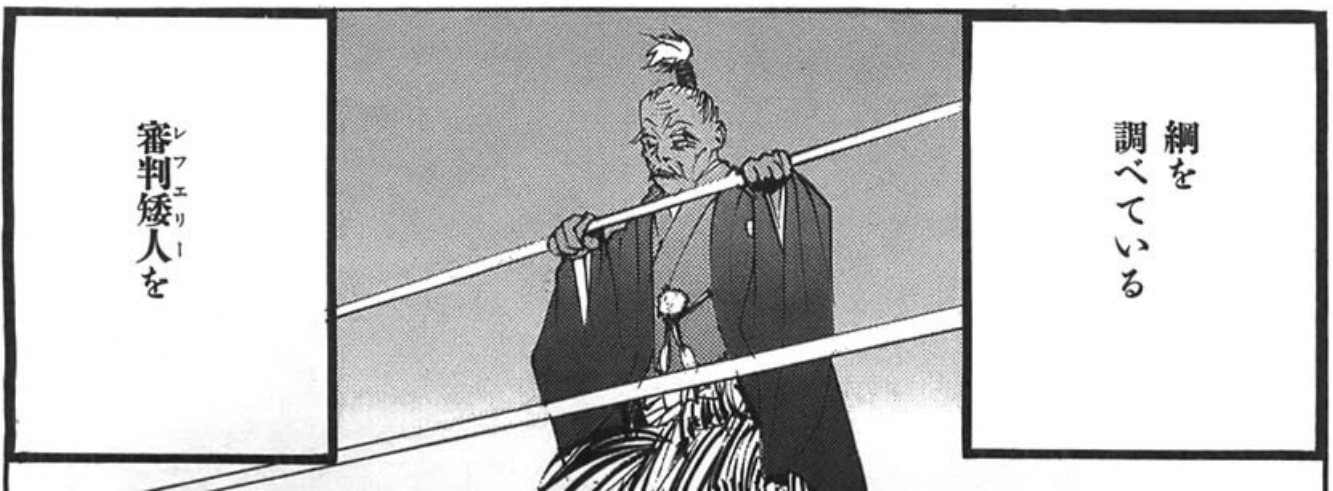
着くまでに
勝負を決めなきゃ
なんないから
休憩なしにしようね

簡単に
ウィリアムと
打合せした
ドリスは



綱を
調べている

審判矮人を



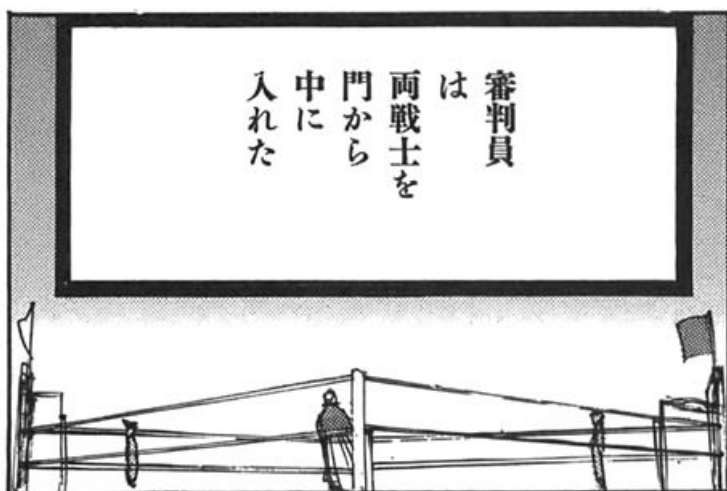
右手の鞭の
ピンととがった先で
ちよつと突っついて
合図すると

キビキビした声で
指令を発した

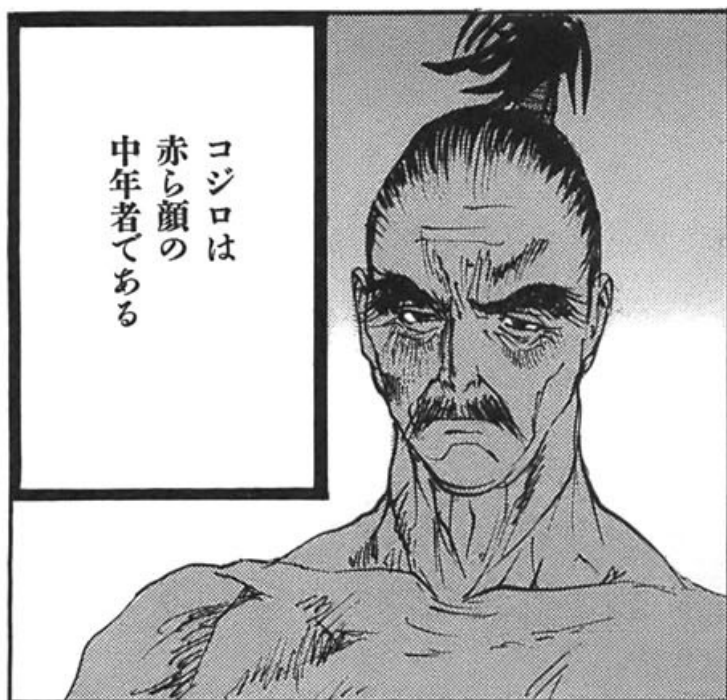


途中休憩なし
すぐ始め！

審判員
は
両戦士を
門から
中に
入れた



コジロは
赤ら顔の
中年者である



なかなかよい
デュエル
決闘に
なるでしょう

金髪の美男子
ドレイバア夫君は
楽しそうにいった

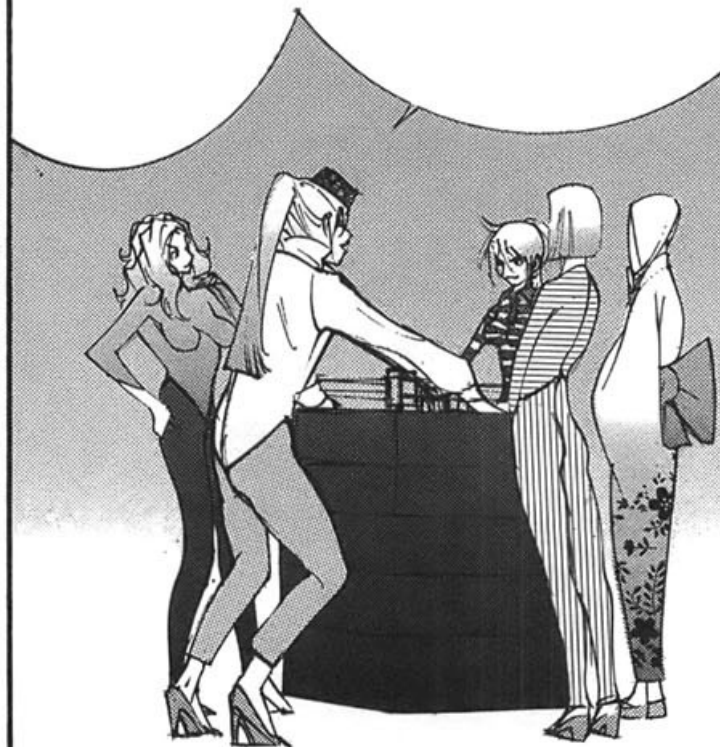


ヤブー刀は
刺突より
斬撃が主で
派手ですから
見てて
いちばんおもしろい

負傷が
よく見えるように
裸でやらせるんです

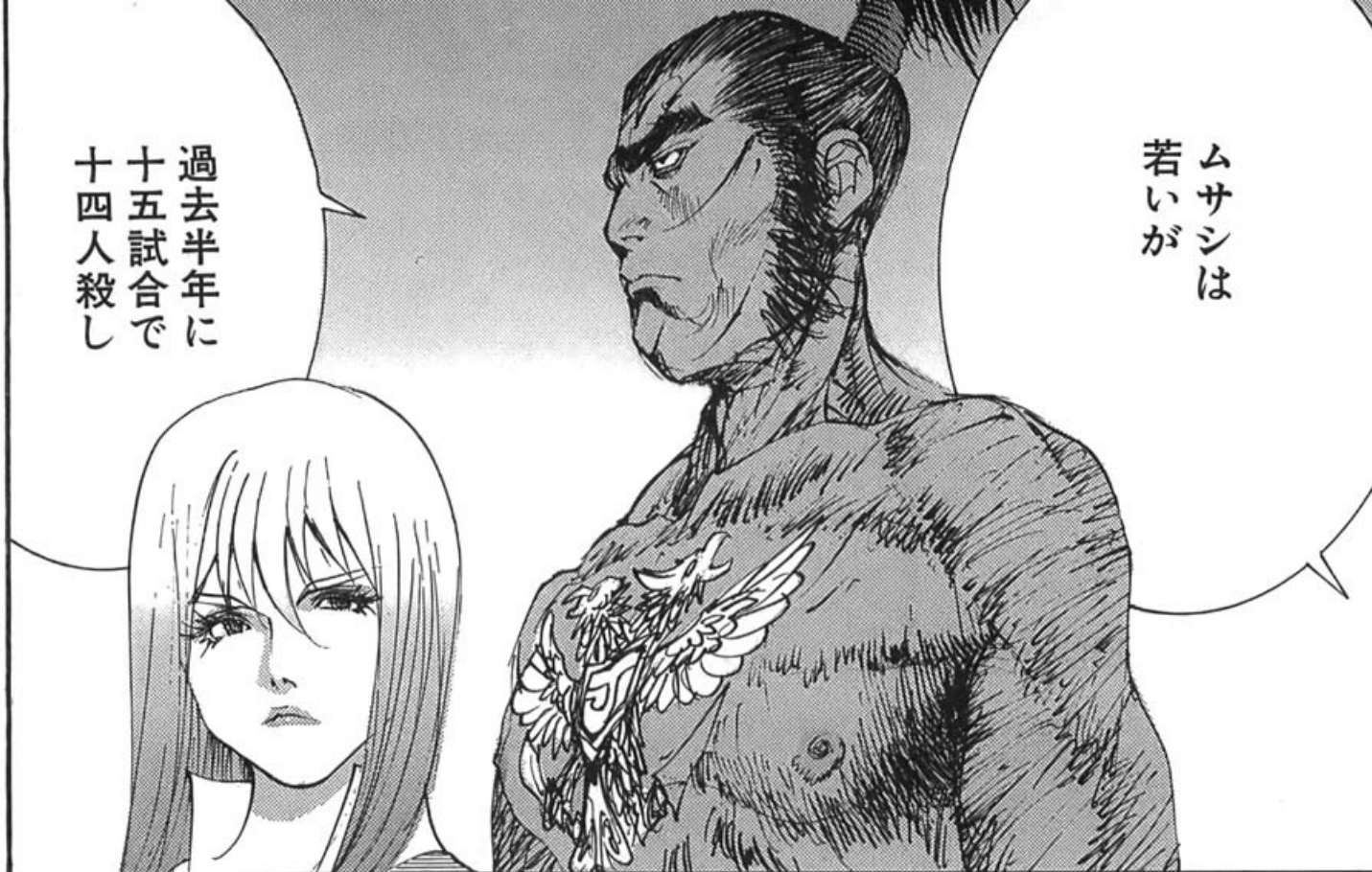
老練コジロは
過去三年間に
試合数八十八回で

そのうち
七十二回
相手を
殺してます



ムサシは
若い

過去半年に
十五試合で
十四人殺し



経験では
コジロがまさり
殺敵率では
ムサシが上



こりや
よい勝負ですよ

さあ
貴女を招待する
パーティーの
主催者はどちらに
なりますかね……

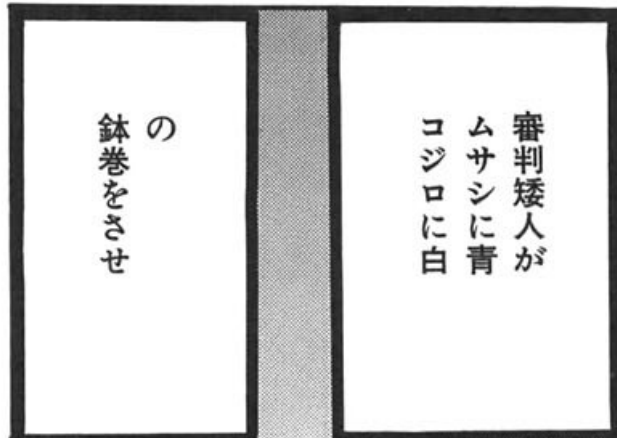


解説者然と語る
彼の手には

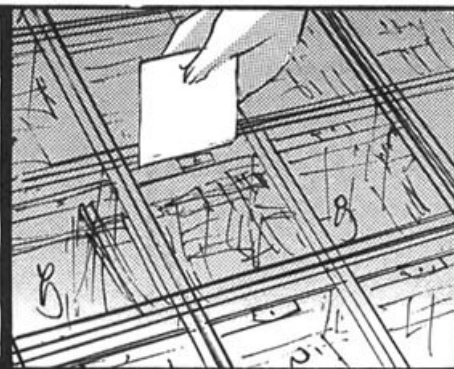


審判矮人が
ムサシに青
コジロに白

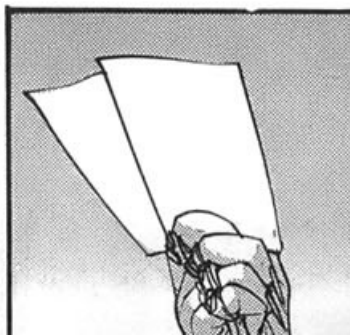
の
鉢巻をさせ



引出しの
両戦士の居室から
取り出した



二枚の
戦績カードが
握られていた



さらに
反りのある刀を渡して
何か
しゃべっていた



日本語
らしかったが

クララには
わからない



……と
突然

その話の
終るのが
待ち切れない

と
いった様子で
ドリスが叫んだ



か か れ
Oshicko

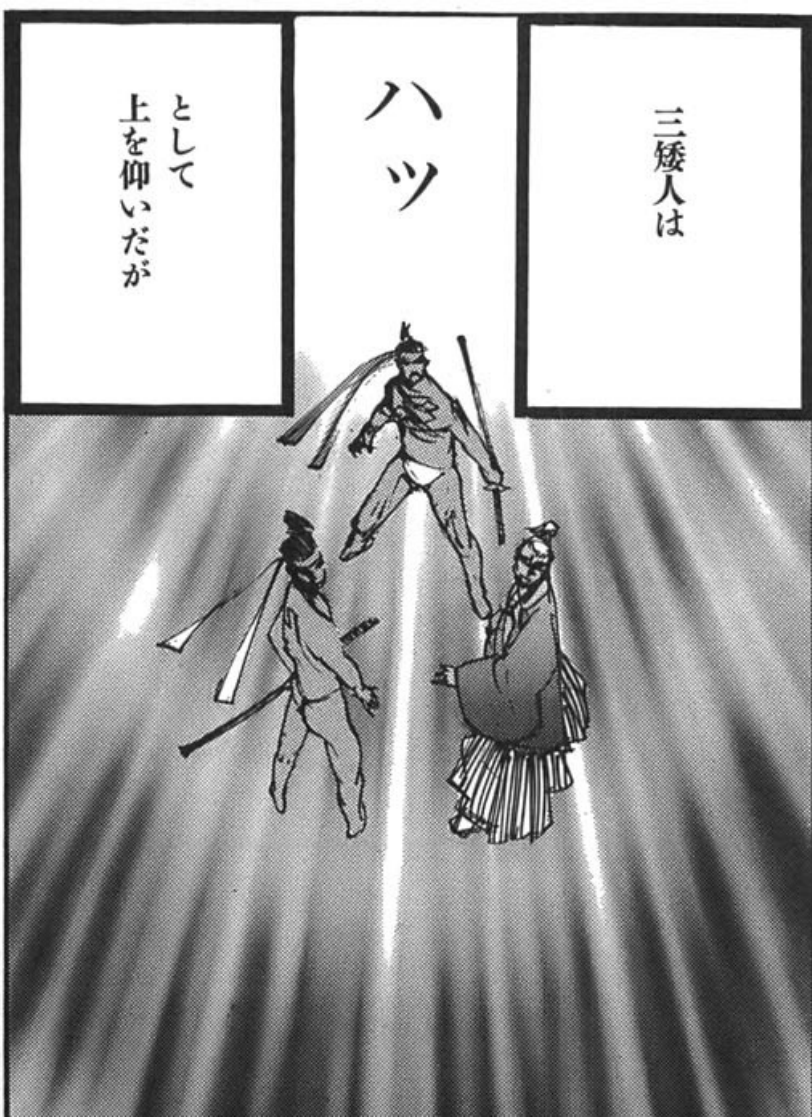


三矮人は

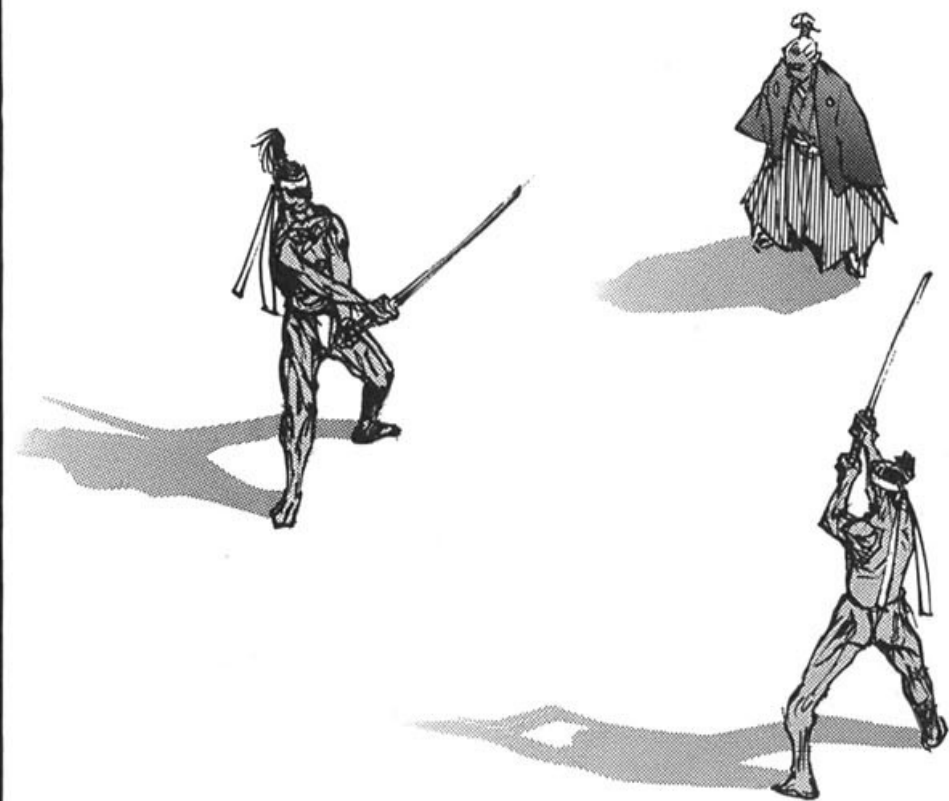
ハッ

として
上を仰いだ

次の
瞬間には

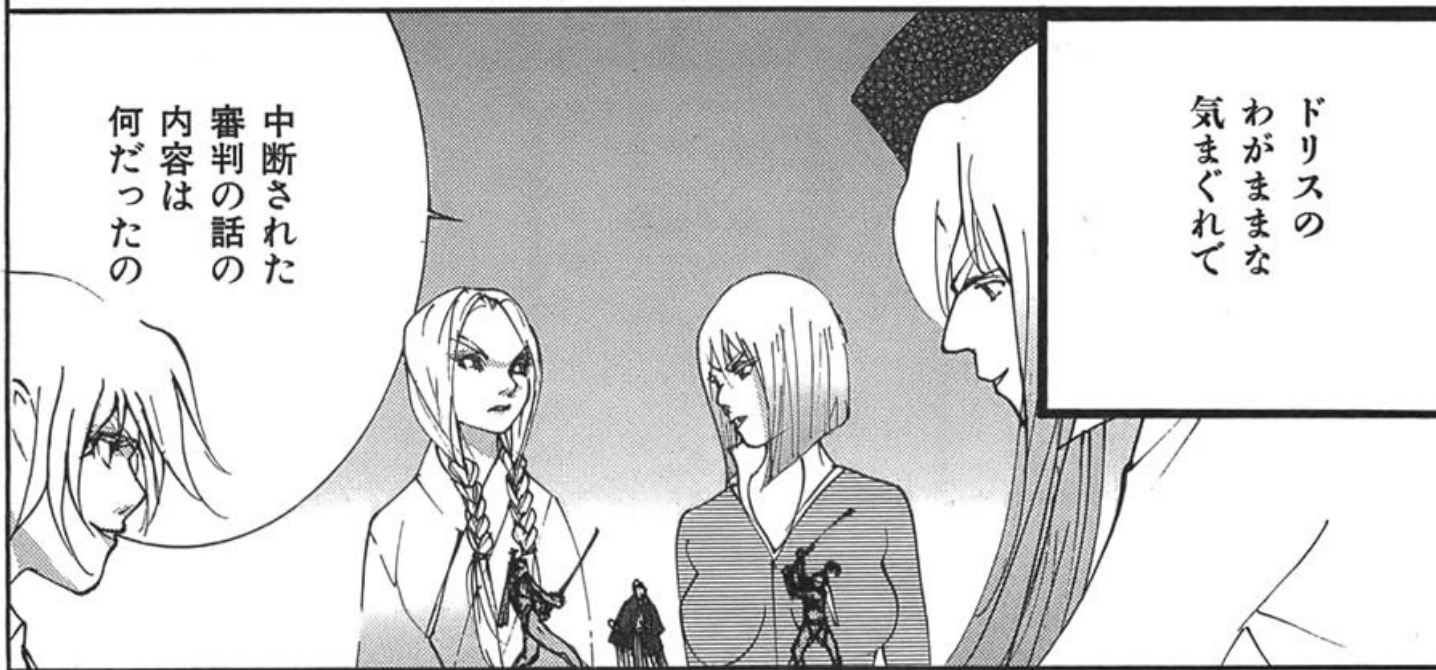


両戦士は
鞆^{さや}を捨てて
身構えていた

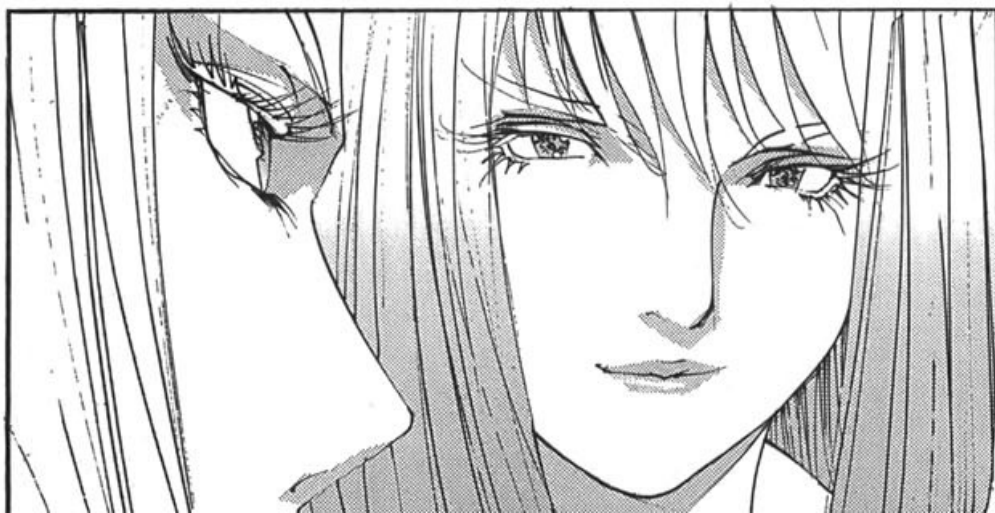


ドリスの
わがままな
気まぐれで

中断された
審判の話の
内容は
何だったの



かと
好奇心を起して
クララが尋ねると
セシルは





ああ
あれはね
決まり文句の
訓辞なんです

これは
神聖なる
神前奉納試合なるぞ
生命を賭けて戦い
神々の目を
楽しませよ



※29
サリバ
聖唾
味わいし
身の誉れを
忘れず



いやしくも
卑怯の振舞して
己れに
唾吐き給いし
神を
裏切るな



スラスラと
家畜語を
訳し終って
なお
彼はいい添えた

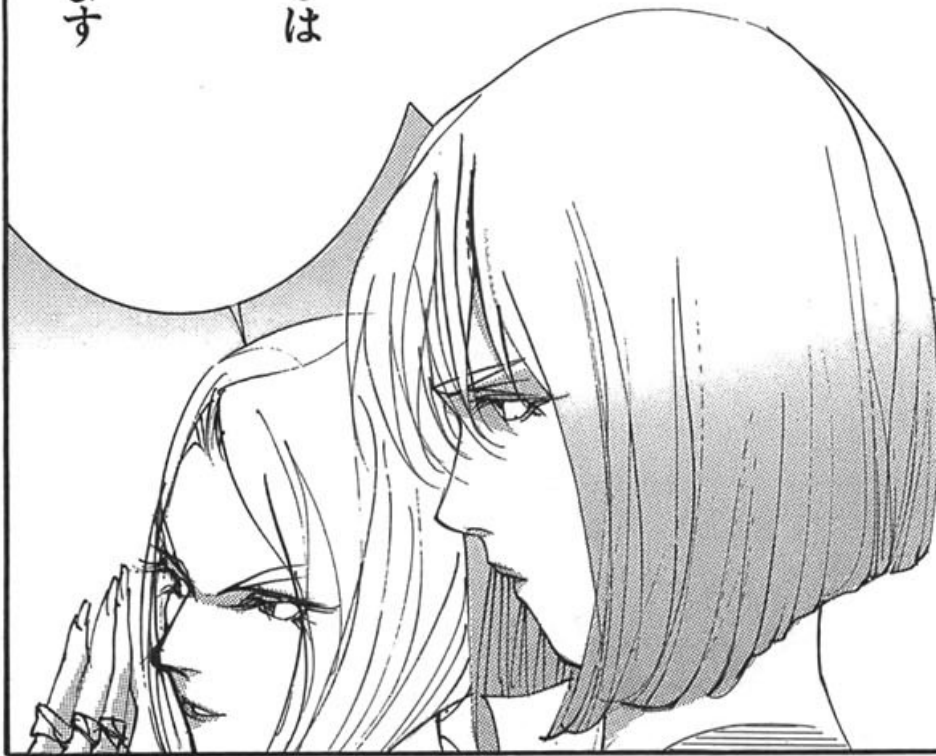


※29 サリバはsaraから家畜語化した単語で、特に白人の唾を指す。
ヤブー自身のや黒奴のを指す家畜語はツバ

奴らにとっては
私たち人間は
唾を吐きかけられてさえ
ありがたい
神々なんですな

矮人に
限らず

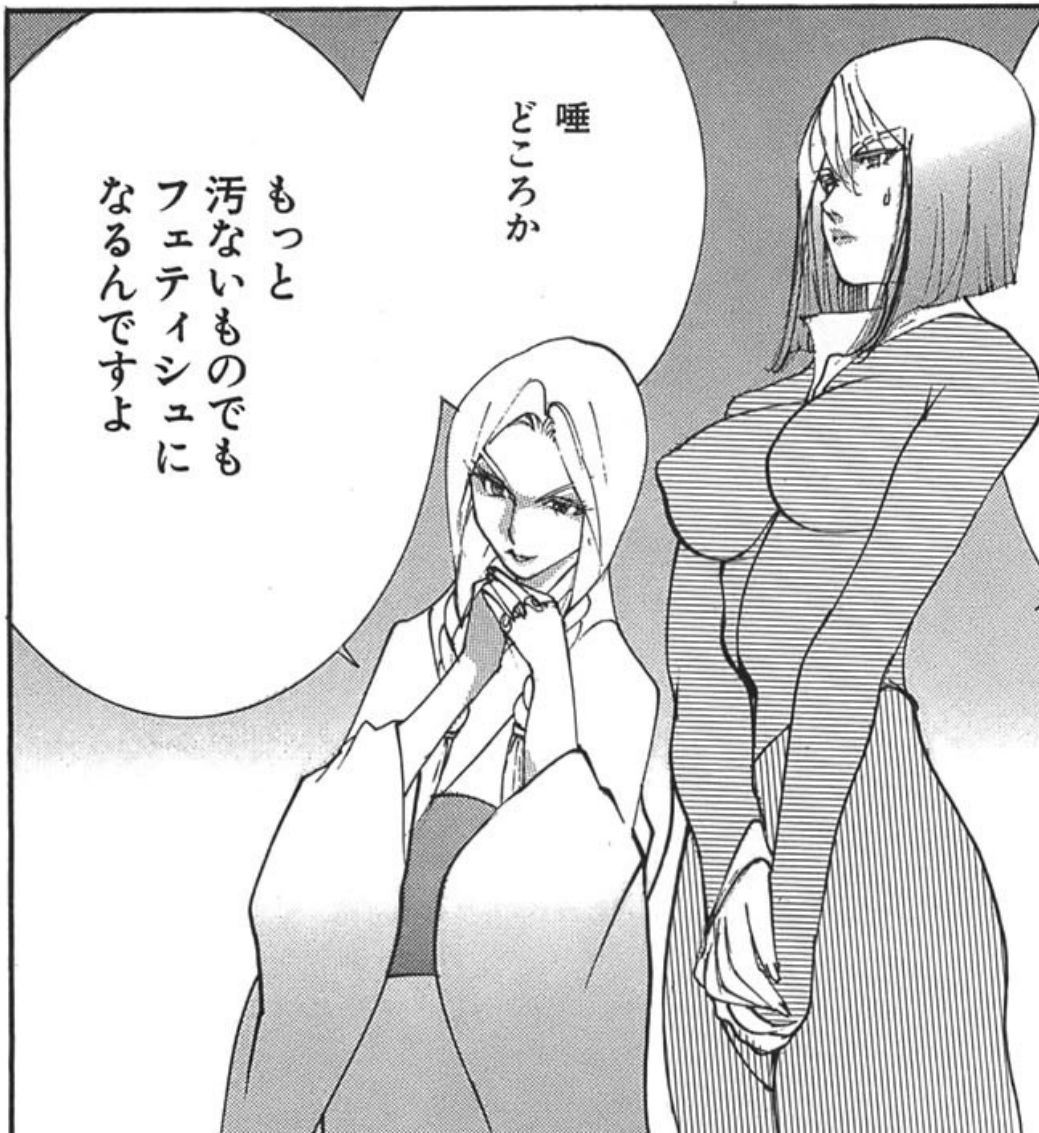
ヤプーどもは
すべて
そういう
信仰を
持っています



私たちの体に
関係の
あるものなら

唾
どころか

もっと
汚ないものでも
フェティシュに
なるんですよ



そうでしたわね
思い出しますわ

バツを
合わせながら

クララは
自分を拝んだ
セツチンの姿を
脳裡に浮べた

ウィリアムが
彼女のほうを
見ていた

二人の——
というべきか
二匹の
というべきか

グラシヤトレット
小決闘士は
依然
身構えたまま
であつた



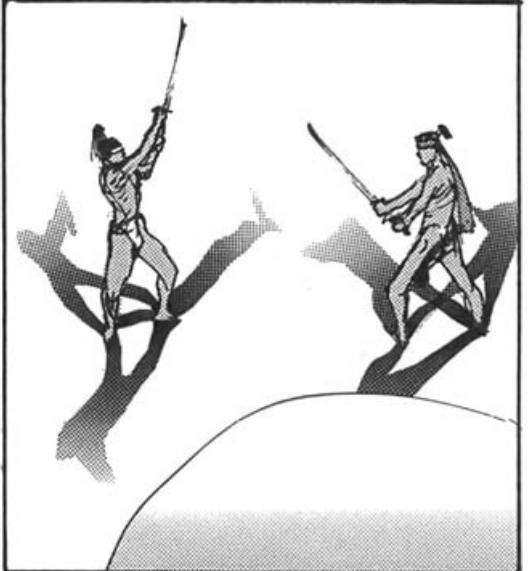
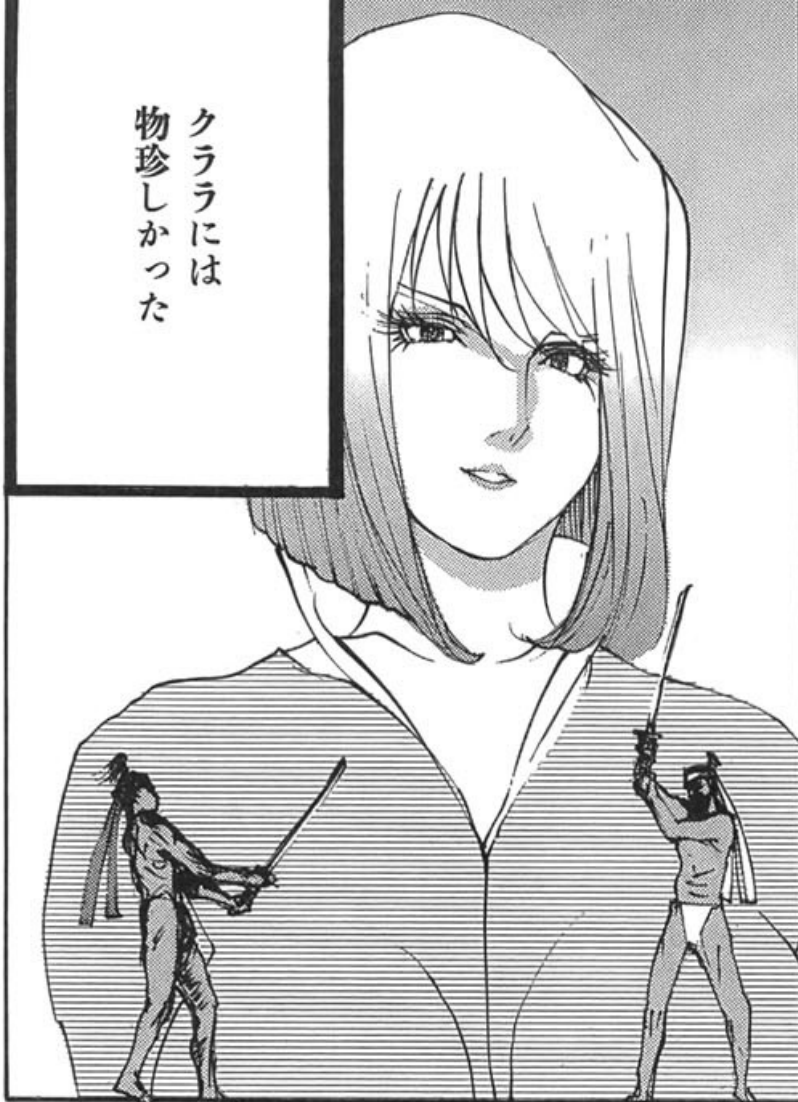
ムサシは
体の前に

コジロは
頭の上に



どちらも
刀を
両手で
握っている
構えが

クララには
物珍しかった



他の四人は
見慣れた通でも
あるらしく

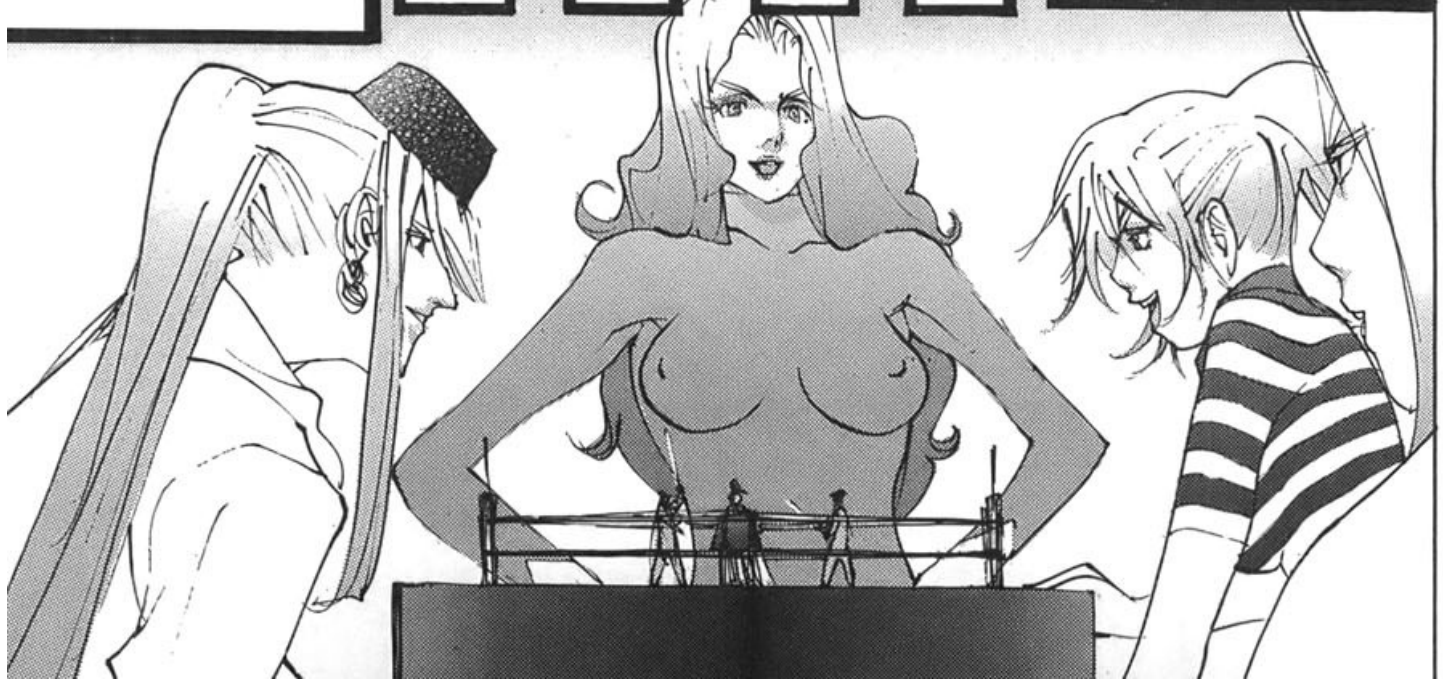
正眼だ

大上段だ

間がある

隙がない

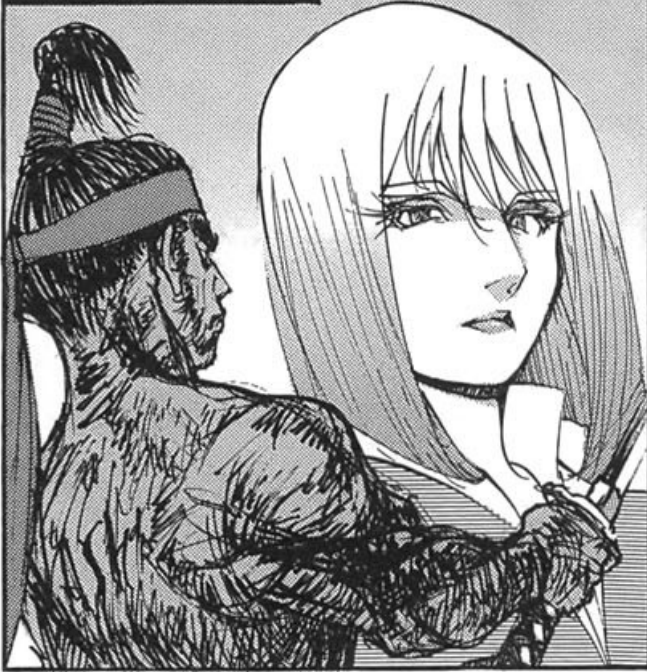
と
口々に
評し合っていた



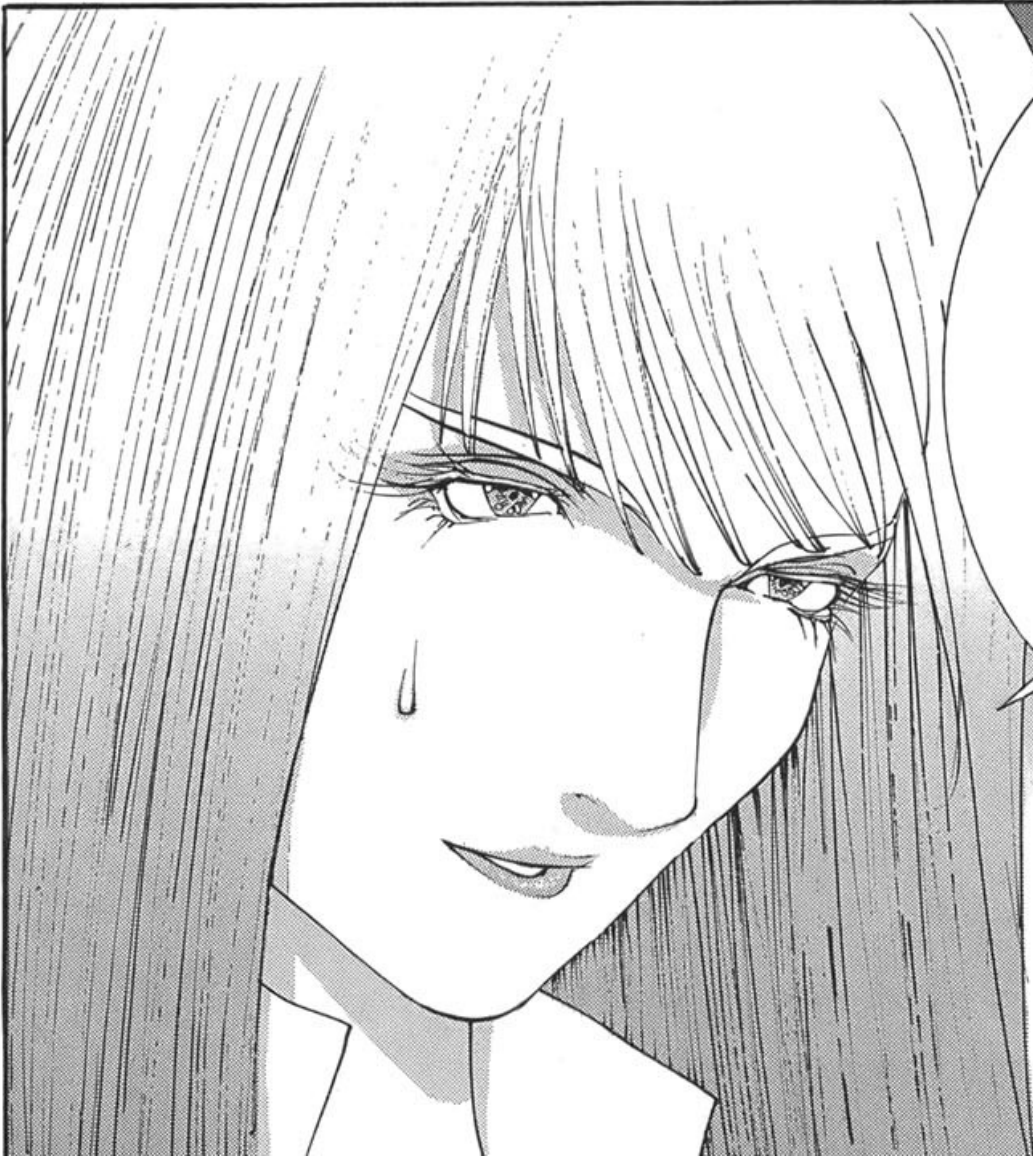
どちらも
なかなかの
使い手
らしいことは

クララにも

見て取れた



勝負は
どっちか
死ぬまで……



たいてい
そうです

今日

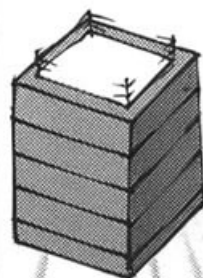
この引出しの
区画は

少なくとも

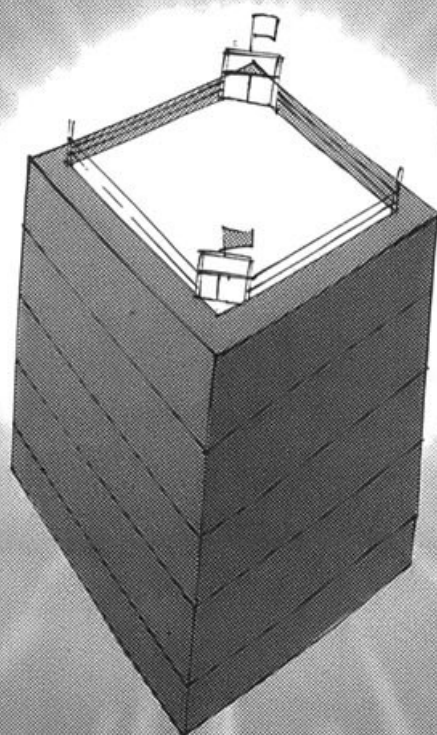
一室は

あくわけです

ゲラシヤート・レット・ファーム
小決闘士飼育所から
補充を
買うんですが



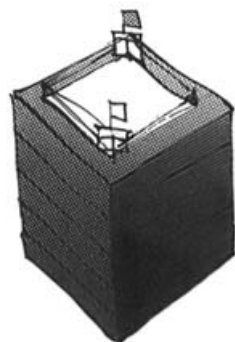
ジャンセン家の
烙印^{うぐいん}を
胸にもらい
その
引出^{※30}しに住み
その屋上^{※31}で
死ねるのは
たいへんな名誉なんで
買われる奴は
大喜び



飼育所じゃ
いつも
選抜試合をさせて
決めるそうで



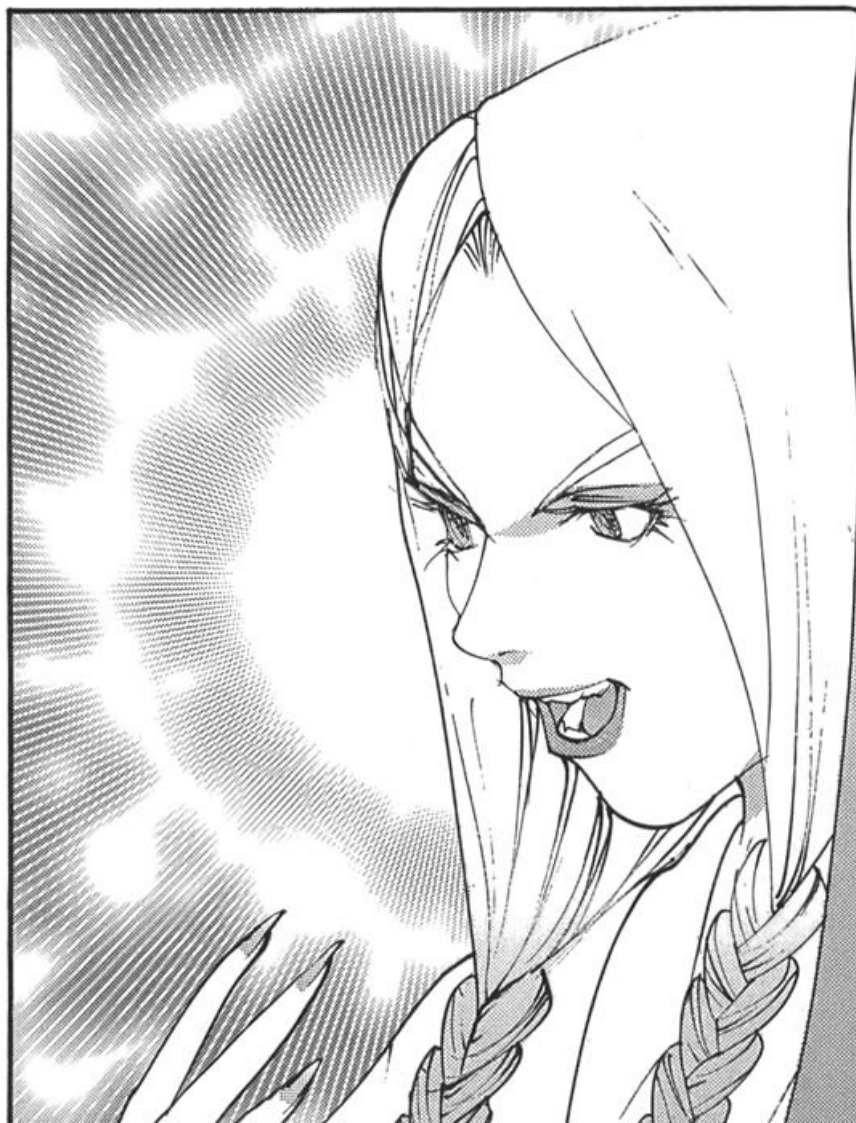
だから
ジャンセン家の
簞笥たんすの奴は



皆相当な
腕達者
ばかりで……



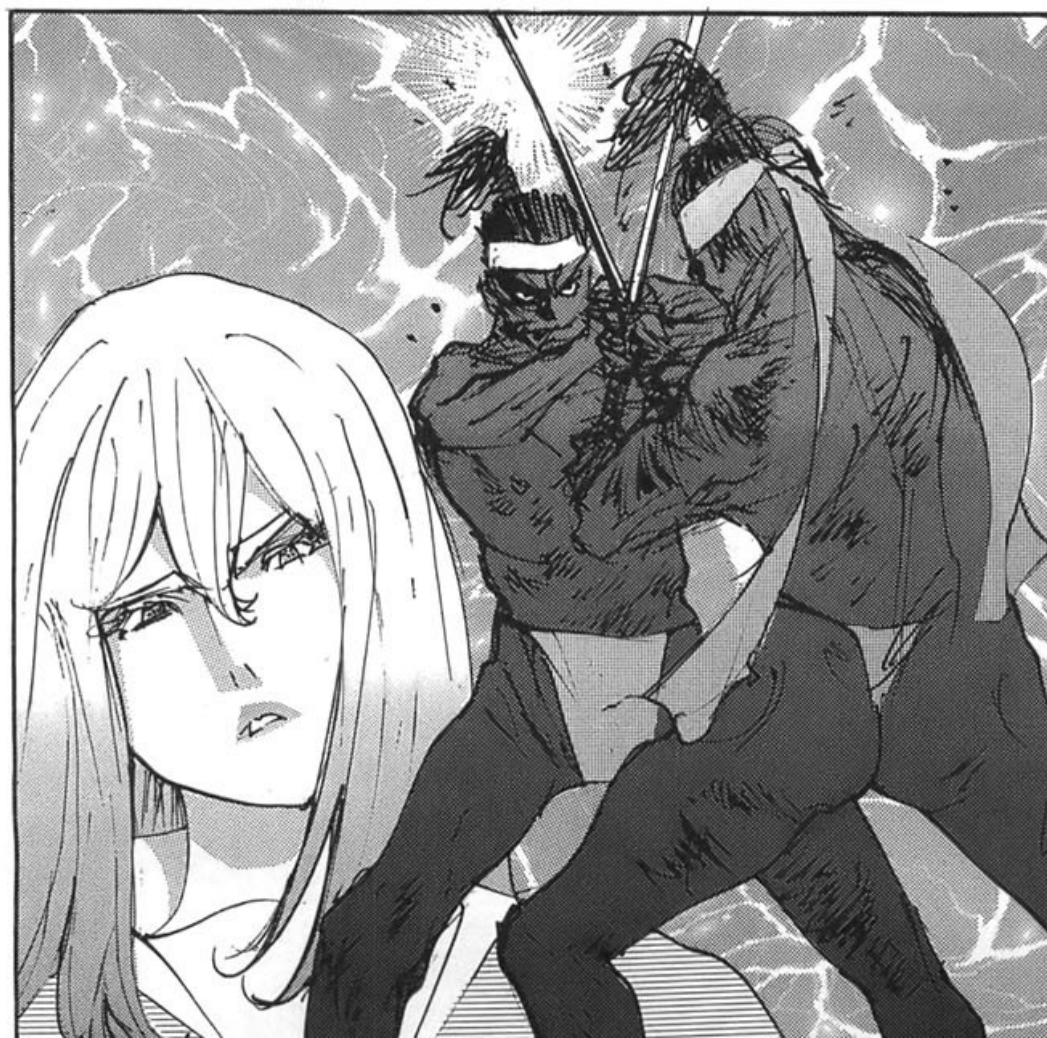
あ
やった



急に
コジロが
飛びかかった



激しい
鍔^{つば}ぜり合い



再び
間があくと



ムサシの
肩と
コジロの
左手から
血が
流れていた



技量伯仲



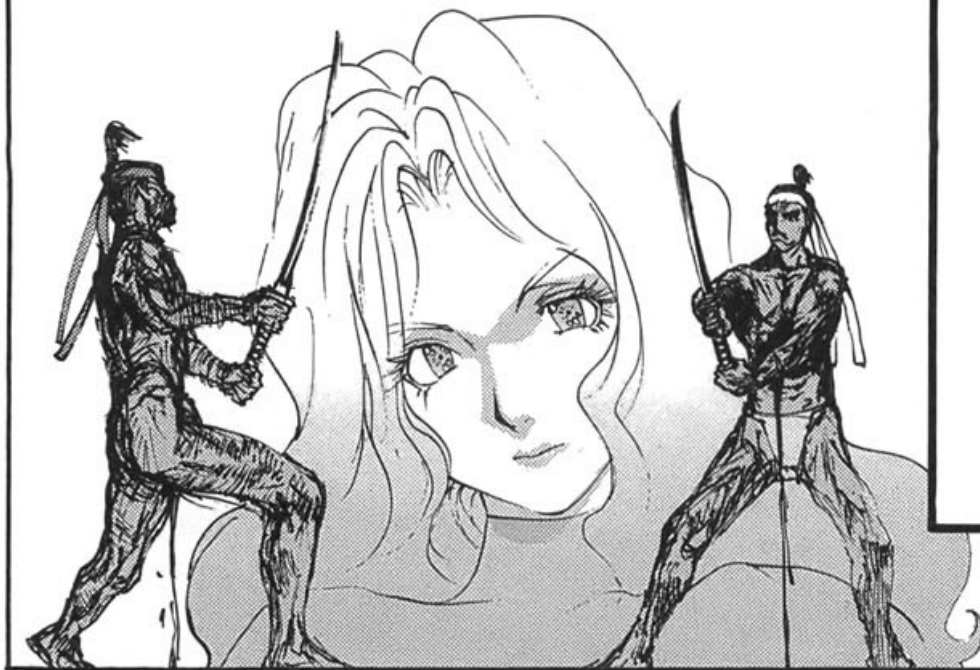
しかも
その全能力を
挙げて
生命の
遣り取りを
して



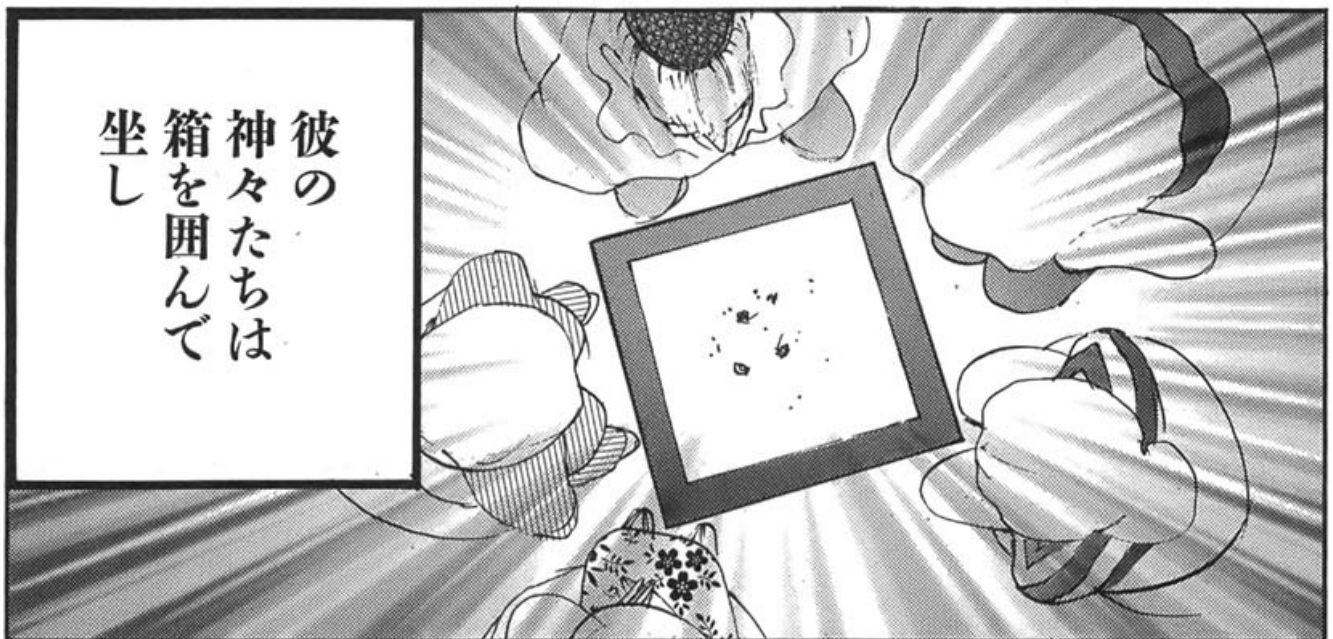
それを
クララ
たちの
娯楽に
供する
ことに



甘んじるどころか
名誉を感じている
両戦士なのであった



彼の
神々たちは
箱を囲んで
坐し

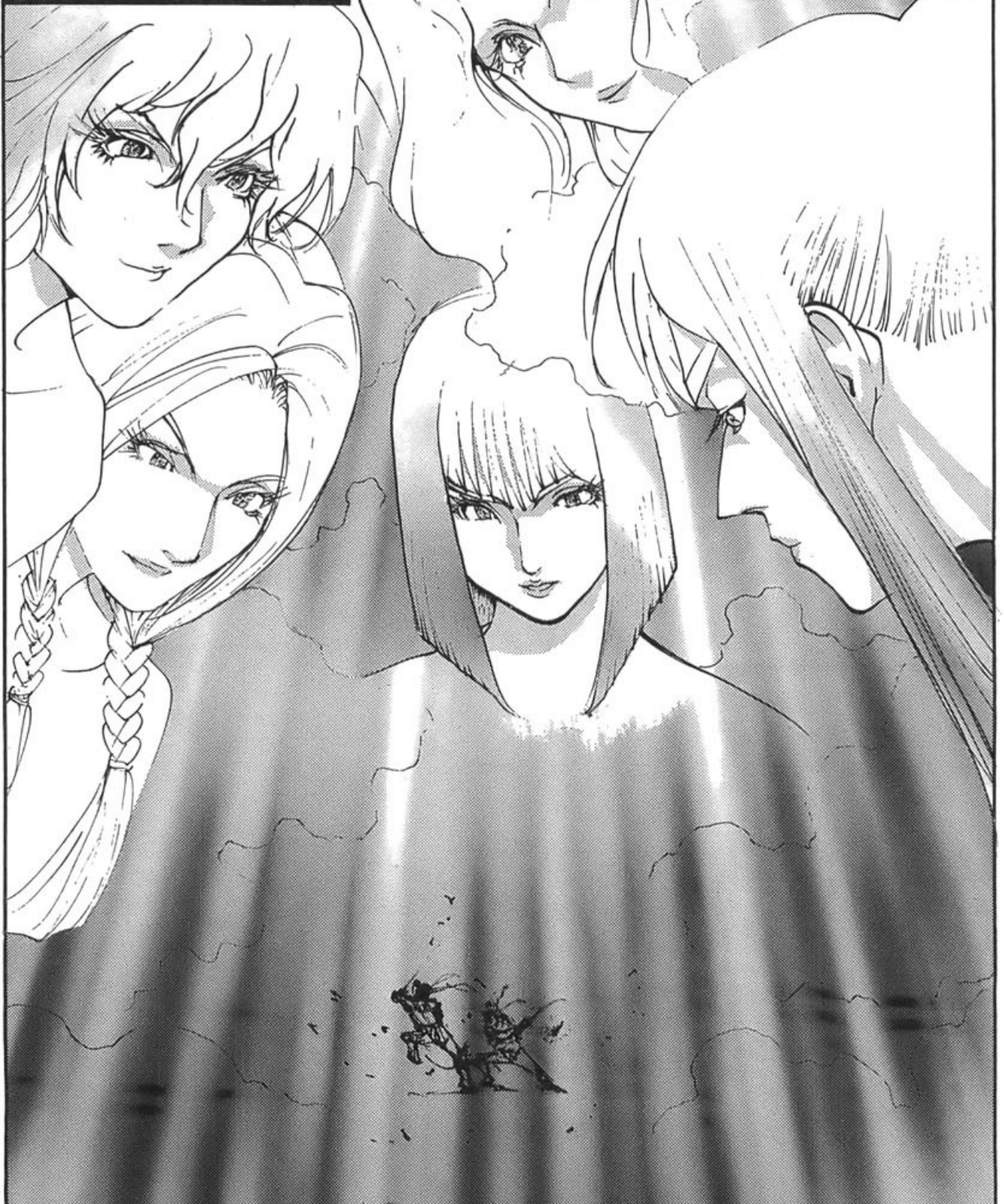


四面
斜上方から
見守って
いたが



その
美しくも
非常な目つきは

まるで
オリンパスなる
諸神が



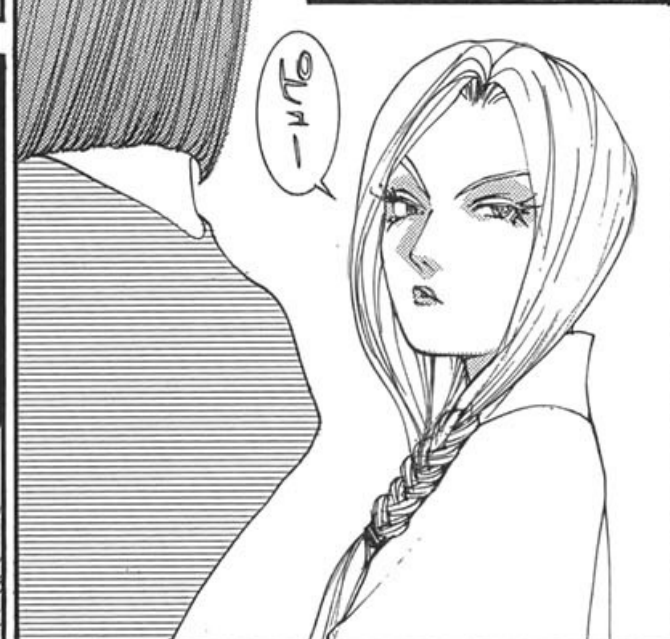
地上の争いを
眺めるにも
似ていた



より
卑俗な比喻を
とれば

闘鶏場を囲んで
二羽の軍鶏しやもが
死ぬまで闘うのを
楽しむ人々のと
同じ
目つきだった

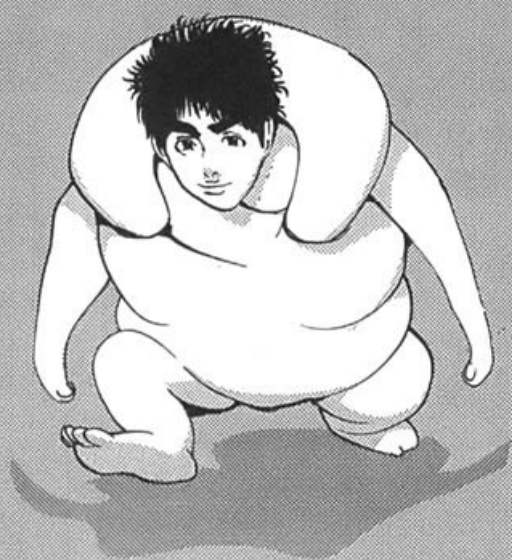




※32 標準型肉便器

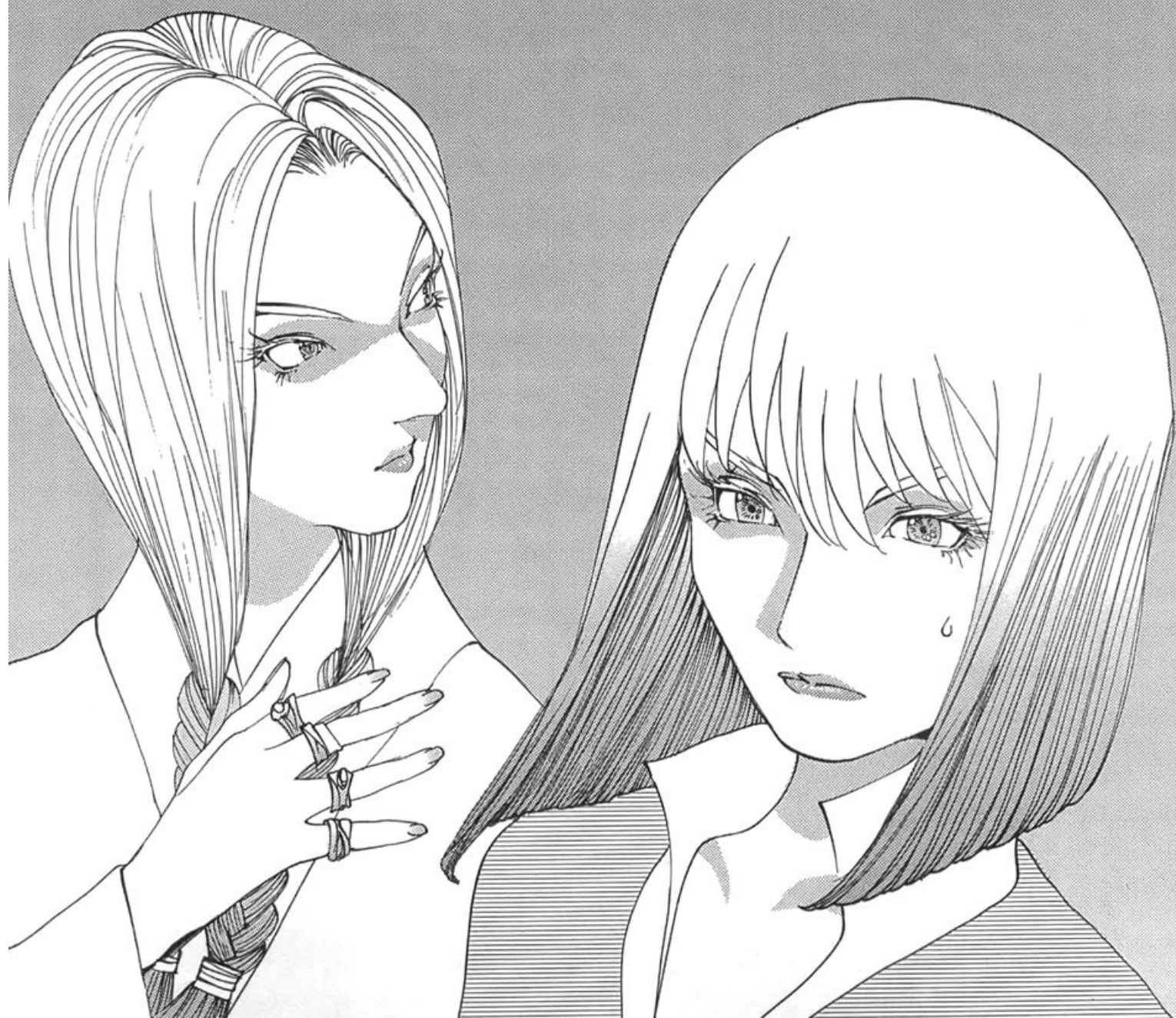


現われたのを
見て

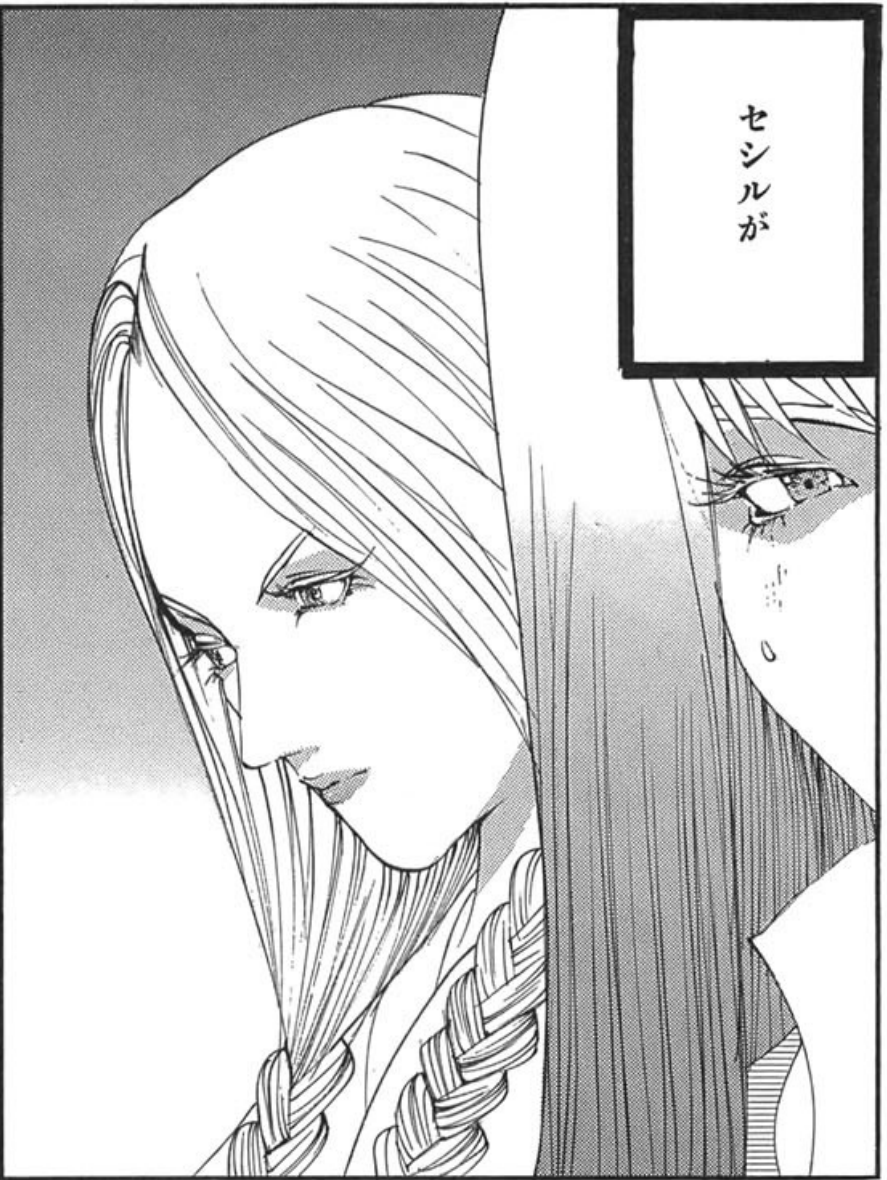


第十章 矮人決闘 — 第二話 —

あわてて
前を向いた



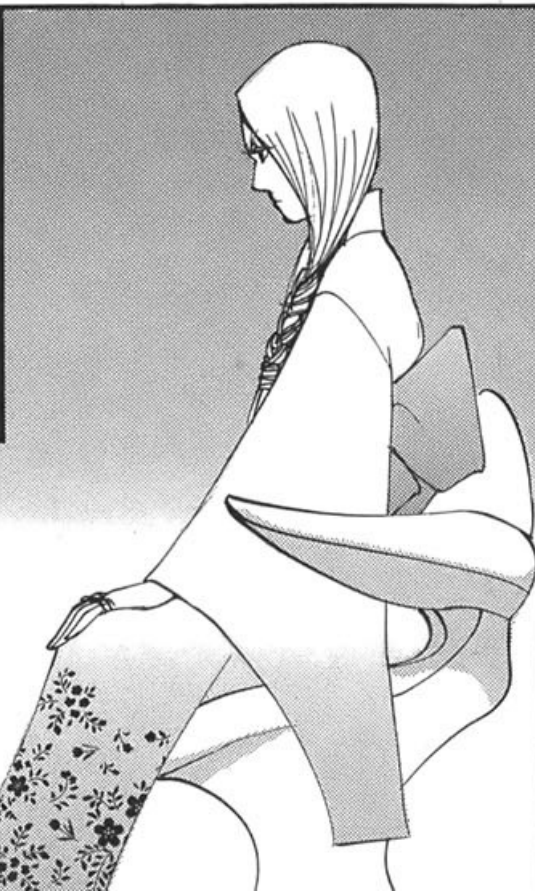
セシルが



皆の
邪魔に
ならない
ように



低い声で
オシッコ
起立号令を
掛けた



セツチンが
いつか
彼の腰掛けていた
椅子の前に来て
うづくまり



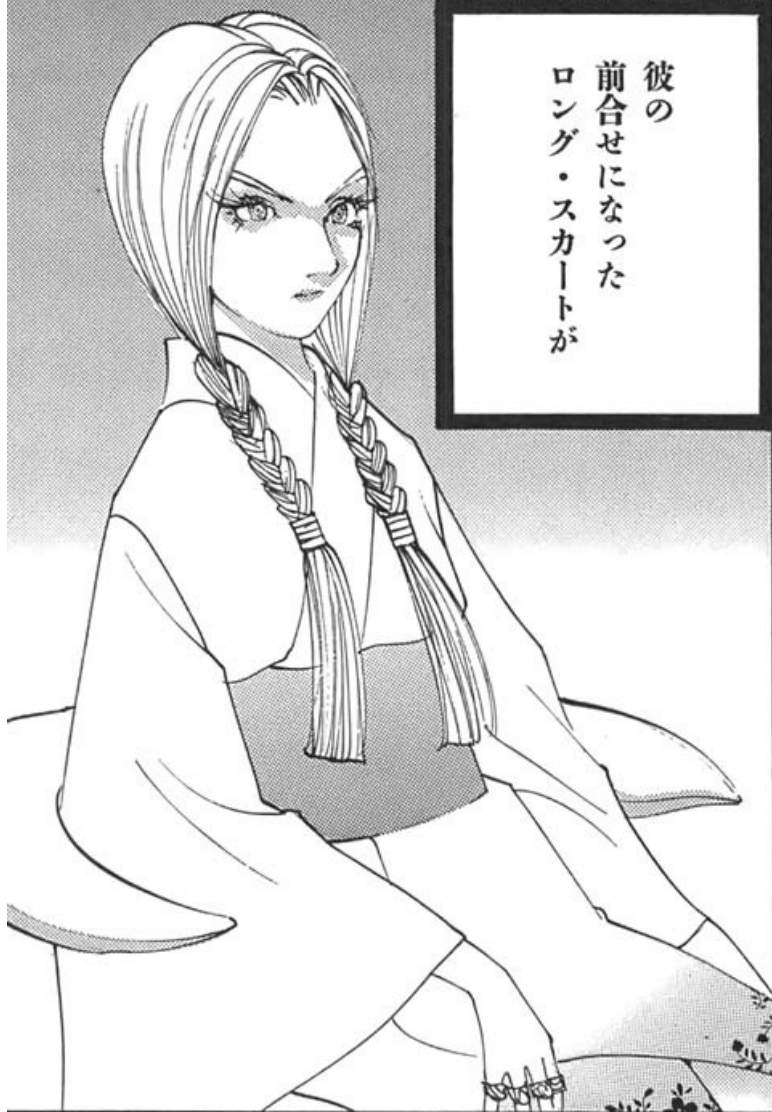
オシッコ
OSHICKO



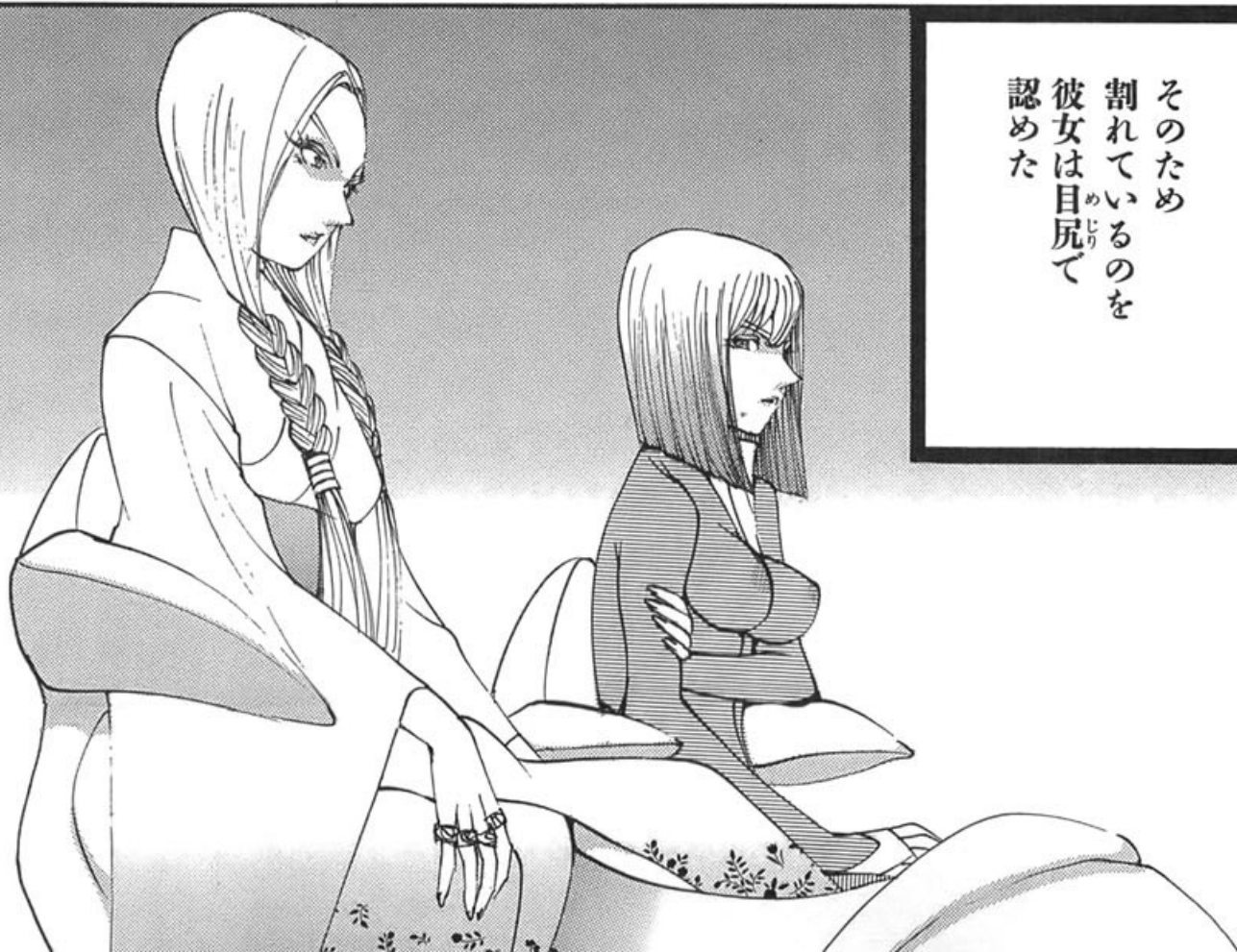
長い首を
伸ばしており

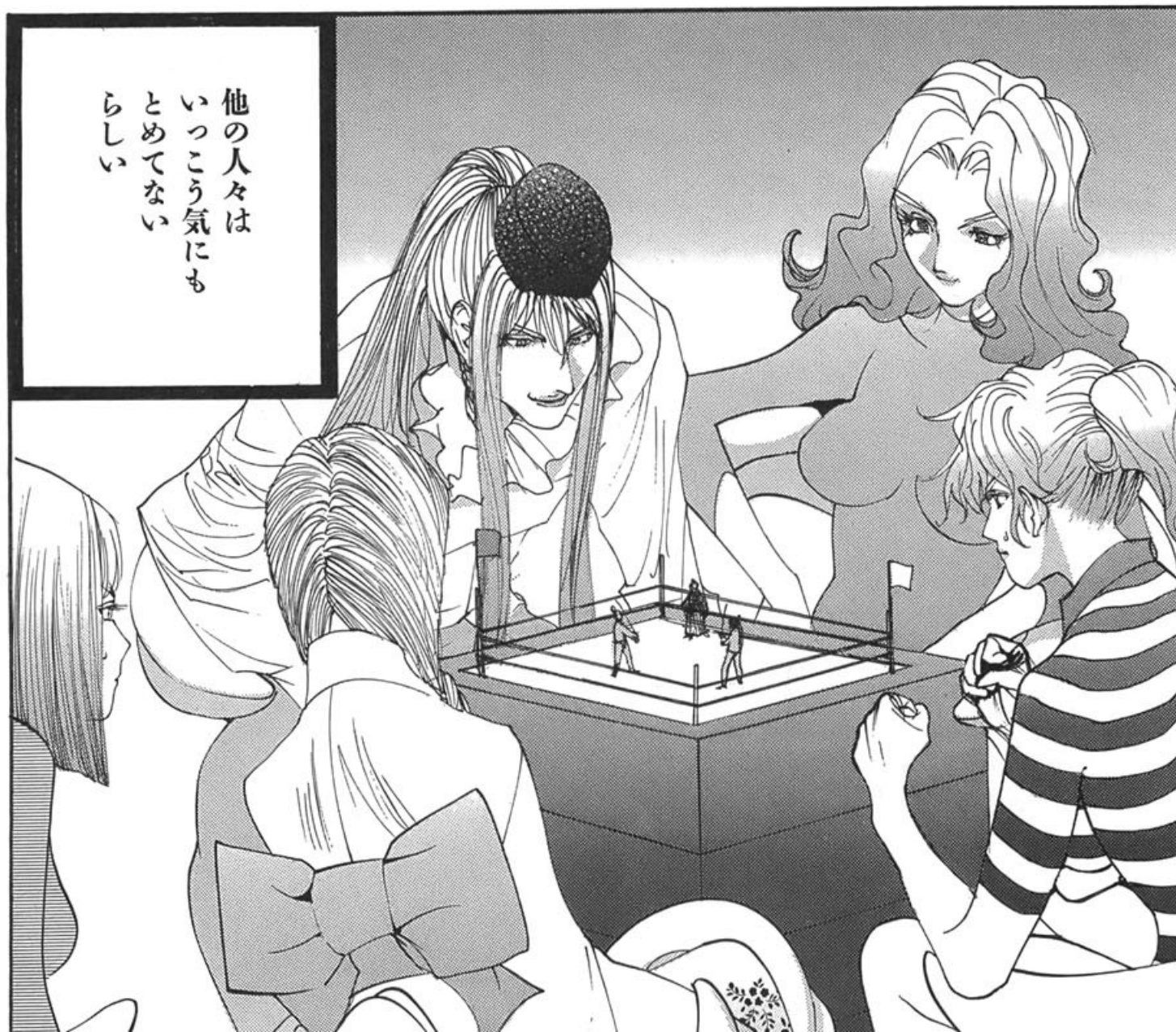


彼の
前合せになった
ロング・スカートが



そのため
割れているのを
彼女は目尻で
認めた





ムサシの
ほうが
傷が深いようだね
ドリス

と
放尿してる
ようにも
見えず

話しかけた
セシルの言葉に
ドリスは
むきになって

しゅわん

ところが
ムサシは
手負獅子^{ておいし}って
渾名^{あだな}がある
くらいだね

怪我^{けが}してからが
かえって強い^{強い}のよ

今までの試合でも
たいてい先に
斬られてから
相手を殺した……

パーティーは
妾^{めかけ}がすること
になるわ

彼女は
しゃべりながら
席を立った



特有の
香水の匂い^{にお}が
漂うので



気づいた
クララが
横目で
見ていると



少し
後ろに下がり



今しも
セシルの花模様の
スカートから



首を
くねらせつつ
頭部を引き抜いた
セツチンを



小声で



Come here



と
呼び寄せると



乗馬ズボンの
両脚を
踏み開きながら



ウ
胡坐^ン号^コ令^コを
掛けた

ウ
ン
コ
Ungko

孔^{アナル}釘^{ギン}と
いうものが
あるから

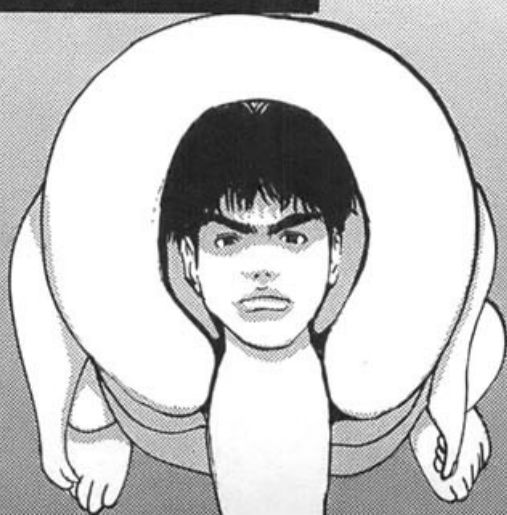
ズボンを
下ろしたりする
必要はない

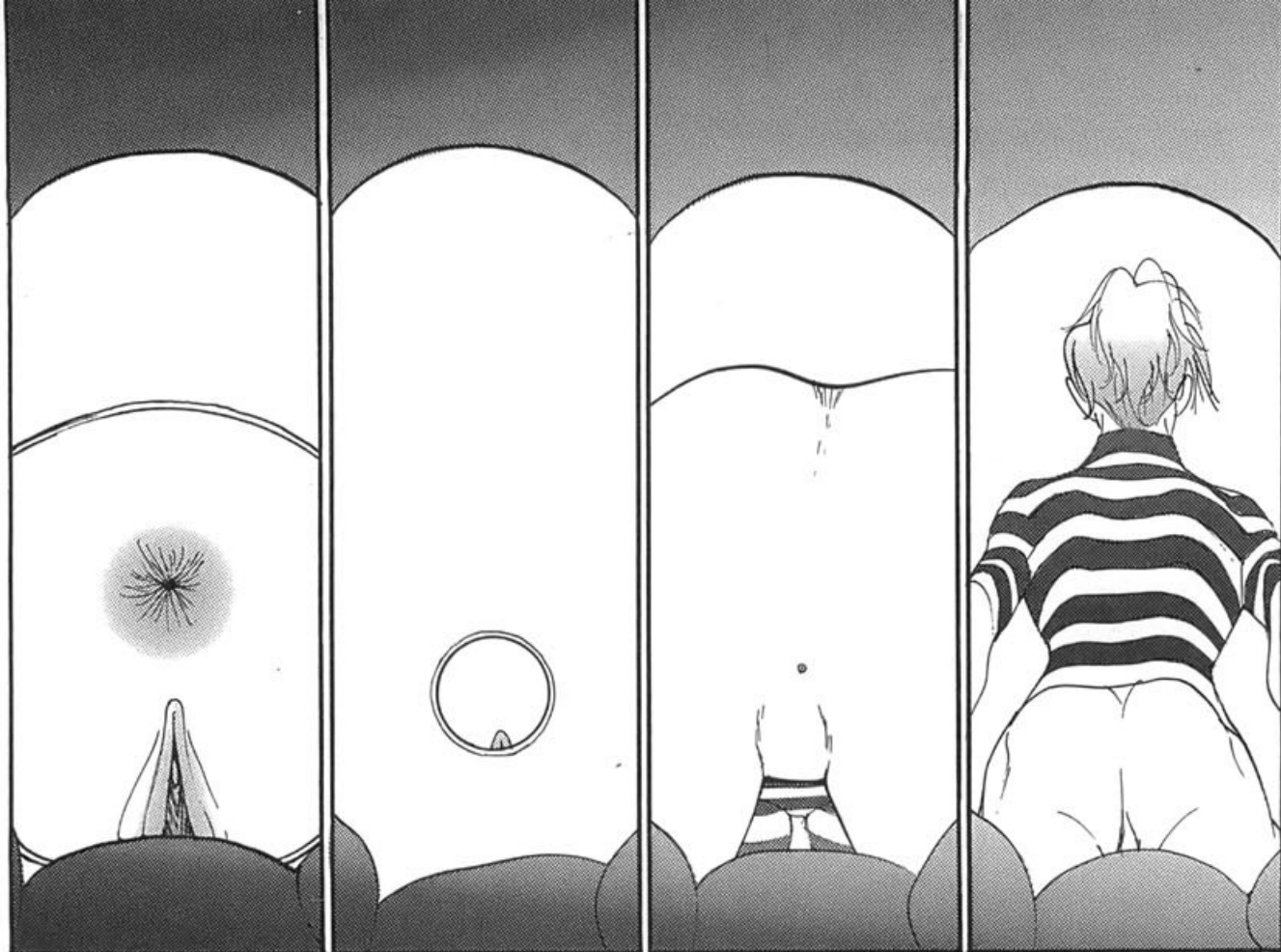


彼女の後方に
胡坐した
セツチンの

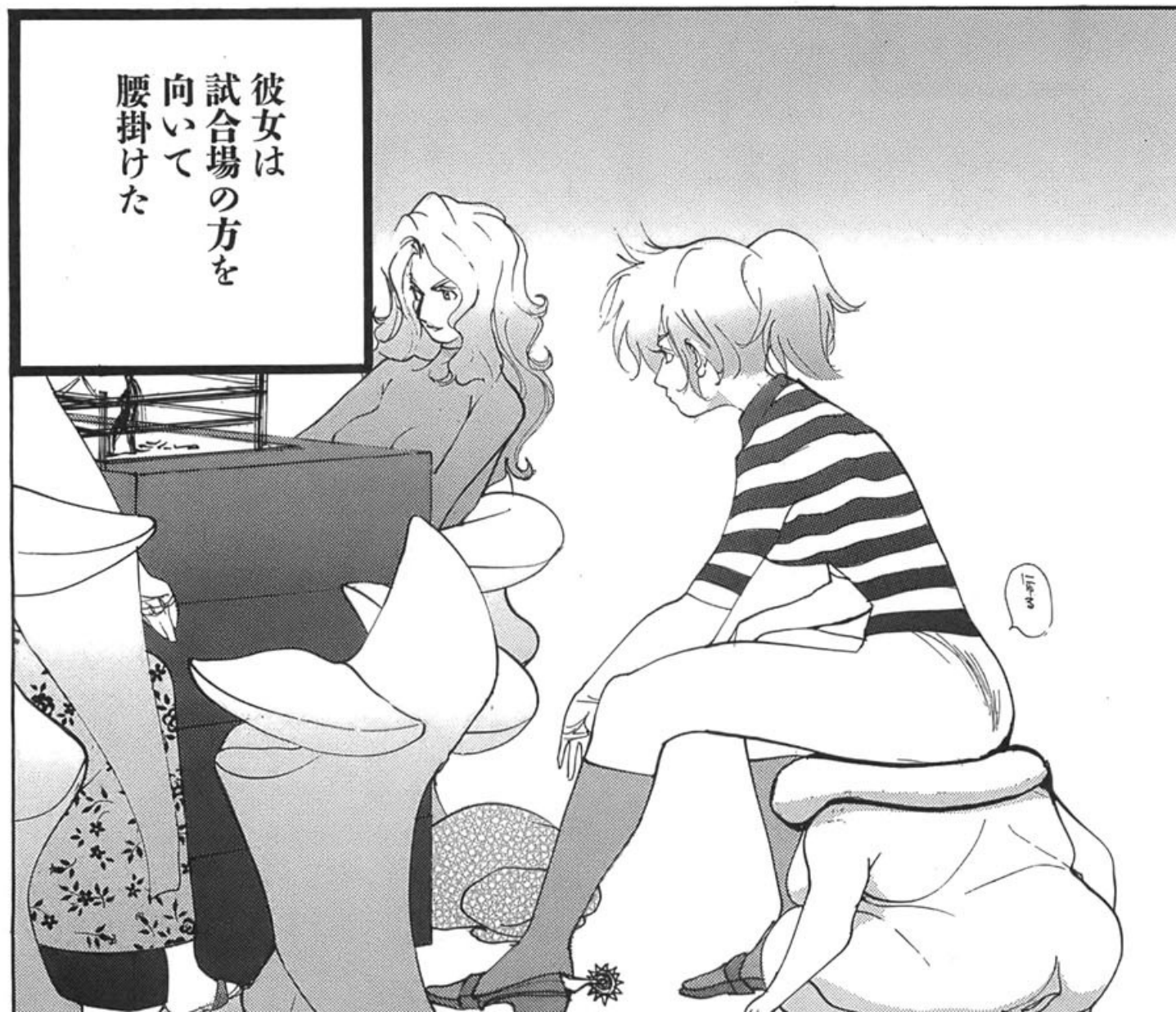


首の
畳まれた
馬蹄肉瘤^{ホースシュー・ヘンダ}に
腰を下ろす
だけだ

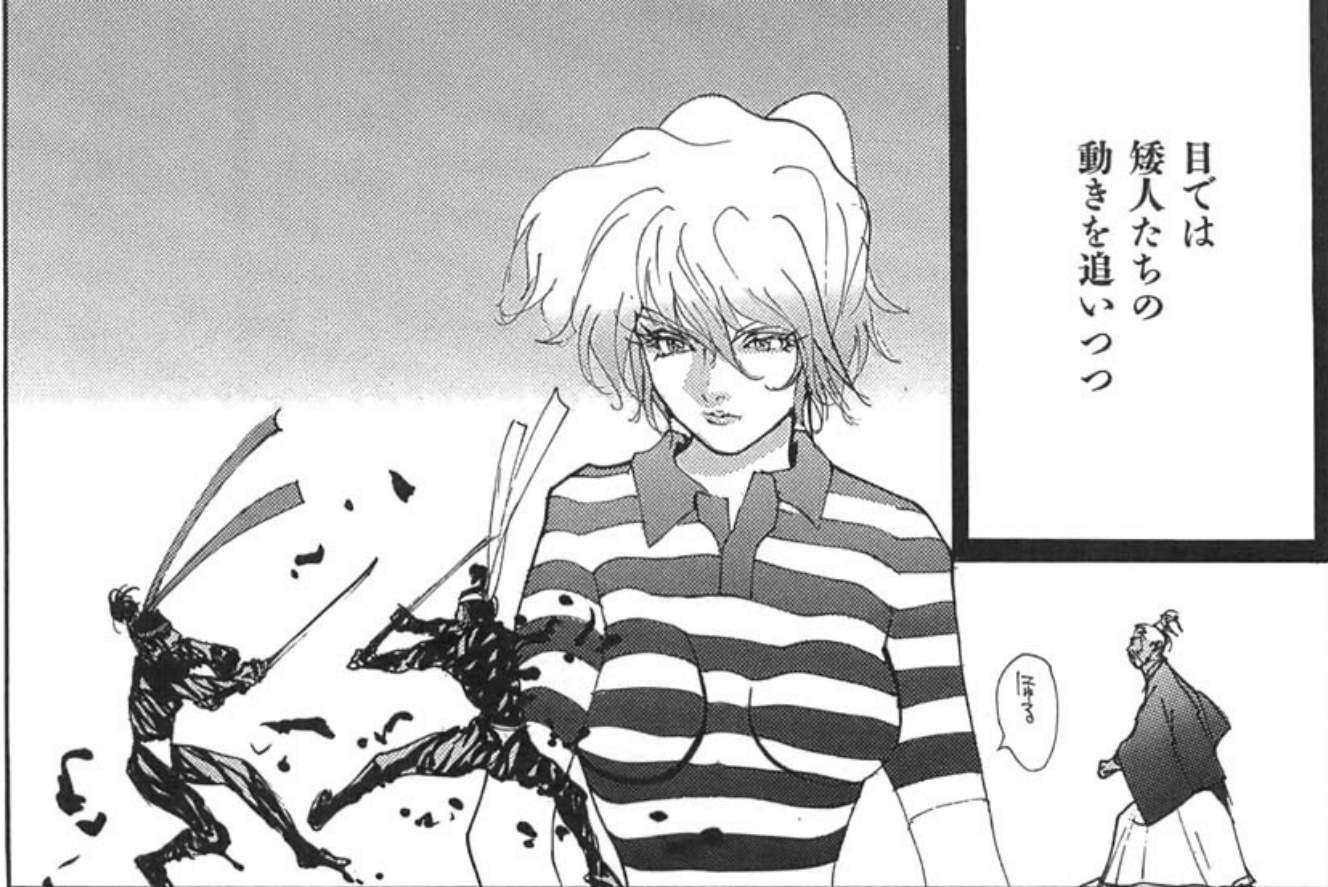




彼女は
試合場の方を
向いて
腰掛けた



目では
矮人たちの
動きを追いつつ



片手で
シガレット・ケースを
探って



一本取り出し
くわえると



指輪ライターで
点火し



気持よさそうに
くゆらしながら



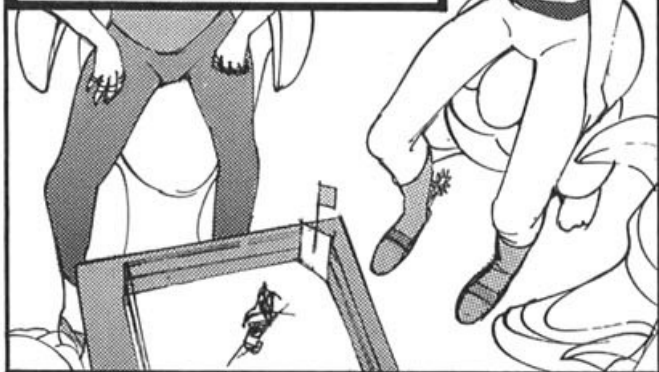
ゆっくり
生理的排出を
行なっている



急いで
息んだり
することは
イース人の
なさぬところ
である



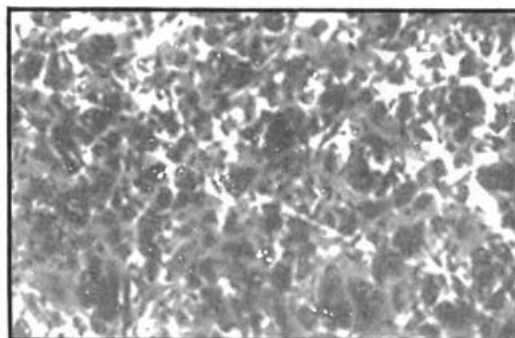
知らない者には
椅子を替えて
見物し続けて
いるとしか
見えまい



落ち着いた
ものだ



材料は
精気結晶ホルモンで



口にくわえていた
シガレットは
前史時代の
紙巻煙草
そっくりだったが

イースでは
ふつう



※³³ 喫煙といえ
ばこの精気煙草の
ことなのである



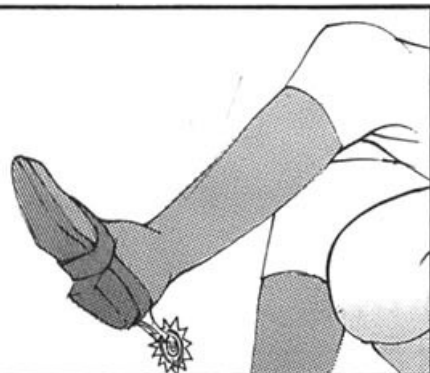
一本を半分ほど
ふかしたところで



ブーツ
長靴の拍車で
セツチンの
肥満した腹部を
一撃したが



ドリスは
突然右脚を
宙にわずかに
浮せてから



急に
後ろに
引いて



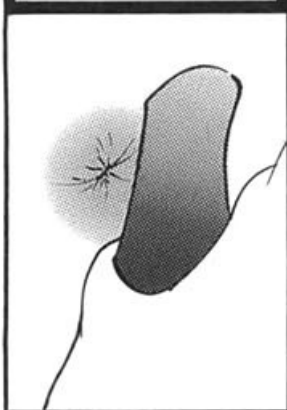
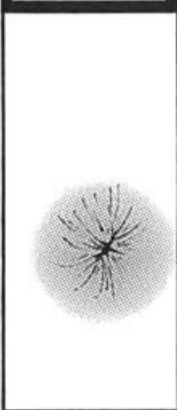
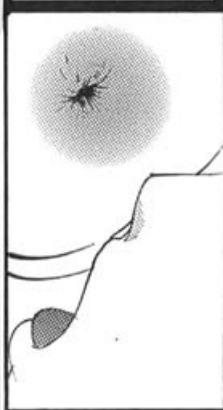
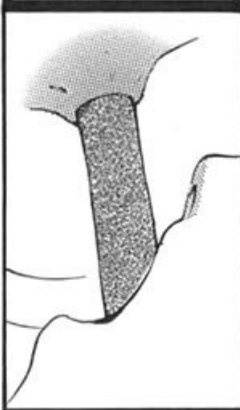
それは
この廟畜が
当然躡られて
いるはずの
礼法を忘却し

食

後

聖なる食器を

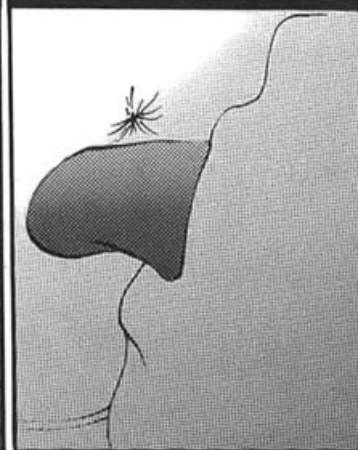
後ろから前へ
清拭しようと
したから



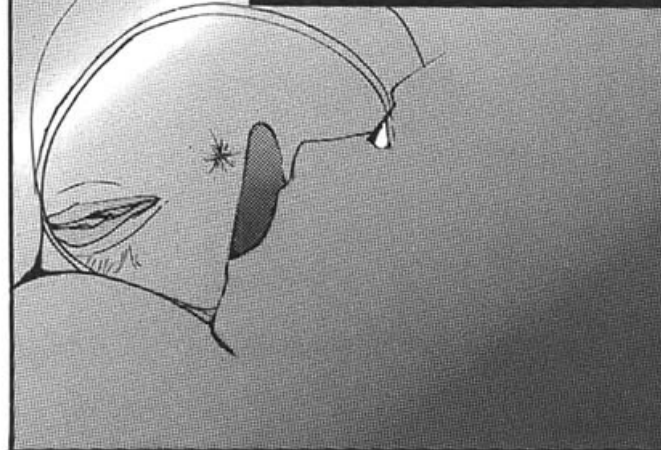
拍車で
その無作法を
とがめ



食器の清拭は
前・から・後・ろ・へ



という
正しい
食後の行儀を
思い出させたのだ



ドリスが
立ち上って
自席に戻ると



今度は
ウィリアムが
オシッコに
呼び寄せた

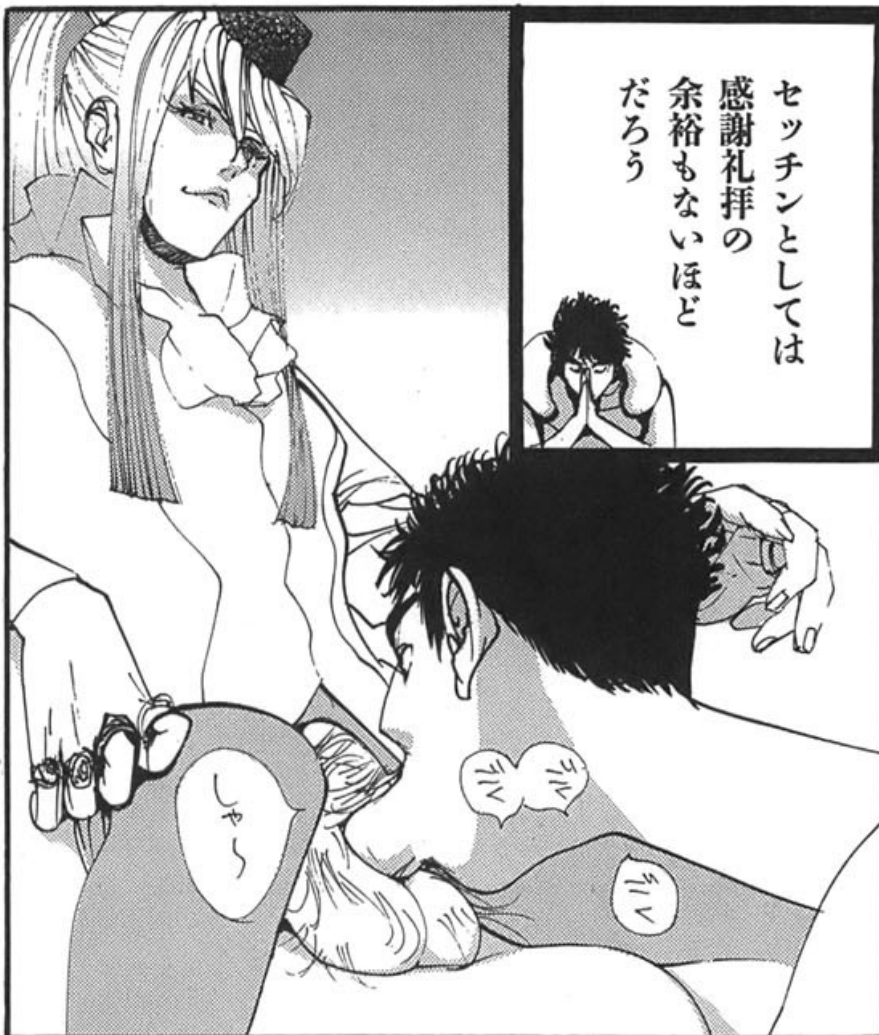
Oshicko



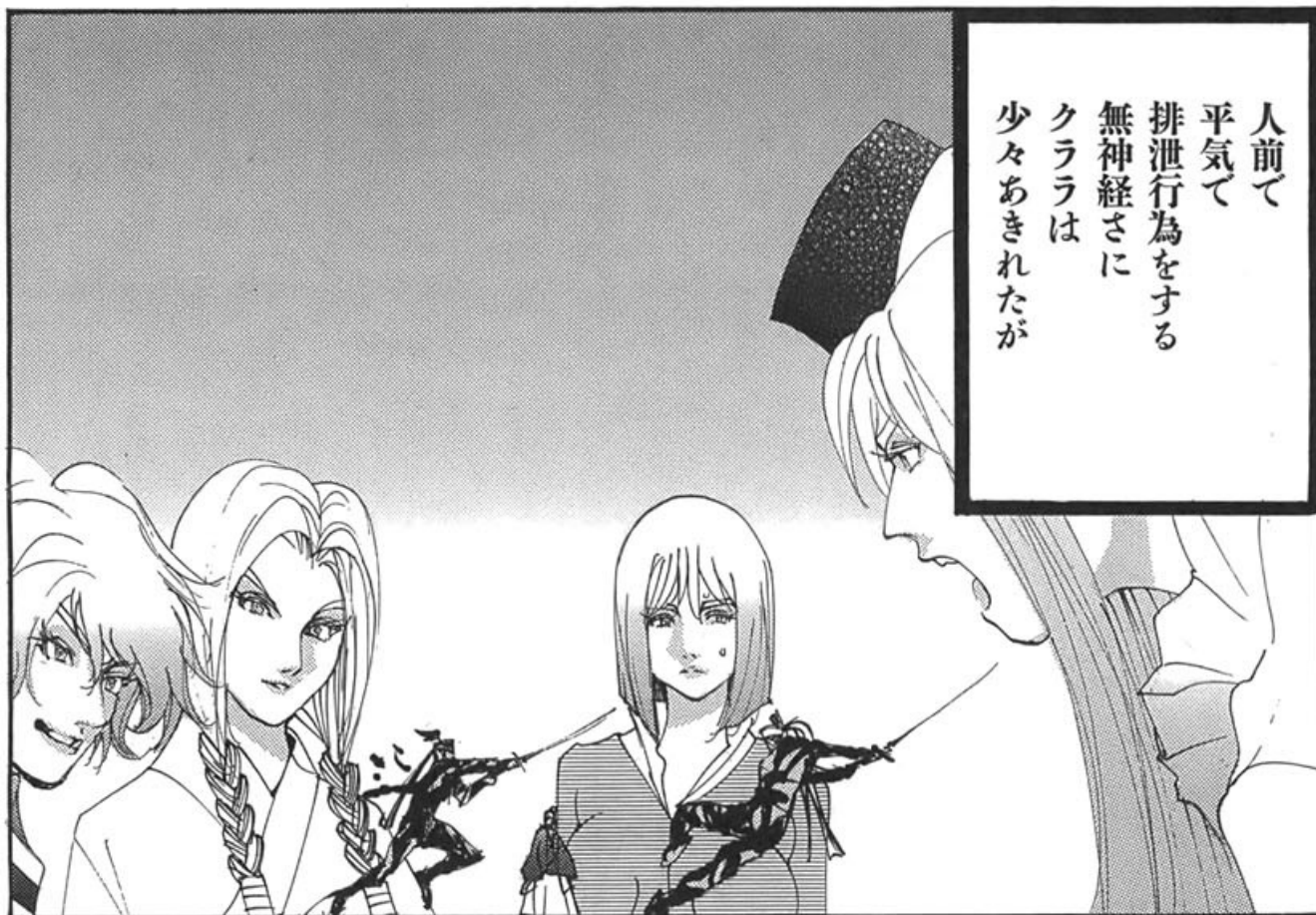
セツチンとしては
感謝礼拝の
余裕もないほど
だろう



……やがて
セツチンを
SCにしまう
ホイスル
口笛が聞えた



人前で
平気で
排泄行為をする
無神経さに
クララは
少々あきれたが

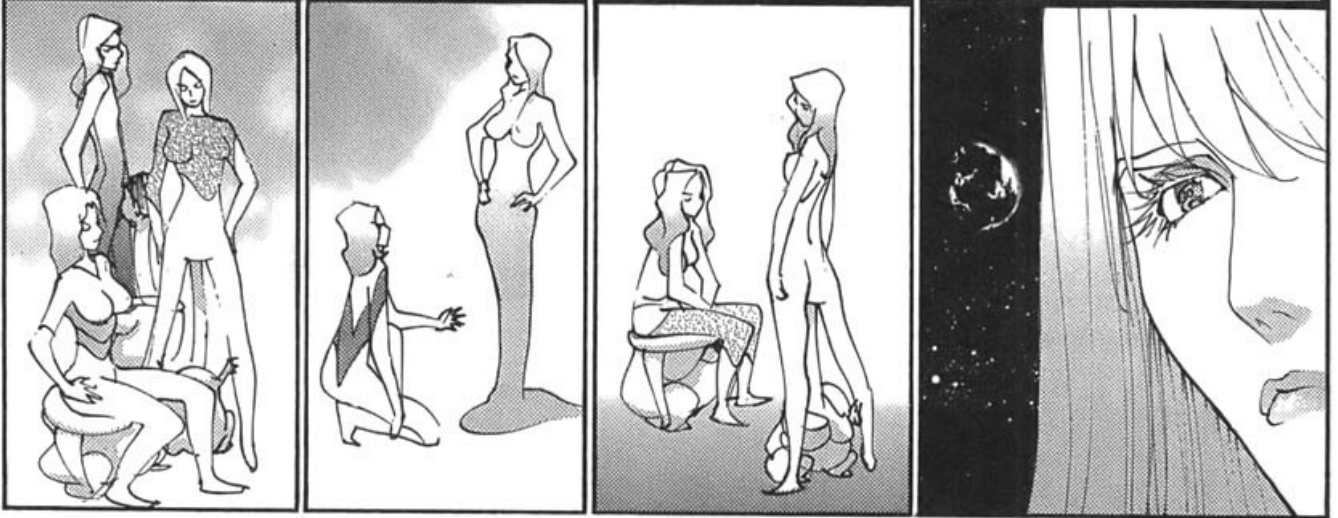


それは
彼女がまだ
イースにおける
白人社会の風習に
親しまなかつた
からである

排泄回数
頻^{ひん}繁^{はん}な
白人の間では

特に
目上の者が
いない限り

他の人の前で
脚に触れさせることは
べつだん失礼に
ならない



と
いう風俗が
成立しているのだ

それにいちいち
ズボンを下ろして
隠し所を
現わすじゃなし

手を
汚すじゃなし
いやな臭気が
漏れるじゃなし

他人の
迷惑になる点が
ないから

昔とは
事情が違うので
ある



現に
クララも



何が
行なわれたか
わからなかった
ろう



もし
廁畜の機能を
知らなかったら



昔の人は
人前で
鼻をかむ時
ちよつと後ろを
向くくらいで



今
セツチンの
使用は
ちようど
その程度の
軽い無作法と
観念されて
いるのだ



いちいち
部屋を離れは
しなかったが



臭気が漏れないのが
不思議に
思えるかも
知れないが



ホースシュー・ハンズ
馬蹄肉腫は
使用者の
臀部の肉に
密着するし

スタンダード・セツチン

他の肉便器も
大同小異であるが

——の
鼻孔は
顔面の鼻
でなく



ホースシュー・ハンシ
馬蹄肉腫の内側に
開いていることは
既述のとおりで



用便中

肉瘤内にこもる
臭気は全部
ここから
吸われて肺に
収まるから



外には
少しも
漏れないのだ

人間には
悪臭でも



セツチン共は
これを
よい匂いと
感じるような
条件反射で
仕込まれているし



また
その鋭敏な



※ 34
嗅覚で

ところで
決闘試合は
今や
白熱していた

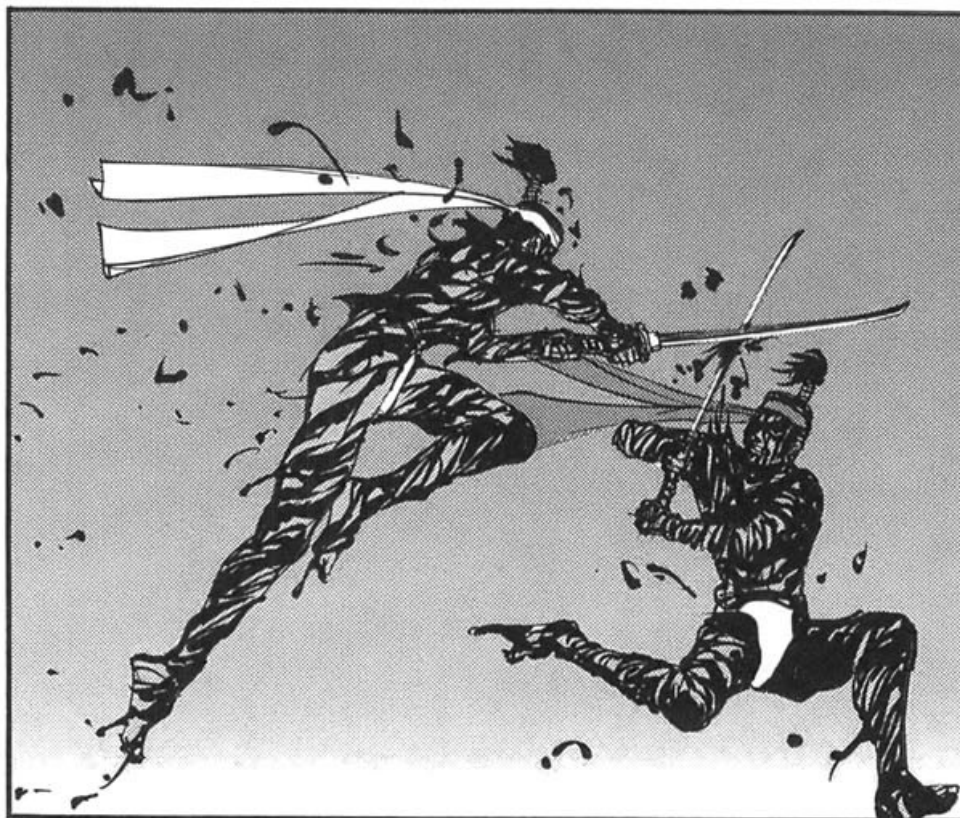
主人の
体の異常を
便の匂いによつて
診断かぎつけする技術も



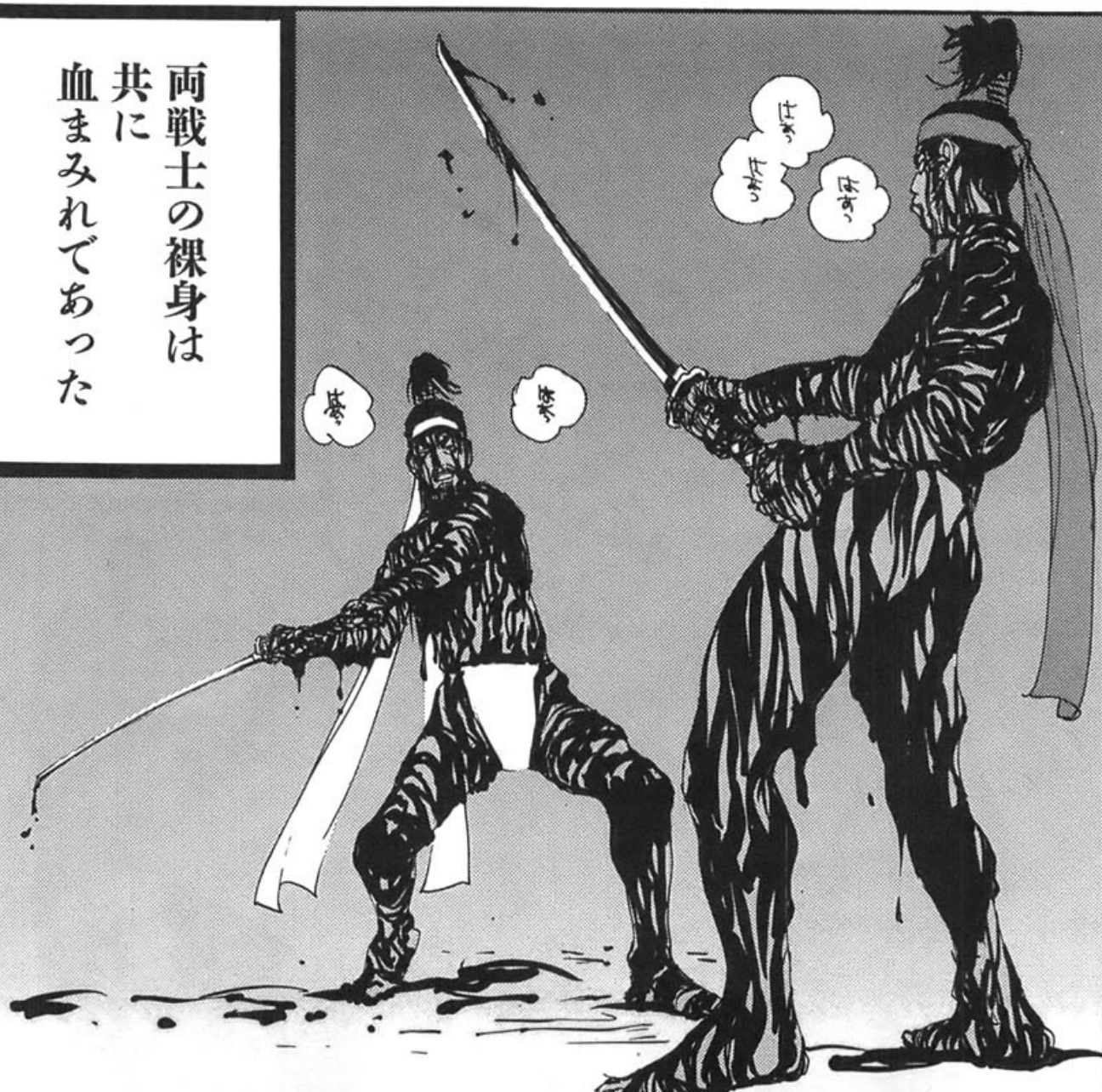
セツチンの
必須教養の一課に
なっているのである



激闘数十合



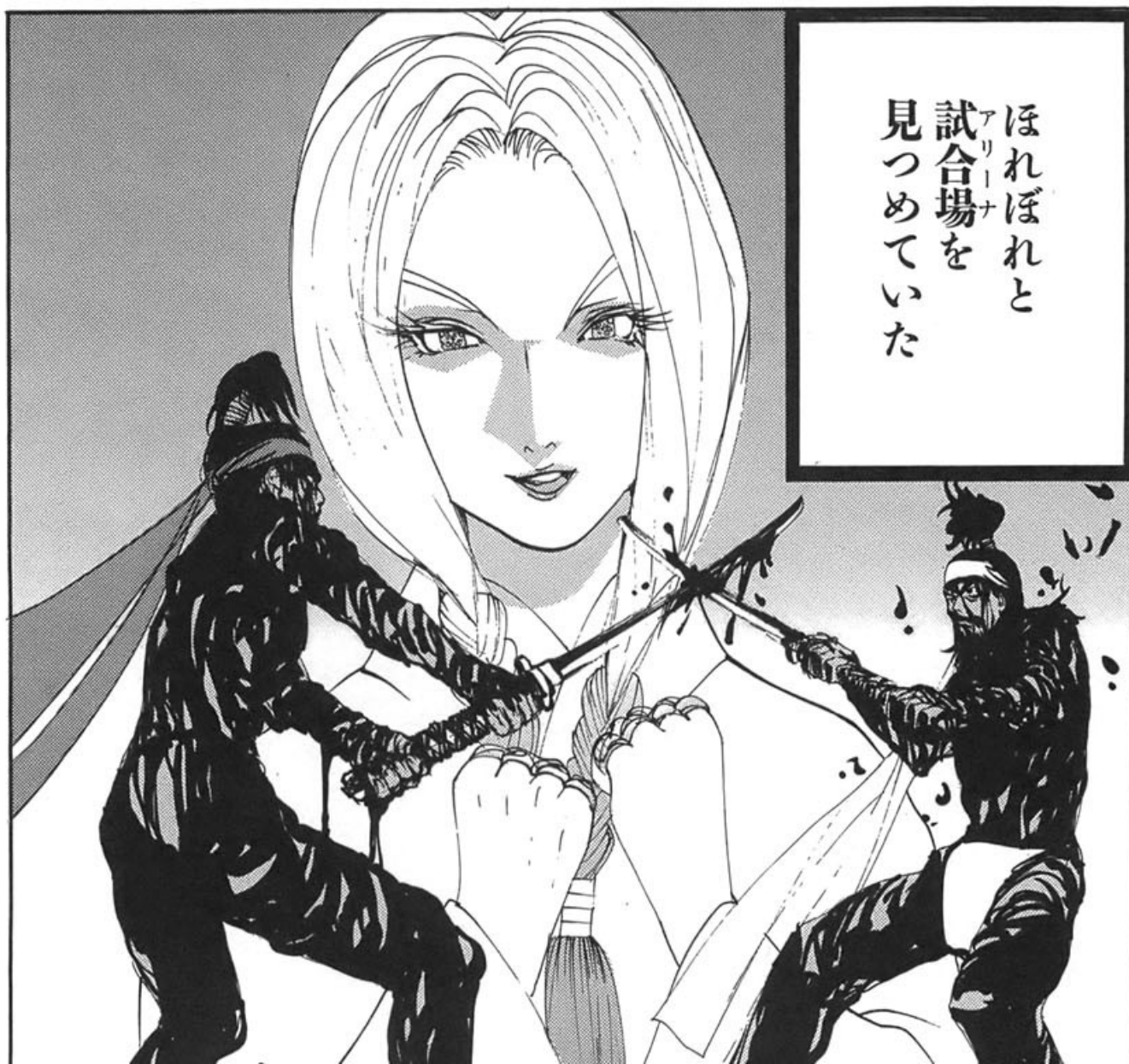
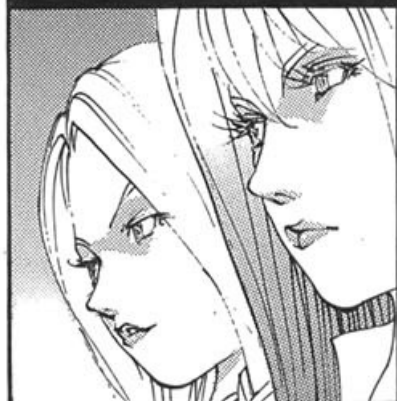
両戦士の裸身は
共に
血まみれであつた



実際に
ヒクミーンデュエル
矮人決闘の
醍醐味というの
は
これでしょう

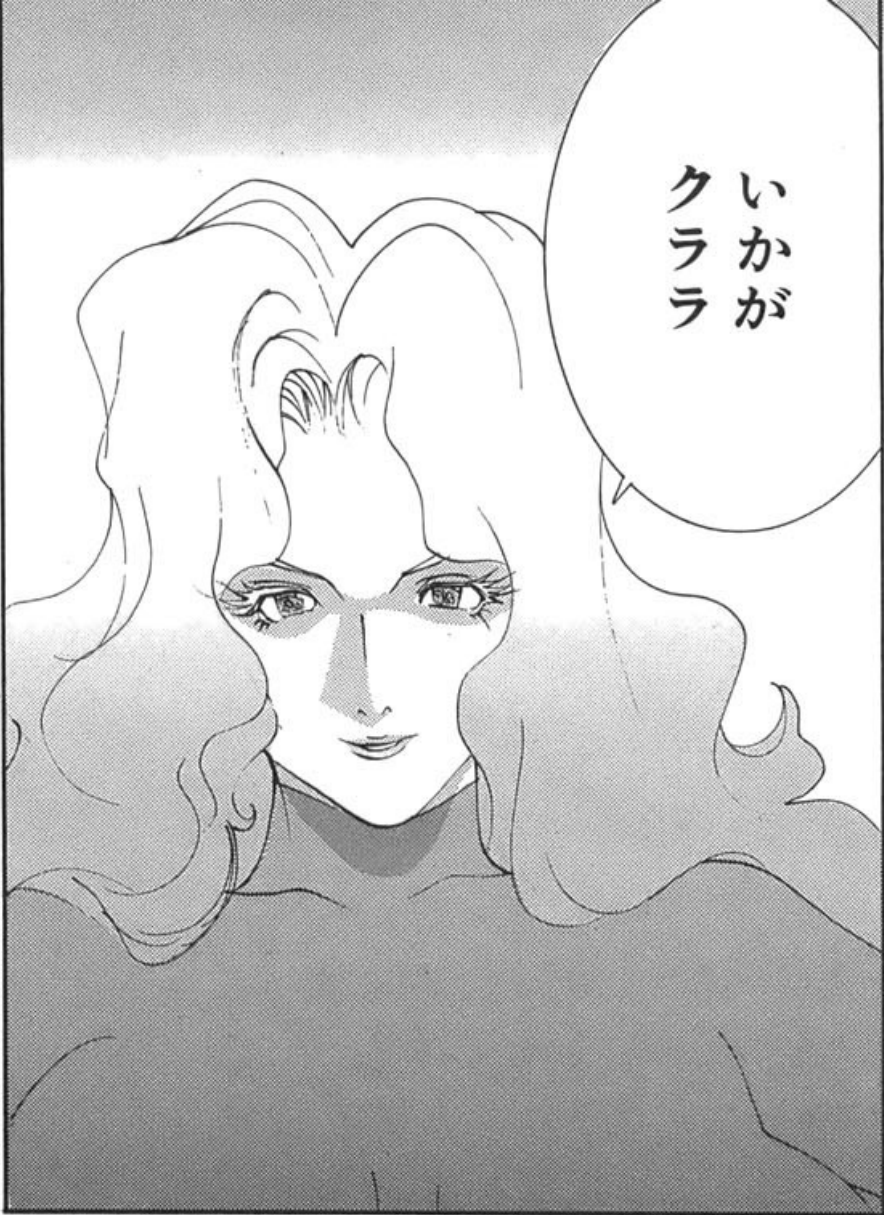
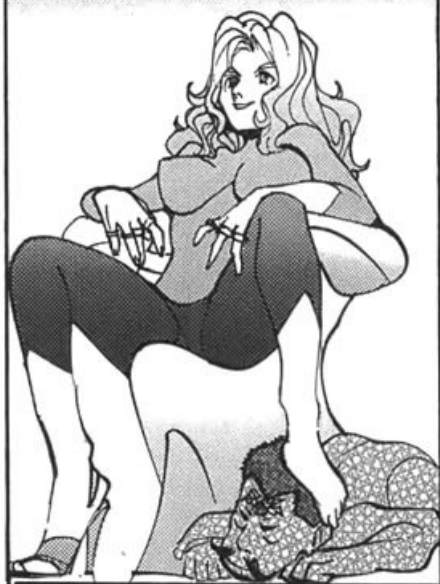
セシルは
クララに
聞かせるともなく
つぶやいて

ほれぼれと
アリーナ
試合場を
見つめていた



いかが
クララ

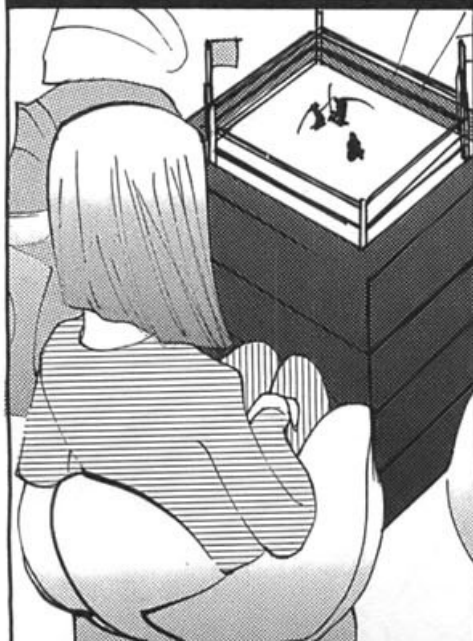
ポーリーンは
足元にうづくまった
ニューマの黒髪を
無心に片足で
愛撫してやりながら
クララを顧みた



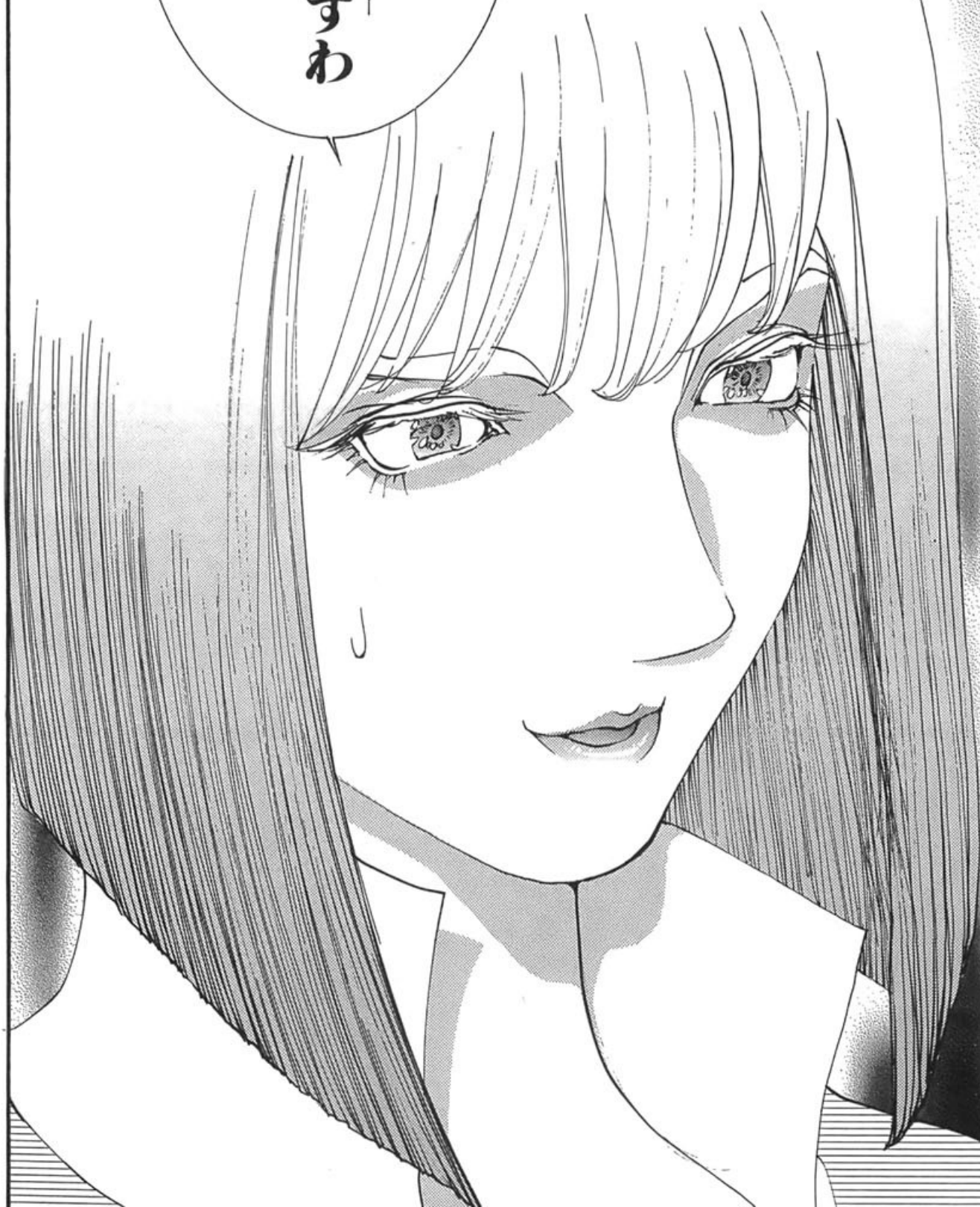
彼女は
息を凝らし
目を
輝かせながら

ポツリと
一言答えた

思わず
ドイツ語に
なっていた



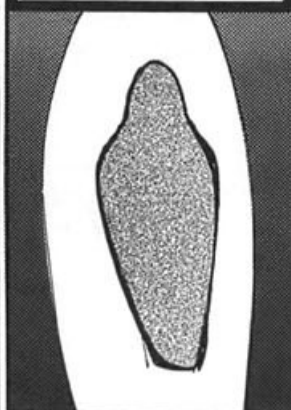
素晴らしいですわ



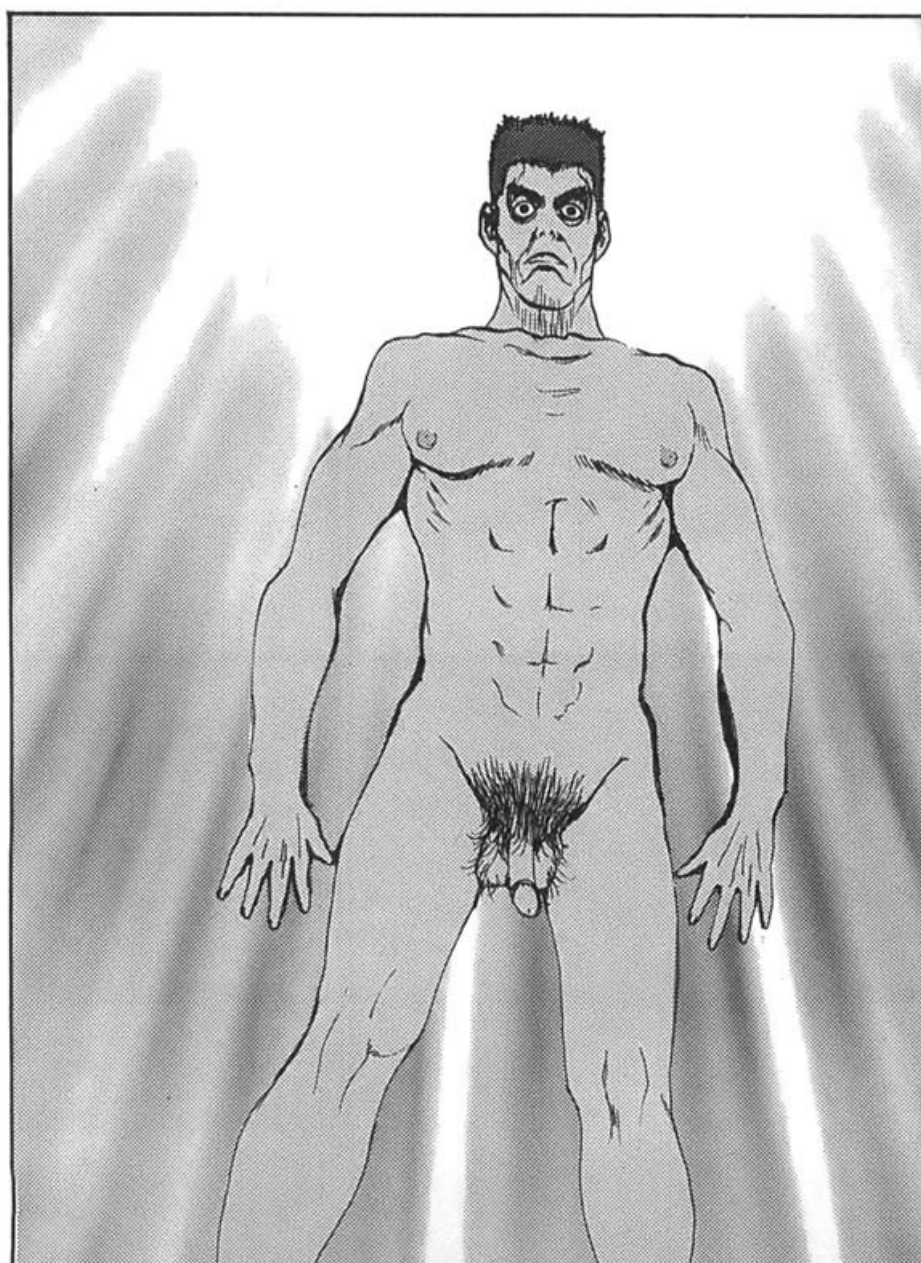
そのころ
船底の
ゲイム・シェツド
獲物置場の棺

スキン・アプン
皮膚釜
——の内では

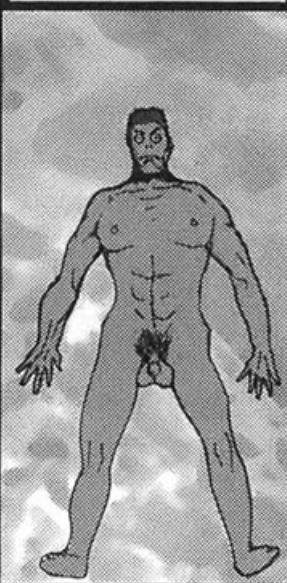
古い
瀬部鱗一郎の
肉体が
葬り去られて



後に
リンと名づけられた
新しい一匹の
ヤプーが
誕生しつつあった



デアルマトローム
皮膚強化剤は
しだいに
定着度を
増してゆき



脂汗が
涸れ尽した
ころからは



彼は
あまり熱痛を
感じなく
なってきた



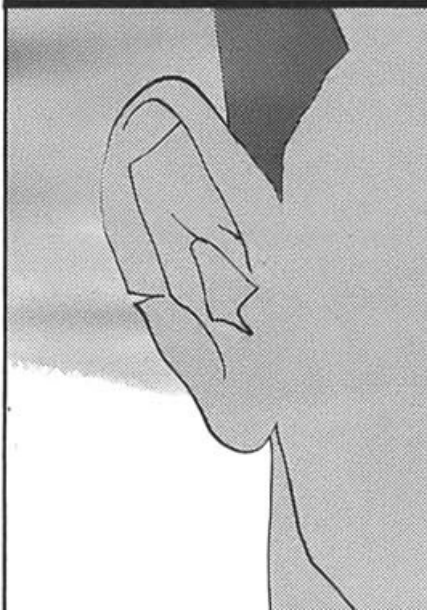
ついに
まったく
感じなく
なった



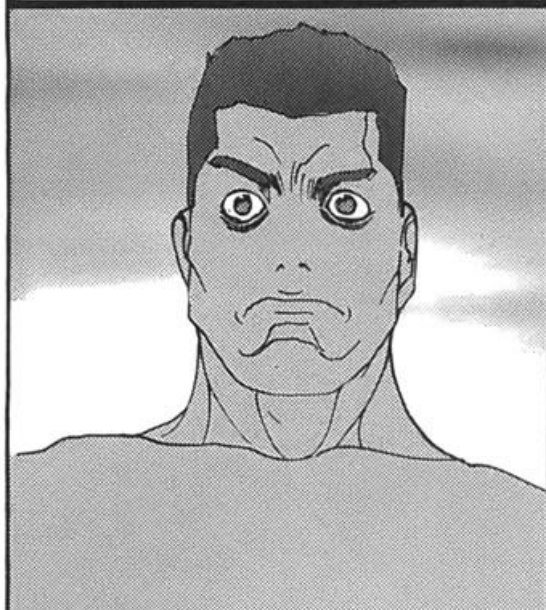
暖かさは
感じるが
熱くはない



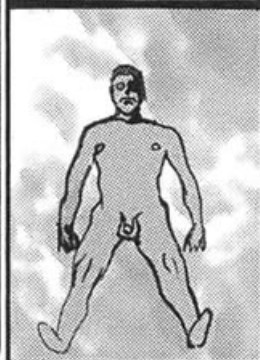
さつき
ポーリーンの
サンダルで切られた
耳の傷も



初めしばらく
感じていた痛みが
まったく消えた



ちょうど
四十分たった



一人は
温度計を



一人は
窯内の
ヤブーの体温や
脈拍等を示す
計測自記捲取表を
見つめつつ



一歩も離れず
待機していた
係の両船員が
立ち上った



定着は
終わったはずだが



いちおう
テストせねば
ならない



高温のほうは
もう充分
なのだから



今度は
低温であつた



ずっと
摂氏八十度を
持続していた
窯内であつて



皮膚強化に従い
主観的には
温度の漸次的下降を
錯覚していたが
鱗一郎だった



この時
さらに
温度が急速に
下っていくのを
覚えた



——や
何だか
涼しくなったぞ



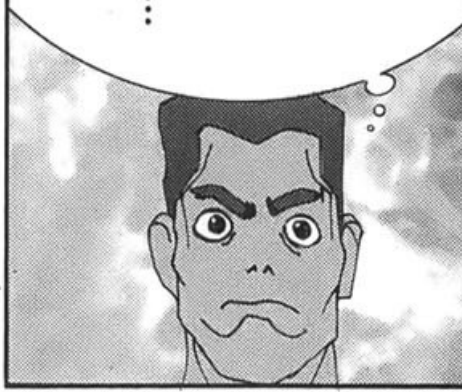
黒人ども奴
また悪戯を
する気か！



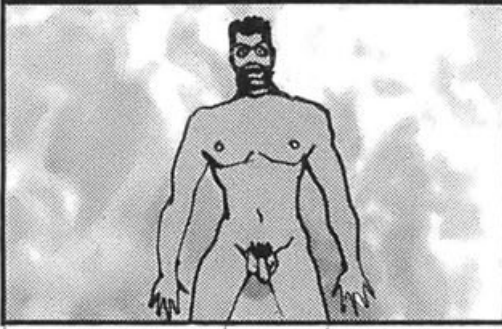
……さつき
この箱に
はいる前の
氷点近い寒さ



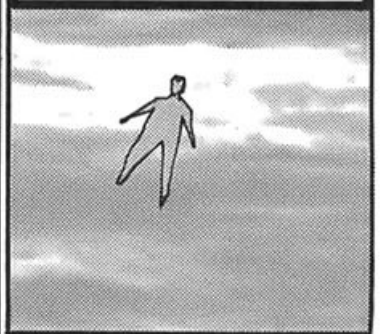
あれに
比べると
このくらいの
涼しさは
問題じゃないが……



彼は
多少肌寒い
程度にしか
感ぜず



かえって
清涼ささえ
覚えたのだが



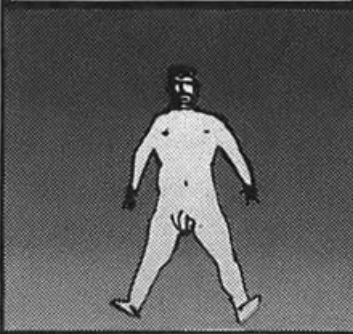
もし
デルマトローム強化皮膚を
持っていなかったら



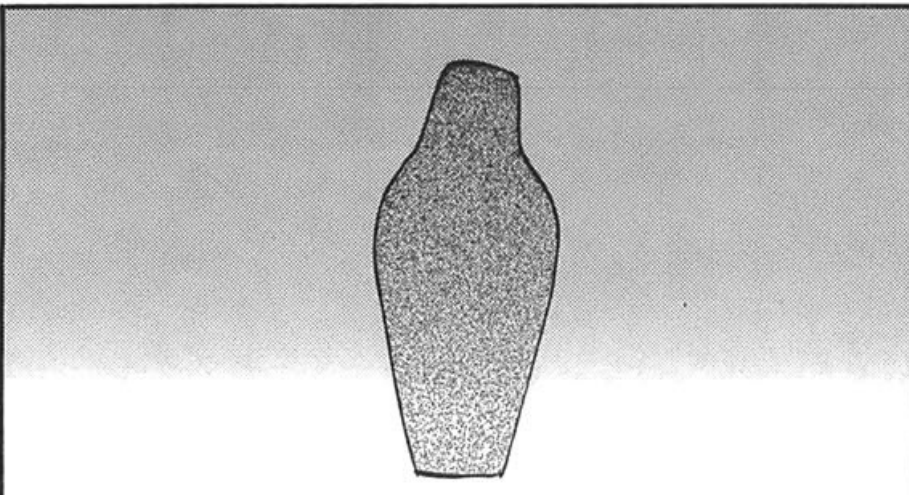
灼熱地獄のあとの
八寒地獄



直ちに
凍死して
しまったに
違いない



——この時の
窯内の温度は
摂氏零下五十度に
なっていたのである





彼は
気温変化の激しい
カルー星で

八十度を
暖かいくらいに
この極寒を
涼しくらいにしか
感じなくなった
今こそ



全裸のままで
生命を
保持してゆけるように
なったのだ

鱗一郎の
肉体は



熱さ寒さを知らぬ
ヤプーの肉体として
生れ変った
のである



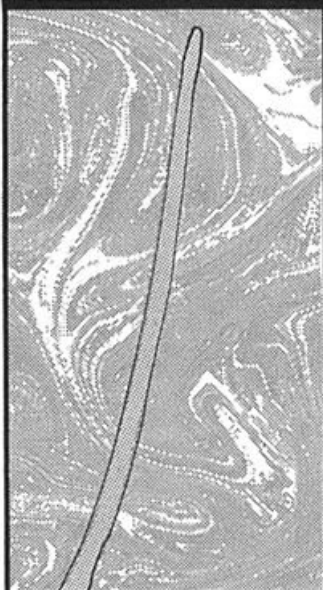
汗腺も
ふさがれたから
もう汗を
かくこともないが



その代り
作業のあとでは
犬のように
舌を吐くことだろう



エンジン虫の
尻尾は
さらに伸びたに
違いない



彼は
だんだん
ヤブー化されて
ゆくのだ



胸番号8の男は
自記テープを
じっと見凝めていたが



よからう
異常なしだ



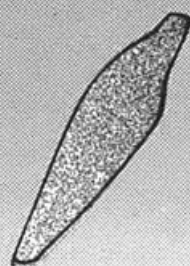
定着度
百パーセント
処置完了



13号が
温度計の針を
室温と同じ
三度に戻した



これがこの室の
常温なのであった



もう
出しとくか



そうさな
カテーテル
導尿管を
はずしても



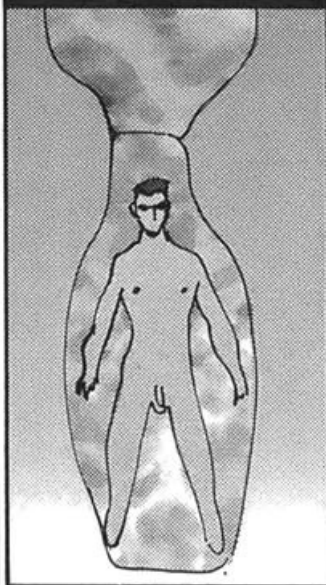
もうすぐ
着くんだから
破裂するほど
膀胱にたまることも
あるめエし



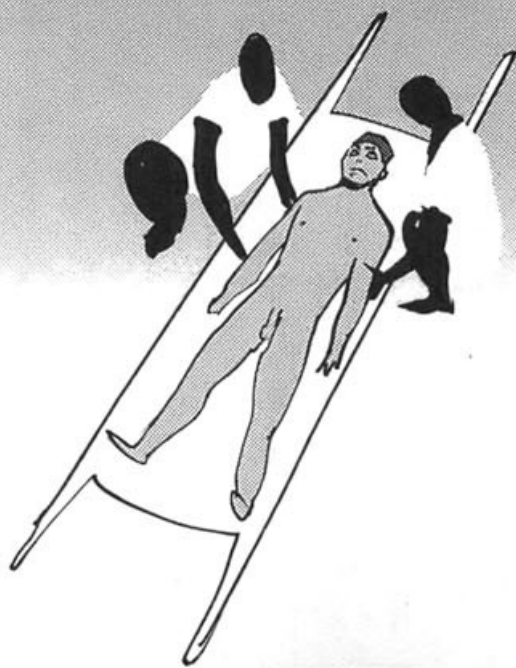
カテーテル
導尿管と
腸内注入管とが
同時に引き抜かれ



かま
釜が開かれ



彼は担架の上に
運び出された



肉体は
見たところ
何の異常もない



彼も
自覚しない



黒人
二人を見て



いったいなぜ
あんなひどいことを
した！



と
難詰したくも
舌は動かない



全身麻痺も
最前と
同じであった



さつき
の
呑んだ虫のことも
何も感じない



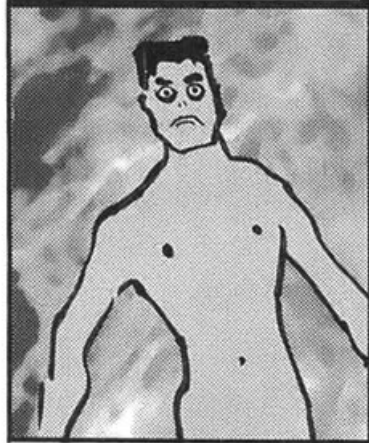
四十分を



鱗一郎は
何時間
何十時間にも
感じていた



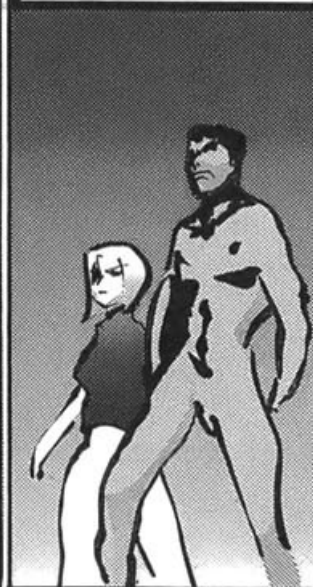
焦熱地獄の中では
時の歩みが
遅々たるもの
だったのだ



窯にはいる前の
出来事が
遠い過去のことの
ような気がした



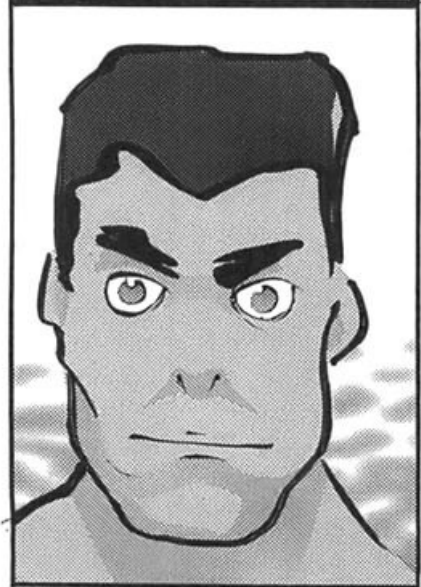
二時間ほど前に
円盤艇に
踏み込んでいった
時からの



生ま生まましい
経験は
忘れるべくも
ないが



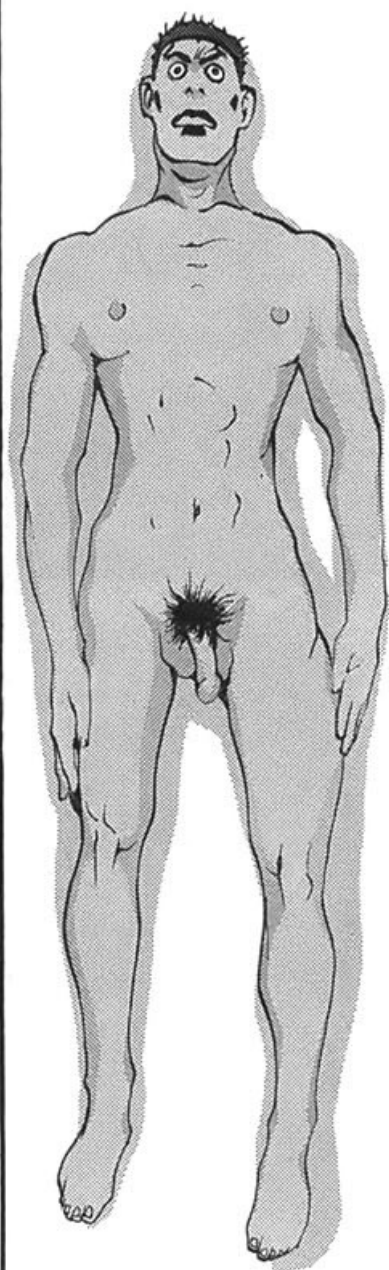
それさえ
色あせ
印象が薄らいだ

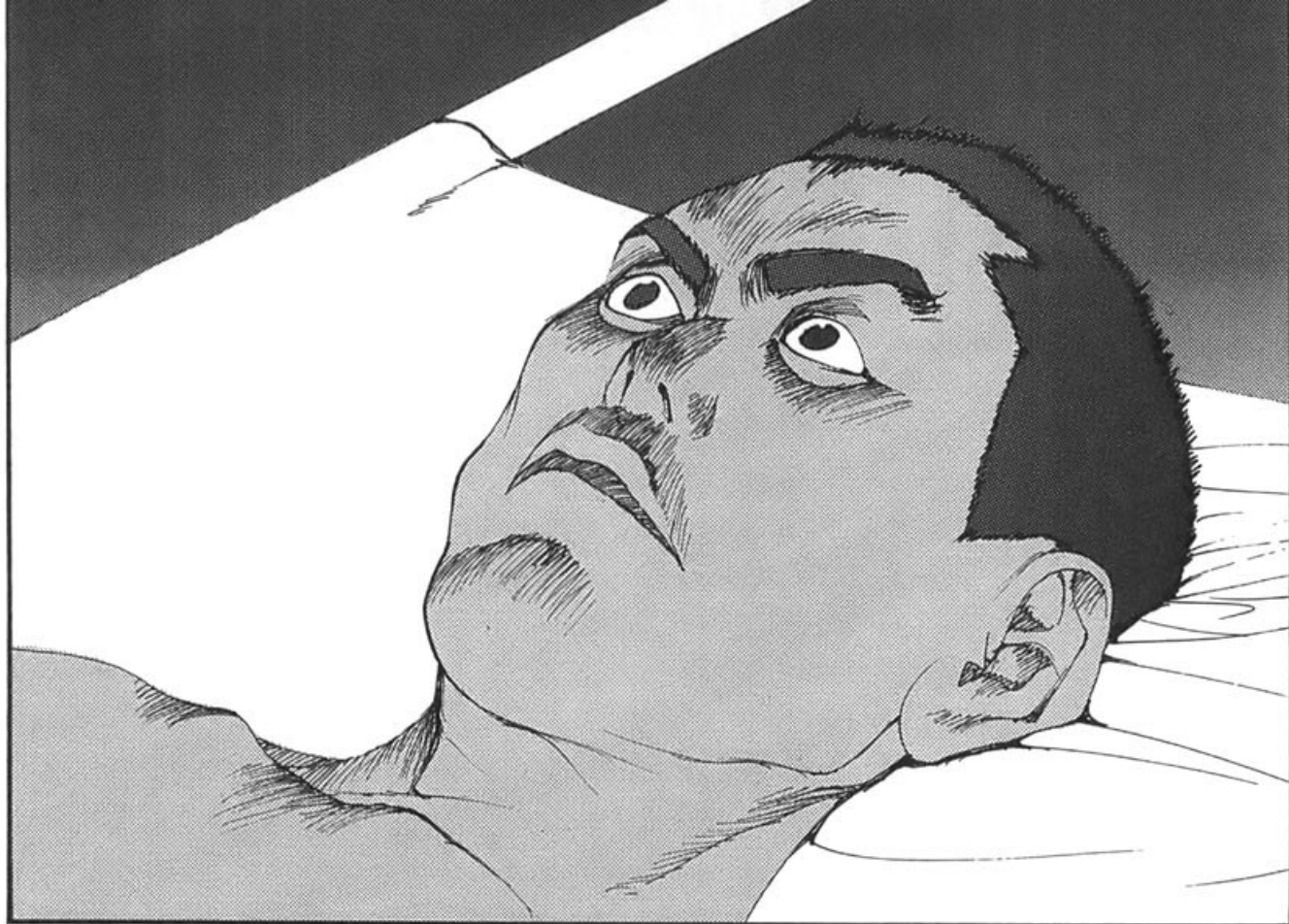


それに恐ろしい
肉体的苦悶くもんの
終ったあとの
せいでもあるのか

精神的にも
虚脱感があり

系統立った
記憶のつながりが
なかった

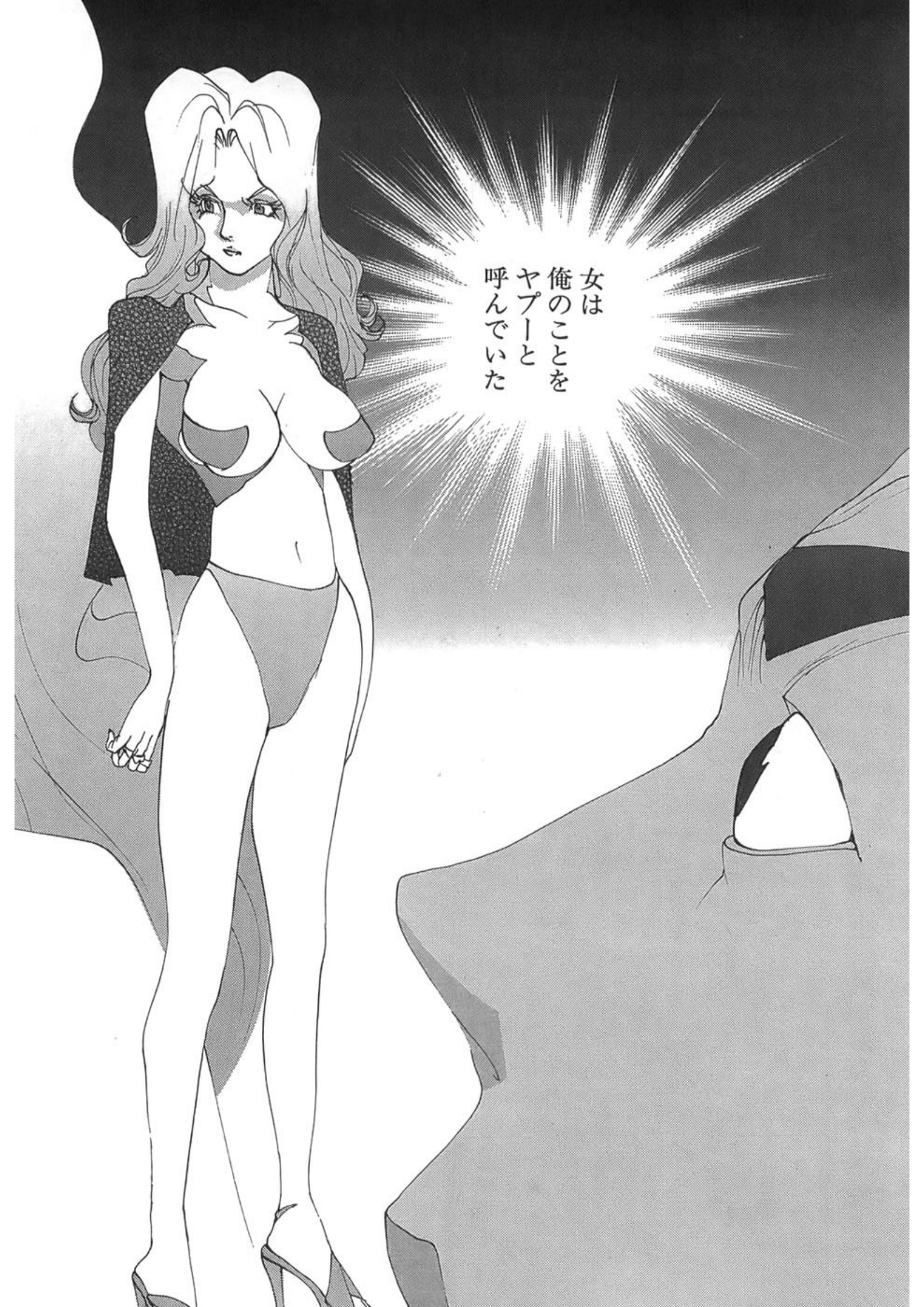




ひといぬ
人犬に
咬まれたつけ



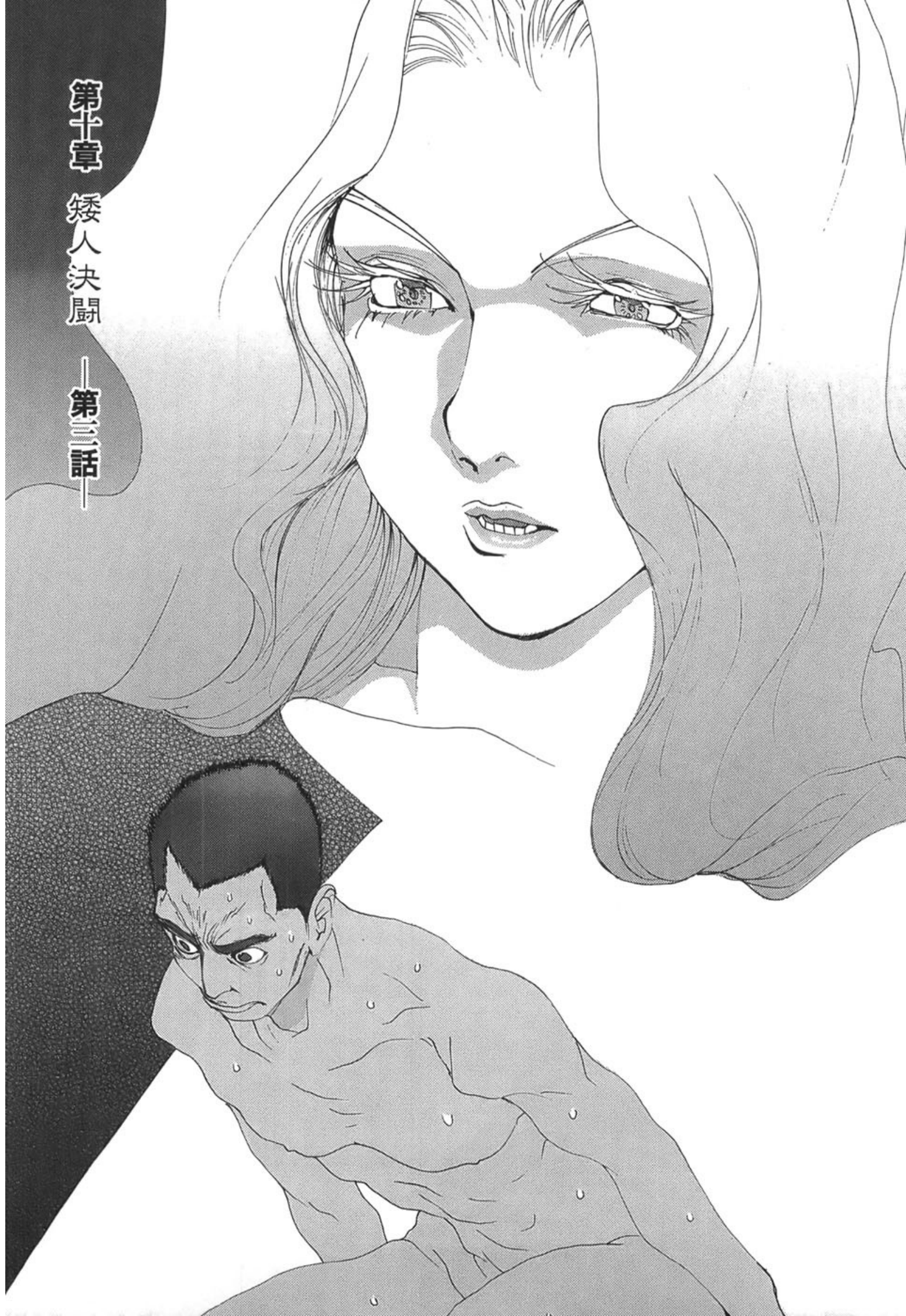
それで
動けなくなっ
たんだ



女は
俺のことを
ヤプーと
呼んでいた

第十章 矮人決闘

第三話



ああ
クララは
どうしている
だろう



クララが……





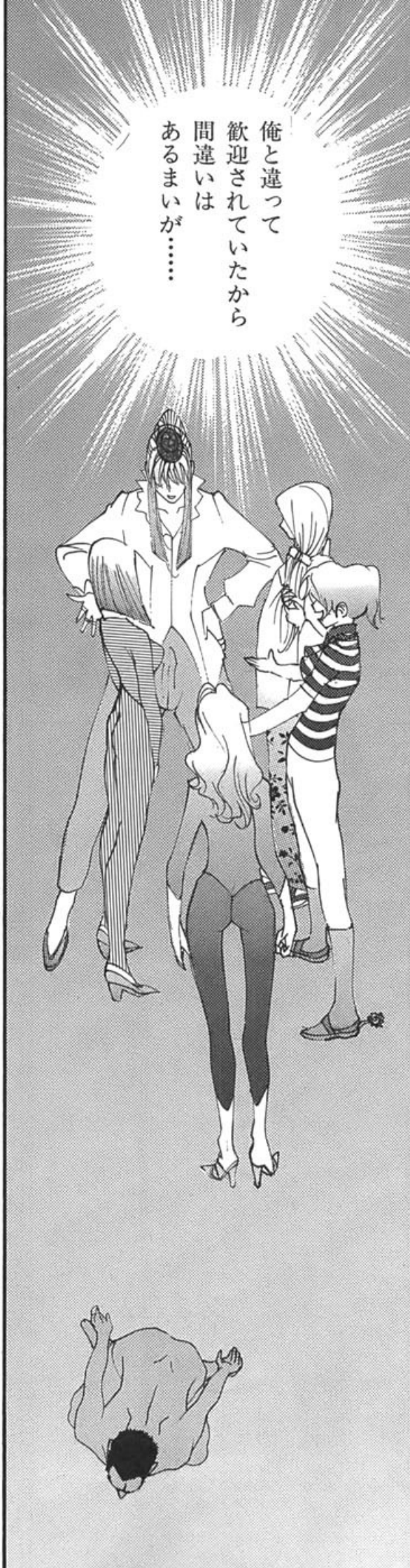
俺にだって
あの連中の
一人は



親切に
小便のことや
寒いことに
気がついて
くれたのに



命令を実行する
黒人が
こういう無茶を
するんだから



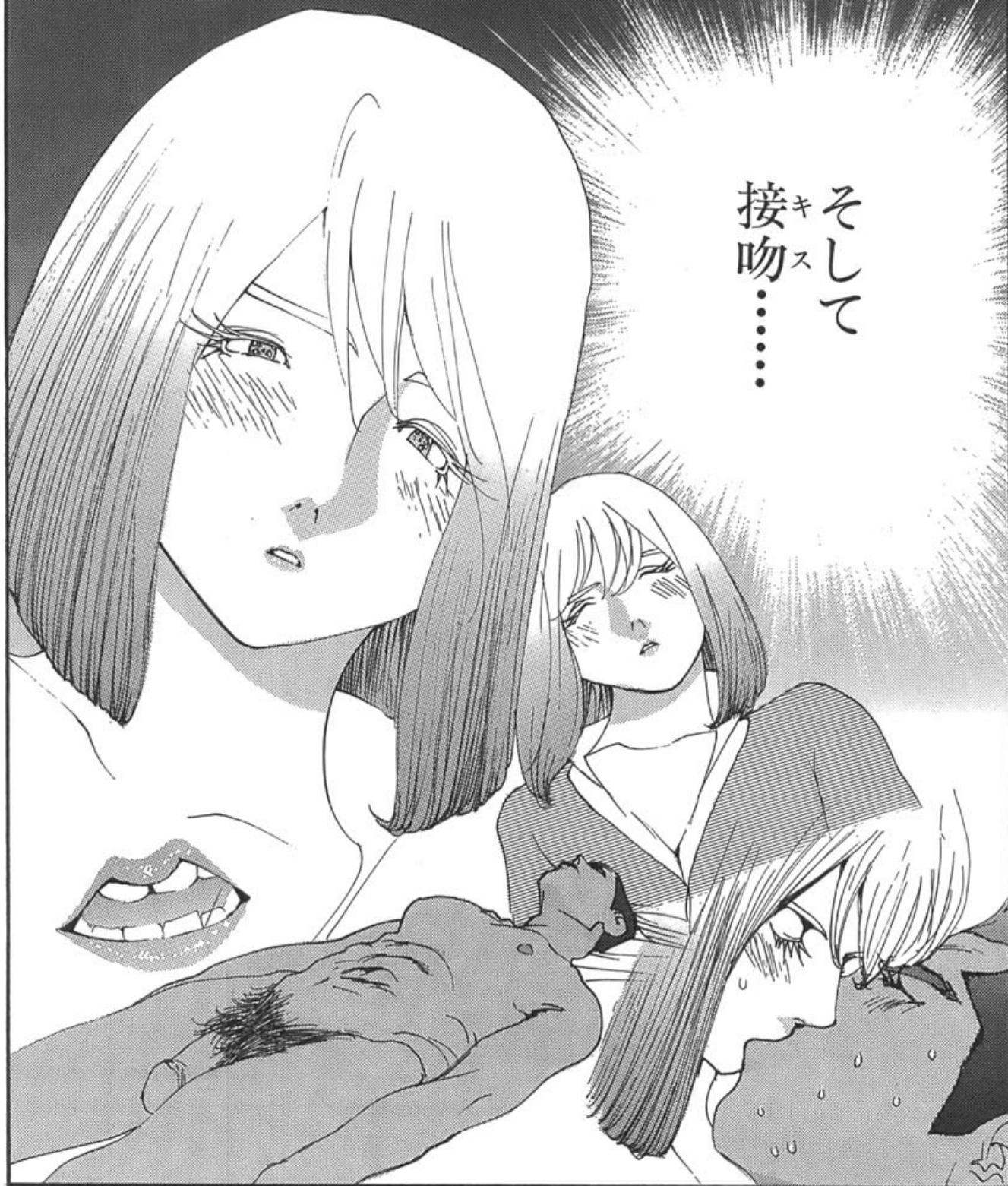
俺と違って
歓迎されていたから
間違いは
あるまいが……

クララも
気をつけなくちゃ

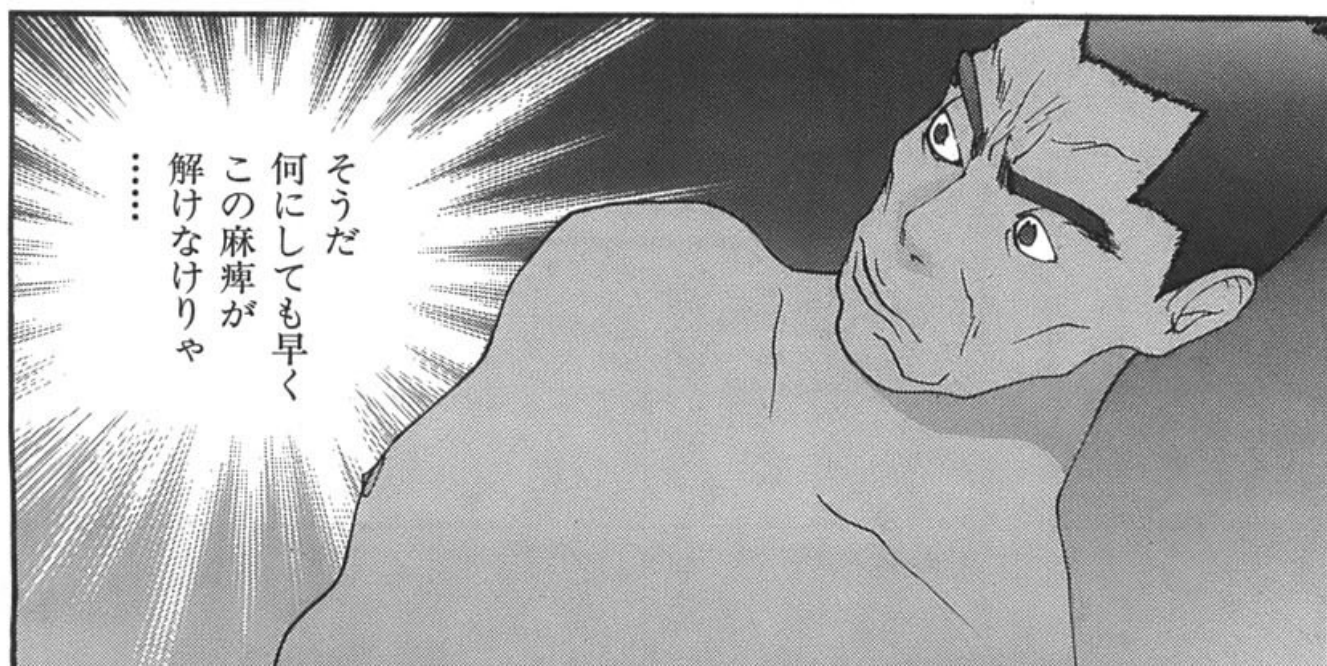
抱きしめたい

……
大丈夫だろうか？

ああ
会いたい



そして
キス
接吻……

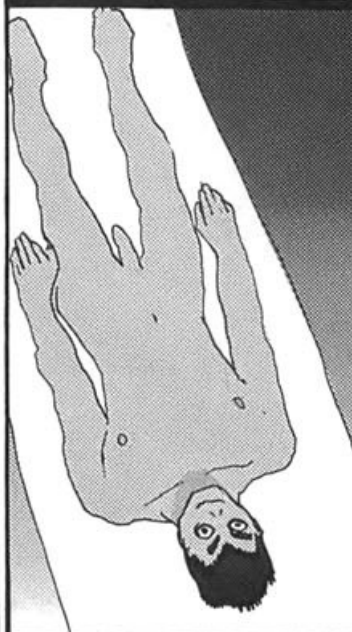


そうだ
何にしても早く
この麻痺が
解けなけりや
……

平生どおりの
頭脳の働きの
あったら



彼は
暖房らしい
ものがない
この室内で



さつきあんなにも
寒かったのに



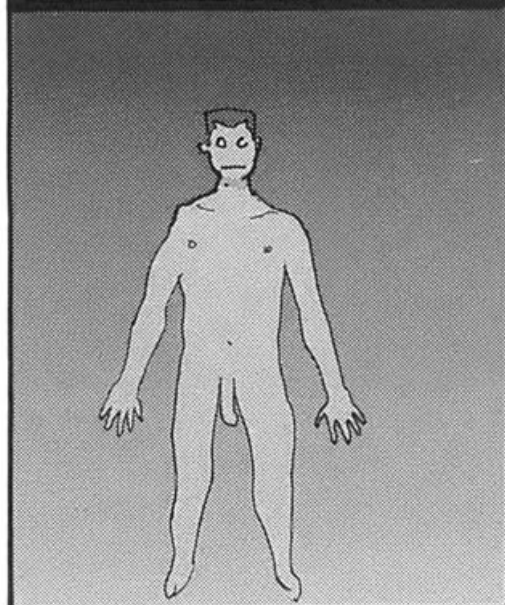
今は
どうして
暖かく感じる
のか?



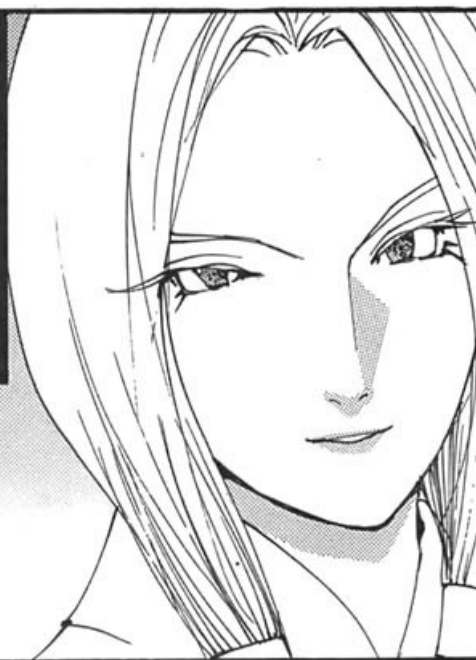
と
そこで
黒人の毒舌と



ついには
自分の肉体の
異常をも
結論し得たて
あったろう



その前
セシルがいった
言葉の示唆する
真の意味を
考え直して



しかし
虚脱状態の
頭脳では
思考の集中が
できず

注意力も
鈍っていたので

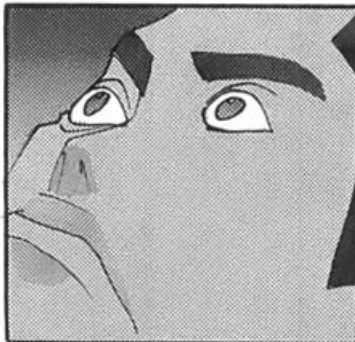
彼は何一つ
気づかなかつた
のだ



セシルの好意で
保温用の箱に
入れてもらったのに

黒人どもが
無茶をしたのだ

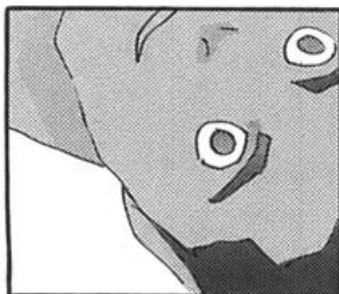
と
信じ込んでいる



おめでたい話
だった



と
……その時



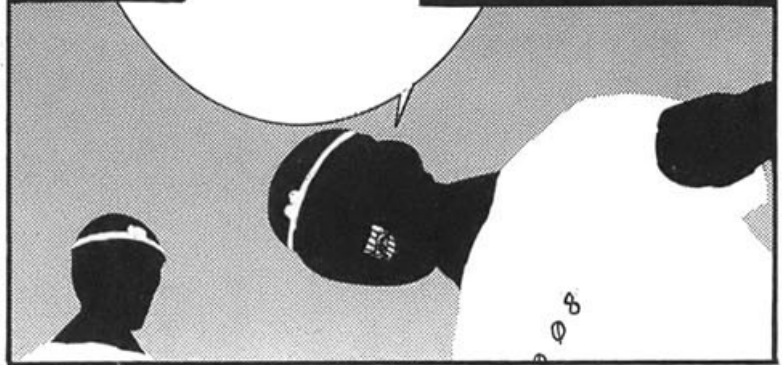
入窯前に
彼の背中に
鞭を当てる
相棒から
とがめられた
G8号が

ここを
ためすんなら
いいやな

と
いいさま

右手に
握った
クララの鞭を
大きく
ふるって

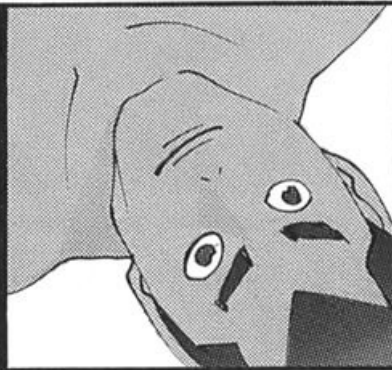
彼の
両足裏を



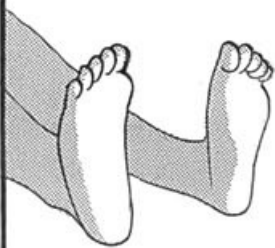
ピシッ

と
鞭打った

驚いたことに
痛くないのである



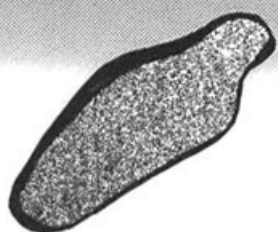
足裏の中でも
いちばん
柔らかいところに
当たったのだが



軽く
たたかれた
程度にしか
知覚しなかった



彼は
窯に入れられた
時



足裏に
何か
塗られたのを
思い出した



どうした
ことだろうか？



読者は
舌人形^{カニリンガ}の舌に
造肉刺激剤が
加えられて
立派な形に
成長させられた



との
記述を
覚えておられるて
あらう



さつき
彼の足裏に
塗布されたのは



この薬の
一種だったのだ
ある



グッド・アウトソウル
良い靴底だ

満足そうに
8号がいった



わずかの間に
彼の足裏は
厚みと堅さを増し



南洋の土人の
十倍も
強靱なものに
なっていたのだ



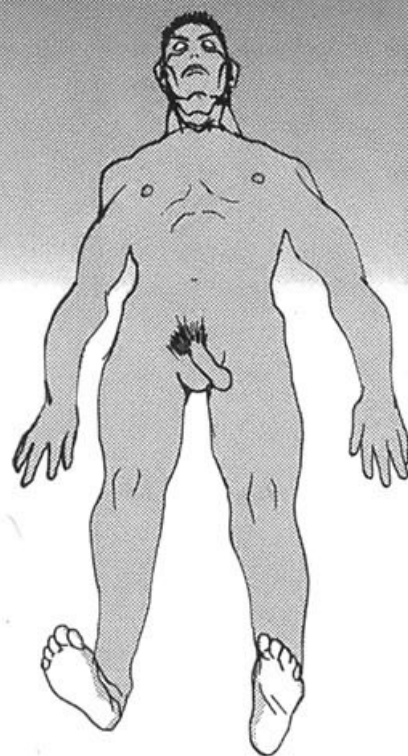
もう
靴を履く
必要はない



彼の肌が
衣服そのものに
化したように

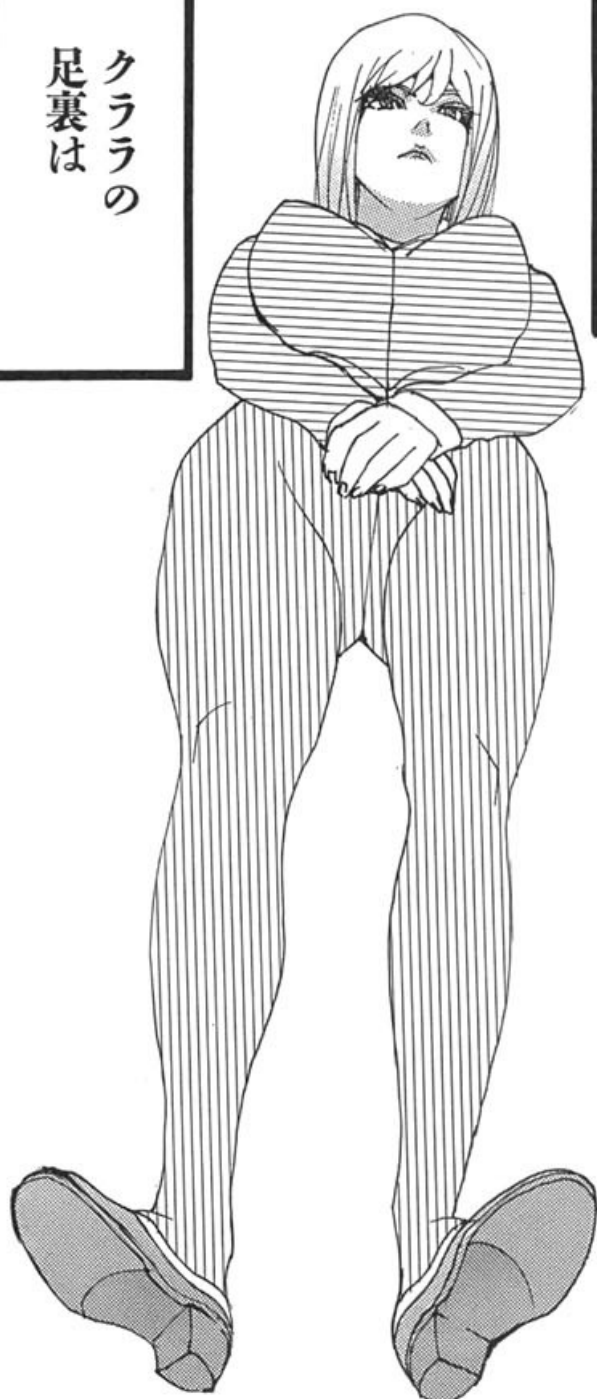


彼の足裏も
靴底の
半張革と
同じになって
しまったのだ



一方

クララの
足裏は



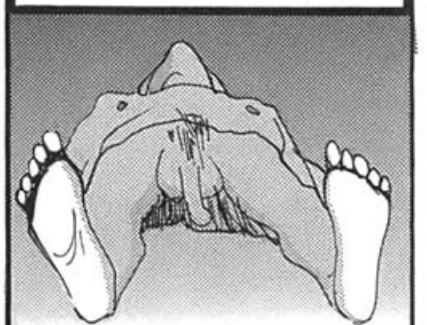
今後
フランク・クシヨン
足裏布団の
肉体に
脂を吸わせつつ



ますます
柔軟になってゆく
というのに……



鱗一郎には
この足裏の変化も
わけが
わからなかった



漠然と
異常を感じて
不安に
思っではいたが



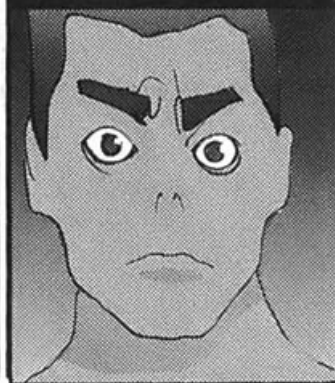
異常といい
不安という
だけなら



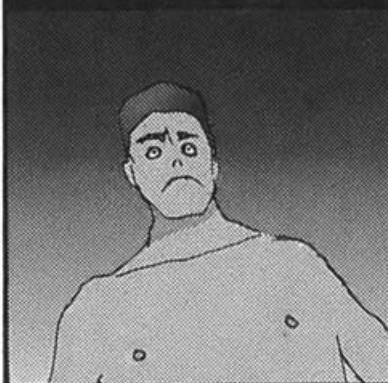
ニユーマに
咬まれてからの
出来事で
異常でないものは
なく



不安を
呼ばぬものはない



……彼はもう何も
考えるのをやめて



ただ
クララを
待つことにした



担架に
横たえられ



天井を
ながめつつ



彼の
脳中は
恋人のことで
いっぱいだった



——クララ
君は今
何をしているのだ

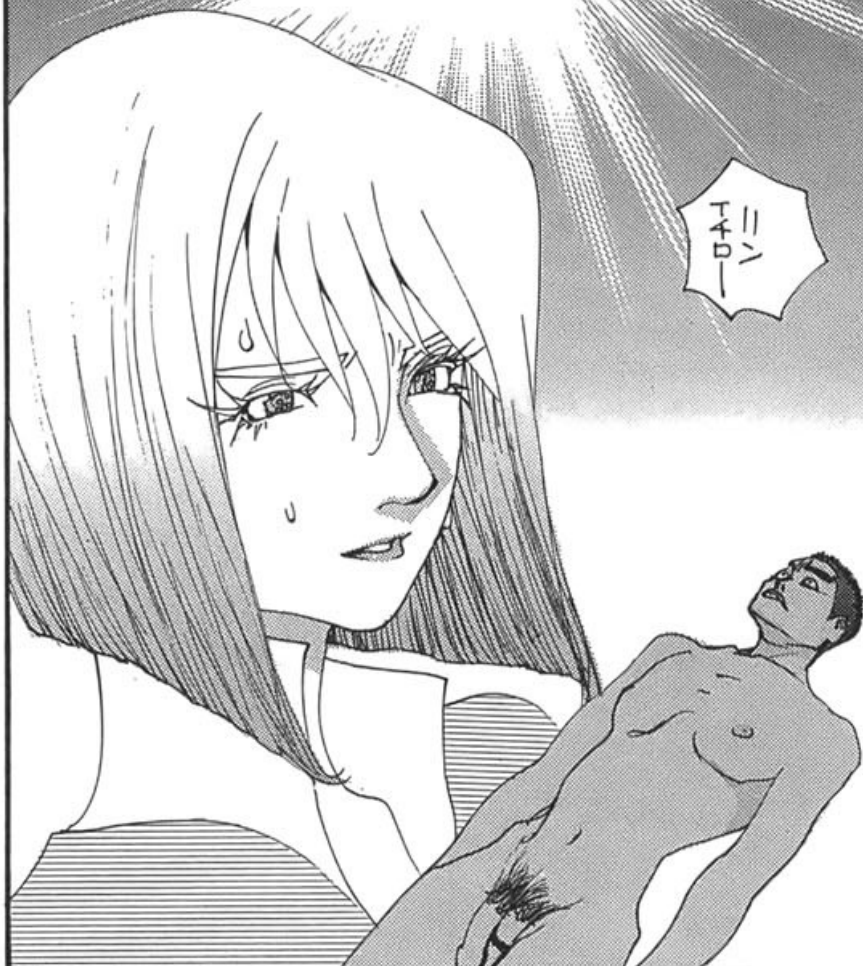


どこに
いるのだ

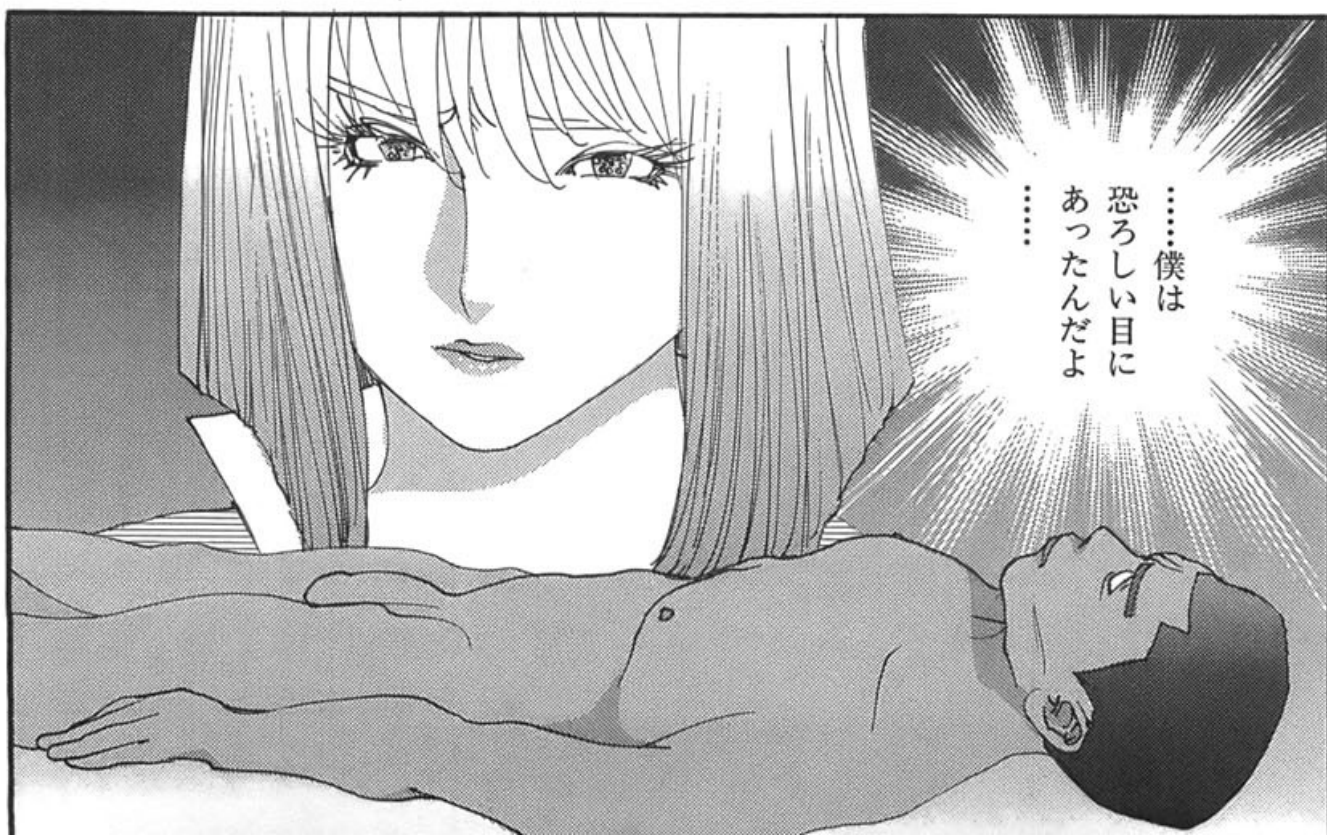


きっと
僕のことを
心配してい
てくれるの
だろうね

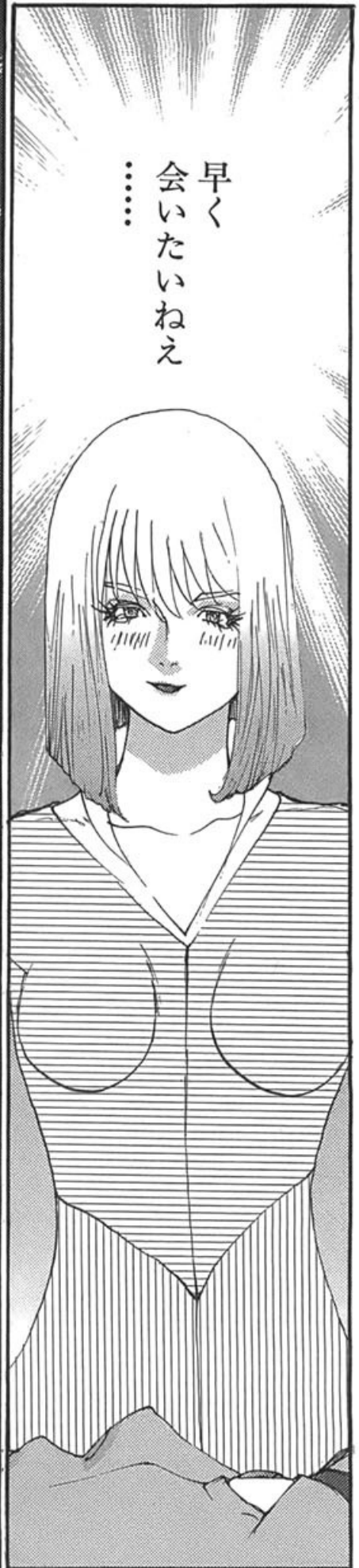
リン
イロー



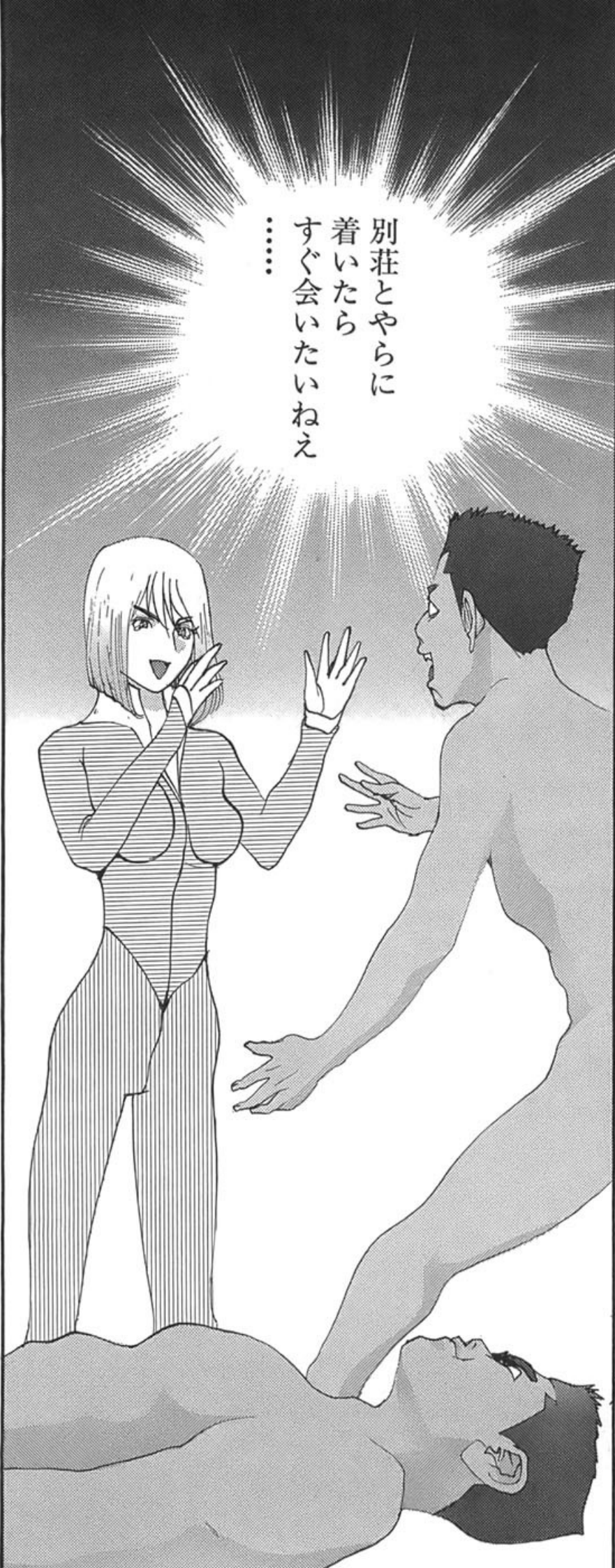
……僕は
恐ろしい目に
あったんだよ
……



早く
会いたいねえ
……

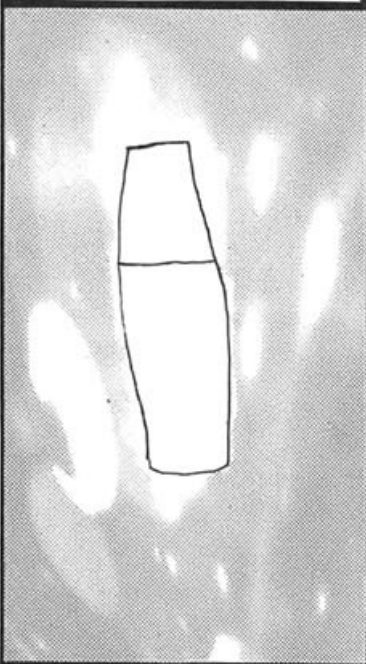


別荘とやらに
着いたら
すぐ会いたいねえ
……



最上階の
遊戯室では

流血の
場面が
大詰に
近づいて
いた



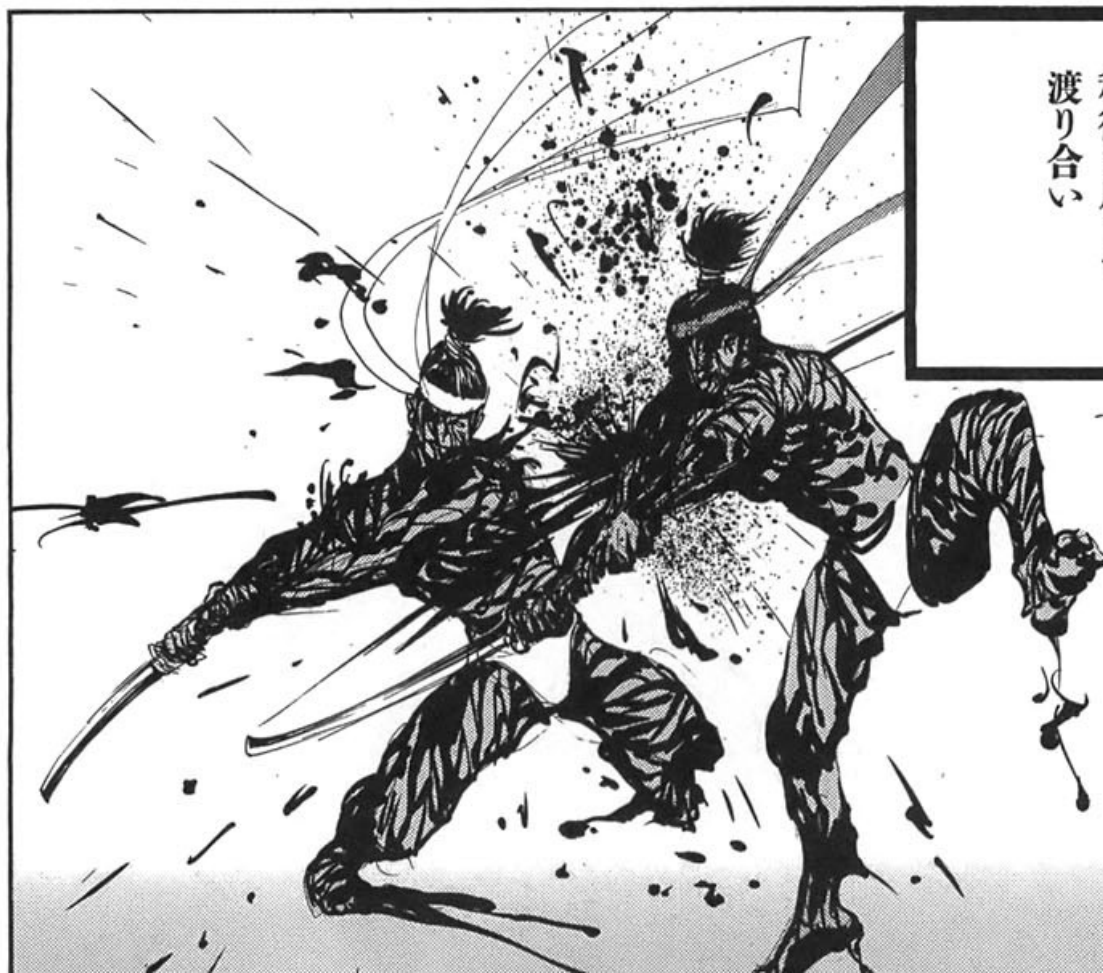
血みどろの
舞台を
真っ白な肌を
紅潮させながら
見守っていた
クララは



鱗一郎の
思惑とは
違って

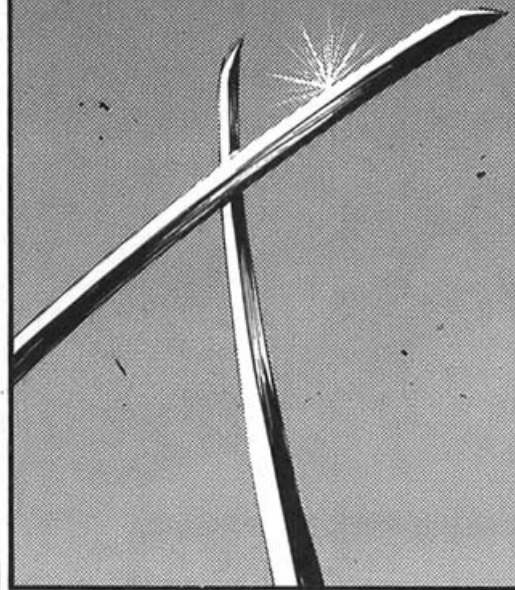
彼の
ことなど
とんと
念頭にない

両矮人^{ビクミ}は
秘術を尽して
渡り合い

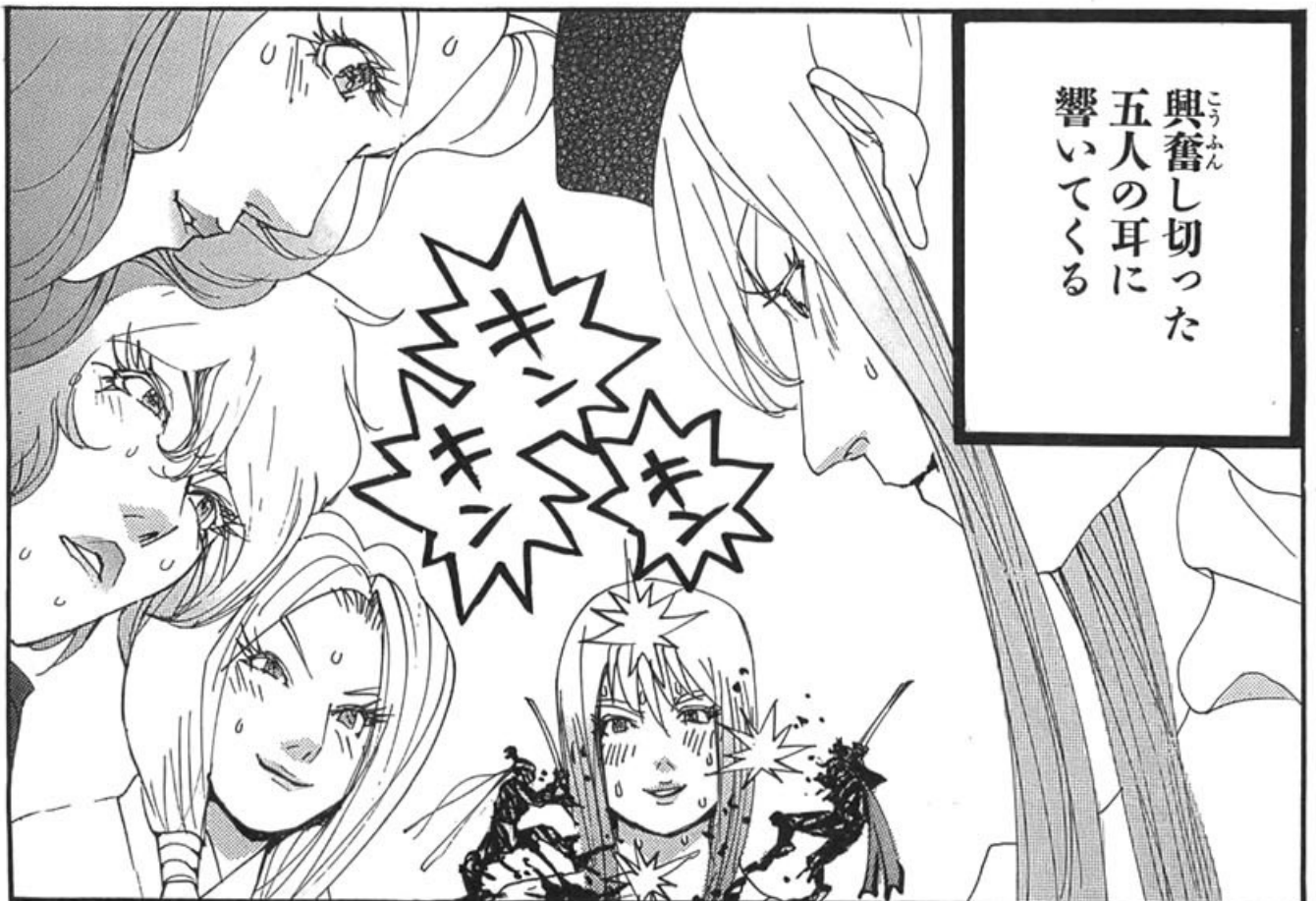


刀が
目まぐるしく
きらめく

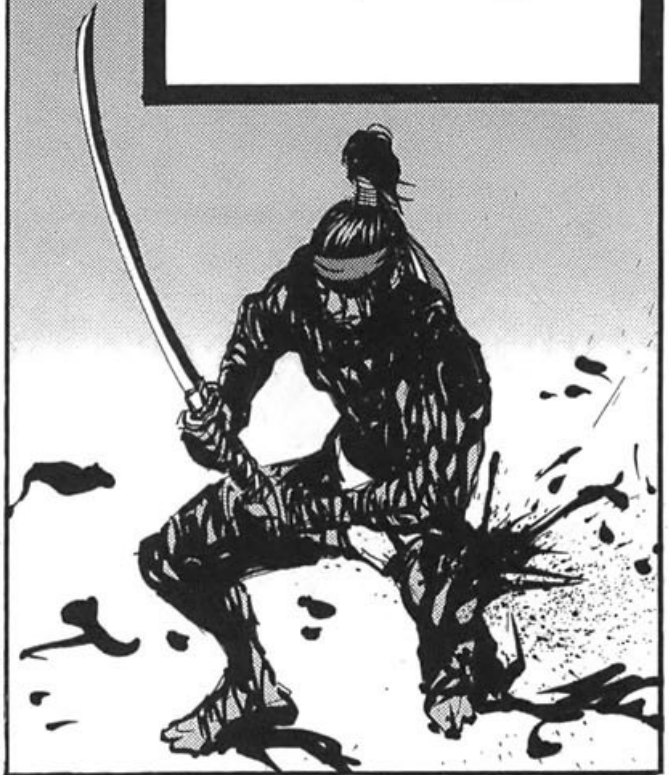
マツチ棒ほどの
刀身ながら
丁々と
斬り結ぶ
響きが



興奮^{こうふん}し切った
五人の耳に
響いてくる



ムサシは
さらに
左股を
斬られて
いたが



コジロの
額も
切り裂かれて
顔面は
真紅の血に
彩られて
いた



それ
そこで
踏み込め
ムサシ！



ほら
相手の右が
空いてるよ！

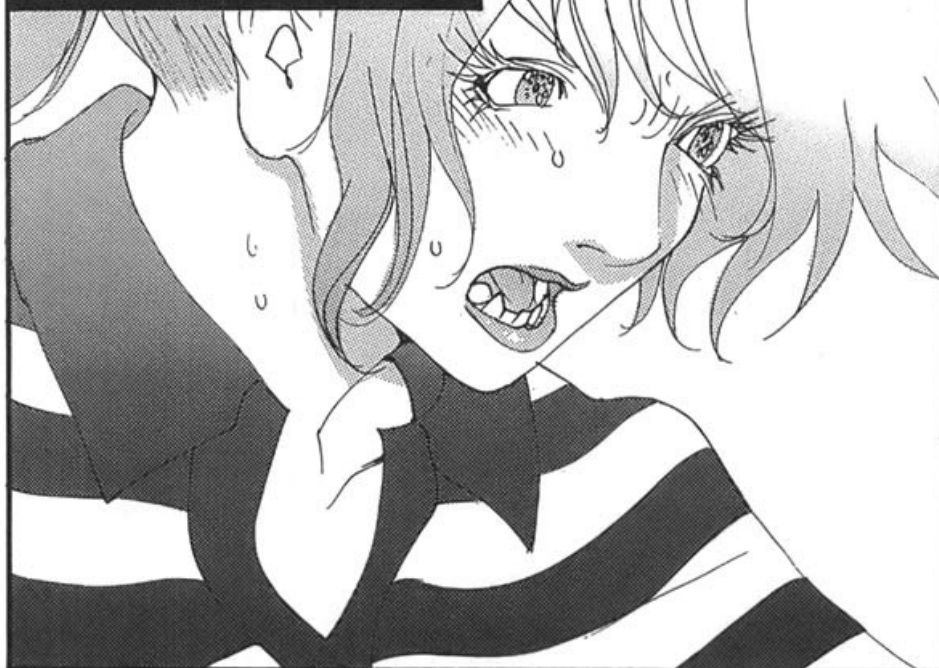
五種競技の
オリンピック選手権を
ねらっている
くらいで



ドリスは
フェンシングの
心得も
あるから



なかなか
技術的な
応援をする



ウィリアムのは
ひどく乱暴で



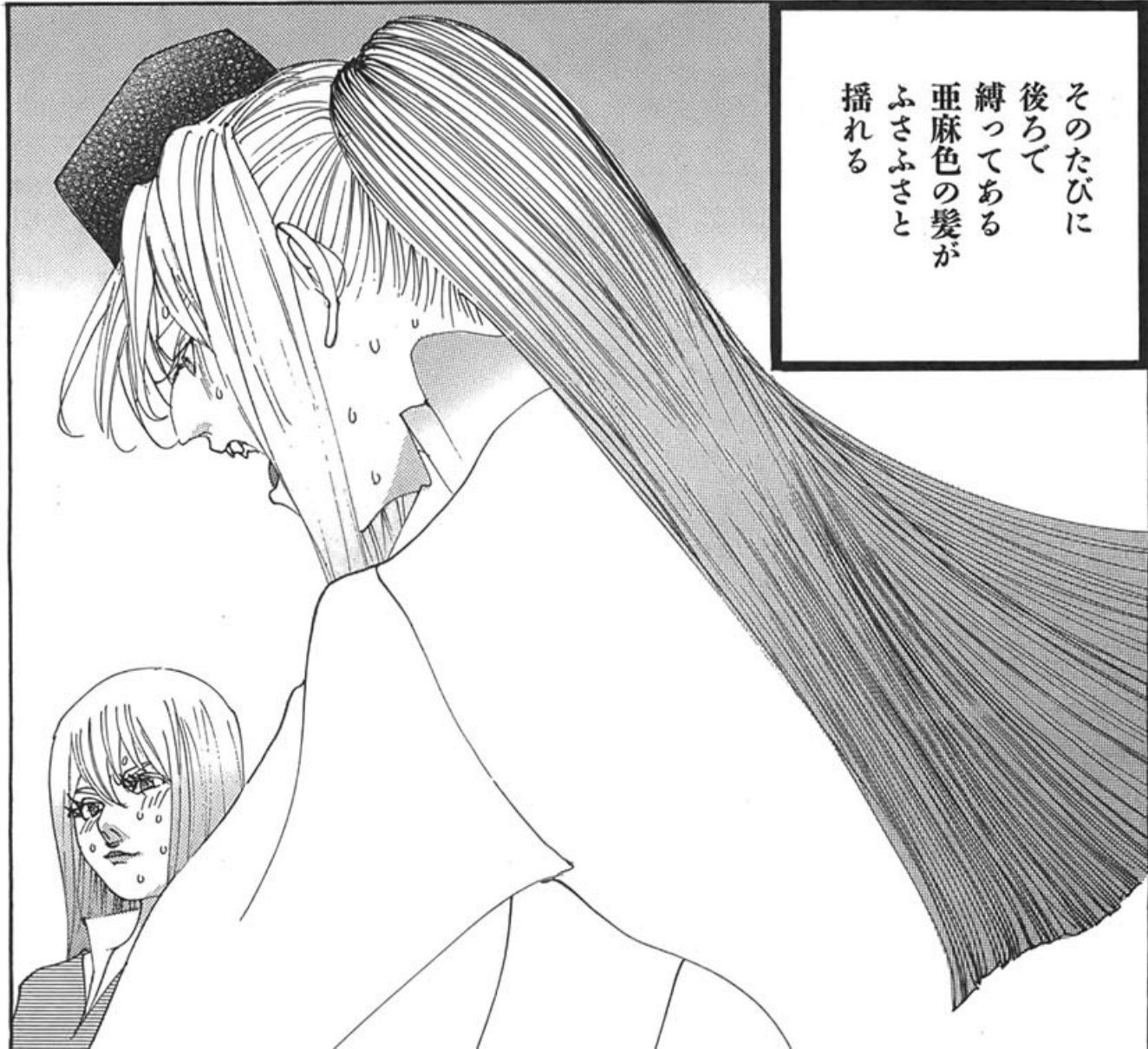
コジロ
殺^やっつけろ
斬^きってしまえ



そら
惜しいところ
もう一撃！

と
夢中

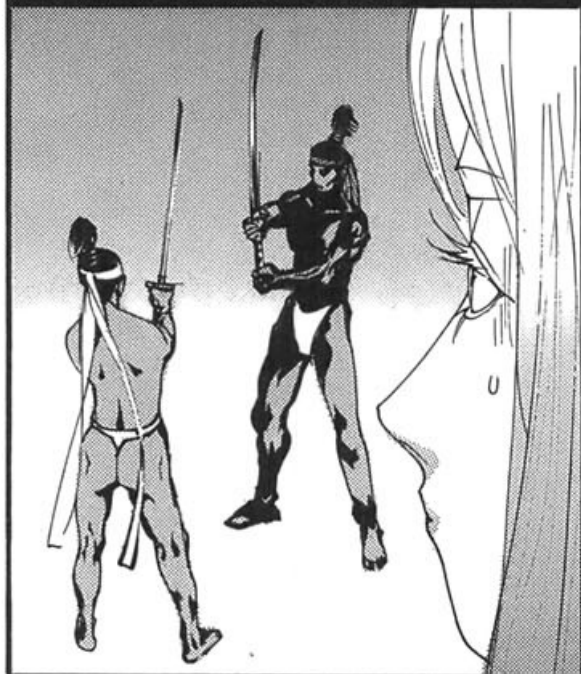
そのたびに
後ろで
縛ってある
亜麻色の髪が
ふさふさと
揺れる



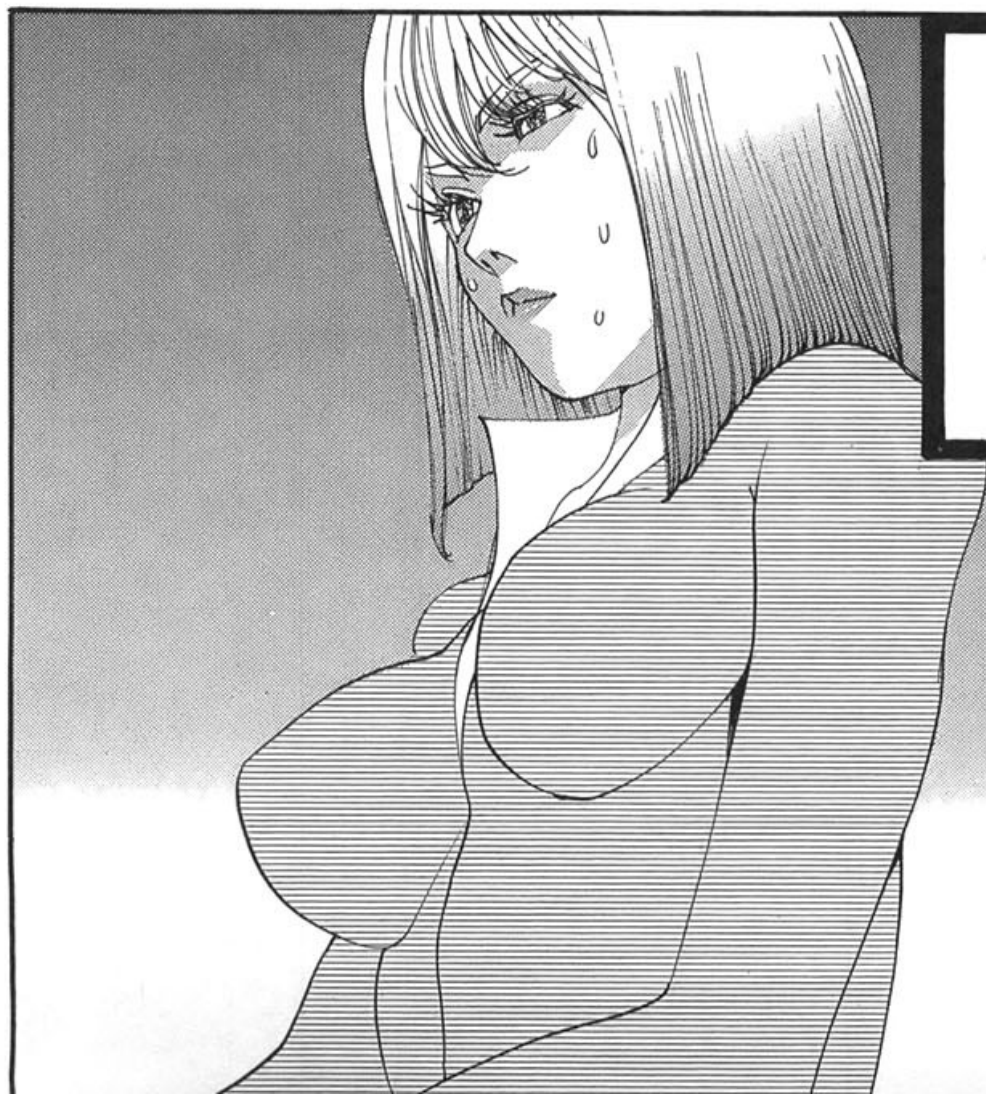
クララは
初めは
こんな
人間そっくりの
ミニアチユア
縮小体に



殺し合いを
させることに
何か残酷な



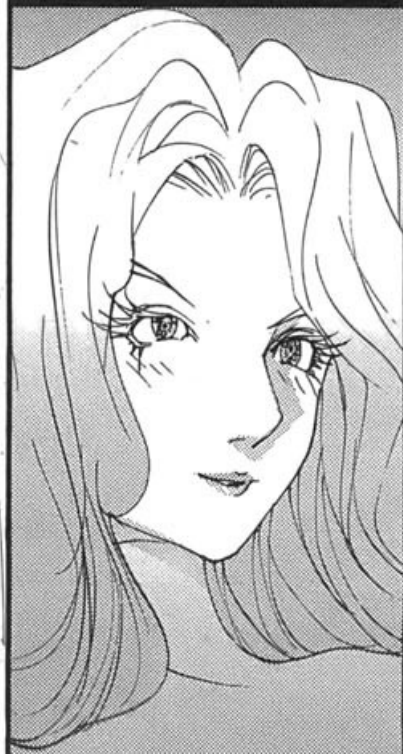
非人間的な
ものを感じて
後ろめたい
思いも
あったのだが



だんだん
引き入れられ



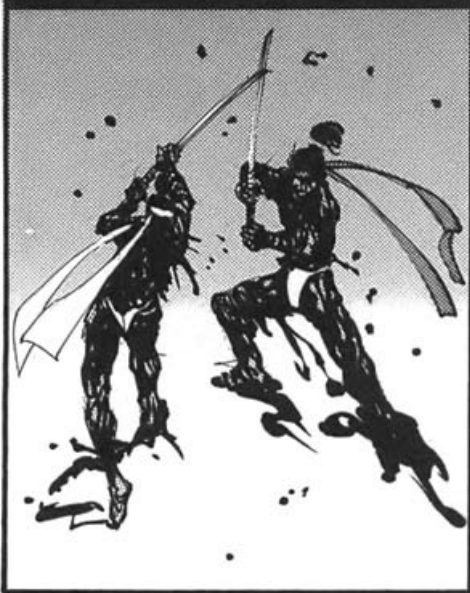
先ほど
ポーリーンに



素晴らしい



と
返事した
ころからは



周りの
四人といっしょに
熱狂していった



もともと
ボクシング
拳闘試合を
見るのは
好きだったし



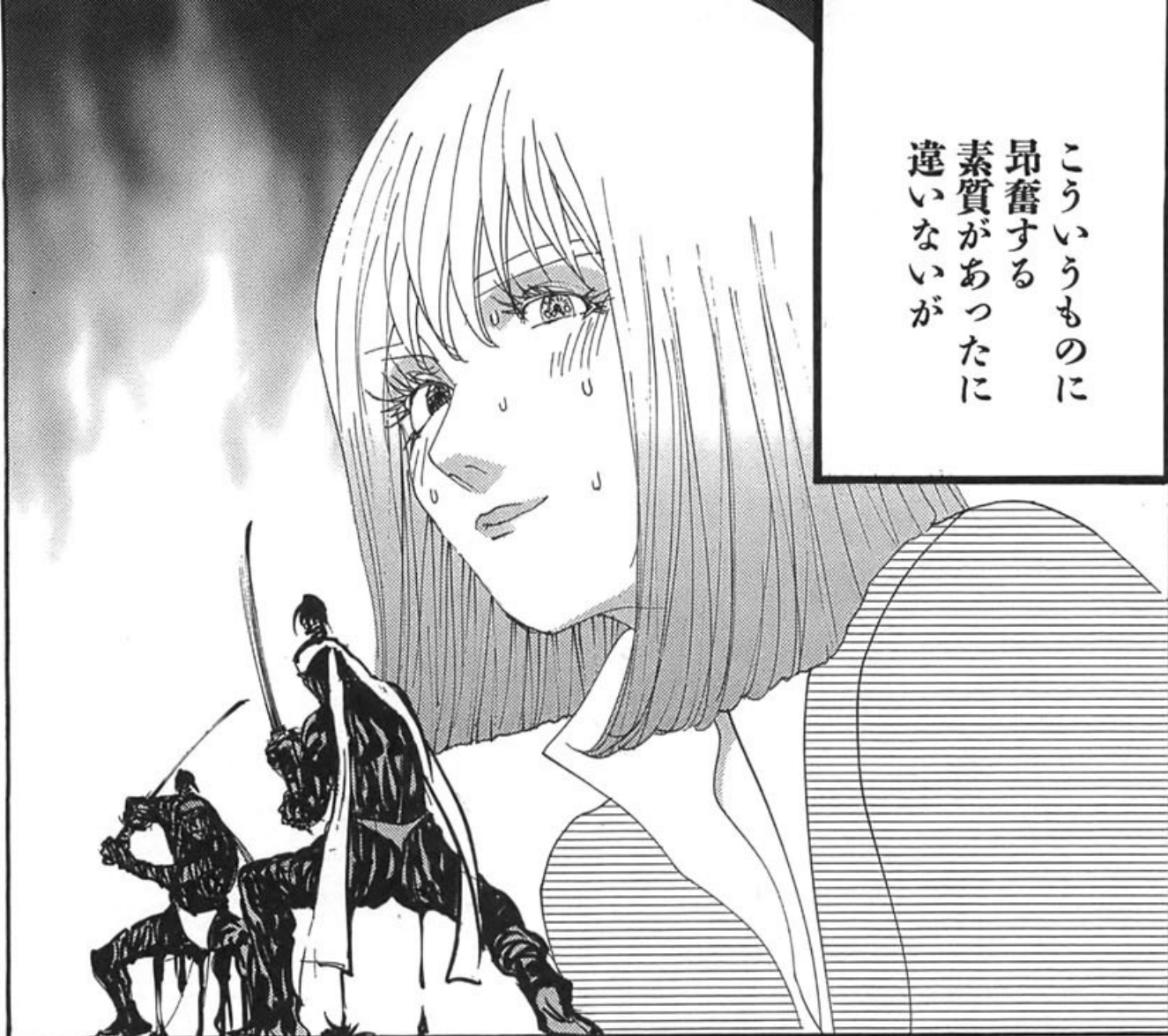
麟一郎に
関心を
持ったのも



彼の
柔道が
機縁になっ
たくらいで



こういうものに
昂奮する
素質があつたに
違いないが



※₃₅
滋養強壯
神経昂奮
芳香発汗
代謝促進

昔の
お茶同様に
好んで
飲まれる
この飲料は

一つには
さつき飲んだ
ソーマの
効き目である

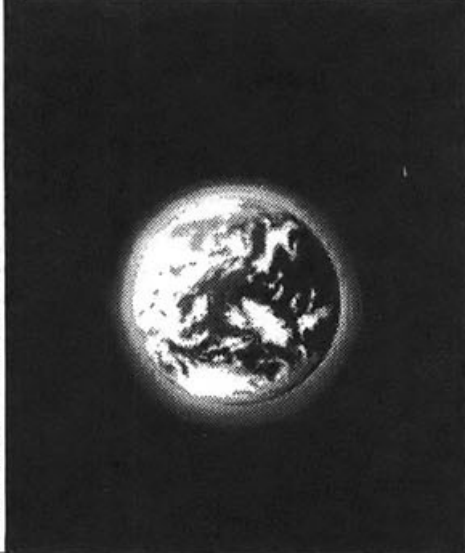
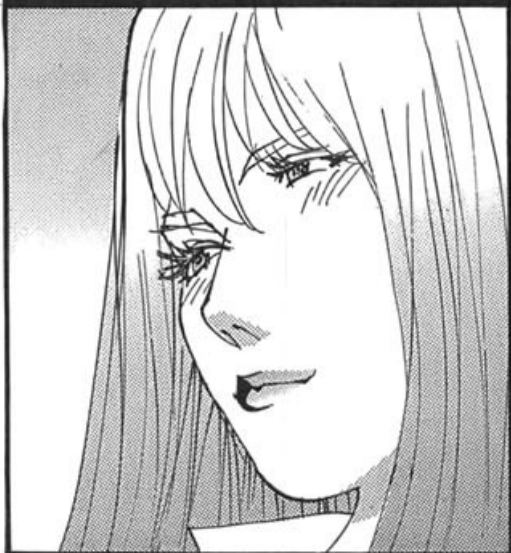


※35
排泄回数はだから増加する

等の
効能も
あるほかに

さらに
「ヒューマニティ・ハニー
人類愛の蜜」
の名称に
ふさわしく

人類の
同胞感や
人道精神を



強固ならしめる
効果を
持つのだが

反面
それを感じる
範囲を限定する
傾きがあり

白人が
これを飲めば



自分と
同じような
白い肌の者
以外には
同類意識を
持たなくなつて
くる

クララが
この
血みどろの
戦いを

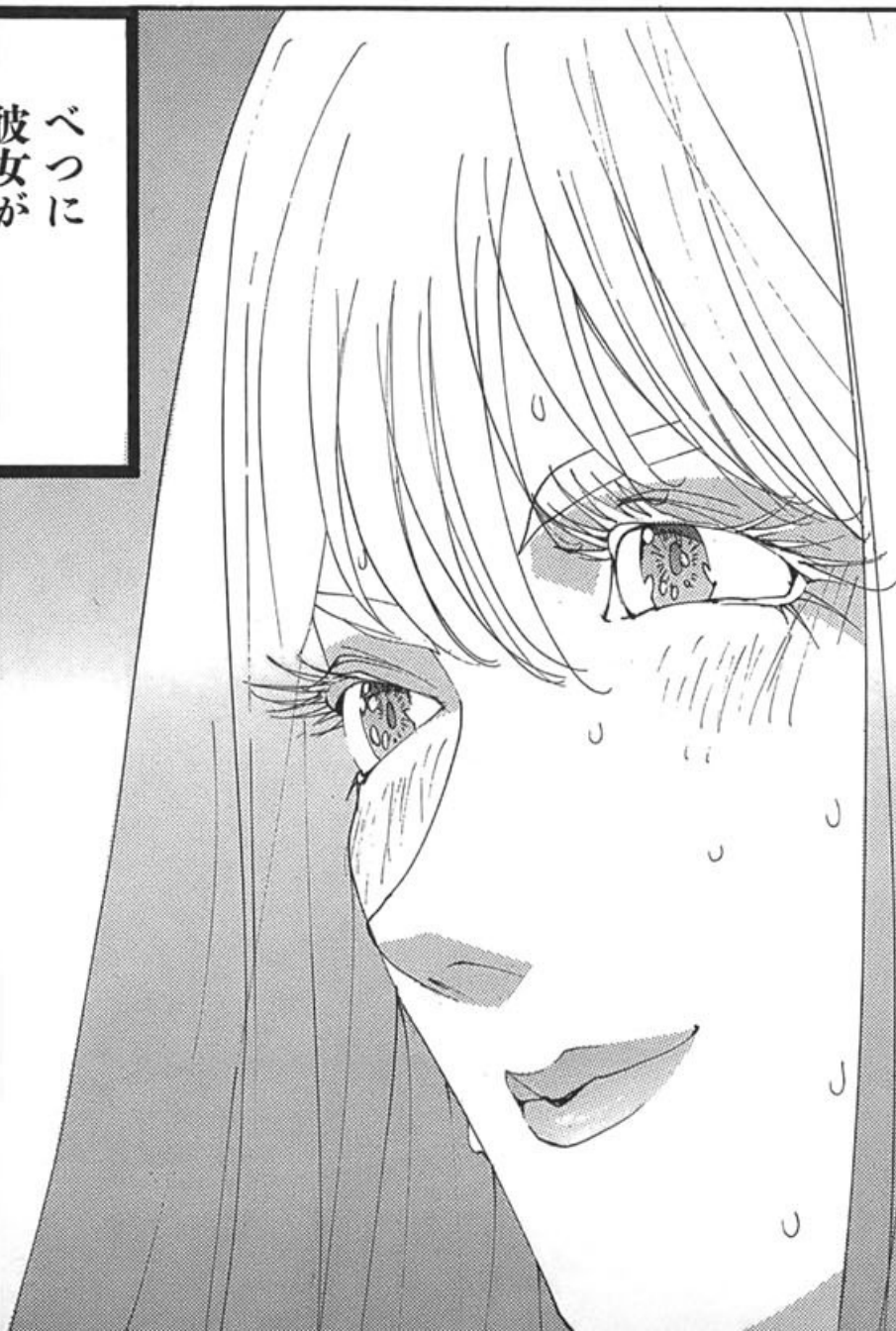
余興として
平気で
ながめうる
心境に
なつていったのも
そのため



矮人同士を
殺傷させることに
躊躇^{ちゅうちよ}しなく
なったから
といって



べつに
彼女が
前より
非人間的に
なった
わけではない



ポーリーンや
ウィリアムに
対する気持は



かえって
親しくなった
くらい
なのである



突然
コジロが
一声叫んで
よろめいた



血が目には
いったので
手元が
狂った瞬間



腰に
斬り込まれた
のだ





ムサシが
踏み込んで



真っ向から
拝み打ちに
したのと



よろめく
足を
踏みしめつつ

コジロが
右手の刀を
突き出した
のと



どっちが
速かったか……



コジロの
頭蓋から
血が噴いて



どうと
倒れると
同時に



ムサシも
腹を押えて
かがみ込んだ



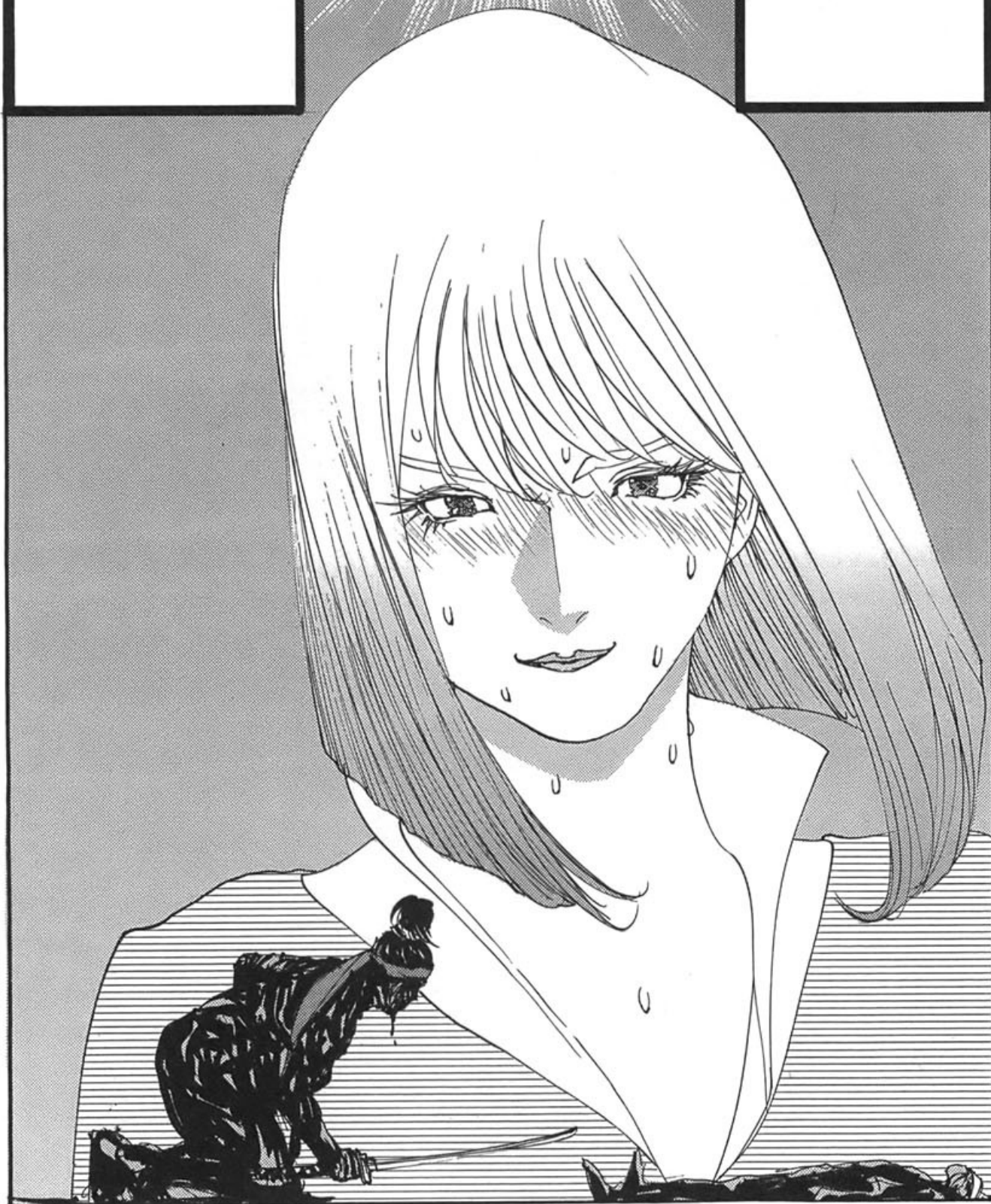
苦痛を
こらえる
青年矮人の
小さい人形の
ような顔を



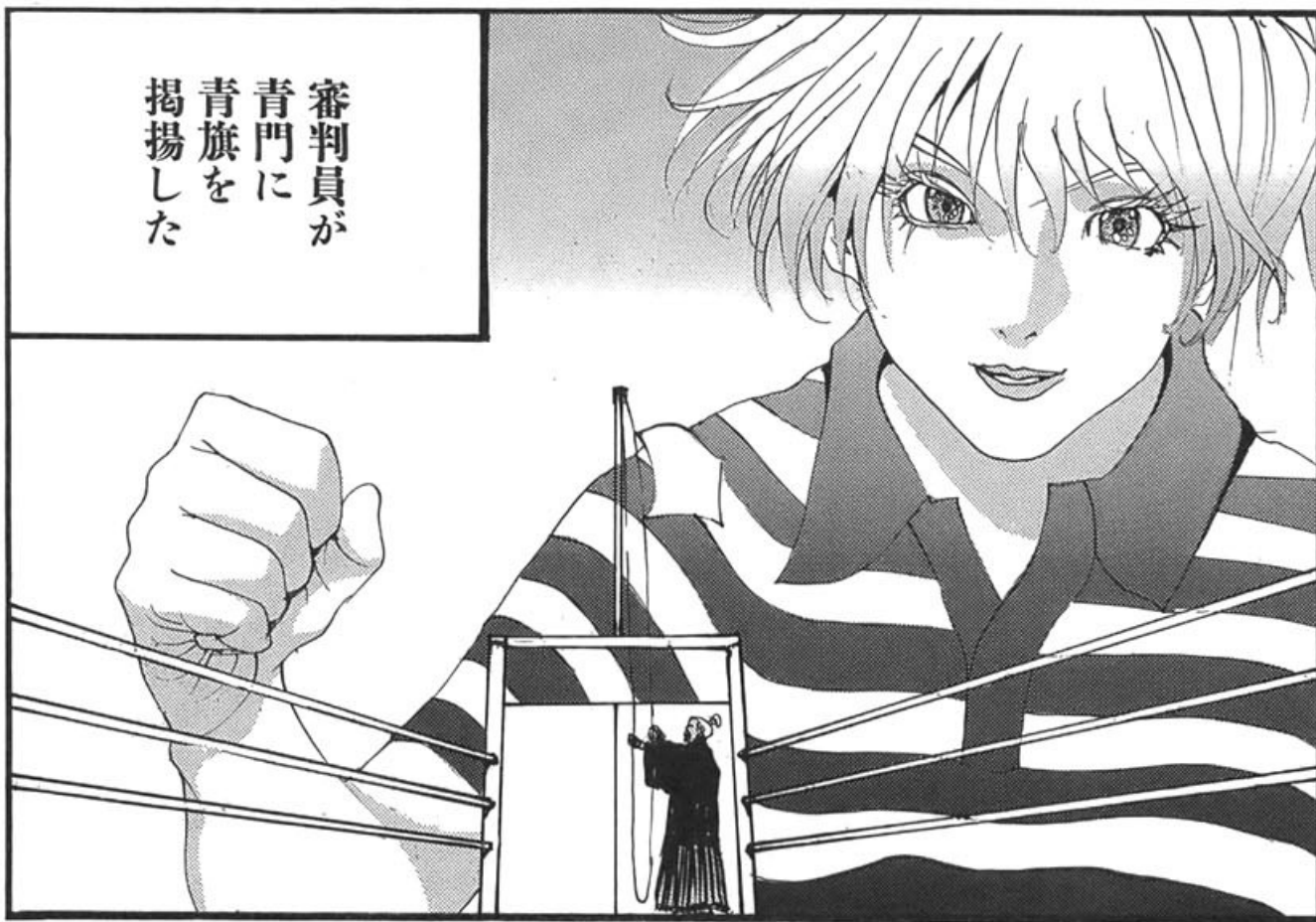
クララは

美しい

と
思った



審判員が
青門に
青旗を
掲揚した



ムサシの勝



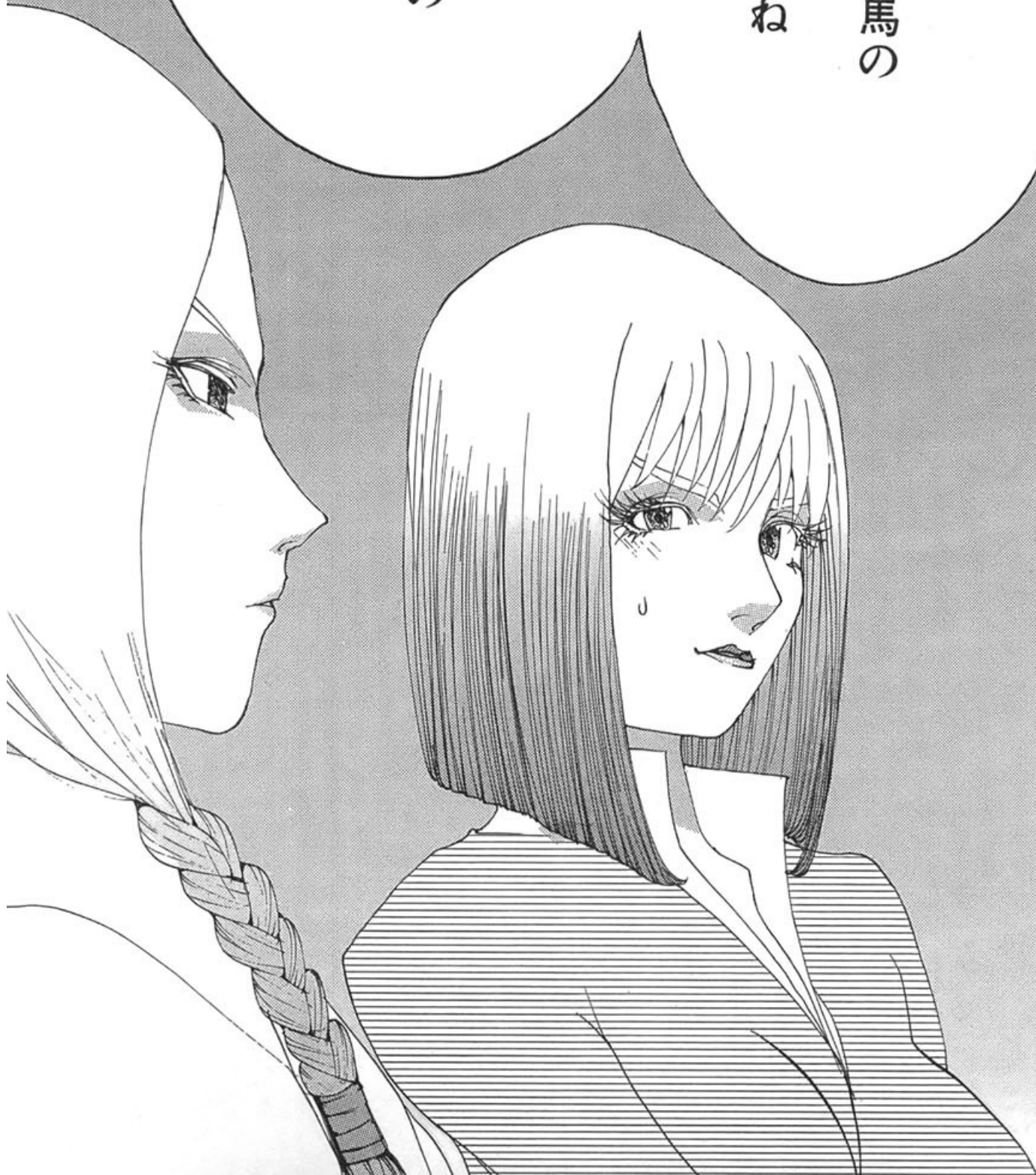


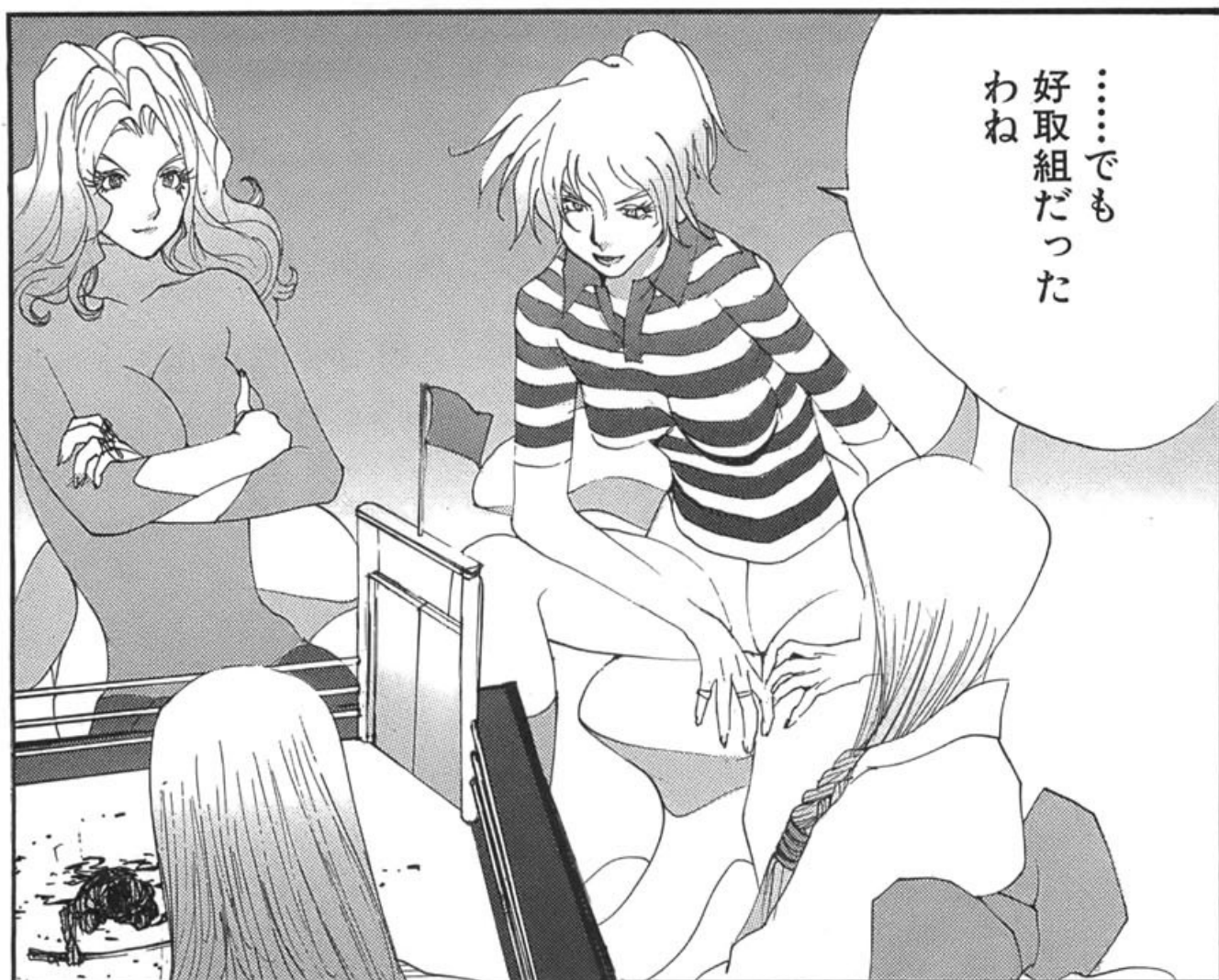
クララ
あたし
妾のパーティーに
出てね

第十章 矮人決闘
——第四話——

そして
あたし妾の持馬の
贈物を
受けてね

あたし妾の厩うまやには
アベルデーン一の
名馬もいるわよ





彼女には
初めても
同然なんだから
……

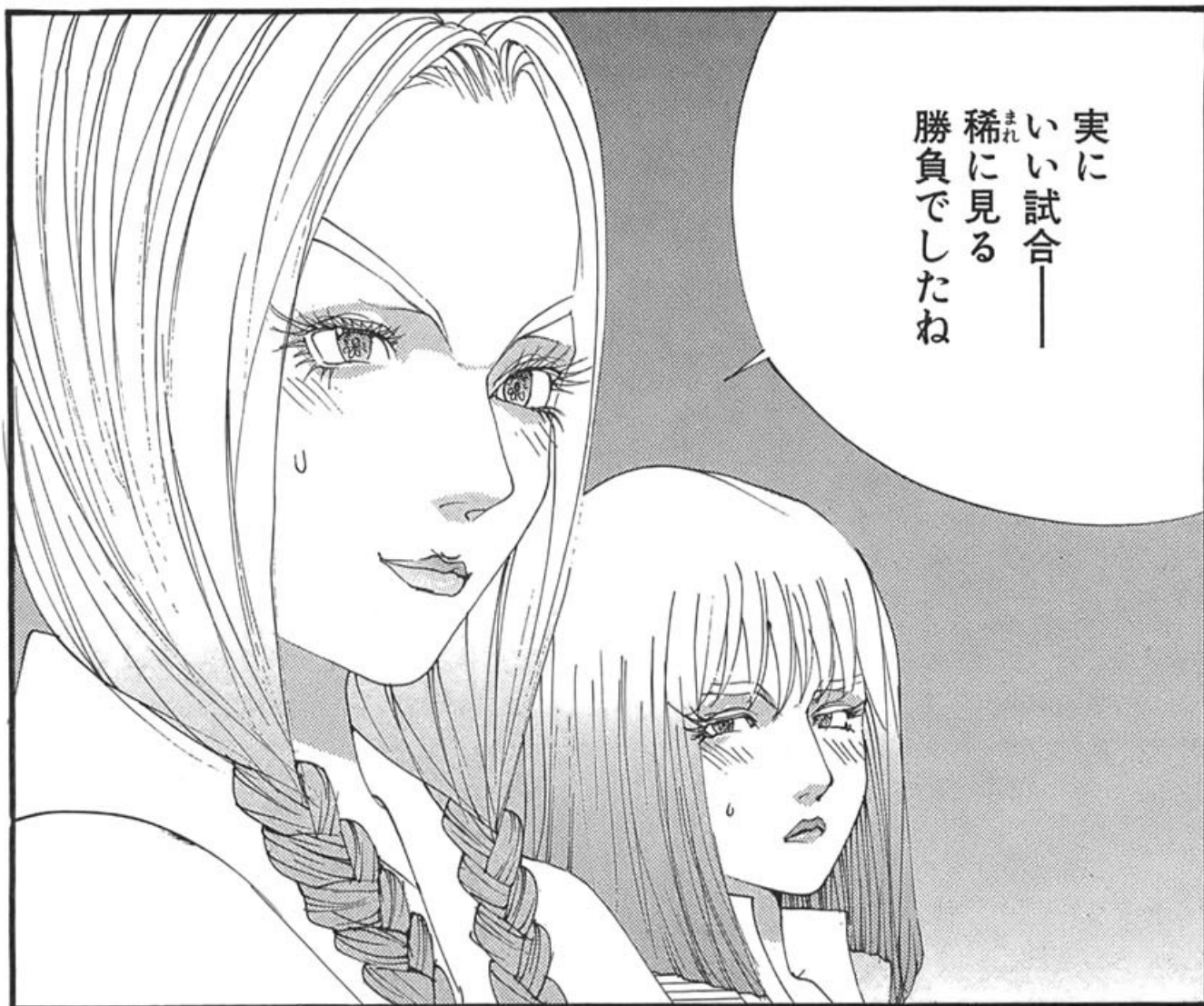
早口に
ドリスが
しゃべるのを
受けて

彼女の兄は
ゆっくりと

戦績カードに
何か
書き込んでいた
手を休めて

感に
たえたように
いった

何と
いいましょうか



実に
いい試合——
稀^{まれ}に見る
勝負でしたね



ドリスは
鞭を
短く持ち直すと



ウィリアムは
残念そうに
黙っている

とがった先端を
うつぶして

苦しんでいる
ムサシの
顎の下に入れて
顔を上げさせた



真っ青で
血の気がない



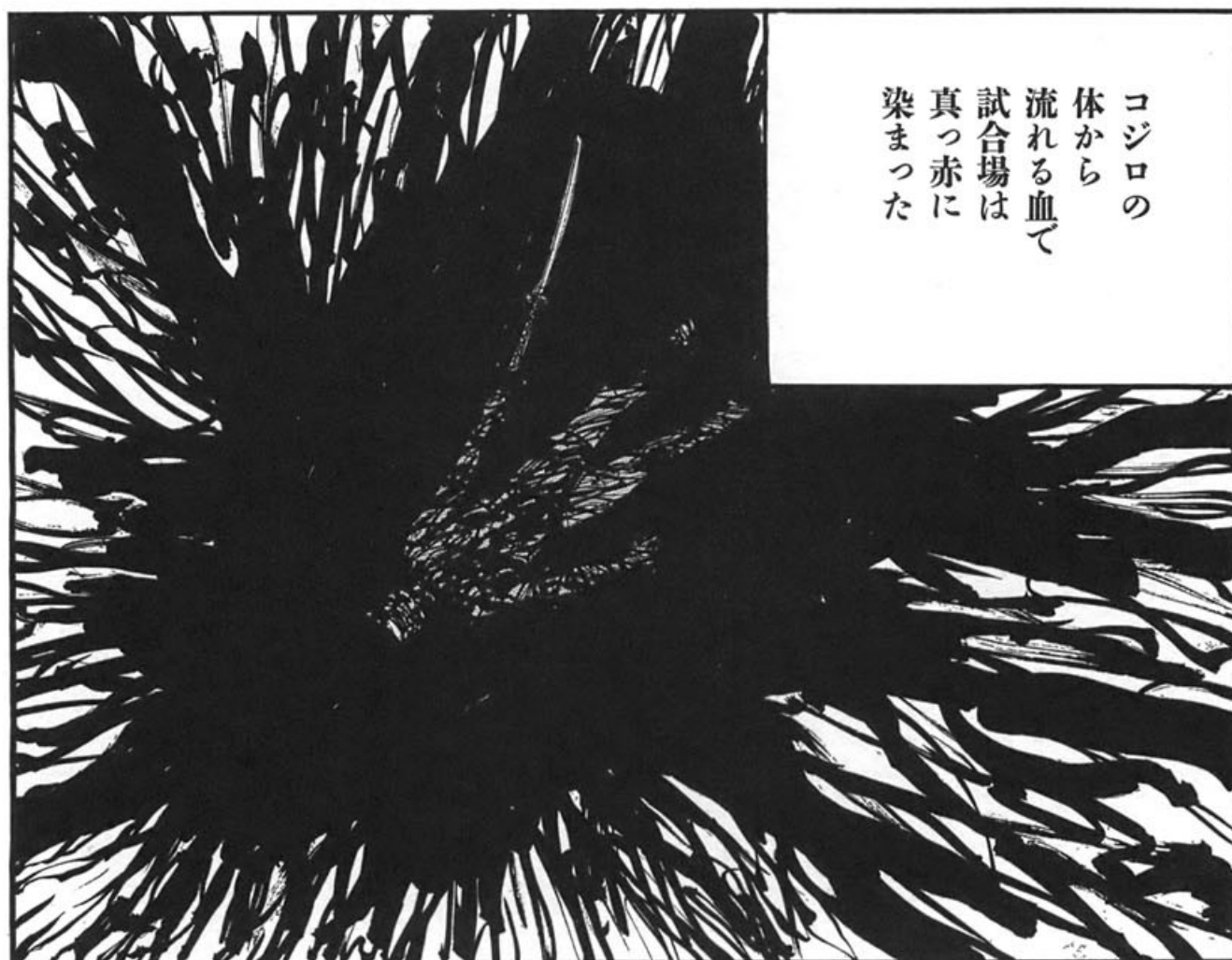
ムサシも
傷られてる
助からんね





こりや
あいうち
相撃で
無勝負じゃ
ないかな

ウィリアムが
つぶやいた



コジロの
体から
流れる血で
試合場は
真っ赤に
染まった

審判は
ムサシと
言葉を
交した後



箱の縁まで
出て来て
ドリスに
何か
話しかけ



彼女が
クララの
名を告げて
何かいうと



引き下がって
ムサシの
ところに
戻った



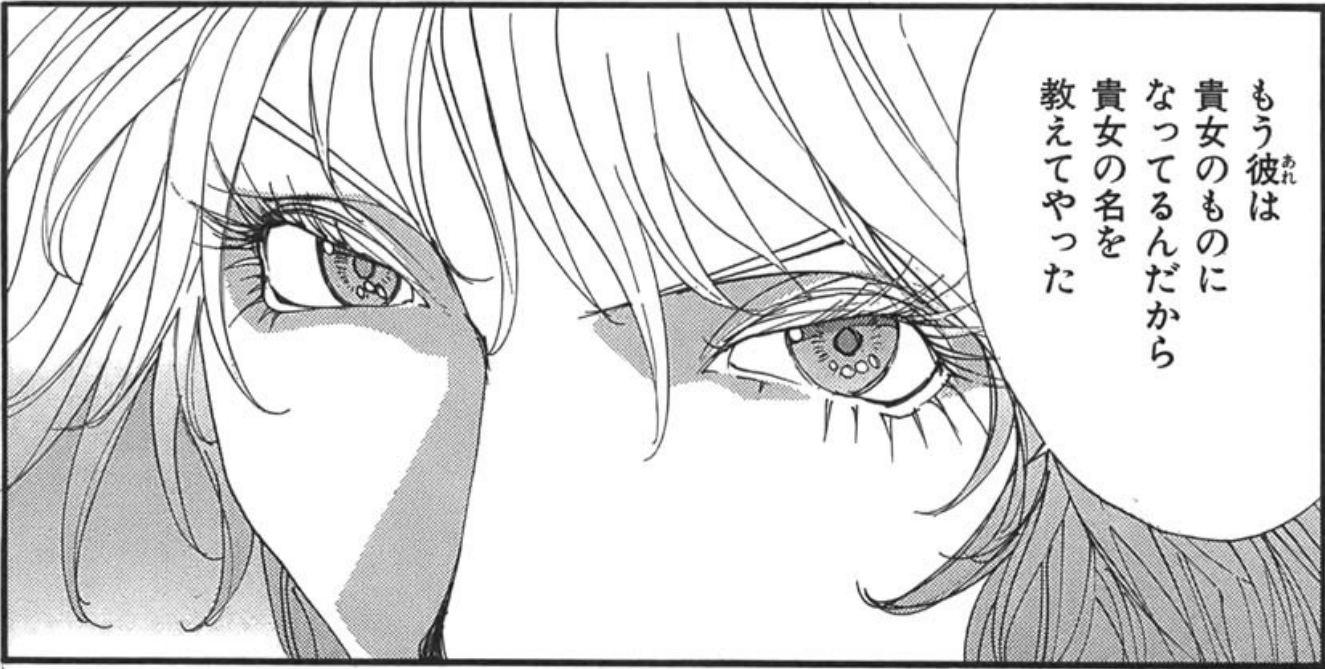
ドリスは
クララに
向って



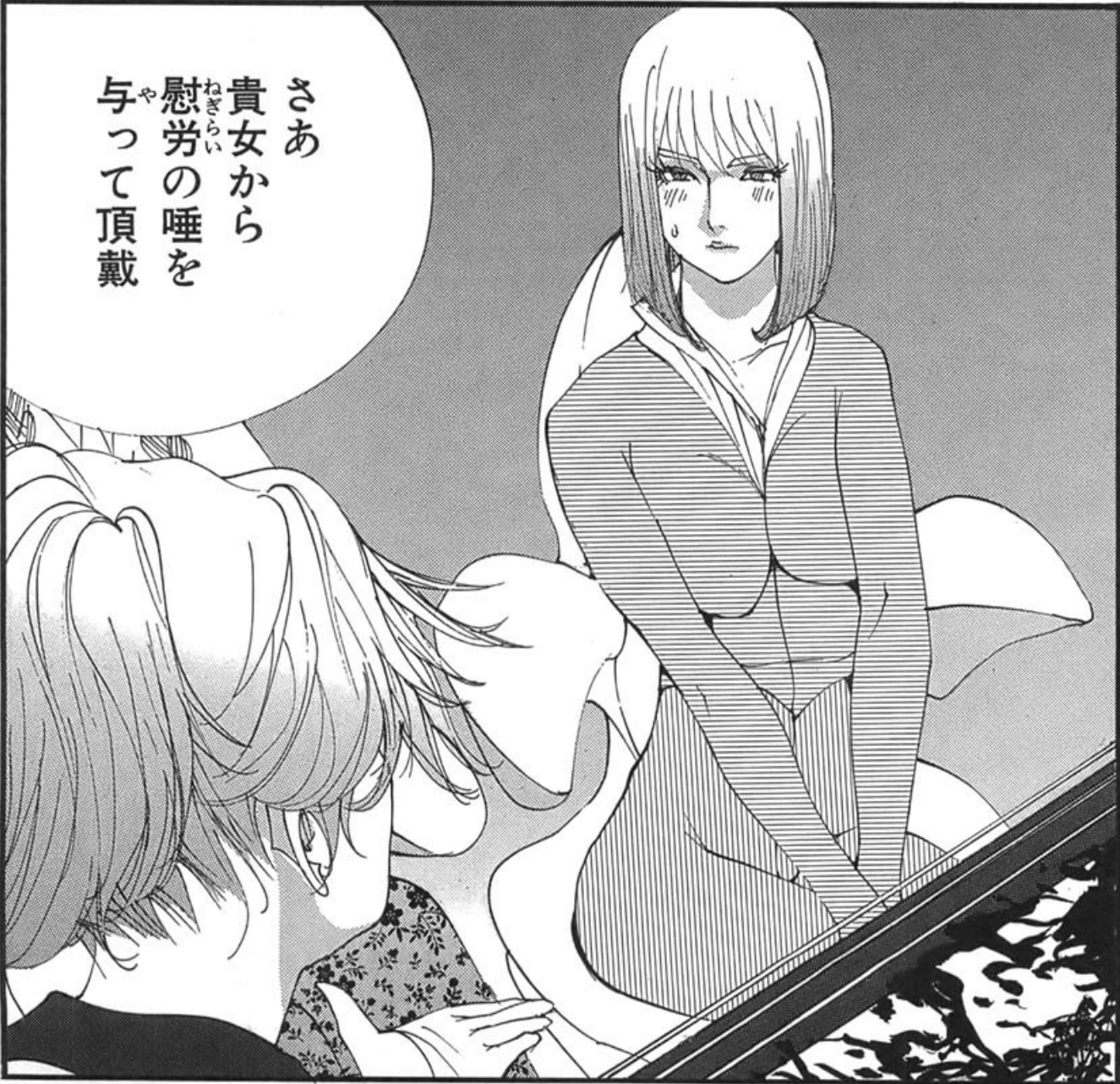
ムサシは
助からぬ命と
悟って

最後に
サリバ
聖唾を
頂きたい

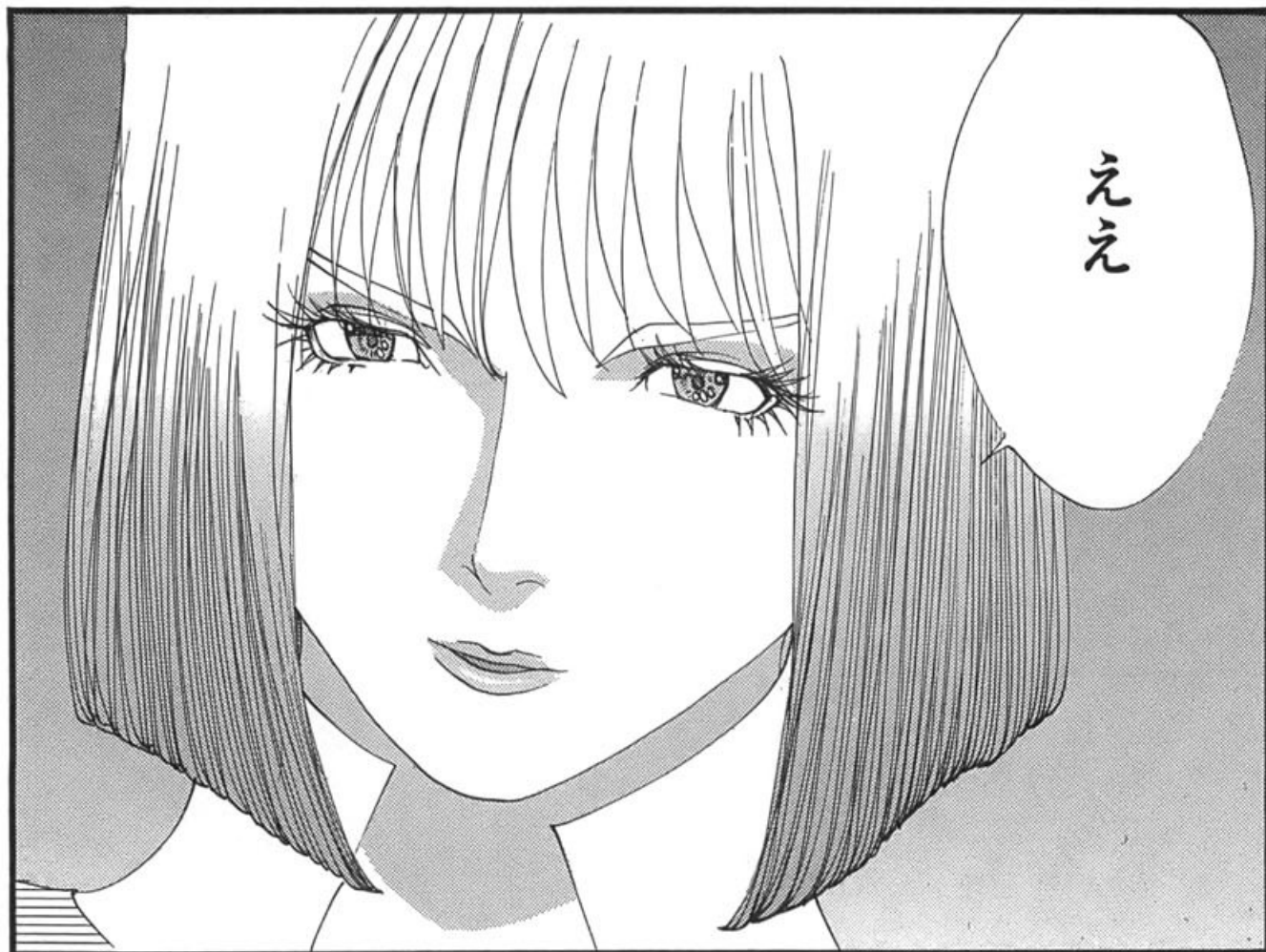
と
願ってるの



もう彼は
貴女のものに
なってるんだから
貴女の名を
教えてやった



さあ
貴女から
慰^{ねが}勞^らの唾^{つば}を
与^やって頂戴



ええ



と
引き受けた
ものの
クララは
困った

はげまし
激励の唾と
同じように
てのひら
手掌に
載せてやるの
だろうか？

さつき

思い出した

などと
ハツタリを
言った手前

退くわけにも
ゆかず



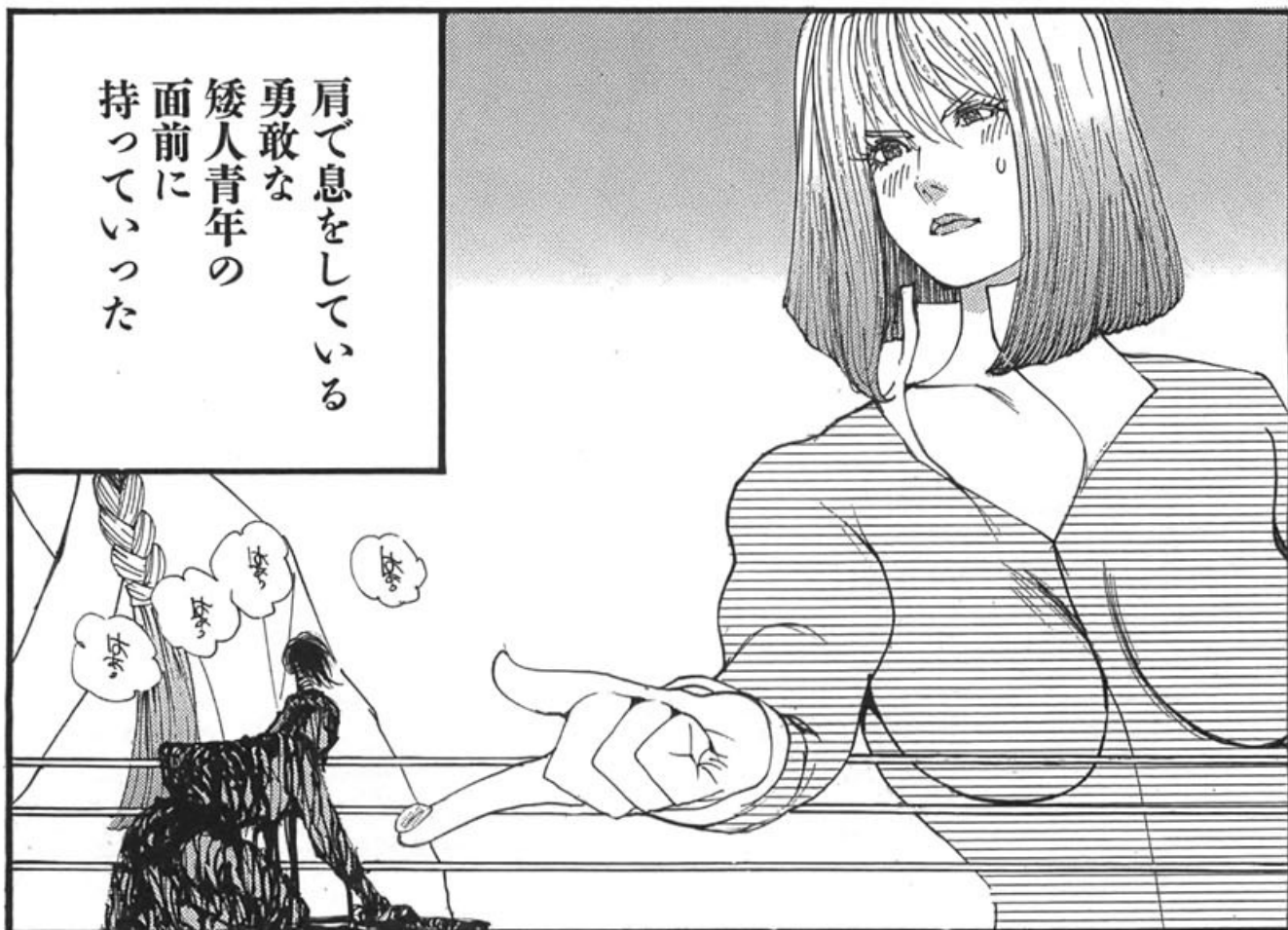
血だらけの
矮人を
手掌に
載せることに
躊躇も
感じるのだ

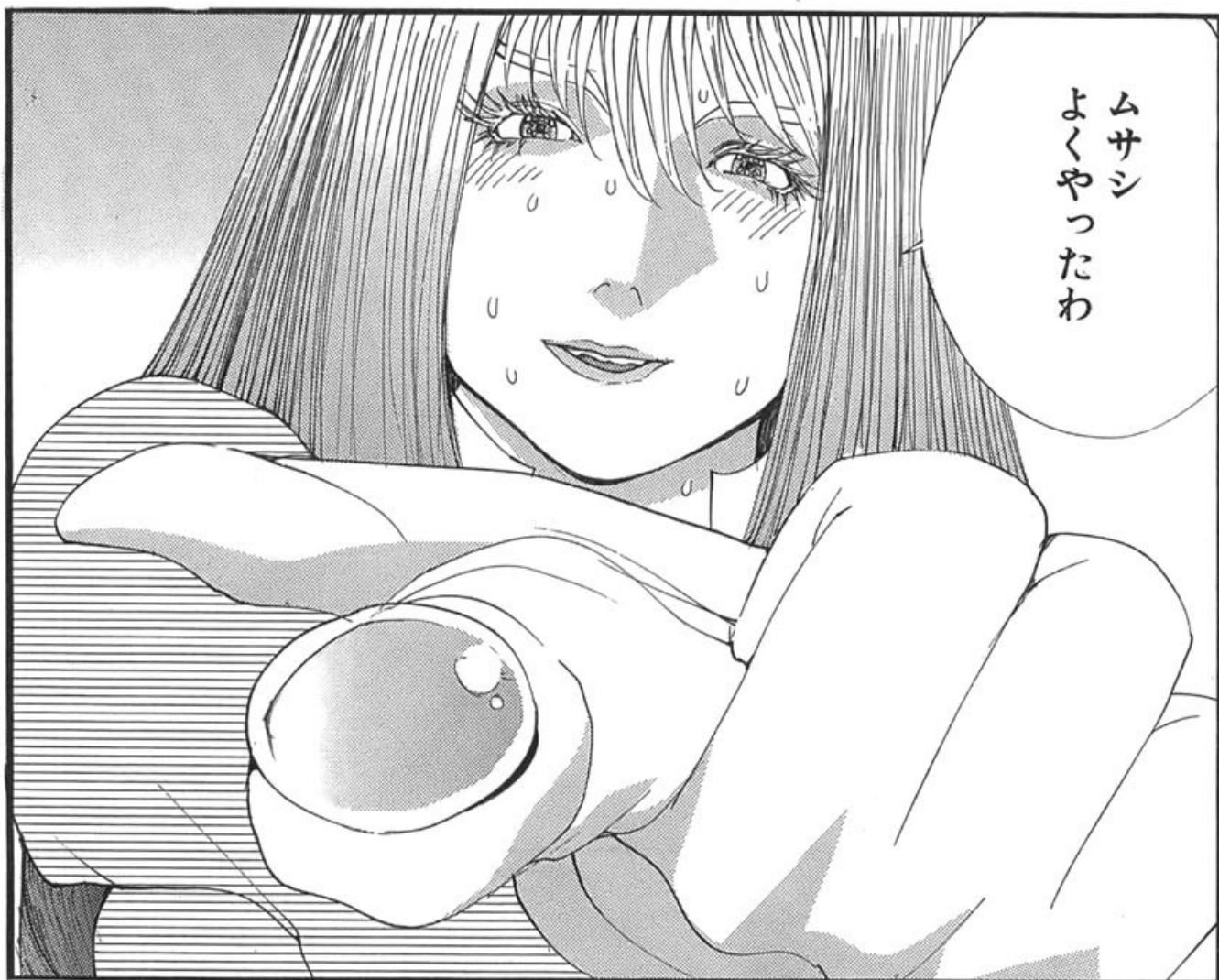


それで
白魚のような
人差指の先に
一かたまりの
唾をつけると

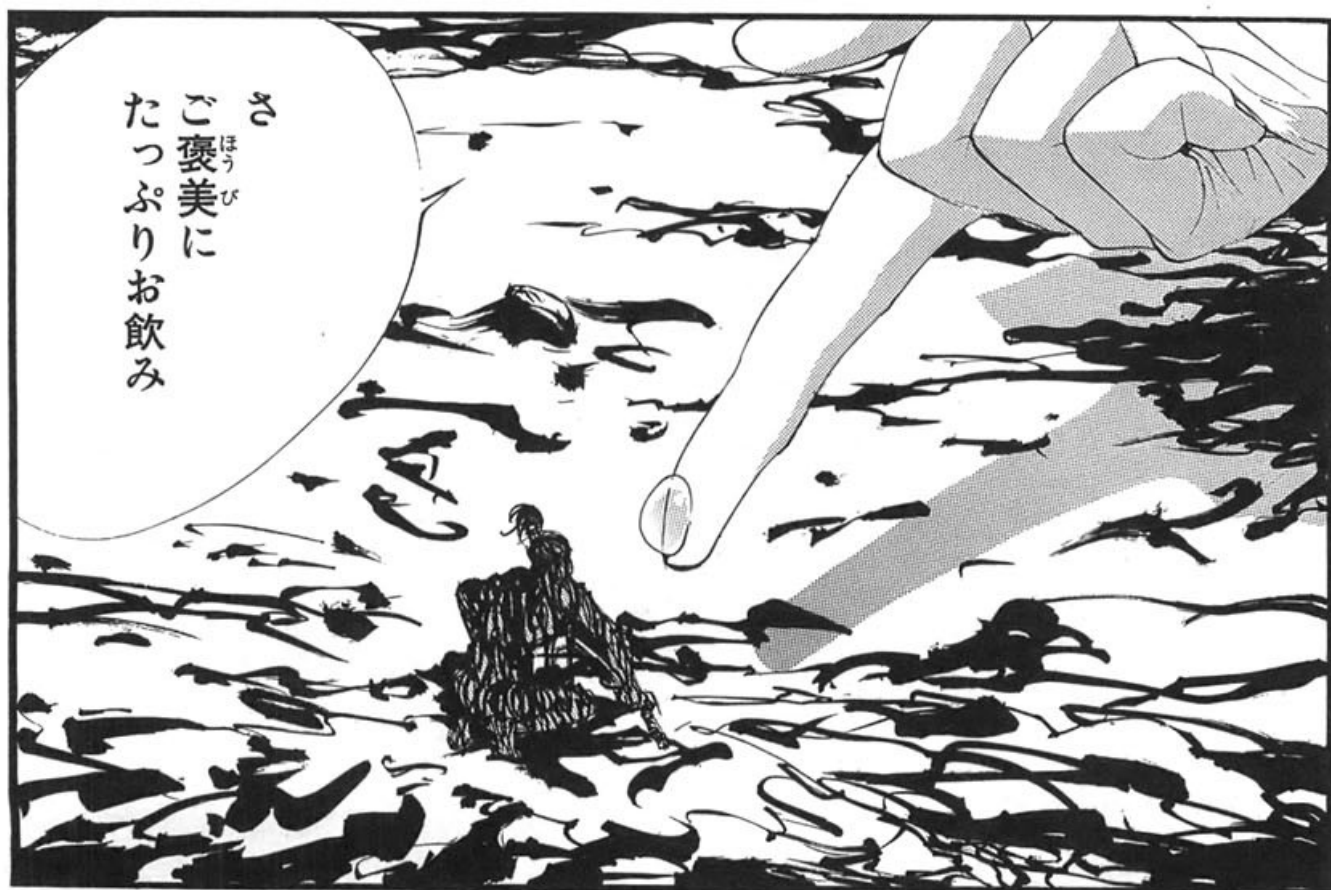


肩で息をしている
勇敢な
矮人青年の
面前に
持っていった





ムサシ
よくやったわ

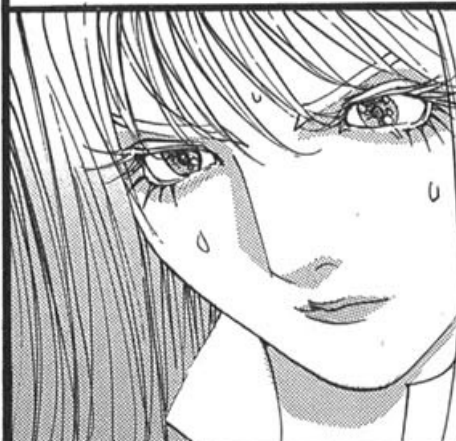


さ
ご褒美に
たっぷりお飲み

変った仕方
で
唾をやるのね



ドリスが
つぶやくのが
クララを
ヒヤリと
させたが



べつに
彼女は
深く
怪しんでいる
様子ではない



ムサシは
うれしそうに
上を仰いで
莞爾と
笑ったが

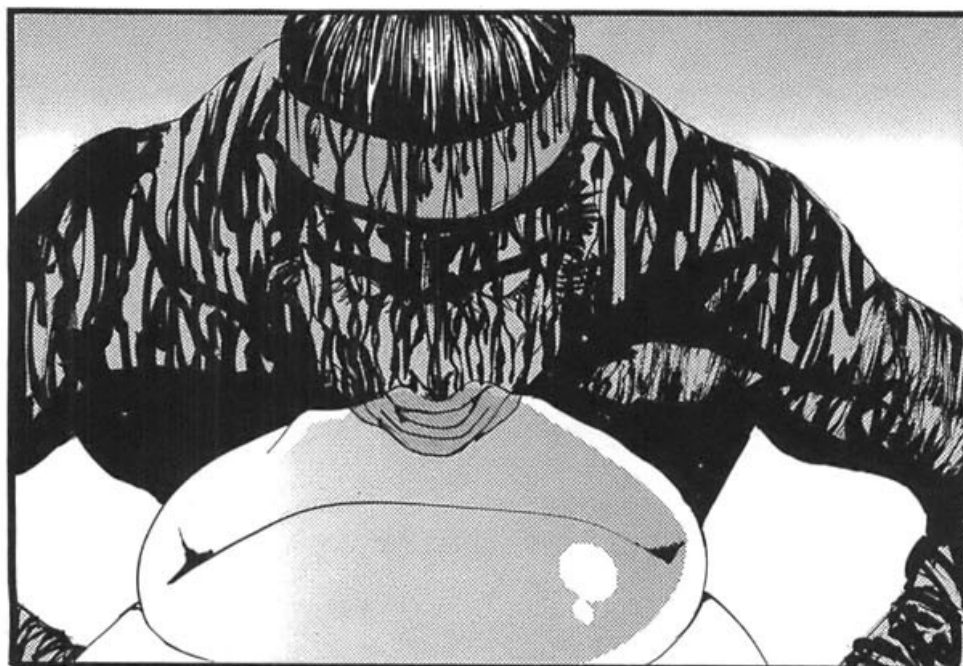




目に
隈^{くま}が出て
死相が
現われている



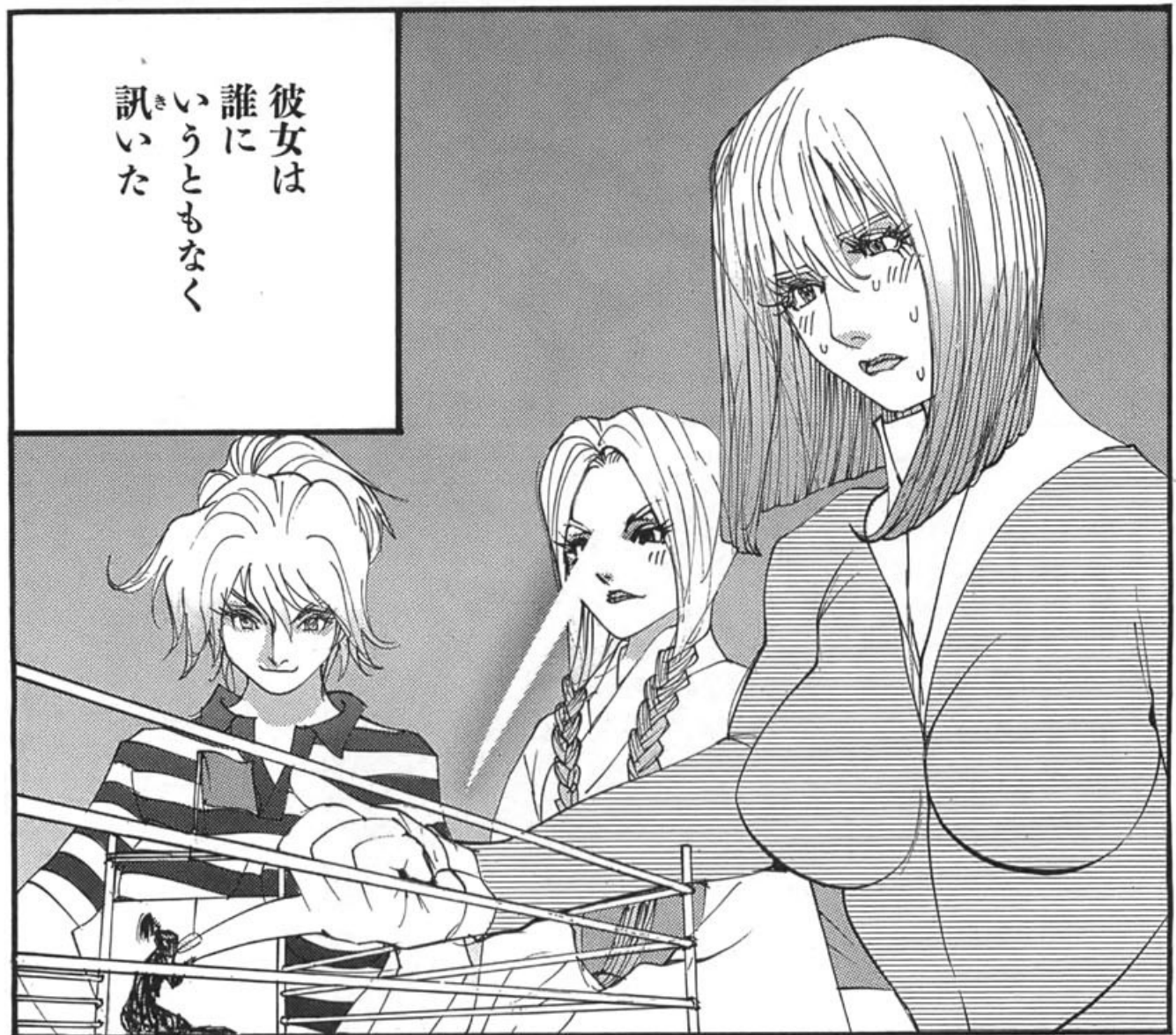
両手で
彼女の指先を
かかえるようにして



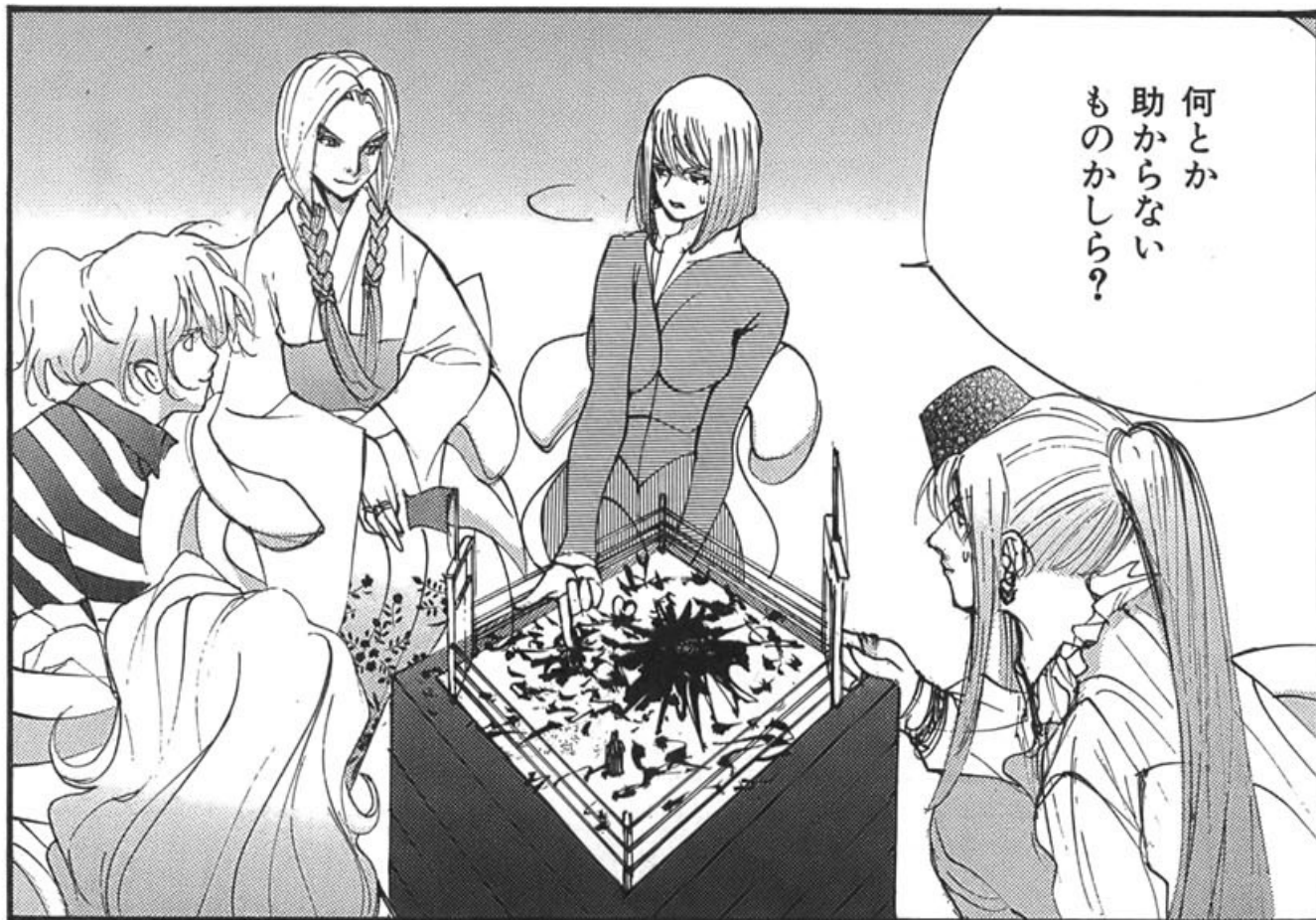
「サリバ
聖唾」を
吸い取り
始めた



小さい舌端の
かすかな動きを
指先に
覚知しながら



彼女は
誰に
いうともなく
訊いた



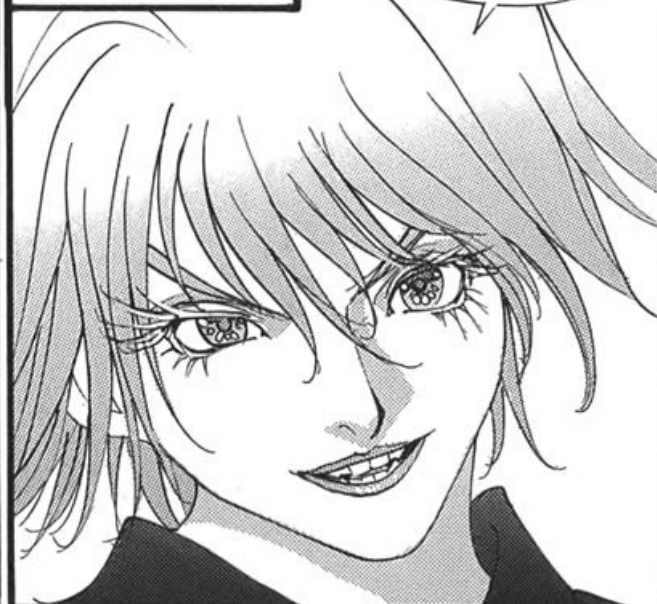
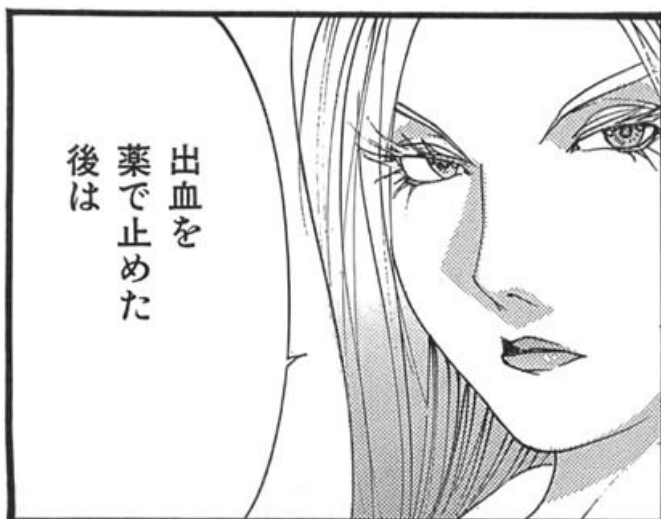
止血してから
畜人薬をやれば
生命は
取り止めるわ

ドリスが
答えた

でも
そんなこと
無駄よ



出血を
薬で止めた
後は



前より
弱くなることで
多いのです

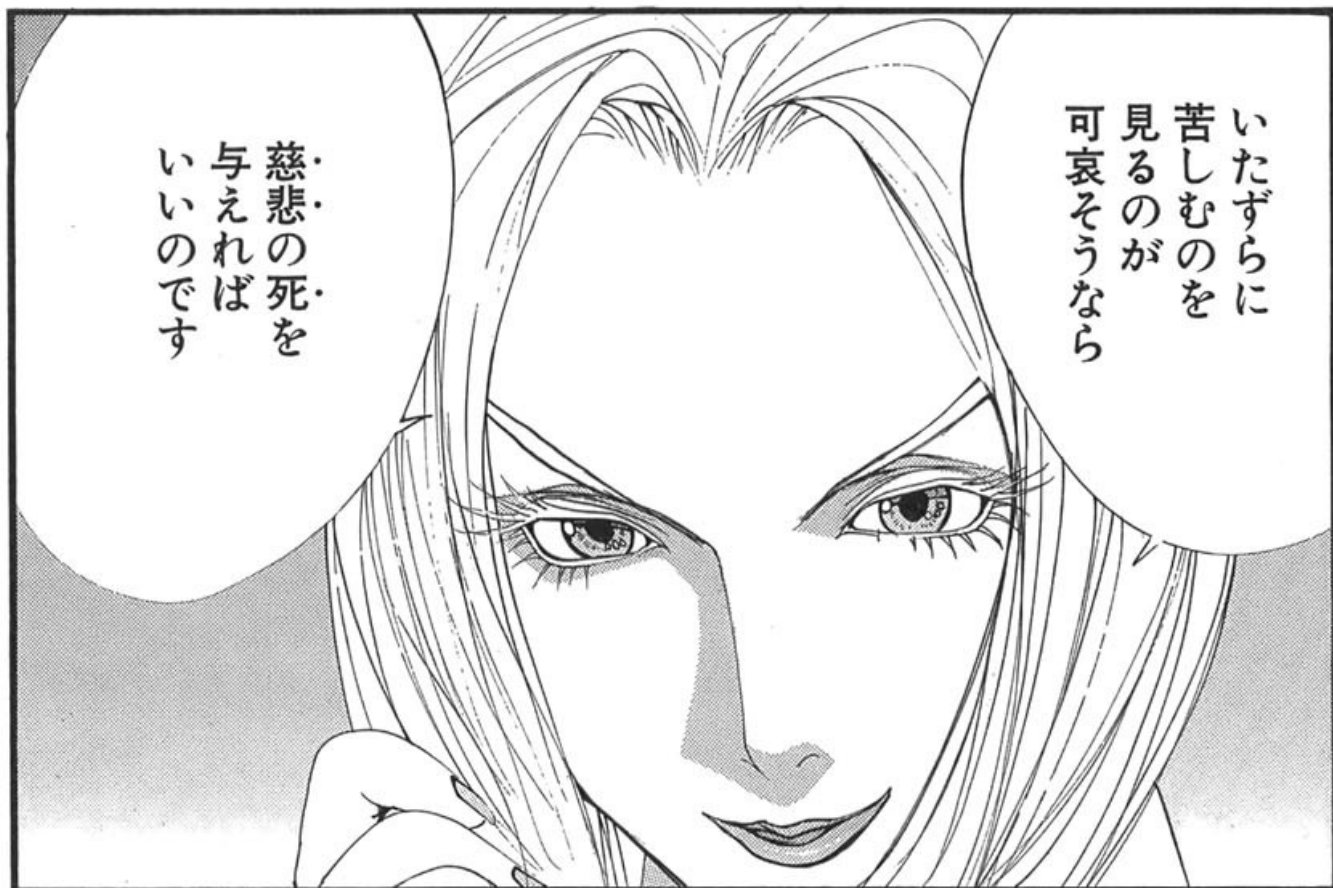
セシルが
解説した

そんな
グラジャートル
小決闘士は
飼う値打ちが
ないでしょう？

だから
怪我しても
矮人病院に
送ることは
しないのです

でも
手当すれば
癒るものを
……

ひとりで癒すか
死ぬか……



いたずらに
苦しむのを
見るのが
可哀そうなら

慈悲の死を
与えれば
いいのです

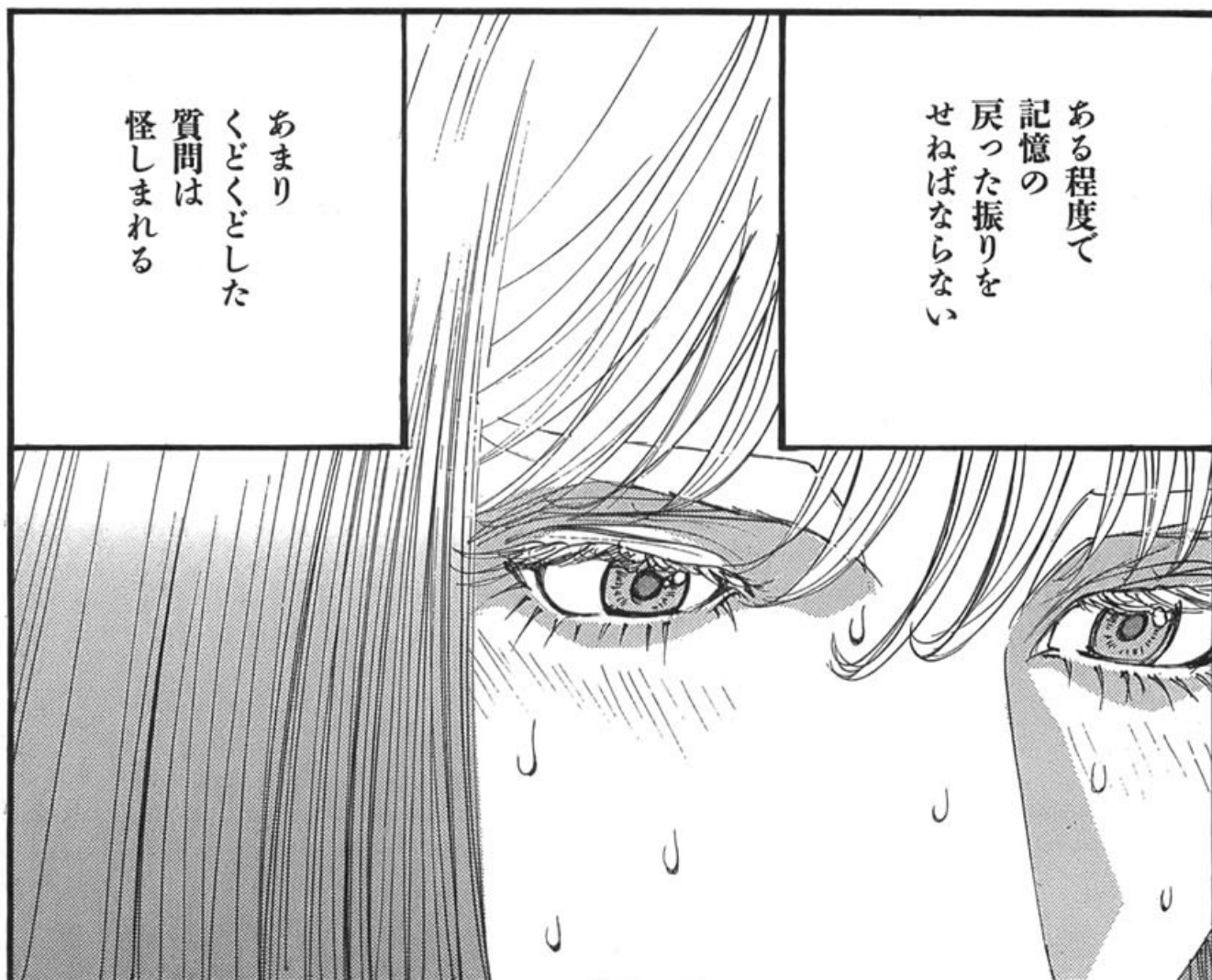


そう
マシーン・キリング
慈悲殺人と
いうものが
あったわね

クララは
曖昧に
口をきいた

ある程度で
記憶の
戻った振りを
せねばならない

あまり
くどくどした
質問は
怪しまれる



殺して
やろうか？
癒りそうも
ないわ

ドリスが
いった

ま
クララの
ビクミ
矮人に
なったんだから
彼女の意向を
きかなくちゃ

と
セシル

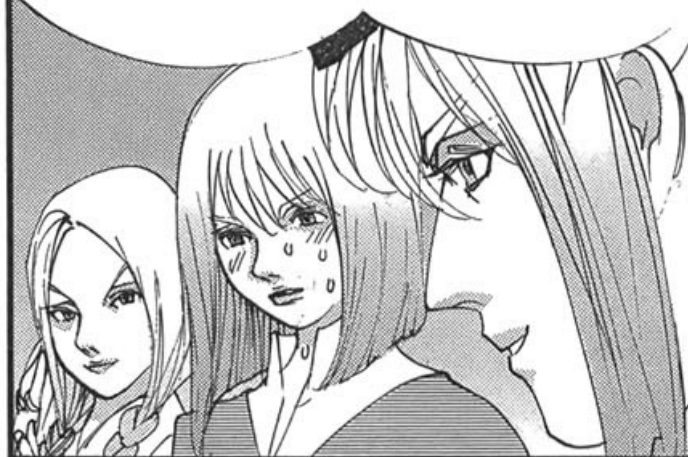


いっそ
ハラキリを
演^{フレイ}らせたら

ウィリアムが
提案した

あなた
貴女の
記憶の回復にも
これはうんと
役立つと思うな

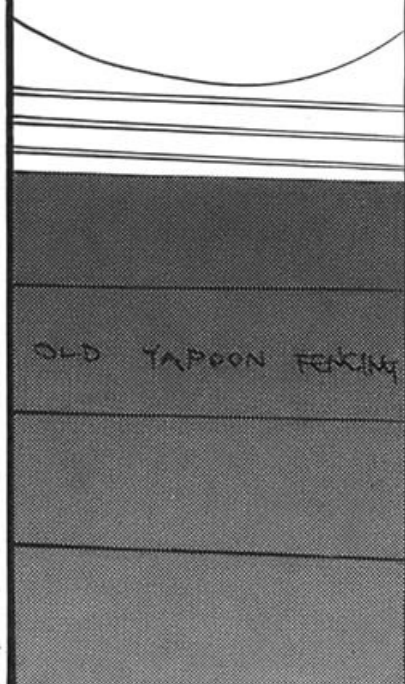
とても
印象深い
ものだから



幸い
オールド・ヤブーン・フェンシング
「古式畜人風剣術」の
引出しに
住んでる奴らは

いつでも
この余興を
演^やれるよう
本式に仕込まれて
いるから

おもしろく
見られるし……



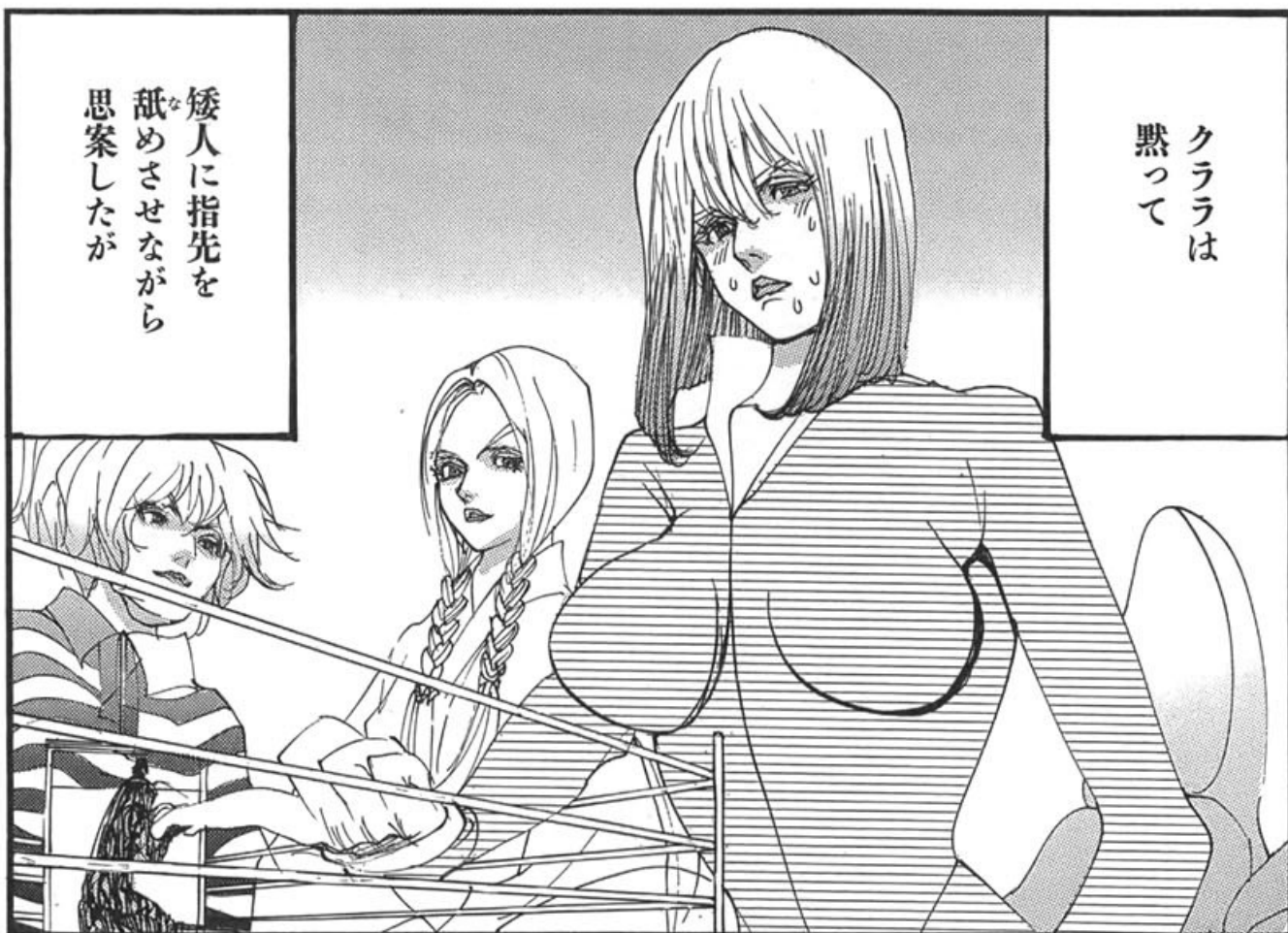
賛成
クララ
そうなさいよ

と
ポーリーンも
勧めた

ほかの
二人も
無言で
うなずいた

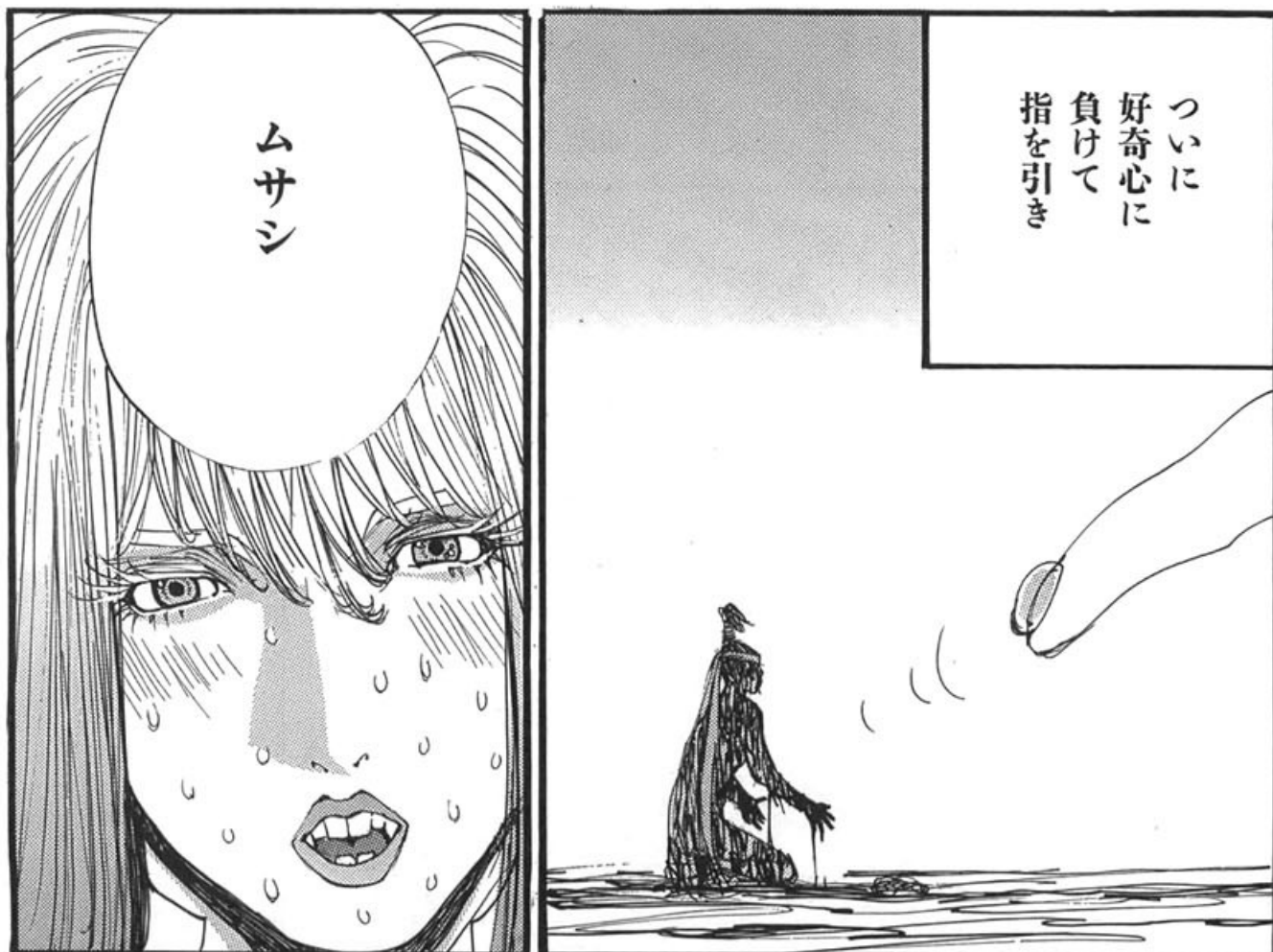
クララは
黙って

矮人に指先を
舐めさせながら
思索したが



ついに
好奇心に
負けて
指を引き

ムサシ

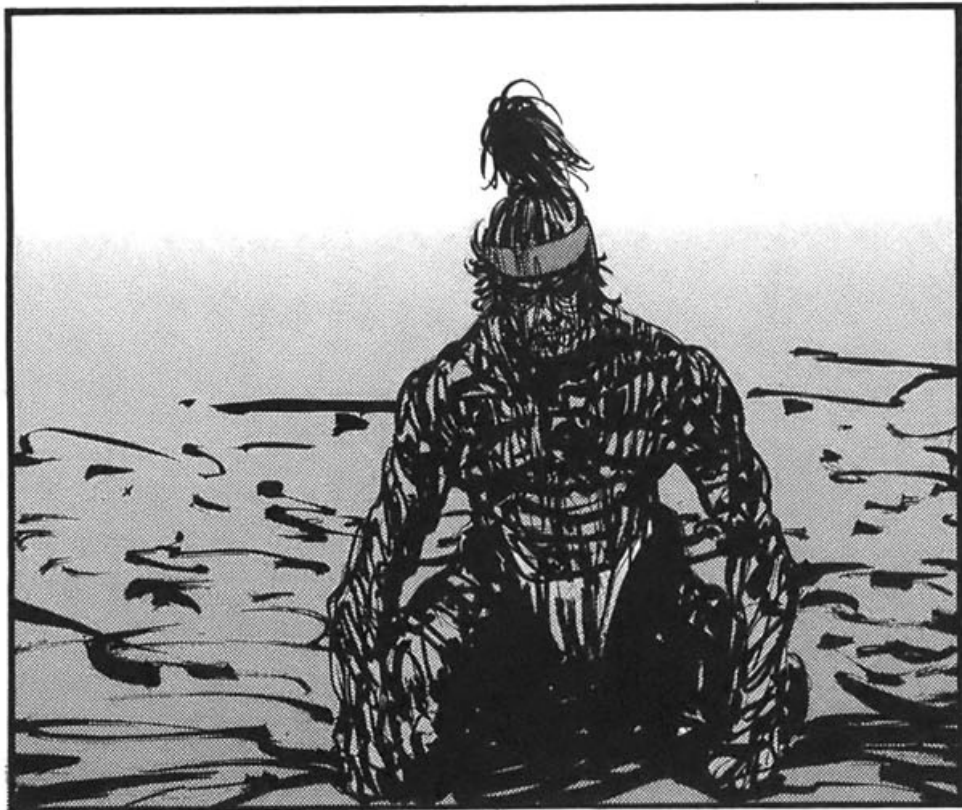




と
呼びかけてから



これが
初めてとは
思えぬような
物慣れた
調子で



二言で
命令した



ハラキリを
お演り

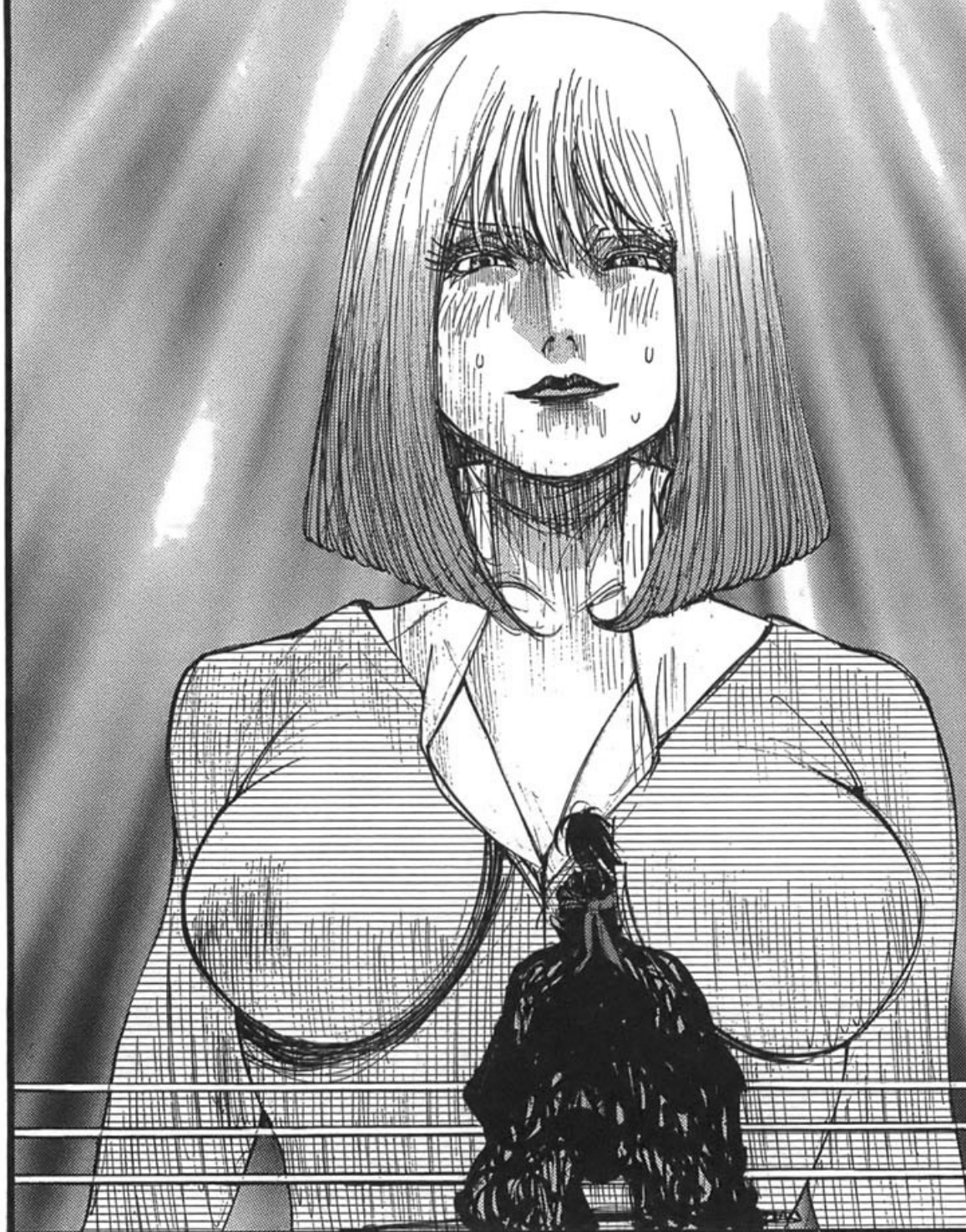
Play
harakiri



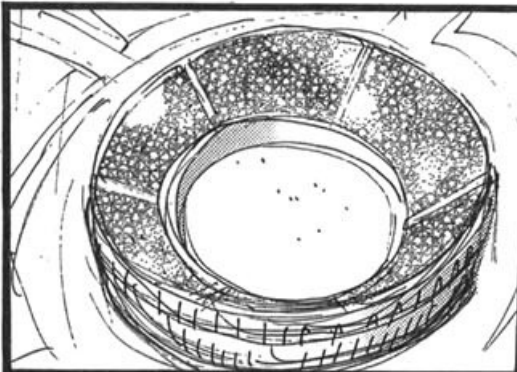
かつて
知らなかった
全感能が

怪しい
魅力で

彼女を
捕えた



円形競技場で



負けた
グラディエトル
決闘士に



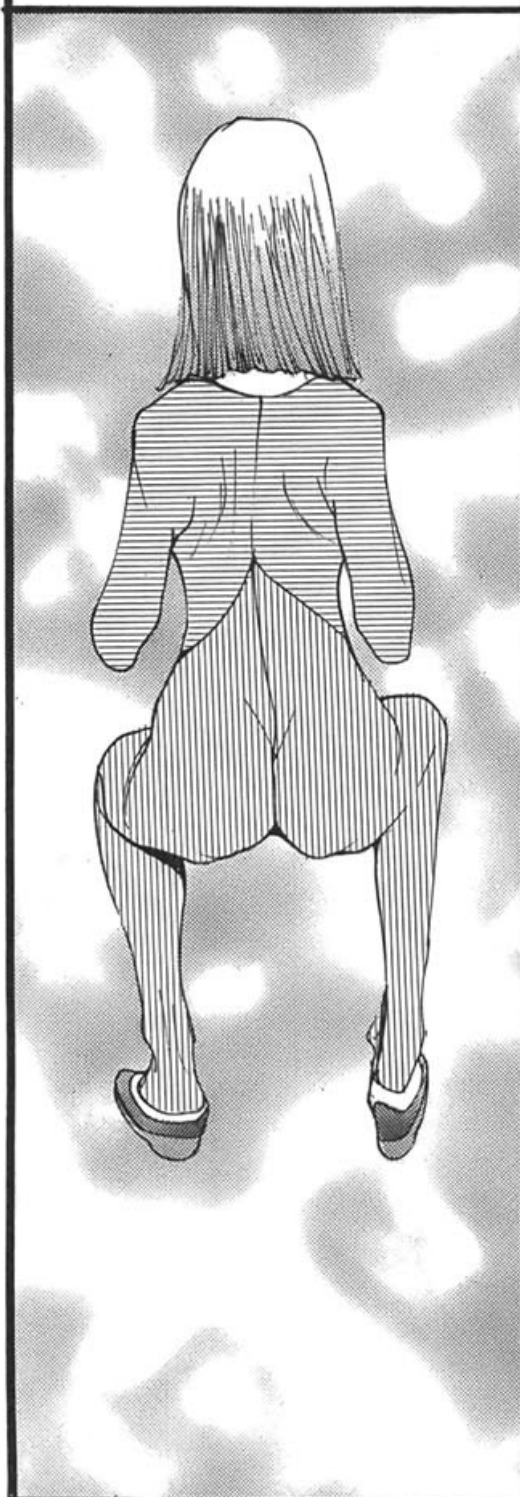
おやゆび
拇指を
下に向けて
死の合図をした
ローマの
貴婦人たち



遠い遠い
先祖の血が



今
彼女の体内で
たぎ
沸っているの
だった





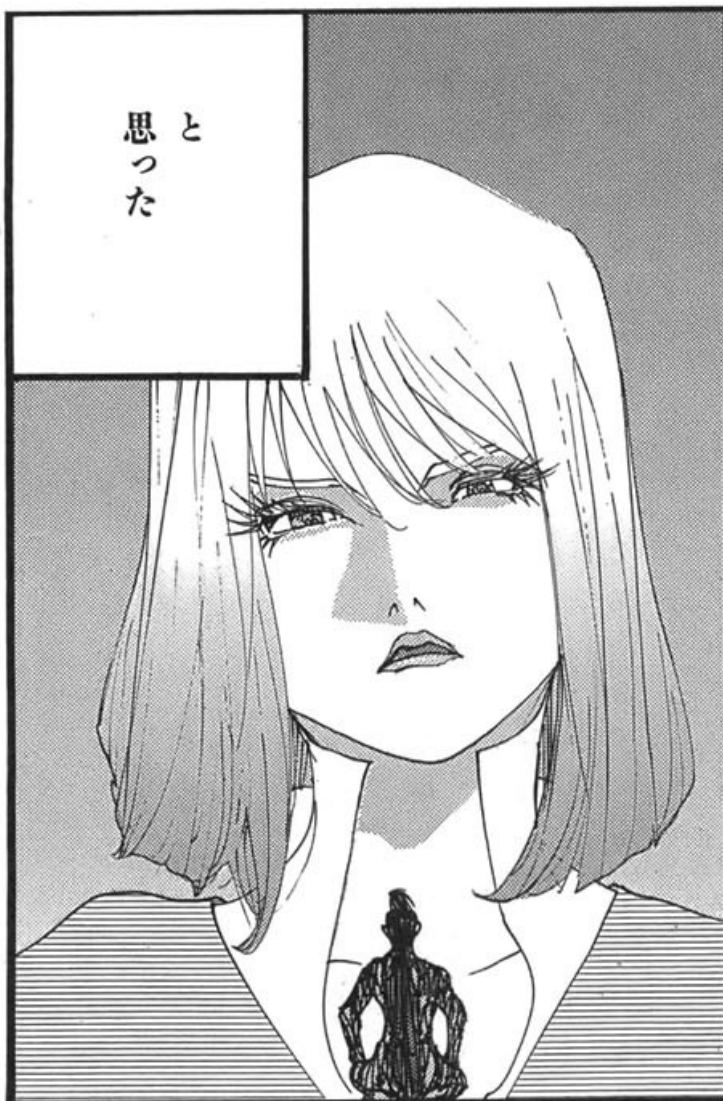
クララは
ふと



自分たちの
普通の声も



言下に
瀕死の青年が
血の
漂う床に
坐り直したのを
見て



と
思った



彼ら
矮人の耳には
雷霆のような
ゼウスの声
さながらの
ものとして
響くのだろう



ムサシは
ふり仰いで
神々の中に
彼女の姿を
求め

じつと
見つめながら

ふりしほるような
声で叫んだ

彼らの
知っている
数少ない
※³⁶英語の単語を
※³⁷日本語に
混ぜて



ホワイト・ゴツデス
白哲の女神なる
クララ・サマ
バンザイ



バンザイとい
うのは

もう

思い出されたかも
知れませんが
“主よ^{いのち}寿長かれ”
という
祈りです



セシルが
素早く
説明した

ヤプーは
昔から
死ぬ時は



自分の首長の
バンザイを
唱えたもの
らしいです



叫び終ると
彼は
短く握った太刀を
突き立て



白金禪はくぎんぜんの
上縁うしえんに沿って
一気に
引き回した



上半身が
前に
のめろうとする時に



介錯^{かいしやく}に立った
審判矮人が

その首を
打ち落した



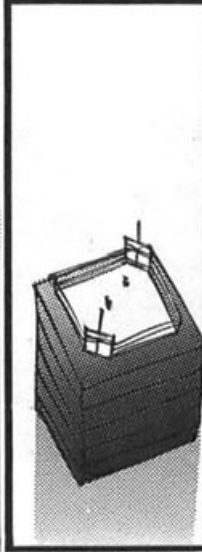
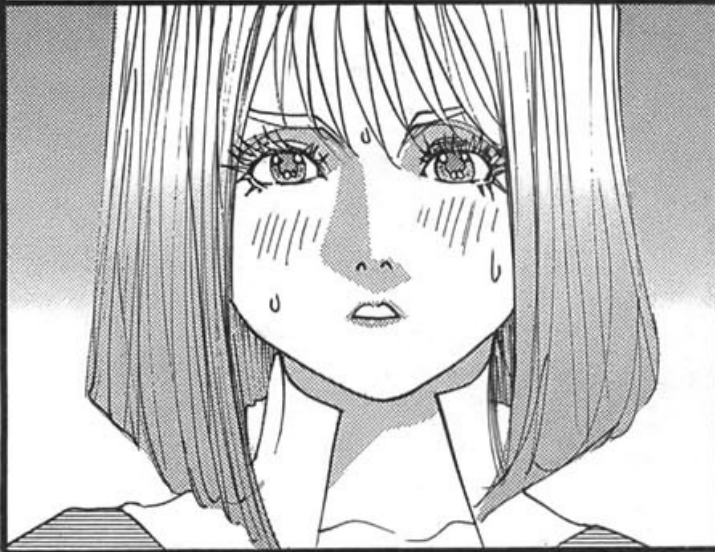
血^ちが
噴^ふき出した



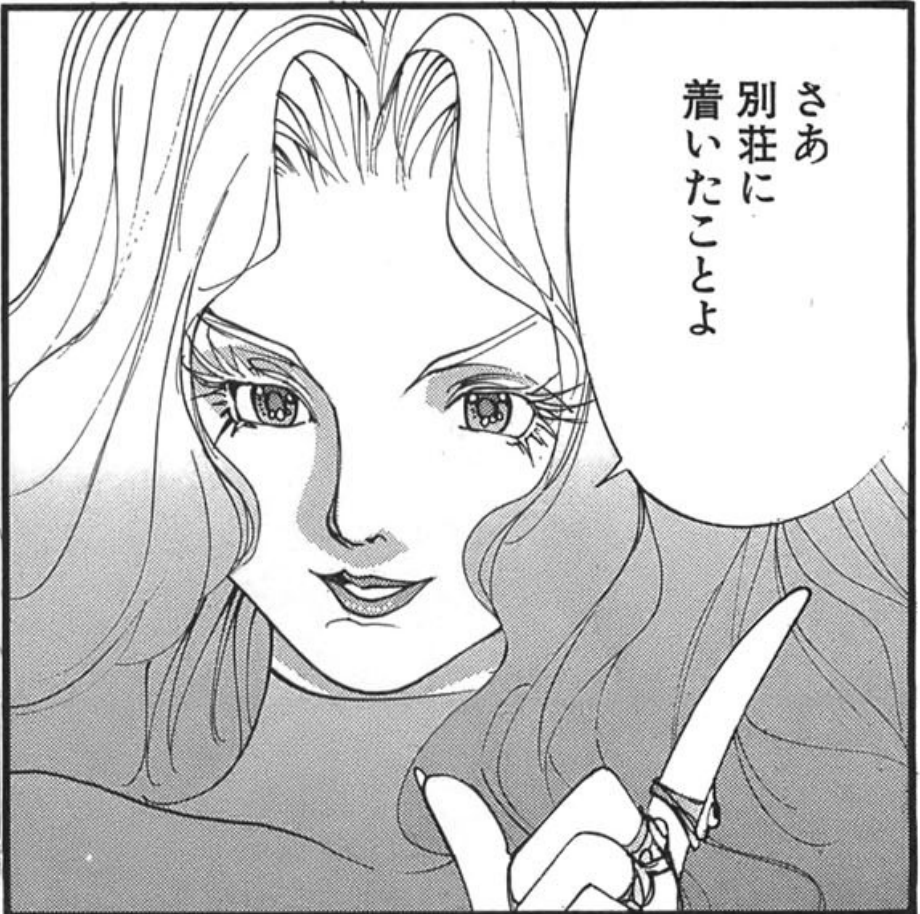
決闘の
デュエル
余興の
腹切演戲は
ハシラフレイシ
終ったのだ

初めて見る
悲壮美の舞台で

自分の名に
ささげられ
自分の意思で
流された血潮の
鮮かな色に
魅せられた
クララは
快い昂奮に
しばし
放心したようにな
っていたが



さあ
別荘に
着いたことよ



という
ポーリーンの声に
ふと
我に返った



ミツク化!!

作画 江川達也 原作 沼正三

BIRZ COMICS
POO, THE HUMAN CATTLE
Higawa Tatsuya · Numa Shozo

家畜

かちく
じん

ヤ

●①693円(本体価格660円)②～⑤620円(本体価格590円)

(一)～(五)

絶賛発売中

コ の 撃 衝

西暦196X年、将来を誓い合った恋人同士であるドイツ人・クララと日本人・麟一郎。

二人が乗馬を楽しんでいたそんなある日、

突如見た事もない飛行物体が目の前に墜落する。

それに乗っていたのは、完璧な美貌を持つ白人女性・ポーリーン。

彼女は日本人が生体手術により、生体家具、肉便器などあらゆる「物」に加工され、

宇宙帝国イースを支える家畜「ヤブー」として生きる

二千年後の未来世界からタイムドライブしてきたのだった。

船内で気を失ったポーリーンを助けてしまったクララと麟一郎。

恋人同士の輝く未来は、この時を境にあらぬ方向へと流れ出す……！

**異才・沼正三が放った
戦後最大のタブーに
鬼才・江川達也が挑む!!**

家畜ヤプー

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

原作 沼正三

かちく
じん

9月発売予定!!!

イース文明を
知るにつれ、
日本人は「家畜」である事を
認め始めたクララは
美しきイース貴族・ウィリアムに
惹かれてゆく。



月刊**コミックバーズ**にて

絶賛連載中!!

江川達也 作画

第六巻、2005年

そして、
ようやく体の自由を
取り戻した麟一郎には
ヤブーとしての
さらなる
奇烈な
運命が
待ち受けていた
!!

発行◆幻冬舎コミックス 発売◆幻冬舎

● 490円 (本体価格467円)

MONTHLY
コミックバーズ **BRZ**

※一部地域は発売日が
変わります。

バースコミックス

家畜人ヤプー⑤

2005年2月24日 第1刷発行

著者

えがわたつや
江川達也

ぬま しょうぞう
沼正三

発行人

伊藤嘉彦

発行元

株式会社 幻冬舎コミックス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6431(編集)

発売元

株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6222(営業)

振替00120-8-767643

印刷・製本所

大日本印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©Egawa Tatsuya, Numa Shozo, GENTOSHA COMICS 2005

ISBN4-344-80521-6 C9979 Printed in Japan

幻冬舎コミックスホームページ <http://www.gentosha-comics.net>

この本に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は、comics@gentosha.co.jpまで。

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。